神州天馬侠「二」（吉川英治）

白樺に笛吹く少女

一

駈けもかけたり早足の燕作。

水車小屋から法師野まで、二里八、九丁はたっぷりな道、暗夜悪路をものともせず、ひととび、五、六尺ずつ踵をけって、たちまち大庄屋狛家の土塀門のうちへ、息もつかずに走りこんだ。

きて見ると、こなたは意外、いやのんきしごくなていたらく。

呂宋兵衛以下、野獣のごとき残党輩。竹童のあげた狼煙も、伊那丸軍の出動も知らず、みなゆだんしきッた酒宴の歓楽最中。なかにはすでに酔いつぶれて、正体のない野武士さえある。

息はずませて、門から奥をのぞきこんだ燕作、

「ケッ、ばかにしていやがら」

と、むッとして、

「おれひとりを、番小屋に張りこませておきゃあがって、てんでに、すきかってなまねをしていやがる。ウム、くせになるから、いちばん胆ッ玉のでんぐり返るほど、おどかしてやれ」

じぶんも蛾次郎あいてに、かけごとをしていたことなどは棚へあげて、不平づらをとンがらかした燕作、いきなり庭先のやみへバラッとおどり立ち、声と両手をめちゃくちゃにふりあげて、

「一大事、一大事！　酒宴どころじゃない、一大事がおこったぞ」

取次ぎもなく、ふいにどなられたので、呂宋兵衛は、杯をおとして顔色をかえた。かれのみか、丹羽昌仙、蚕婆、穴山の残党足助、佐分利の二名、そのほかなみいる野武士たちまで、みな総立ちとなり、あさましや、歓楽の席は、ただ一声で乱脈となった。

「おお、そちは番小屋の燕作、さてはなんぞ、伊那丸がたの間諜でも、立ちまわってきたと申すか」

「あ、昌仙さまでございましたか、間諜どころか、武田伊那丸じしんが、一千あまりの軍勢を狩りたて、この法師野へおそってくるようすです」

「ウーム、さすがは伊那丸、もうこの隠れ里をさぐりつけてまいったか。よもやまだ四、五日は大丈夫と、たかをくくっていたのが、この昌仙のあやまり、ああ、こりゃどうしたものか……」

丹羽昌仙は、ためいきついて、つぶやいたが、急に、ヒラリと庭さきへでて、じッと、十方の天界をみつめだした。

そらは無月、紺紙に箔をふきちらしたかのごとき星月夜、――五遊星、北極星、北斗星、二十八宿星、その光芒によって北条流軍学の星占いをたてているらしい昌仙は、しばらくあってのち、なにかひとりうなずいて、もとの席へも

どり、呂宋兵衛にむかって、離散逃亡の急策をさずけた。
「ではなんとしても、おれもひとりとなり、そちもひとりとなり、他の者どももみなばらばらとなって、退散せねば危ないというのか」
蛮流幻術にたけて、きたいな神変をみせる呂宋兵衛も、臆病な生まれつきは争えず、語韻はふるえをおびて昌仙の顔をみまもっていた。
「ざんねんながら、富岳の一天に凶兆れきれき、もはや、死か離散かの、二途よりないようにぞんぜられまする」
「伊那丸ずれに亡ぼされて、ここに終るのも、無念至極。ウム……では、ひとまずめいめいかってに落ちのびて、またの時節をうかがい、京都へあつまって、人穴城の栄華にまさる出世の策を立てるとしよう」
「なるほど、京都へまいれば秀吉公のお力にすがることもでき、公卿百官の邸宅や諸侯の門など甍をならべておりますから、またなんぞうまい手蔓にぶつからぬかぎりもございますまい。では、呂宋兵衛さま、すこしもはやく、ここ退散のおしたくを……」
「おう、じゃ、昌仙もほかの者も、のちに京都で落ちあうことはたしかにしょうちしたろうな」
「がってんです、きっとまた頭領のところへ駈けあつまります」
一同が、異口同音に答えるのを聞いて、呂宋兵衛は、有り金をあたまわりに分配して、武器、服装、足ごしらえ用意周到の逃げじたくをはじめる。
間もあらせず、とうとうたる金鼓や攻め貝もろとも、法師野の里へひた押しに寄せてきた伊那丸勢、怒濤のごとく、大庄屋狛家のまわりをグルッととりかこんだ。
その時おそし、呂宋兵衛一味の残党、間ごと間ごとの燈火をふき消して、やくそくどおりの自由行動、蜂の巣を突いたように、八方から闇にまぎれて、戸外へ逃げだした。
塀を躍り越そうとする者――木の枝にぶらさがる者、屋根にのぼってすきを見る者、衆を組んで破れかぶれに斬りだす者――いちじにワーッと喊声をあげると、寄手のほうも木霊がえしに、武者声を合わせて、弓組いっせいに弦を切り、白刃組は鎬をけずり、ここかしこにたちおこる修羅の巷。
時に、鉄鋲打った鉢兜に小具足をつけ、背に伝令旗を差し立てた一騎、伊那丸の命をうけて、五陣のあいだをかけめぐりながら、
「――民家へ火をつけるな。――罪なき民を傷つけるな。――降を乞う者は斬るな。――和田呂宋兵衛はかならず手捕りにせられよ。以上、おん大将ならびに軍師の厳命でござるぞ。違背あるにおいては、味方たりといえども斬罪」
と、声をからして伝令し去った。

二

「もうだめだ、表のほうは、蟻のはいでるすきもねえ。昌仙さま、昌仙さま、うまいところが見つかったから、はやく頭領をつれてこっちへ逃げておいでなさい」
まっ暗な裏手に飛びだして、あわただしく手をふったのは早足の燕作。ひゅうッ、ひゅうッ、とうなりを立てて飛んで

くる矢は、そのあたりの戸袋、井戸がわ、廂、立木の幹、ところきらわず突き刺さって、さながら横なぐりに吹雪がきたよう。

と、暗憺たる家のなかで、丹羽昌仙のひくい声。

「呂宋兵衛さま、裏手のほうが手うすとみえて、燕作がしきりにわめいております。さ、少しもはやくここをお落ちなさいませ」

「ウム」

となにかささやきながら、奥からゾロゾロとでてきたのは、丹羽昌仙、蚕婆、足助主水正、佐分利五郎次、そしてそのなかに取りかこまれた黒布蛮衣の大男が、まぎれもない和田呂宋兵衛か――と思うと、またあとからおなじ黒衣をつけ、おなじ銀の十字架を胸にたれ、おなじ背かっこうの男がふたりもでてきた。

しめて、七人。

そのなかに呂宋兵衛が三人もいる。ふたりはむろん昌仙がとっさの妙策でつくった影武者だが、どれが本物の呂宋兵衛か、どれが影武者か、夜目ではまッたくけんとうがつかない。

「燕作、燕作」

昌仙は用心ぶかく、裏口へ首だけだしてどなってみた。矢はしきりに飛んでくるが、さいわい、まだ伊那丸の手勢はここまで踏みこんでいなかった。

「燕作、逃げ口をあんないしろ！　燕作はどこにいるんだ」

「あ、昌仙さまでございますか」

「そうだ、呂宋兵衛さまをお落としもうさにゃならぬ、うまい逃げ口が見つかったとは、どこだ」

「ここです――ここです」

「どこだ、そちはどこにいるんだ」

「ここですよ。昌仙さま、呂宋兵衛さま、はやくここへおいでなさいまし」

「はてな？」

流れ矢があぶないので、七人とも首だけだして、裏手の闇をズーと見わたしたが、ふしぎ、すぐそこで、大きくひびく燕作の声はあるが、どこをどう見つめても、かれのすがたが見あたらない。

とたんに、表のほうへ、伊那丸の手勢が乱入してきたのか、すさまじい物音。逃げだした部下もあらかた生けどられたり斬りたおされた気はいである。

「それッ、ぐずぐずしてはいられぬ」

七人のかげが流れ矢をくぐってそとへとびだし、いっぽうの血路を斬りひらく覚悟で、うらの土塀によじ登ろうとすると、

「あぶない！　そっちは危ない！」

とまた燕作の声がする。

「どこだ、そのほうはいずれにいるのだ」

「ここだよ、こっちだよ」

「こっちとはどこだ」

七人は行き場にまよってウロウロした。

矢は見るまに、めいめいの袖や裾にも二、三本ずつ刺さってきた。

「ええ、じれッてえな、ここだってば！」

「や、あの声は？」

「早く早く！　早く降りておいでなせえ」
「燕作」
「おい」
「どこじゃ」
「ちぇッ、血のめぐりがどうかしているぜ」
　という声が、どうやら地底でしたと思うと、かたわらの車井戸にかけてあった釣瓶が、癇癪を起したように、カラカラカラとゆすぶれた。
「や、この井戸底にいるのか」
「そうです、ここより逃げ場はありませんぜ」
「バカなやつめ」
　影武者のひとりか、ただしは本人の呂宋兵衛か、井戸がわに立ってあざ笑いながら、
「こんななかへとびこむのは、じぶんで墓へはいるもどうぜんだ」
「おッと、そいつは大安心、ここは空井戸で一滴の水もないばかりか、横へぬけ道ができているからたしかに間道です」
「なに抜け道になっているとか、そりゃもっけの幸い」
　と、にわかに元気づいた七人、かわるがわる釣瓶づたいに空井戸の底へキリキリとさがってゆく。
　そして、すでに七人のうち五人までがすがたを隠し、しんがりに残った影武者のひとりと佐分利五郎次とが、つづいて釣瓶縄にすがって片足かけたとき、早くもなだれ入った伊那丸勢のまっさきに立って、疾風のごとく飛んできたひとりの敵。
「おのれッ」
　と、駈けよりざま、雷喝一声、闇からうなりをよんだ一条の鉄杖が、ブーンと釣瓶もろとも、影武者のひとりをただ一撃にはね飛ばした。
　そのおそろしい剛力に、空井戸の車はわれて、すさまじく飛び、ふとい棕梠縄は大蛇のごとく蜿って血へどを吐いた影武者のからだにからみついた。
「あッ――」
　と、あやうく鉄杖の二つ胴にされそこなった佐分利五郎次、井戸がわから五、六尺とびのいてきッと見れば、鎧武者にはあらず、黒の染衣かろやかに、ねずみの手甲脚絆をつけた骨たくましい若僧、いま、ちぬられた鉄杖をしごきなおして、ふたたび、らんらんとした眼をこなたへ射向けてくるようす。
「さてはこいつが、伊那丸の幕下でも、怪力第一といわれた加賀見忍剣だな……」
　五郎次はブルッと身ぶるいしたが、すでに空井戸の逃げみちは断たれ、四面楚歌にかこまれてしまった上は、とうてい助かる術はないとかんねんして、やにわに陣刀をギラリと抜き、
「おお、そこへきたのは加賀見忍剣とみたがひがめか、もと穴山梅雪が四天王のひとり佐分利五郎次、きさまの法師首を剣先にかけて、亡主梅雪の回向にしてくれる、一騎うちの作法どおり人まじえをせずに、勝負をしろ」
　窮鼠猫をかむとはこれだ、すてばちの怒号ものものしくも名のりをあげた。
　忍剣は、それを聞くとかえって鉄杖の力をゆるめ、声ほがらかに笑って、

「ははは、さては汝は、悪入道の遺臣であったか、主人梅雪がすでに醜骸を裾野にさらして、相果てたるに、いまだ命ほしさに、呂宋兵衛の手下にしたがっているとは臆面なき恥知らず、いで、まことの武門をかがやかしたもう伊那丸さまの御内人加賀見忍剣が、天にかわって誅罰してくりょう」

「ほざくな痩法師、鬼神といわれたこの五郎次の陣刀を受けられるものなら受けてみろ」

「豎子！　まだ忍剣の鉄杖のあじを知らぬな」

「うぬ、その舌の根を！」

――とさけびながら佐分利五郎次、三日月のごとき大刀をまっ向にかざして、加賀見忍剣の脳天へ斬りさげてくる。

「おお」

ゆうゆう、右にかわして、さッと鉄杖に寸のびをくれて横になぐ。あな――とおもえば佐分利も一かどの強者、ぽんと跳んで空間をすくわせ、

「ウム、えイッ」

と陣刀に火をふらして斬ってかかる。パキン！　パキン！

と二ど三ど、忍剣の鉄杖が舞ってうけたかと思うと、佐分利の大刀は、氷のかけらが飛んだように三つに折れて鍔だけが手にのこった。

仕損じたり――とおもったか佐分利五郎次、おれた刀をブンと忍剣の面上目がけて投げるがはやいか、踵をめぐらして、いっさんに逃げだしていく。

時こそあれ、

「えーイッ」とひびいた屋上の気合い。

屋根廂からななめさがりに、ぴゅッと一本の朱槍が走って、逃げだしていく佐分利の背から胸板をつらぬいて、あわれや笑止、かれを串刺しにしたまま、欅の幹に縫いつけてしまった。

三

「何者？」

鉄杖をおさめて、忍剣が廂の上をふりあおぐと、声におうじて、ひとりの壮漢が、

「巽小文治」

と名のりながら、ひらりと上からとび下りてきた。

「なんだ小文治どのか、よけいなことする男じゃ」

「でも、あやうく逃げるようすだったから」

「だれがこんな弱武者一ぴき、鉄杖のさきからのがすものか」

「はやまって、失礼もうした」

「いや、なにもあやまることはござらぬよ」

と忍剣は苦笑して、さきに打ちたおした黒衣の影武者をのぞいたが、呂宋兵衛の偽者と知って舌打ちする。小文治は敵を串刺しにして、大樹の幹につき立った槍をひき抜き、穂先の刃こぼれをちょっとあらためてみた。

「して、小文治どの、木隠や山県などはどうしたであろう」

「龍太郎どのは表口から奥の間へはいって、呂宋兵衛のゆくえをたずね、蔦之助どのは、弓組を四町四ほうに伏せて、かれらの逃げみちをふさいでおります」

「ウム、それまで手配がとどいておれば、いかに神変自在な呂宋兵衛でも、もう袋のねずみどうよう、ここよりのがれる

ことはできまい。だが……この井戸はどうやら空井戸らしい、念のためにこうしてやろう」
法衣の袖をまくりあげた忍剣、一抱えもある庭石をさしあげて、ドーンと、井戸底へほうりこむ。それを合図に、あとから駈けあつまってきた部下の兵も、めいめい石をおこして投げこんだので、見るまに井戸は完全な石埋めとなってしまった。
ところへ木隠龍太郎が、うちのなかから姿をあらわして、
「オオ、ご両所、ここにいたか」
「やあ、龍太郎どの、呂宋兵衛の在所は」
「ふしぎや、いっこう行方が知れもうさぬ。どうやらすでに風をくらって、逃げ失せたのではないかと思われる」
「といって、この家の四ほうは、二重三重に取りかこんであるから、かれらのしのびだすすきもないが」
「どこかに間道らしい穴口でもないかしら」
「それもわしが手をわけて尋ねさせたが、ここに一つの空井戸があったばかり」
「なに空井戸？」
と龍太郎がとび降りてきて、
「ウム、こりゃあやしい、どこかへ通じる間道にそういない、なかへはいってあらためて見よう」
「いや、念のために、ただいまわしが石埋めにしてしまった」
と、忍剣はしたり顔だが、龍太郎はじだんだふんで口惜しがった。呂宋兵衛や敵の主なるものが、この口から逃走したとすれば、この空井戸をふさいで、どこからかれらを追跡するか、どこへ兵を廻しておくか、まったくこれでは、みずから手がかりの道を遮断してしまったことに帰結する――と憤慨した。その理の当然に、忍剣もすっかり後悔して、しばらく黙しあっていた。
すると、はるか北方の森にあたって、とぎれとぎれな笛の音が高鳴った。
――おお、それは、幻の陣をしいて鳴りをしずめていた咲耶子が、かねて手はずをあわせてある合図の笛。
「それ、咲耶子どのの笛がよぶ――」
よみがえったように、加賀見忍剣、巽小文治、木隠龍太郎の三名、音をしたって走り出すと、その余の手勢も波にすわるる木の葉のごとく、声なく音なく、渦の中心に駈けあつまる――

城やとりでの間道とちがって、豪農の家にある空井戸の横穴は、戦時財宝のかくし場とするか、あるいは、家族の逃避所とする用意に過ぎないので、もとより、二里も三里もとおい先へぬけているはずがない。
呂宋兵衛たち五人のものがわずか二、三丁の暗闇をはいぬけて、ガサガサと星影の下に姿をあらわしたのは、黒百合谷の中腹で、上はれいの多宝塔のある施無畏寺の境内、下は神代川とよぶ渓流がドーッとつよい水音をとどろかしている。
「道は水にしたがえ」とは山あるきの極意。
五人は無言のうちに、道どりの心一致して、蔓草、深山笹をわけながら、だらだら谷の断崖を降りてゆく。
――と、その時だ。

にょッきと、星の空にそびえた一本の白樺、その高き枝にみどりの黒髪風に吹かして、腰かけていたひとりの美少女、心なくしてふと見れば、黒百合谷の百合の精か星月夜のこぼれ星かとうたがうだろう――ほどに気だかい美少女が、手にしていた横笛を、山千鳥の啼くかとばかり強く吹いた。

「や、や？　……」

五人の者が、うたがいに、進みもやらずもどりもせず深山笹のしげみに、うろうろしていると、白樺のこずえの少女は、虚空にたかく笛をふって、さっ、さっ、さっと三閃の合図知らせをしたようす。

と思うと、神代川の渓流がさかまきだしたように、ウワーッとあなたこなたの岩石のかげから、いちじに姿をあらわした伏兵。

これなん、咲耶子の一指一揮に伏現する裾野馴らしの胡蝶の陣。

「しまった！」

丹羽昌仙が絶叫した。

とたんに崖のうえから木隠龍太郎が、

「賊徒、うごくな」

と戒刀の鞘をはらって、銀蛇頭上に揮りかぶってとびおりる。発矢、昌仙が、一太刀うけているすきに、呂宋兵衛とその影武者、蚕婆と早足の燕作、四人四ほうへバラバラと逃げわかれた。

と、ゆくてにまたあらわれた巽小文治、朱柄の槍をしごいて、燕作を見るやいな、えいッと逆落としに突っかける。もとより武道の心得のない燕作、受ける気もなくかわす気もなく、ただ助かりたい一念で、神代川の水音めがけて飛びこんだ。が、小文治はそれに目もくれず、ひたすら呂宋兵衛の姿をめざして駈けだした。

一ぽうでは丹羽昌仙、龍太郎の切ッ先をさけるとたんに断崖をすべり落ちて、伏兵の手にくくりあげられそうになったが、必死に四、五人を斬りたおして、その陣笠と小具足をすばやく身にまとい、同じ伏兵のような挙動をして、まんまと伊那丸方の部下にばけ、逃げだす機会をねらっている。

もっとも足のよわい蚕婆は、れいの針を口にふくんで、まえの抜け穴に舞いもどり、見つけられたら吹き針のおくの手をだそうと、眼をとぎすましていたけれど、悪運まだつきず、穴の前を加賀見忍剣と龍太郎が駈け過ぎたにもかかわらず、とうとう見つけられずに、なおも息を殺していた。

「木ッ葉どもはどうでもよい、呂宋兵衛はどうした」

「かくまで手をつくしながら、当の呂宋兵衛を取り逃がしたとあっては、若君に対しても面目ない、者ども、余人には目をくれず、呂宋兵衛を取りおさえろ」

忍剣と龍太郎が、ほとんど狂気のように叱咤してまわったが、なにせよ、身を没すばかりな深山笹、杉の若木、蔦葛などが生いしげっているので、うごきも自由ならずさがしだすのもよういでなかった。すると、かなたにあって、

「やあやあ、巽小文治が和田呂宋兵衛を生けどったり！　和田呂宋兵衛を生けどったり！」

声、満山鳴りわたった。

「ワーッ――」

「ワーッ」

と、手柄名のりにおうずる味方の歓呼、谷間へ遠く山彦する。
さしも、強悪無比な呂宋兵衛、いよいよここに天運つきたか。

多宝塔

一

山県蔦之助も、さっきの笛合図と、小文治の手柄名のりをきいて、弓組のなかからいっさんにそこへ駈けつけてきた。
でかした小文治――と、党友の功をよろこびつつ、忍剣も龍太郎も、声のするほうへとんでいってみると、いましも小文治は、黒衣の大男を組みふせて、あたりの藤蔓でギリギリとしばりあげているところだ。
「おお、みごとやったな」
蔦之助と龍太郎があおぐようにほめそやす。忍剣はちょっとざんねんがって、
「どうもきょうは、よく小文治どのに先陣をしてやられる日だわい……」
と、うれしいなかにまだ腕をさすっている。
すると、白樺のこずえの上にあって、始終をながめていた咲耶子が、にわかに優しい声をはって、
「あれあれ、蔦之助さま、忍剣さま！　上の手うすに乗じて、和田呂宋兵衛が逃げのぼりましたぞ、はやくお手配なされませ！」
「な、なんといわるる！」
四人は、愕然として空を見あげた。
「咲耶子どの、その呂宋兵衛は、ただいま小文治どのがこれにて生けどりました。それはなにかの人ちがいであろう」
「いえいえ、たしかにあれへ登ってゆくのこそ、呂宋兵衛にそういありませぬ。オオ、施無畏寺の境内へかくれようとしてようすをうかがっておりまする、もう、わたしもこうしてはおられませぬ」
咲耶子は、笛を帯にたばさんで、スルスルと白樺の梢から下りてしまった。
「や、ことによるときゃつも？　……」
忍剣は、さっき空井戸で打ちころした影武者を思いおこして、黒衣の襟がみをグイとつかんだ。と同時に、その顔をのぞきこんで龍太郎も、おもわず声をはずませて、
「はてな、呂宋兵衛は蛮人の血をまぜた、紅毛碧瞳の男であるはずだが、こりゃ、似ても似つかぬただの野武士だ、ウーム、さてはおのれ、影武者であったな」
「ええ、ざんねんッ」
怒気心頭にもえた巽小文治、朱柄の槍をとって、一閃に突きころし、いまあげた手柄名のりの手まえにも、当の本人を引っとらえずになるものかと、無二無三に崖上へのぼりかえした。
一足さきに、白樺を下りて追いすがった咲耶子は、いましも施無畏寺の境内へ、ツウとかくれこんでいった黒衣のかげをつけて、

「呂宋兵衛、呂宋兵衛」
と二声よんだ。
意外なところに、やさしい女の声音がひびいたので、
「なに？」
おもわず足を踏みとどめて、ギョロッと両眼をふり向けたのは、蛮衣に十字の念珠を頸にかけた怪人、まさしく、これぞ、正真正銘の和田呂宋兵衛その者だ。
「や、汝は根来小角の娘だな」
「おお、仇たるそちとはともに天をいただかぬ咲耶子じゃ。伊那丸さまや、その余のかたがたのお加勢で、ここに汝をとりかこみ得たうれしさ、悪人！　もう八ぽうのがれるみちはないぞえ」
「わはははは、おのれや伊那丸ずれの女子供に、この呂宋兵衛が自由になってたまるものか。斬るも突くも不死身のおれだ。五尺とそばへ近よって見ろ、汝の黒髪は火となって焼きただれるぞ」
「やわか、邪法の幻術などにまどわされようぞ」
「ふふウ……その幻術にこりてみたいか」
「笑止やその広言、咲耶子には、胡蝶の陣の守りがある」
「胡蝶陣？　あのいたずらごとがなんになる」
「オオ、そういうじぶんが、すでに胡蝶陣の罠に墜ちているのも知らずに……ホホホホ、曳かれ者の小唄は聞きにくいもの――」
「女郎！　おぼえていろ」
かッと、両眼をいからして、呂宋兵衛はふいに咲耶子の咽首をしめつけてきた。じゅうぶん彼女にも用意があったところなので、ツイと、ふりもぎって、帯の笛を抜くよりはやく、れいの合図、さッと打ちふろうとすると呂宋兵衛が強力をかけて奪いとり、いきなりじぶんの力で縦横にふってふってふりぬいた。
するとピューッ、ピューッというぶきみな笛鳴りは、たちまちおそろしい暴風となって、満地満天に木々の落葉をふき巻くりあれよと見るまに、咲耶子は砂塵をかおに吹きつけられて、あ――と眼をつぶされてしまう。
「おのれ！」
きらめく懐剣、ぴかッと呂宋兵衛の脇腹をかすめる。――カラリ、と笛をなげすてた呂宋兵衛は、肩にとまった一枚の紅葉を唇にくわえて、プーッと彼女の顔に吹きつけるやいなや、ひらりと舞った紅葉の葉は、とんで一片の焔となり、吹きぬく風にあおりをえて、あやし、咲耶子の黒髪にボウとばかり燃えついた。
あッとおどろいたのは、一瞬の幻覚である。どこからか飛んできた一本の矢が、あやうく呂宋兵衛の耳をかすりぬけたせつな、かれの術気は、ぱたッとやんだ風とともに破れて、ばらばらとかなたをさして逃げだした。
それは、忽然とかけあがってきた四勇士の影をそこに見たがためであろう。――のがさじと、おいすがる咲耶子につづいて、忍剣は鉄杖をひっさげ、龍太郎は戒刀をひらめかし、蔦之助は弓に矢をつがえ、小文治は朱柄の槍をしごいて、八門必殺のふくろづめに、呂宋兵衛を、多宝塔のねもとまでタタタタと追いまくした。

二

さきに、伝令が陣ぶれをしたことばには、かならず、呂宋兵衛を手捕りにせよとの達しであった。けれど、もうこうなっては、騎虎の勢いというもの、戒刀を引っさげた龍太郎は、まッさきに背後からとびかかって、

「奸賊、和田呂宋兵衛、伊那丸方にさる者ありと知られたる木隠が素ッ首もらった」

さッと一陣の太刀風をなげた。

「あッ」

呂宋兵衛はきもをひやして、切ッ先三寸のさきからツウと左へ逃げかわす。

そこには加賀見忍剣、鉄杖をまっこうに押っとって、かれのゆくてに立ちあらわれ、

「おのれ、極悪の山大名！」

みじんになれとふりつける。

右へよければ巽小文治、大音とともに、

「呂宋兵衛、はや天命はつきたるぞッ」

とばかり朱電の槍をくり出して、まつげを焦くばかりな槍影閃々。

「えい、なんのおのれ輩に！」

絶体絶命となった呂宋兵衛。そのとき、とんと踏みとまって腰の大刀を横なぎに抜きはらったかとおもうと、剣は、火をふいて夜光の珠を散らすかと思われるような閃光を投げつけた。

「おお！」

おもわず目をふさいだ四勇士。

はッと虚をうたれて飛びのいたが、これ、火遁幻惑の逃術であって、まことの剣を抜いたのではなかった。そのすきに、呂宋兵衛はしめたとばかり、多宝塔の階段へ向かってトントンとかけのぼった。

そこへプツン！　と山県蔦之助がねらいはなしてきた二の矢を、みごとに袖でからみおとした呂宋兵衛は、すばやく多宝塔のとびらへ手をかけた。

この鉄壁の塔へかくれて、なかから扉をもってふせぐさんだん。

咲耶子も四勇士も、あッ、しまった！　と階段へ追いすがってきたが、呂宋兵衛はそれを尻目にかけて、早くも塔の扉をひらき、そのなかへ風のごとく姿をすいこませてしまった。

けれど、かれのからだがそこへかくれるやいな、漆のような塔内の闇から、とつじょ、

「奸賊すさりおろう！」

声のひびきに呂宋兵衛の五体、はじき返しに、階段の下までゴロゴロとけおとされてきた。

忍剣をはじめ小文治や龍太郎は、得たりとばかり、得物をすてて呂宋兵衛に折りかさなり、歯がみをしてもがきまわる奸賊を高手小手にからめあげた。――が、いま頭上でひびいた声の主は、そも何者であろうか、味方にしては意外なと、思ってふと見あげた人々は、

「や、わが君」

と、階段の下へひれふしてしまった。

「オオ、心地よいこと！」
そのとき、多宝塔の扉をはいして、悠然と壇上に床几をすえ、ふくみ笑いをして、こう見下ろしたのは、伊那丸であった。白綸子の着込みに、むらさき縅しの具足、太刀のきらめきもはなばなしい。
そのわきに、片膝折って、手をついたのは、すなわち軍師小幡民部である。紺地無紋の陣羽織をつけ、ひだりの籠手に采配をもち、銀作りの太刀をうしろへ長くそらしていた。
兵は味方より計るというが、あまり意外なことなので龍太郎は、呂宋兵衛の縄尻をとりながら、民部に向かってたずねてみた。
「こよいは法師野に平陣をしかれて、あれにおいであることとばかり思っておりましたに、いつのまに、この塔のうちへお越しなされてでござります」
「おん大将の陣は、ありと見ゆるところになく、なしと見ゆるところにあるのが常、べつにふしぎはござりませぬ」
と、民部はことばすくなく答えたのみ。
「いつもながら軍師の妙策、敬服のほかはござりませぬ。ところでこやつはいかがいたしましょうか」
「わが君の御意は！」
「そうじゃの……」
伊那丸はじッと考えて、
「厳重にひっくくって、ひとまず、この三重の塔のいただきへからげつけておくのはどうじゃ」
「ともすると、幻術をもって人をまどわす妖賊、なにさま、陣ぞろいのまもありますゆえ、それが上策かも知れませぬ」
「ウム、軍馬をそろえて、小太郎山の砦へひきあげたうえは、御旗楯無の宝物のありかも、とくと糺してみねばならぬゆえ、そのあとで咲耶子に討たせてやるもおそくはあるまい」
「おおせ、ごもっともです。では方々、呂宋兵衛をこの三重へひっ立てて、かならず妖術などで逃げ失せぬように厳重なご用意あるよう」
「はッ、しょうちいたした」
「立てッ！」
と、呂宋兵衛を引ったてた四勇士は、多宝塔三重のいただきまで追いあげて、その一室の丸柱に鎖をもって厳重にしばりつけ、二階三階の梯子まではずした上、扉の口々はそとから鉄錠をおろしてしまった。

あのここな慾張り小僧

一

水車は、夜もすがらふだんの諧音をたてて、いつか、孟宗藪の葉もれに、さえた紺色の夜があけていた。
燕作の拇指で、息の根をとめられた鞍馬の竹童は、いぜんとして、水車小屋のうら崖に、ダラリとなったまま木の根にからんであおむけざまに倒れている――
とはいえ、まだ幽明の境にあって、まったく死んでしまったわけではないので、いくぶん、温みがあるが、笹の小枝からはいうつった小さな白蛇は、かれの体温へこころよげにそ

って、腕から喉へ、銀の輪となって巻きついたきり、去りもやらず、害をくわえるようすもない。
おりから、法師野の空にあって、三鼓七流の陣鐘が鳴りわたるを合図に、天地にとどろくばかりな勝鬨の声があがった。
それは、人穴の残党を一挙に蹴散らして、主将呂宋兵衛を生けどり、多宝塔の三重へ封じこめた伊那丸の軍兵が、あかつきの陣ぞろいに富岳の紅雲をのぞんで、三軍おもわず声をあわせてあげた凱歌であろう。
とおい動揺みが、失神の耳にも通じたものか、そのとき竹童は、ピクリと鳩尾をうごかして、すこし顔を横にふった。その唇へ、白蛇は銀の鎌首をむけて、緋撫子のような舌をペロリと吐く。
すると、幾十の麗人が、笙をあわせて吹くごとき竹林の風――ザザザザッ……とそよぎ渡ったかと思うと、竹童ははッきりと意識を呼びかえされて、パッチリこの世の目をひらいた。
――気がつくと、じぶんはだれかに抱かれている。
白衣白髯の老道士、片手を彼の首にまき、片手を胸にまわして、わが膝に抱きながら、なにやら、かんばしい仙丹を噛みつぶして、竹童の口へ唇うつしにのませてくれる。
「こりゃ、竹童、竹童……」
「あ？」
「気がついたか」
「オオ、あなたはお師匠さま！」
「ウム」
とうなずいたとたんに、老道士は竹童を手からおろして、すばやく七、八間ばかり離れてしまった。
その人は、竹童がぎょうてんして呼んだごとく、かれの恩師果心居士であった。みずから仙丹をかんで唇うつしにのませてくれるほどやさしい居士も、竹童が正気にかえるとともに、いつもの気むずかしい厳格なすがたにもどっている。
「不覚者めが、この後もあること、敵にあったらかならずわしの教えをおもいだすのじゃぞ」
「はい、面目しだいもございません。燕作というやつにつかまって、とうとうおくれをとりましたが、こんど会ったら、きっと負けはいたしません」
「よし、早うゆけ」
「ですが、お師匠さま――」
竹童はなつかしそうに近寄って、居士のおもてを見上げながら、
「いつか、人穴城へなげ松明をせよと、お師匠さまから密策をさずけられました時に、お別れしたきり、その後さらにお姿が見えませんでしたが、一たい今日まで、どこにおいでなされたのでございます」
「おお、わしのいたところか、じつは、そちだけにいってきかすが、わしはゆえあって、常陸鹿島の宮、下総香取の両神社に、七日ずつの祈願をこめて参籠しておったのじゃ」
「そして、お師匠さまのご祈願というのは？」
「伊那丸さまのご武運をうらなうに、どうも亀卜の示すところがよくないので、前途のおため神願をたてた」
「では、お師匠さまの易によると、伊那丸さまには、甲斐源氏のみ旗をもって、天下をお握りあそばすほどな、ご運がない

とおっしゃいますか」
「いやいやそうともいえぬ、しかしそのことばかりは、ただ天これを知るのほか、凡夫な居士には予察ができぬ」
と、果心居士はふかくもいわず口をにごして話頭一転。
「それはとにかく、法師野に陣ぞろいいたしている伊那丸君や龍太郎などは、さだめし、そちの見えぬのをあんじているであろう」
「ここで狼煙をあげたッきりですから、ほんとうにしんぱいしていられるかもしれません」
「ウム、少しもはやく、ご幕下へはせくわわって、このうえとも、伊那丸さまのおんために働けよ」
「はい」
「わしも、もういちど鞍馬のおくにこもって、星座を観じ、天下の風雲をうかがい、機あらばあらわれ、変あらば退いて、伊那丸さまの善後の策を立てるかんがえ。――では竹童、またしばらくそちにも会わぬぞ」
「あッ、お師匠さま――」
竹童が声をあげて呼ぶうちに居士のすがたは、風のごとく竹林をぬって、見えなくなった。
ふたたび法師野にあたって聞ゆる法螺の音――。すでに夜はまったく明けはなれて、紫金紅流の朝雲が、裾野の空を縦横にいろどっていた。

二

多宝塔を中心として、施無畏寺の庭に陣ぞろいした武田の軍勢は、手負い討死の点呼をしたのち、伊那丸の命令一下に、またも一部の軍卒が、法師野の部落を八方にかけわかれる。
まだ戦いがあるのか――と思うとそうではない。
武田の士卒は、呂宋兵衛らのために森にいましめられていた善良の民を第一に解放し、衣なき者には衣をあたえ、財は家々へかえしてやり、宝物は寺にはこび返し、老人には慰安を、わかき者には活動を、女には希望を、子供には元気をつけてやる。
「オオ、あの旗じるしを見ろ、多宝塔の下にいるおん大将をおがめ、あれこそ、この土地のむかしのご領主、信玄さまのおんまご武田伊那丸さま――」
と、部落の民は、わかれた慈父にめぐり会ったごとく大地にぬかずくもの、おどって狂喜するもの、うれし涙にくれる者などさまざまで、さながらそこは、修羅暗憺の地獄から、天華ふる極楽の寂光土へ一変したような光景である。
一たび、めいめい、家へかえった百姓たちは、取ってかえしに、名主の狛家一族をせんとうとして、
「これを、どうぞおん曹子さまにさしあげてくださいませ」
「八車の米と十駄の粟は、ご陣屋の兵糧としてご使用くださいますよう」
「わたくしたち若いものは、なんなりと軍役をつとめますから、仰せつけねがいとうぞんじます」
と、兵糧軍用品を、車につんでひきこむかと思えば、家畜野菜をもたらしてくる者、あるいは労力の奉仕を申しこむ若者もあり、なかにはしおらしくも、まずしい一家がよろこびの餅をついて献納するなど、人情の真美と歓喜のこえは、陣屋の

内外にあふれて、まことこれこそ極楽の景色かと、見るからにただ涙ぐましい。
かくて、民の平和をながめたうえで、伊那丸をはじめ幕下の人々、一千の軍兵、おもいおもいに屯をかまえ、はじめて朝の兵糧をとった。
勝戦のあとの兵糧――その味はまたかくべつ。
そしてきょう一日は、夜来一睡もせぬ兵馬のため、陣やすみという触れ太鼓がなる。
ところへ、ションボリした顔で、陣屋のうちへ、力なくかえってきた鞍馬の竹童。
こんな元気のないことは、竹童として稀有なことだ。
「オオ、どうした竹童！」
「竹童が見えた、竹童がもどってまいった」
さっきから、士卒を八方にやって、その行方をたずねさせていた龍太郎や忍剣らは、栄光の勇士を迎えるように手をとって、狼煙のてがらを褒めたたえた。
ことに伊那丸は、竹童かえるの声をきくと、みずから幔幕をしぼってそれへ立ちいで、人穴城いらいの功を称揚して、手ずから般若丸長光の脇差を褒美として、かれにあたえた。
主君から刀をさずけられたのは、武士の資格をゆるされたもどうよう、竹童もきょうからは幕下のひとりである。なりこそ小さいが、押しもおされもせぬ伊那丸の旗本。しかも拝領したその刀は、武田家伝来の名刀般若丸尺七、八寸の丁字みだれ、抜くにも手ごろ、斬るにも自在な反り按配、かの泣き虫蛾次郎がじまんする、あけび蔓をまいた山刀などとは、質がちがう。
これからは竹童も、鞍馬いらいの棒切れをすてて、一人前の大人のように、玉ちる刃で敵にむかうことができる。
もう、早足の燕作ごときは、一刀のもとに斬ッても捨てられるんだ。
長いあいだの希望がかなって、さだめしこおどりしたろうと思うと、スゴスゴとご前をさがった竹童、般若丸の太刀をいだいて、ひとけなき陣屋のすみで、ひとりシクシクと泣きはじめた。

三

「はてな？　……」
龍太郎は眉をひそめて、そッと、竹童のあとについていった――見るとそのありさま。
「ウーム。こりゃふしぎだ。鞍馬の奥にいたころから、泣いたことのない竹童だが……」
すきまからのぞき見をしていた龍太郎、こうつぶやきながら、しばらく考えていたが、やがて、
「こりゃ、竹童、なんでこんなところに泣いているのだ」
幕をはらって、やさしくかれの背なかをたたいた。
竹童はふいに声をかけられて、恥ずかしそうに、泣き顔をかくしながら、
「いいえ、なにも泣いてなんかいやしません」
「うそをつけ、瞼はまッ赤だし、拝領のおん刀は、このとおりおまえの涙にぬれているではないか、いったいどういうわけか、おまえと拙者とは果心居士先生の兄弟弟子、うち明

けられぬということはあるまい」
「はい、……じつは龍太郎さま……」
「ウム、どうした」
「あの、クロがどこかへ逃げてしまいました」
「オオ、そちが何者よりかわいがっていた、あの大鷲がにげ失せたと申すか」
「きのう、狼煙をうちあげる時、水車小屋のうしろへおいといたのに、今朝みると、影も形もみえないんです、……ああとうとう、クロはわたしを見すててどこかの山へかくれてしまいました」
「あれほどなついていたし、そちもかわいがっていた鷲だから、さだめしさびしく思うだろうが、いくら霊鷲でもやはり畜生、詮ないこととあきらめるよりほかないであろう」
「いいえ、おいらはあきらめきれません……」
竹童は駄々ッ子のように頭をふって、
「おいらは悲しい、クロがいなくッちゃ一日もさびしくって生きていられない」
「ははははは」
龍太郎は、思わず笑ってしまいながら、
「さてさて、おまえも鞍馬の竹童というと、いかにも稀代な神童だが、こんなところは、やッぱり年だけのわからず屋だな、これ竹童、そちはクロを失ったかわりに、若君から般若丸長光の名刀を拝領したではないか、さ、元気をだして、きょうからそれを差し料とするがいい」
「だから、おいらはよけいにかなしいんだ……。人穴城へなげ松明をした手柄も、きのうの誉れをあげたこともみんな、おいらの力よりはクロの手柄。……クロがあってこそこの竹童も、人並以上の働きができたのに、おいらばかりこんなに褒美をもらっても、ちっともうれしくありゃしない……」
いうところは天真爛漫、竹童はいよいよクロの別れをかなしみ、いよいよ声をだして泣くばかり――さすがの龍太郎も、これには弱りぬいて、ことばをつくしてなぐさめたうえ、きょう一日は陣休みだから、とにかく久しぶりに、じゅうぶん心もからだも養っておくようにと、幕のあなたへでていった。
「はい、もう泣くのはやめます……」
竹童は龍太郎の立ちぎわにそういったが、ひとりになるとまたさびしさに耐えぬもののごとく、ションボリと陣屋の空を見あげていた。そして、つまらなそうに、馬糧のなかにゴロリと身をよこたえたが、やがて連日の疲労がいちじにでて、むじゃきないびきが、スヤスヤそこからもれはじめた。

ここに、得意なやつは、泣き虫の蛾次郎。
首尾よく、鷲ぬすみのはなれ業をやりとげて、飛行天行の怪をほしいままに、たちまちきたのは家康の采地浜松の城下。
竹童の故智にならって、乗りすてた鷲を、とある森のなかにかくし、じぶんはれいの、あけび巻の山刀をひねくりまわして、意気ようようと城下隠密組の黒屋敷、菊池半助の住居をたずねあててきた。
「おねがい申します」
反りかえって立ちはだかった玄関口。
猪口才にも、もっともらしい顔をして、取次ぎの小侍に申しいれることには、

「まかりでました者は、富士の裾野の住人鼻かけ卜斎の弟子鏃師の蛾次郎と申す者、ご主人半助さまに、至急お目にかかりとうぞんじます」
取ってかえしに、奥からでてきたのは、菊池家の家来とみえて、いかさまがんじょうな三河武士、横柄に頭の上から見くだして、
「フーム、おまえか、泣き虫の蛾次公というのは？」
「はて心得ぬ」
蛾次郎、口をとンがらかして、すこぶる威厳を傷つけられたように、憤然と、
「鍛冶にかけては鏃鍛ちの名人、石をなげては百発百中の早技をもつわたくし。しかも、半助さまのおたのみにより、命がけで稀代の大鷲を連れてまいりましたのに、近ごろ無礼なごあいさつ。よけいなことをいわないで、さッさとご主人にお取次ぎあれ」
胸に慢心のいっぱいな蛾次郎、天狗の面をかぶったように、鼻たかだかと大見得をきった。
「やかましいッ」
侍の一喝に、蛾次郎はひやりと首をすくめる。
「ご主人半助さまには、きさまのような小僧になんのご用もないとおっしゃった。ペラペラむだ口をたたきおらずと退散せい」
「へえ、……こりゃ妙だ。あれほど蛾次郎に、鷲をぬすんでくれとたのんだ半助さまが、きょうになって、用がないとはずいぶんひどい。それはなにかのおまちがいでしょう」
「だまれ、へらず口の達者なやつだ。いつまでお玄関に立ちはだかっていると、つまみだすからそのつもりでおれ」
「ちぇッ、ばかにしやがら」
「こいつめ、まだでて失せぬかッ」
「いまいましい！　けッ、よくも人にカスを食わせやがったな、おぼえていろ、いまに鷲に乗って、この屋敷の上から小便をひっかけてやるから」
得意と、えがいてきた慾望を、めちゃめちゃに裏切られた蛾次郎は、腹立たしさのあまり、出放題なにくまれ口をたたいて、黒屋敷の門をでようとすると、横からふいに、
「これッ、待て！」
と、ふとい腕が、むんずとかれの襟がみをつかみもどした。
「あッ、――あなたは菊池さま」
「ただいまなんと申した」
「くッ、くるしい。……べつになんにもいいはしません」
「いやいった！　不埒なやつめ」
「だって、だってそいつはむりでしょう。あなたさまこそ、竹童の鷲をぬすんでくれば、徳川家の武士に取りたててやる。褒美はなんでも望みしだいと、向田ノ城でおっしゃったじゃありませんか」
「ばかッ。いやはやあきれかえった低能児だ。汝のようなうすのろを、戦の用に立てようとしたのが半助の大失策、ご当家の軍勢が裾野陣へくりだすときに間にあってこそ、鷲もご用に立つとおもって申したのだ。それをなんだ、すでに戦もすみ、軍勢もひいてしまった今日のめめのめといまごろ鷲をぬすんできたとてなんになるかッ。あのここな慾張り小僧めッ」
ピシリッ、と頬げたを一つくらわしたうえ、足をもって門

外へけとばすと、さっきの小侍や仲間などが下水の水をくんで、蛾次郎の頭からぶっかけ、門をしめて笑いあった。
半死半生の泥ねずみとなって、泣くにも泣けぬ蛾次郎先生、命からがら浜松の城下を、鷲にのって逃げだしたはいいが、夜に入るにしたがって、空天の寒冷は骨身にてっし、腹はへるし、寝る場所のあてはなし、青息吐息の盲飛行、わるくすると先生、雲のなかへ迷子となってしまいそうだ。
されば、村正の斬れあじも、もつ人の腕しだいであるし、千里の駒も乗り手による。――自体、蛾次郎の腕なり頭なりでは荷の勝ちすぎたこの大鷲が、はたしてかれの自由になるかどうか、ここ、おもしろい見ものである。

九輪をめぐる怪傑怪人

一

法師野の空には平和の星がかがやいている。
今夜ばかりは、部落の人も、はじめて楽しい夢路にはいっているのだ。
老人はご陣屋のほうへ足をむけずに寝ているだろう。嬰児は母の乳房にすがって、スヤスヤと寝ついているだろう。――そして施無畏寺の庭に陣した千人の軍兵も、鞍や物の具を枕にしてつかのまの眠りにつき、馬もいななかず、篝もきえ、陣の幕にしめっぽい夜がふける。
すると、多宝塔のまわりを、ぴた……ぴた……と、しずかに歩いてくる人影。
また、廻廊のかげからも、ふたりの武士が、足音ひそやかに、階段をおりてきた。
「オオ、山県どのに小文治どのか……」
「これは忍剣どの、おたがいに、こよいの寝ずの番、ごくろう」
「どこにも異状はありませぬか」
「かくべつ」
「では後刻に……」
黙礼して左右にわかれる。
カーン、カーン、――水にひびくような寂しい音。時刻番が丑時（午前二時から三時の間）の報らせ。
本陣、おん大将の寝所幕のあたりにも、夜詰めの侍が警固する槍の穂が、ときおり、ピカリ、ピカリとうごいてまわる。
そのころ――、まさにそのころ。
多宝塔三重の頂上にある暗室へ、ゆうべからほうりこまれていた和田呂宋兵衛は、らんらんたる眼をとぎすまして、しばられている鉄の鎖を、時おり、ガチャリ、ガチャリと鳴らしていた。
「ウーム、いまいましい」
音を立てないようにはしているが、しきりに身もだえして、あらんかぎりの力を鎖にこころみているようす。しかし、しょせんそれはむだな努力。
だれかに、腕でも斬ってもらわないかぎり、鎖の寸断されるはずもなし、塔の太柱が砕けるはずもないのだ。
「ああ、ざんねんッ……ウーム、つつつッ……」

もがきにもがくうち、呂宋兵衛は唇をかみわって、タラタラと血潮をたらした。

とたんに、バサッと天井を打ったまっ黒な怪物がある。見ると、楼閣の欄間から飛びこんでいた一尺ばかりの蝙蝠、すでに秋の暑さもすぎているこのごろなので、翼に力もなく、厨子の板壁をズルズルとすべってきた。

「オ！　しめた」

呂宋兵衛はジリジリと身をにじらせた。蝙蝠をみたとっさに思いうかんだのは、獣遁の一法、南蛮流の妖術では化獣縮身の術という。が、それを行うには、ちょっとでもよいから蝙蝠のからだにふれなければやれない。いや、蝙蝠にかぎることはない、なんでも動物霊気の感応を必要とするのだから、ねずみでも猫でもいいが、いまこの塔中には蝙蝠よりいないのだから、ぜひそれへ指でもふれたいのである。

しかし、なかなか蝙蝠のほうでちかづいてくれない。

たまに、頭の上へはってきたなとおもって、体をよせていくと柱にしばりつけてある鎖がガチャッと鳴るので蝙蝠はびっくりして天井へはねあがる――が、六角形の密室なので、そとへはでずにまたバサバサと板壁に羽すべりをしてきた。

こんど近くへきたらのがすまいと、呂宋兵衛は息をころした。けんめいになるとおそろしいもの、かれの額は魚の油を塗ったように汗ばんでいる。

けれど、蝙蝠の敏覚に、七たび八たびおなじことをくりかえしても、呂宋兵衛の努力はむなしかった。はやくも里では一番鶏がなく、かれは気が気でなくなった。

そこで、呂宋兵衛はまた考えなおした。

かれは坐禅を組むようにすわった。そして、さいごにもういちど蝙蝠が壁をすべってくるのを待ちかまえこんどは、口に呪をとなえて、つーッと一本のほそい絹糸のような線を吐きだした。

と思うと――一ぴきの小さな金蜘蛛が、呂宋兵衛の口からスススススと、その細い糸をつたわりだした。

これはかつて、人穴城で竹童と初対面のときに、問答ちゅうにかれがやってみせたことのある、呂宋兵衛得意の口術、いま、吐いて糸をわたらせた金蜘蛛は、壁にはりついている大蝙蝠のそばへはいよったが、それを見ると蝙蝠は、バサリと一すべりして、いきなり蜘蛛を食いにかかった。

と、蜘蛛はつーッ、と二尺ばかり糸をもどってとまる。蝙蝠はまたソロリと寄って餌をうかがう――その機微なころあいをはかって、呂宋兵衛はスッと、吸う息とともに、蜘蛛を口のなかに引きいれてしまうと、蝙蝠は餌を追ってパッとかれの顔へぶつかってきた。

「えいッ！」

とたんに、かれの五体からおそろしい気合いが発した。そして、忽然と床に鳴った鎖の上へ、大蝙蝠のくろい妖影が、クルクルと舞いおちた。

二

「やッ」

愕然と、多宝塔の下で立ちすくんだのは、寝ずの番の加賀見忍剣。

左に鉄杖をつき、右手を眉にあてて、暁闇の空をじッとみつめていたが、やがて、
「おお！　山県、巽！」
と同僚の名を呼びたてた。
「なんじゃ」
「異変かッ」
バラバラと、すぐそこへ飛んできた小文治と蔦之助、――
忍剣は、
「しッ」
と手でせいして、
「愚僧の気のせいかも知れぬが、あの塔の三重目にあたる欄干に、何者か立っておらぬだろうか」
「どれ……」
すこし身を横にかがませて、暁天の闇をすかしたふたりは、なるほど、よくよく眸をこらして見ると、忍剣のいうとおり楼閣の三階目に、うす黒い影が立っているような気がした。
「しかし、あれに人のいるはずはなし、ことによったら棟木の瓔珞ではないか」
「いや、瓔珞がアア大きく見えるはずはない」
「といって、厳重にいましめておいた呂宋兵衛ではなおさらあるまい。ウーム、おや……、影がうごいた！」
「なに影がうごいた？　オオ、いよいよあやしい」
「ちぇッ、やっぱり呂宋兵衛だ、どうして自由になりおったか、あれあれ、棟木の瓔珞に身をのばして、塔の屋根によじ登ろうとしておるのだ」
「一大事！　それのがすなッ」
「オオ」
三人は疾風のごとく階段をあがって、扉を蹴ひらき、塔のなかへ躍りこんだが、南無三、二階三階へあがる梯子は、呂宋兵衛を頂上にほうりこんだ時、まんいちをおもんぱかって、みんな取りはずしたまま施無畏寺へはこんでしまった。
うっかり、それを忘れて飛びこんだ三人は、じだんだをふんで、
「しまった！」
とふたたびそとへかけだしてきた。
「なんじゃ、なにごとが起ったのだ」
ところへ、木隠龍太郎がくる。小幡民部がはせつける。たちまちにして、陣々の大そうどう、大将伊那丸も幕をはらってそれへきたが、閣上の呂宋兵衛は、いちはやく屋根の上へとびうつり、九輪の根もとに身をかがめてしまったので、遠矢を射かけるすべもない。
「あれあれ、呂宋兵衛は幻術に長けた曲者、どう逃げようもしれませぬ、みなさま、はやくお手配をしてくださりませ」
と、うろたえまわる軍兵のなかにまじって、しきりに叫んでいるのは咲耶子の声らしい。十数人の軍兵は同時に、施無畏寺へ塔の梯子を取りに走りだした。
それを待つのももどかしいと思ったか、れいによっておくれをとらぬ木隠龍太郎、ばらばらと多宝塔の裾にかけよったかと見るまに、一階の欄干にひらりと立って、えいッとさけんだ気合いもろとも、千本廂の瓔珞にとびついた。
「オオ、やったり、木隠！」
と、こなたの一同は、その機智に感嘆の声をあげたが瓔珞

の飾り座金がくさっていたとみえて、龍太郎の体がつりさがるとともに、金鈴青銅の金物といっしょにかれの五体は、ドーンと大地におちてしまった。
「ウーム、無念」
ふたたび立ってよじのぼるくふうをしていると、朱柄の槍をひっさげた小文治。すっくとそこに立って、槍の石突きを勢いよくトンと大地につくやいなや、
「やッ――」
と叫んで、みごとに一階の屋根廂へ飛びあがった。そしてすぐ槍を引こうとすると、
「待ったッ」
と九尺柄のなかごろに、龍太郎がすがりつく。
「おうッ」
と、上から小文治が力をこめると、龍太郎も息をあわせて、槍の柄とともにポンと跳ねあがった。
たちまち、槍をたよりに二階へあがり、三階目の欄干までよじのぼって、呂宋兵衛監禁の六角室を見ると、一ぴきの蝙蝠が死んでいるほか、そこには何者のかげもない。
「あ！　いよいよ逃げたは、きゃつときまった」
「それッ、この上だ」
とふたりは、東のすみの欄干に足をかけたが、そこから九輪のたっている塔のてっぺんへのぼるには、どうしても、千本廂につってある瓔珞に身をのばして、ブラさがるより道がない。
ところが、それをたよりにすることは、一階のときの失敗があるので、さすがの小文治も二の足をふんだが、龍太郎はなんのおそれげもなく、やッと、欄干から瓔珞の根にとびついた。
下にながめていた伊那丸をはじめ、あまたの勇士も、思わず、胆をひやしたが、こんどは瓔珞も落ちず、龍太郎も完全に棟木へ片手をかけてしまった。これ、さっきは、瓔珞の頑丈をたよって不覚をとったが、こんどは、果心居士相伝の浮体の法をじゅうぶんにおこなっているためだ。
そのかわり、龍太郎、最後の頂上へのぼるにはだいぶ手間がとれている。片足を瓔珞の鈴環にかけ、そろそろと手をのばして、屋根の青銅瓦に半身ほど乗りだしたところで、小文治のさしだした槍をつかんでやる。
巽小文治は、もとより果心居士の門下でないから、浮体の息を知らない。したがってただ度胸のはや業。槍の一端を塔の角金具にひっかけ、いっぽうを龍太郎につかんでいてもらって、スッと瓔珞の鈴環へ足をかけると、ともに、ふたりの重みがかかっては危ないので、龍太郎はすばやく上へはいあがった。
とたんに、雨とも見えぬ空合なのに、塔の先端九輪の根もとから、ザーッと滝のような水がながれてきて、塔の四面はさながら、水晶の簾珠をかけつらねたごとく、龍太郎の身も小文治のからだも、水の勢いでおし流されそうにおぼえた。
「呂宋兵衛の妖術だ、まことの水ではない、小文治どのひるむなッ」
龍太郎は果心居士の手もとにいただけに、幻術しのびの技などには多少の心得がある。いま、九輪の根もとから吹いてきた水勢もてっきり、呂宋兵衛の水龍隠れの術とみたから、こう注意して、無二無三に青銅瓦の大屋根へ踏みあがった。

そして、気は宙天へ、声は、大地にひびくばかりに、
「やあ、奸賊和田呂宋兵衛、この期になってはのがれぬところ、神妙に木隠龍太郎の縄目をうけろ」
「だまれ、青二才、汝らごとき者の手にかかる呂宋兵衛ではない。うかと、わが身にちかよると、このいただきから蹴落として、木ッ葉微塵にしてくれるぞ」
水術の印を解くとひとしく、あきらかに姿をみせた和田呂宋兵衛、九輪の銅柱をしっかと抱いて、夜叉のごとく突ッ立っていた。
「おのれッ――」
と片膝おりに、戒刀の鞘を横にはらった龍太郎、銅の九輪も斬れろとばかり、呂宋兵衛の足もと目がけて薙ぎつけた。
同時に、波のごとき瓦のうえへ、ヒラリと飛びあがった巽小文治は、いま龍太郎が斬りつけたとたんに、朱柄の槍をさッとしごいて、呂宋兵衛がかわさば突かんと身がまえた。

紅帆呉服船

一

下では、あッと、手に汗をにぎる諸軍の声。
伊那丸をはじめ、幕下の面々、また竹童も咲耶子も、塔の一点に眸をあつめ、ハラハラしながら鳴りをしずめた。
時こそあれ、――大へん。
三重の屋根瓦から塔の九輪のまっ先へ、雷獣のごとくスルスルとはいあがった和田呂宋兵衛、
「おうッ……」
なにやら叫んだかと思うと、片手をブンとふりまわした。
と――またこそ、かれの幻術か、ふいに、さッと落ちてきた一陣の風鳴り。
すると明方の天空から、思いがけない人声がきこえた。
「いけねえいけねえ、おいクロ！　こんなところへおりちゃアいけねえ」
いうまもなく、ななめに翔けりきたった、まっ黒な怪物があった。
まさしく鷲！　竹童の盗まれたクロ。
乗っているのは――わめいているのは、菊池半助にドヤされて、遠江の国をすッ飛んできた、泣き虫の蛾次郎であった。
鷲は見るまに九輪をかすった。
一大事！
巽小文治はふたたび槍をとりなおして、あおむけざまに、ヤッと突きあげたが、鷲の羽風にふき倒され、さらにいっぽうの龍太郎が、九輪の根もとからはらいあげた戒刀の切ッ先も敵のからだにまでとどかなかった。
その時、それと同時に、呂宋兵衛はとんできた鷲の背なかへ乗りうつっていた――ほとんど、電光一過――目ばたきする間だ。
塔上の二勇士、塔下の三軍が、あれよと、おどろきさけんだ時には、万事休す、蛾次郎、呂宋兵衛、ふたりを乗せた大鷲の影はまっしぐらに、三国山脈の雲井はるかに消えていく。
「しまった！」

伊那丸以下の者、でる声は、ただこのたんそくばかりであった。
なかにひとり竹童のみは、陣屋をかけだして、
「おお、クロだクロだ、おいらのクロだ」
空にむかって叫びながら、追えどもおよばぬ大鷲の行方へ無我夢中で走りだした。

二

さて、おどろいたのは、蛾次郎である。
多宝塔のてッぺんを通りすぎたとたんに、ヘンなやつがじぶんの腰へとびついたと思ったが、なにしろ、鷲の走っているあいだはふり向くこともできず、話しかけることもできない。
目の下に、クルクルまわる山や峠や町や村をいくつも見て、およそ小半日も飛んだころ、やっと青々とした海辺におりた。
「アア、お腹がペコペコだ。これで命も無事だったし、なにか食べ物にもありつけるだろう……」
すぐにキョロキョロ見まわして、漁師の干しておいた小魚を見つけ、それを火にあぶりもせず、引ッ裂いて食べはじめた。
食べながら波打ちぎわを見ると、黒の蛮衣をきた大男が、小手をかざして、しきりに地理をあんじている。
「あッ、あの男だナ、おれの腰に取っついてきた蠅のようなやつは」
蛾次郎、干魚をムシャムシャ噛みながら、そばへ寄ってみると、裾野で見かけたことのある呂宋兵衛なので、二どびっくりという顔で、
「お、あなたは人穴の……」
「ウム、呂宋兵衛じゃ、ああ、おまえは、鏃師鼻かけ卜斎の弟子だったな」
「ええ、よくごぞんじでございますね。おおせのとおり蛾次郎という者。……ところで呂宋兵衛さま」
「なんじゃ」
「ここはいったい、東海道のどのへんにあたりましょう」
「まるで方角ちがい――北陸道の糸魚川と申すところだ」
「すると向こうに見える岬は伊豆の国とはちがいますか」
「あたりまえだ、北日本の海に伊豆はない。すなわちあれが能登の半島、また、うしろに見える山々は、白馬、戸隠、妙高、赤倉、そして、武田家と鎬をけずった謙信の居城春日山も、ここよりほど遠からぬ北にあたっておる」
「へえ……そしてあなたは、ここからどこへ行こうってえつもりなんです？」
「京へのぼるのじゃ」
「いいなあ。わたくしも一つお供につれてッてくれませんか」
「おまえにはたのみがある。蚕婆と早足の燕作、それに丹羽昌仙、この三名にあったら、わしが京都へのぼっておるゆえ、あとからかならずくるようにと、言伝をしてもらいたい」
「燕作は大きらいだけれど、あとのふたりは引きうけますよ。……オヤ、アッ、大へん……」
なにを見たか、にわかぎょうてんしてうろたえだした

蛾次郎、さようならともいわず、クロにとび乗って、ツーと空へ逃げてしまった。
と、間もなく、スタスタここへきた旅人。
「や、それにまいったのは、人無村の卜斎ではないか」
「これはこれは、呂宋兵衛さま、意外なところで……」
と双方、磯岩に腰かけて、裾野落ち以来のことを話しあったが――卜斎の上部八風斎、伊那丸へ人穴城の絵図面を持ちこんだことや、自分が柴田勝家の家中であることなどは、もとよりおくびにもださずにいる。
「しかし、卜斎。おまえは裾野に住みついている鏃鍛冶、なにもこんどのことで、逃げる必要もなかろうではないか。いったいこれからどこへまいろうとするのだ」
「裾野もよろしゅうございますが、ああしばしば戦があった日には、とても、のんびり金敷をたたいてはおられません。そこで、越前北ノ庄へ巣をかえようと申すわけで」
「なるほど。じつはわしもこれから都へでて、安土の秀吉公へすがり、なんとかいとぐちをつけようと考えているが、うまくとちゅうまでの便船でもあるまいか」
「さあ、わたくしも、北ノ庄までる船はないかと、ずいぶん尋ねてみましたが、どうも折り悪く、出船のついでがないそうで」
と、ふたりが話すのを聞いていたものか、波打ちぎわにあげてあった空船のなかから、ムックリ起きあがったひとりの船頭。
「おい」
と、いけぞんざいに呼びかけて、
「おめえたち、上方のほうへいきてえなら船をだしてやろうか。越前へでも若狭へでも着けてやるぜ」
「それはかたじけない。しかし、そこにあげてあるような小舟ではどうにもならぬ」
「いや、長崎から越後港へ、南蛮呉服をつんできた親船が、この沖にとまってるんでさ。どうせ南へ帰る便船だ、えんりょなく乗っていくがいい」
船頭は空船の艫をおして、砂地から海のなかへ突きだした。そして呂宋兵衛、卜斎のふたりを乗せるや否、勢いよく櫓柄をとって、沖の親船へ漕ぎだした。
まもなく、海潮けむるかなたの沖に長崎型の呉服船、紅帆船の影らしいのが、だんだん近く見えはじめる。

三

紅がら色の帆に、まんまんたる風をはらんだ呉服船はいま、能登の輪島と七つ島の間をピュウピュウ走っている――
カーン　カーン　カーン……
船楼の鐘。
もう真夜中であろう、風はないほうだがかなり高波。パッと、舳にくだける潮の花にもうもうたる霧が立ってゆく。
その霧のなかに、ブランブランと、人魂のようにゆれている魚油のあかり。ギリギリ、ギリギリと帆綱のきしむ気味の悪さ……
「やい、起きろッ」
ふいに木枕を蹴とばされて、はねおきたのは便乗してきた

卜斎と呂宋兵衛。フト見ると、胴の間のグルリに、閃々と光るものが立ちならんでいる。
「なにをするんだおまえたちは？」
卜斎は、前差しの短刀をつかんで、きッとなった。
「まぬけめ、なにをする者か聞かなくッちゃわからねえのか。こいつを見たら少しゃ目がさめるだろう」
わざと、ふりうごかして見せた光は、まさしく槍、刀、鏃、薙刀――どれ一つを食っても命のないものばかり。
「ウーム、さては汝らは海賊だな」
呂宋兵衛は、その時のっそり突っ立って、魚油のあかりに照らしだされている二十四、五人の荒くれ男を睨めまわした。
「知れたことだッ」
槍の穂は、いっせいに横になって、車の歯のごとく中心へ向いた。
「おとなしく素ッ裸になッちまえ、体だけは、ここから輪島の磯へながれ着くようにほうりこんでくれる」
「待てッ。望みどおりになってもやるが、汝らの頭領はいったいなんという者だ」
「そいつを聞くと命がない掟だぞ。それでも聞きたけりゃ聞かしてやる」
「ウム、しょうちのうえでも聞きたいものじゃ」
「よし、冥途の土産に知っておけ。この船の頭領は、龍巻の九郎右衛門。もと東海の龍王といわれた八幡船十八艘のお頭領さまだ。サ、こう聞かしたからにゃ命ぐるみもらったからかくごしろ」
「ばかをぬかせ」
「なんだとッ」
「まごまごいたすとこっちでこそ、汝らの持ち物はおろか船ぐるみ巻きあげてしまうから用心しろ」
「や、こいつが！　てめえいったい何者だ」
「富士の人穴にいた山賊だ」
「なに山賊……」
「おお、海賊の腕が強いか、山賊の智恵がたしかか、ここでいちばん腕くらべをしてもいい。それともすなおに頭領の龍巻をよんできて詫びをするか」
「なまいきなッ！」
勃然と海賊の武器がうごいた。
が――無益な問答をしているあいだに、呂宋兵衛は、じゅうぶんに幻術のしたくをしていた。
「ふッ……」
と、前後の対手へ二息かけると、たちまち、かれのすがたは一条の水気となって、あるがごとくなきがごとく乱打の武器もむなしく風を斬るばかり。
「うぬッ」
ひとりがすさまじい気合いで、おぼろの影を槍で突く。すると、ピチリと一ぴきの魚がはねた。
目の下、二尺もある鰡だ。
ザアッと、舷から二どめの浪がしらがきて、鰡を海中に巻きかえそうとしたが、海賊の手下どもはこれこそ蛮流幻術をやる山賊の変身と、よってたかって、手づかみにしようときそったが、ピチピチはねまわる死力の魚は、むしろ人間一ぴきつかまえるのよりしまつがわるい。

「ちくしょッ――」
バラリと網をなげた者がある。
鉛の重味にしばられて、とうとう鯔はそのなかにくるまってしまったが、同時に頭の上で、
「わッはッははは、あはははは。やい、野郎ども、いいかげんにしねえか」
と、ふたりして、笑う声がする。
ひょいと仰向いてみると、船楼の櫓に腰かけている頭領の龍巻と、いま下にいた呂宋兵衛。
どッちも卓へ頬杖をつきながら、下のありさまを見物して、仲よく酒を飲んでいる。
「じょうだんじゃねえ。お頭領、こいつア、いったいどうしたわけなんで……」
手下どもは、わいわいそこへ寄ってきて、ただふしんにたえぬという面もち。
「しんぱいするな、こりゃ和田呂宋兵衛といって、おれが長崎にゴロついていた時代の兄弟分だ」
「へえ？　……」
「見ろ」
と、龍巻は、じぶんの二の腕と、呂宋兵衛の二の腕をまくりあげて、手下どもに見くらべさせながら、
「このとおり、ふたりとも蜘蛛の文身を彫りあって、おれは海で一旗あげるし、呂宋兵衛は山に立てこもって、おたがいに天下をねらおうとちかって別れた仲なのだ」
「なるほど、そういう兄弟分があるということは、いつかお頭領の話にも聞いていました」
「そのふたりが、思いがけなくめぐりあった心祝いに、てめえたちにも飲ませるから、いまの魚を料理して、もっと酒をはこんでこい」
「しょうちしました。だが、そうとするといまの鯔はいったいどうしたってんだろう？」
「あれは呂宋兵衛が、水気魚陰の法をかけて、てめえたちみてえな半間なやつの目をくらましたのだ。しかし、魚はちょうど船へ跳ねこんだほんものだそうだから、安心して料理するがいい」
手下どもを追いはらって、ふたりとなった船櫓に、龍巻と呂宋兵衛、久しぶりの酒を酌みかわして、話はつきないもよう。
名はおそろしい海賊と山賊だが、久濶の人情には、かわりのないものとみえる。
「なあ、龍巻。てめえとおれとは、その昔、天下を二分するような元気で別れたんだが、おたがいに、いつまでケチな賊の頭領じゃしようがないなあ」
「しかし呂宋兵衛」
「なんだ」
「おめえは富士の山大名とか、野武士の総締めとかいわれて、豪勢なはぶりだってことをうわさに聞いていたが」
「さ、それが残念千万な話で、いちじは富士の殿堂に、一国一城の主を気どっていたが、武田伊那丸という小童のために、とうとう人穴城を焼けだされて落武者となってしまったのだ」
「なに、武田伊那丸だッて」

「ウム、てめえもうわさに聞いていたろう」
いま、船は加賀の北浦に沿って、紅帆黒風のはためき高く、いよいよ水脚をはやめている。

四

龍巻の九郎右衛門は、杯の南蛮酒をゴクリと乾し、呂宋兵衛へもついでやりながら、
「ふウむ、そいつはふしぎないんねんだ……」
とうめくようにいったものである。
「じつは兄貴、うわさどころかこの龍巻も、あの伊那丸のやつと、家来の小幡民部という野郎には、ひどい目にあわされたことがあるんだ」
と、紅帆船以前のことを、無念そうに語りだす。
それは、かれが東海をさかんに荒していたころ――といっても古い話ではない、伊那丸が忍剣にわかれて、弁天島から八幡船のとりこになった時のこと――
穴山梅雪の手をへて、伊那丸のからだを徳川家へ売りこもうとした晩、小幡民部に計略の裏をかかれて、沖の八幡船は焼打ちされ、かれじしんは、堺町奉行の手に召しとらえられてしまった。
その後、龍巻は、堺町奉行の牢をやぶって逃亡したが警戒がきびしいため、こんどは、紅がら色の帆をあげて北日本の海へまわり、長崎から往復する呉服船と見せかけて、海上の諸船や、諸港の旅人をなやましている。
「こういうわけで、おれはいまでも、その恨みを忘れやしねえ。この龍巻の息のねのあるうちは、きっと、あの伊那丸と小幡民部の野郎を、取ッちめずにはおかねえつもりだ」
「そうか……」
と、呂宋兵衛は、聞きおわって、
「してみれば、伊那丸一族は、この呂宋兵衛にも、龍巻にとっても、遺恨のつもりかさなるやつ。おれもこれから京へのぼって、秀吉公の力を借り、武田一族を狩りつくすさんだんをするから、てめえも折さえあったら、この仕返しをすることを忘れるなよ」
「いわれるまでもないことだ。……オオそりゃいいが、さっき、兄貴がつれていた男はどうしたろう」
「ウム、すっかり忘れていた。あの槍襖におどろいて、胴の間のすみで、気を失っているかもしれねえ。……なにしろ裾野の鏃鍛冶で、おそろしい修羅場は知らねえやつだから」
すると、そこへばらばらと、櫓へ駈けあがってきた手下のひとりが、
「お頭領、さっきのどさくさまぎれに、もうひとりの男が、艫の小舟を切りおとして、逃げッちまったようですぜ」
「なに、卜斎が逃げてしまったと？」
それと聞いて、呂宋兵衛は、はじめてかれに疑いをいだき、櫓の欄に駈けよって、漆のような海面を見わたしたが、もとより一片の小舟が、ひろい闇から見いだされるはずもない。
いっぽう、あやしげな親船を逃げだした鼻かけ卜斎の八風斎。たちまち加賀の美川ヶ浜に上陸して、陸路越前の北ノ庄へ帰りつき、主人勝家に、裾野陣のありさまを残りなく復命した。

そして勝家は、ちかごろひんぴんと領海をあらす海賊に討手を向けたが、すでに、紅帆呉服船の行方はまったく知れなかった。

変現千畳返し

一

「あ、あ、あア――」

と、煙草くさいあくびを一つ。

「だいぶ遊んでしまったな、もう陸へあがって四十日目か。おやおや都入りのとちゅうで、おもわぬ道草を食ってしまったわい……」

ひとりごちながら寝台をおり、二階の窓ぎわへ、唐風の朱椅子をかつぎだして、そこへ頬杖をついたのは、こういう異人屋敷にふさわしい和田呂宋兵衛。

そとは海――それも鯖の背のような、あお黒い冬の海。

昼の陽ざしも、こたえがなく、北日本特有の寒風が、槍のごとく波面をかすッて、港泊りの諸船の帆ばしら、ゆッさゆッさとゆさぶれあうさま、まるで盥のなかの玩具を見るよう。

その港を、どこかといえば、賤ヶ岳を南にせおい、北陸無双の要害ではあり商業の繁昌地。――陸には南蛮屋敷があり、唐人館の棟がならび、湾には福州船やスペイン船などの影がたえない角鹿（いまは敦賀と書く）の町である。

「さてと、ことしは天正十年、もう十二月だな……」

この海を見、この異国情調をながめても、呂宋兵衛には、詩をつくる頭もないと見え、みょうなことをつぶやいている。

「天正十年、――へんな年だッたな、ばかに天下をかきまわした年だ。まずちょっとおもいだしたところでも、春早々、甲斐の武田が亡ぼされ、六月には、信長が本能寺で焼打ちにあった。うまくやったのは猿面の秀吉、山崎の一戦から柴田も佐々も滝川も眼中になく、メキメキ羽振りをあげたが、ずるいやつは徳川家康だ。どさくさまぎれに、甲州から信濃の国をわが物にして、こっそり領分をふくらませてしまった。――だが、まずゆくゆくの天下取りは、どうしても秀吉だろうな。北ノ庄の柴田勝家、こいつもなかなか指をくわえてはいまい。いまに秀吉と、のるかそるかの大勝負だ。……ウム、のるかそるかは俺のこと、手ぶらで都入りも気がきかない。手近なところでなにか一つ、秀吉のやつに取りいるお土産を、かんがえようか……」

その時、コツコツ扉をたたく者があった。

「オイ、兄貴、いねえのか、寝ているのか！」

「だれだ」

「龍巻だ、あけてくれ」

「いや、こいつはすまなかった」

窓をはなれて、重い扉をギーとひらく。と、待つ間おそしの勢いで、飛びこんできた九郎右衛門、片目をおさえたまま、呂宋兵衛の寝台の上へ、ゴロリとあおむけに寝てしまった。

「どうしたんだ、耳のほうへ血がたれてくるではないか」

「すまねえが兄貴、この左の目へささッている物を、そッとやわらかに抜きとってくれないか」

「いいとも、だが、棘でもさしたのか」
「針だ、針がささッてるんだ」
「針？」
「ウン、ゆうべ沖の客船から、四、五人の旅人をさらってきて、この下の穴蔵へほうりこんでおいたのだ。そこでいま手下どもと、ひとりひとりの持ち物や身の皮をはいでいると、そのなかにふんじばられていた婆めが、いきなりおれの顔へ針をふきつけやがったんだ。ア、痛、……なにしろ早く抜いてくれなきゃ話もできねえ」
「うごいてはいけないぞ、いま洗い薬を、こしらえているから」
「たのむからはやく……」
「よし、じッとしていろよ」
　と、多少蛮法の医術にも心得があるらしい呂宋兵衛、口をもって龍巻の眸にふかく突きささっている針をくわえとり、すぐ洗い薬をあたえておちつかせた。
　すると、四、五人の手下が、扉口から首をだして、
「おかしら」
　と、どなった。
「いよいよあの船へ、角鹿町の和唐屋から一万両の銀を送りこみましたぜ。船積みするところまでたしかに見届けてきました」
「そうか！」龍巻は、苦痛もわすれ、
「して、厦門船は、いつ纜を巻きそうだ」
「いつどころじゃねえ、もう出船のしたくをしているようすなんで、風のあんばいじゃ夕方にも、港をズリだすかも知れませんぜ」
「じゃ、こうしちゃいられねえ。てめえたちは、穴蔵にいる子分を呼びあげて、すぐ沖の鼻へ、船をまわして見張っていろ。おれはあとから、早船で追いつくから」
「がってんです。じゃ、お頭領もすぐにきておくんなさい」
　ドカドカと階段を降りていった。
「大そうな仕事じゃあないか」
　呂宋兵衛は、いまの話であらかたのもようをさっしていた。
「この角鹿へ煙草を売りこんだ厦門船が、一万両の売り代を積んでかえるやつを、玄海灘あたりで物にしようというたくらみさ。そこでこんどはしばらくこの仲間屋敷へも帰らねえから、兄貴はここで冬を越すとも、また閉めて京都へ立つなりと好きにしてくれ」
「ちょうどいい。じつはおれも、いつまでここにいい心持になってもいられないから、一つゆきがけの駄賃に北ノ庄のようすをさぐり、それを土産に都入りして、うまうまと秀吉のふところへ飛びこむつもりで考えていたところだ。すぐおれもここを立つとしよう」
「するととうぶんお別れだが、秀吉公へ取りいったら、おれもお船手の侍大将かなにかになれるように、うまく手蔓をしてもらいてえものだな」
「野武士だろうが海賊だろうが、人見知りをせず味方にする秀吉だから、おれが上手に売りこんで、龍巻壱岐守ぐらいにはしてやるよ。まあそれを楽しみにしているがいい」
「あ――厦門船がでやがった」
　窓口から港をながめて、龍巻はにわかに立った。そしてせ

わしい別れをつげ、部屋からかげを消したかと思うと、やがて、海賊の巣である異人屋敷の裏手から、一艘のはしけを矢のごとく漕がせていった。
「ははあ、紅帆船は、むこうの岬のかげにかくれているんだな」
それを見つつ、呂宋兵衛も伴天連の黒服をつけ、首に十字架をかけて、ふところには短刀をのんだ。さて、すっかり身支度がおわると、バタバタ窓をしめて、かれもこの家を立ちかけたが、門口でフイと一つの忘れ物を思いだした。
「針……針……針がいたッけ……」
呪文のようにつぶやくと、クルッと踵をかえして、うす暗い石段をスルスルと地の底へ——

二

陰湿な穴蔵部屋、手さぐりで近寄ると、鉄格子の錆がザラザラ落ちた。すると、ウーム……とうめきだしたかすかな人声。海賊たちにつれこまれた旅人らしい、ムクムクと身をおこして、人のけはいにおびえている。
「おい、おい」呂宋兵衛は、鉄格子からのぞきこんで、
「もしやおまえは、富士の裾野にいた蚕婆ではないか」
「えッ！」
と、びっくりしたが、しばられているので、そばへは寄ってこられぬらしい。
「わ、わたしを知っているのは、いったい、だ、だれだい……」
「人穴の呂宋兵衛よ」
「ひえッ、呂宋兵衛さま？　あああありがたい、助かった。海賊の龍巻がこないうち、はやくここからだしてやっておくんなさい」
「どうしておまえはまた、こんなところへつれこまれたのだ」
「どうしてだって、このくろうをするのも、みんなおまえさんに味方をしたためじゃないか。人穴城から法師野へ逃げて、落ちつくまもなく、伊那丸の夜討ちにあい、やッと北陸道まで逃げのびたと思うと、こんどは海賊につかまってこのありさまさ」
「やッぱり、おれの想像があたっていた」
「くやしいから龍巻の目の玉へ、針を一本吹いてやったら、いまになぶり殺しにしてやるからおぼえていろと、おそろしい血相で、二階へかけあがっていったが……」
「その龍巻や手下どもは、にわかに船をだすことになって、おまえをここへおき去りにしていった」
「すると、わたしを餓死させる気だったんだね。呂宋兵衛さま、とにかく早くだしてくださいまし」
「よし、そのかわりにこれからさきは、おれのために、火の中へでも水の中へでも飛びこむだろうな」
「ごめん、ごめん。わたしはもう大きな慾のない身だから、また裾野で、蚕の糸でものんきに引きたいよ」
「ふん、それじゃ、いッそ、死ぬまでこの穴蔵で隠居をしていろ。たぶんもう二、三年は、この屋敷の戸を開けにくる人間はないはずだから」
呂宋兵衛が、もどりかけると、蚕婆は悲鳴をあげた。い

やおうなく、いろいろな誓いを立てさせられて、そこから助けだしてもらうと、婆は、頭にくろい頭巾、身に黒布をまとわせられて、あたかも女修道士のような姿となり、呂宋兵衛のあとからあてもなくついていった。

それから数日ののち――

角鹿の浦から十六、七里、足羽御厨の北ノ庄（今の福井市）の城下に、ふたりの偽伴天連があらわれて、さかんに奇蹟や説教をふりまわしていた。

と、ある日である。濠端にたって、なにやら祈祷をささげている伴天連をみかけて、美しい夫人が鋲乗物を止めさせた。

「もし、伴天連さま」

きれいな侍女たちが三、四人、駕籠をはなれて腰をかがめた。伴天連――呂宋兵衛と蚕婆は、もったいらしく、祈祷の膝をおこして、

「はい、なんぞご用でござりますかな」

「あの駕籠のうちにおいでなされますのは、ご城主さまの奥方小谷の方さまでいらっしゃいます」

「ああそれはそれは、右大臣信長公のお妹君で小谷の方さま、おうわさにもうけたまわっておりました」

「奥方さまは、そのむかし、安土においでのころから、マリヤさまをふかいご信仰でいらっしゃいます。ついては、なにかお祈祷のお願いがあるとのこと、ごめいわくでも城内までお越しあそばしてくださいませぬか」

「おやすいこと、すぐにもお供もうしましょう」

と、呂宋兵衛は、人知れず蚕婆に目くばせして、聖僧気どりのうやうやしく、小谷の方の乗物について大手の橋を渡りこえた。

すると多門の塀際ですれちがった、りっぱな武士がある。

「おや？」

と伴天連のすがたを見送って、

「こりゃふしぎだ、いま奥方の供に加わっていったやつは、たしかに、いつぞや海賊船で別れた和田呂宋兵衛、ひとりは裾野の蚕婆によく似たやつだ……はて、みょうだわい」

と、下城のとちゅうで腕ぐみをしてしまった。

「ウーム、あの呂宋兵衛がこの城内へ……伴天連になりすまして……蚕婆をつれて……こりゃ時節がらゆだんがならん！」

従者だけをそこから下城させて、スタスタとふたたび曲輪へ帰りだしたのは、もと裾野では鏃師の鼻かけ卜斎――いまではこの城の礎とたのまれる上部八風斎だった。

三

足羽九十九橋を脚下にして、そびえたつ北ノ庄の城は北国一の荒大名、鬼柴田勝家がいる砦である。墨濠は宏大、天主や楼閣のけっこうさ、さすがに、秀吉を成りあがりものと見くだして、大徳寺では、筑前守に足をもませたと、うそにも、いわれるほどなものはある。

「憎っくい猿面、ウーム、――あわふかしてくれねばならぬ」

と、本丸の上段、毛皮の褥に、どッかりかまえた修理亮勝家は、その年、五十三の老将である。こよいも、岐阜の侍従信孝からの飛状を読みおわって、憤怒を面にみなぎらしていた。

評定の間のあかりは、晃々と照って、席には一族の

権六勝敏、おなじく勝豊、徳山則秀、不破光治、小島若狭守、毛受勝介、佐久間玄蕃允など、万夫不当の北国衆が、評定の座へズラリといならんでいる。

「この勝家が冬ごもりのまを、鬼のいぬまと思うて、猿面秀吉がすき勝手なふるまい。この書状のようすでは、疾く佐和山をおとしいれ、長浜の城まで手をだしてまいったらしい。ウム、もう隠忍している場合ではない。若狭！　若狭守！」

「はッ」

「そちはすぐ天守へあがって、陣触れの貝をふけ」

「はッ」

「勝敏、勝豊！　また玄蕃允！　その方どもは先陣に立ってまッしぐらに、近江へむかえ、すぐにじゃぞ……」

「君！　しばらく待たせられい」

「なんじゃ、毛受勝介、そちも一陣のさきがけをのぞむか」

「いや、もってのほかな――」

とニジリだした勝介、やや色をあらためて、きッと、

「さきほど、軍師の八風斎どのが、列席のおりには、秀吉退治のご出陣は、来春の雪解けと、同時に遊ばすことに決したでは ござりませぬか」

「ひかえろ、それはまだ信孝公の御書がつかぬまえじゃ。秀吉の独断かくまでと思わぬからじゃ」

「ご立腹はさりながら、時はいま十二月の真冬、北国街道の雪たかく、軍馬の進路、おもいもよりませぬ」

「だまれ、勝介、おりから今年は雪がすくない。このくらいな天候ならば、柳ヶ瀬越えもなんのその、一挙に、長浜を取りかえして、猿めに、一あわふかすぐらいなんのぞうさがある」

「仰せながら、ひとたび軍旅を遠くはせて、木ノ芽峠や賤ヶ岳の険路を、吹雪にとじこめられるときは、それこそ腹背の難儀、軍馬はこごえ、兵糧はつづかず、ふたたびこの北ノ庄へご凱旋はなりますまい」

「ウーム……」

勝家も愚将ではない、ましてや分別もじゅうぶんな年ごろ。理のとうぜんに、やり場のない怒気が、うめきとなって口からもれる。

「いちおうの理がある、しかし……」

とやや落ちついて、

「来春を待つとして、ほかになんぞ、よい策があるか」

と極めつけた。

「ございます――それは裾野よりご帰参の上部どのが、一月あまりお屋敷にこもって、苦心のすえ作戦された、秀吉袋攻めの奇陣、必勝の布陣、軍旅の用意にいたるまで、お書付としてご家老徳山どのへお渡しになっております」

「そんなものがあったか。伊那丸を味方につけ、甲駿へ根を張らんとしてながらくでていた八風斎、それが不首尾で、帰参後も、めッたに顔をみせぬと思うていたら、すでに、秀吉袋攻めの奇陣を策しておったのか、どれ、一見いたそう」

と、勝家はことごとくきげんをなおして、徳山則秀の取りだした書類や図面に目をとおし、また時折にはなにか小声でヒソヒソと密謀をささやいていた。

するとこの夜陰、おくの曲輪にあたって、にわかにジャラン！　……と妖異な鐘のひびきがゆすりわたった。

「なんじゃ」
折もおりなので、一同おもわず、ガバと顔をはねあげる。
勝家も聞きとがめて、
「南蛮寺で聞くような、いまわしい鐘の音色、奥の局でするらしいが、やかましいゆえ、止めてまいれ」
「はッ――」
と気転よくたった小姓の藤巻石弥、ふと廊下へでるとこは何者？　評定の間の袖部屋へじッとしゃがみこんでいる黒衣の人間。
「間諜ッ！」
大声に叫んで、ダッ！　と組みついた。奮然と、むこうからもむかってくるかと思ったがあんがい、グズグズとくじけてしまったので石弥もあっ気にとられた。
「なに、諜者が入りこんでいたと？」
勝家をはじめ、玄蕃允、若狭守など、めいめい燭をかざしてそれへでてきた。
「なんじゃ、そちは伴天連……しかも老婆ではないか」
「はい、はい、……どうぞおゆるしくださりませ」
黒いかげは、竿でハタキ落とされた蝙蝠のようにおのいていた。毛受勝介はッたとにらんで、
「きさま、ただいまの密議を、ここで聞きおッたな！」
「めっそうもないこと、わたくしは神さまに仕える修道士でございます……戦のご評議などを立ちぎきしてなんになりましょう」
「その修道士が、なんでかような場所へ入りこんだか。婆！　うそをもうすと八ツ裂きだぞ」
「奥方さまのおたのみで、お祈祷にあがりました……ハイ、三人の姫君さまが、そろいもそろうてご風気の大熱……そのご平癒を神さまにお祈りしてくれとのご諚をうけてまいりました」
「ほ、なるほど……」
勝家の面がすこしやわらいだ。
「おさない姫たちが、このあいだから風邪に悩んでいる。奥もきょうはそれで祈祷にまいった。アレは昔からその宗門でもあった」
「まったく、ご錠口をまちがえまして……」
「石弥、この修道士の婆を、おくの局へつれていってやれ、間諜でもないらしい」
「かしこまりました」
と、石弥が立ち、一同がちりかけると、そのとき、四十九間の長廊下を、かけみだれてくる人々！　小谷の方をまっ先に、局侍女など奥の者ばかり、めいめい鞘をはらった薙刀をかかえ、雪洞花のごとくふりてらしてきた。
「奥ではないか、なにごとじゃ」
「オオ殿さま、ごゆだんあそばしますな」
と小谷の方は、薙刀をふせて、
「今がいままで、一間のうちに祈祷の鐘をならしていた伴天連がみょうなそぶりで、ご城内の要害をさぐり歩いているという小者の知らせでござります」
と息をあえいだ。
「うかつな者をめしいれるから悪い。む！　さすればただいまの老婆もその片われじゃな」

「オオ、そこにいる修道士、引っくくってごせんぎなされませ」
といわせもはてず、小谷の方のうるわしい頬へピラピラッと四、五本の針がふき刺さった。
「あッ！」と藤巻石弥も、同時にひとみをおさえて飛びしさる、とたんにすきをねらった老婆は、黒布をひるがえしてドドドドッと大廊下から庭先へ飛びおりた。
「それッ」
と近侍をはじめ侍女の薙刀、八面をつつんでワッと追いかぶさったが、雪ともつかぬ雹ともつかぬふしぎなものが、近よる者のひとみに刺さって、見るまに怪異な老婆のかげは、外曲輪の闇へ、飛鳥と消える。
ふいのそうどうに、ガランとしていた評定の間。
一羽の蛾がピラピラと飛んでいる。……
これはあやしい。蛾は妖異だ。夏なら知らず十二月、蛾が生きているはずがない――と思うと灯取り虫、一つ一つの燭をはたきまわって、殿中にわかにボーッと暗くなってきた。
スウーッとその蛾が吸いこまれてしまった。
いつの間にか襖のかげに立っていた呂宋兵衛の口のなかへ――滅光の口術？　ニヤリと笑って、評定の間へスルスルとはいってきた。

四

暗闇のなかで、呂宋兵衛、ムズとつかんだ。一同が評議にかけていた秀吉袋攻めの秘帖、それだ！　それをつかんだ。
――片手につかんで墓のように評定の間をはいだした。
大廊下には人がいる、ワイワイとさわいでいる。そッちへは逃げられない、次の間へ、スーと抜けてくると、障子に槍をもってる人影がうつっている。
「こいつは危ない……」
と、あとずさりをした壁ぎわで息をのむ。と、うしろからだれか、指のさきで、チョイと背中をついた者がある。
二寸ばかり納戸襖があいていた。そのなかから手がでて呂宋兵衛の指へやわらかにさわった。
「蚕婆だな……」
と、すぐ肚のうちで、うなずいた。
そして、手につかんでいた秘帖を、スルリと引っぱられたが、婆があずかるつもりだろう――と思ってわたしてしまった。
とたんに、ズドン！　と短銃の弾がまつげをかすった。白いけむりが評定の間でムクッとあがった。いけねえ！　と思ったので呂宋兵衛、いきなり障子を開けるやいな、バラッと飛びだすと、待ちかまえていた長身の槍先が、
「えいッ」
と、するどい光をつッかけてきた。
「おッ！」
と、すばやくつかみとめた槍の千段、顔を見るとおどろいた、闇でも知れる鼻――あの鼻のもちぬし、上部八風斎である。
こいつは苦手だ、ばらばらともとの部屋へ逃げこむ、と同時に、佐久間玄蕃允の声で、

「曲者ッ！」
組んできた。ドンとつぎの千畳敷へ投げつけられた。起きあがると、またふたたび、毛受勝介の大喝一声、
「おのれ、間諜！」
グンと襟がみを引ッつかまれた。が、こんどは呂宋兵衛にれいの奥の手をだすよゆうがあった。ポンとその手をはらうや否、跳びあがって広間の壁へ、守宮のようにペタリと背なかを貼りつけてしまった。
上部八風斎、すばやく見つけて、槍の素扱きをくれながらブーンと壁の下からつき上げた。――もんどり打って呂宋兵衛のからだが畳の上へおちたかと思うと、木の葉をめくるように一枚の畳がヒラリと起きて槍へかぶった。
「おおッ」
と、毛受、佐久間が飛びつくまに、かれのすがたは畳の下へもぐって消える。
「方々、方々、曲者はこの部屋でござる。千畳敷を取りまきめされい！」
毛受勝介が城中へ鳴りわたるばかりにどなった。
と――あら奇怪、畳から次の畳へ、ムクムクムクと波のごとくうごいていった。そして、向こうの端の一枚がポンとめくれる――たちまち飛びだした呂宋兵衛、脱兎のごとく大廊下から武者走りにげだした。
「幻術師！　のがすなッ」
とひしめきあって、あらん限りの武者がそれへ殺到してしまった。そのようすを見すまして、はじめて、納戸襖をソロリとあけた黒装束、押入れからとびだして、呂宋兵衛からわたされた攻軍の秘図をふところにおさめ、別なほうから築山づたいで、北庄城の石垣をすべり落ちていった。

秀吉をめぐる惑星

一

橡ノ木峠の大吹雪――
軍飛脚か狼か雪女よりほかはとおるまい。
ところがひとりのお婆さん、元気なものだ。歓喜天さまのお宮の絵馬を引ッぺがして、ドンドン焚火をしてあたっている。
黒い頭巾をかぶって、姿は気だかい修道士だが、中身は裾野の蚕婆だ。たきびで焼いた兎の肉をひとりでムシャムシャ食べている。
「ここで落ちあうやくそくだのに、どうしたんだろう……にげ損なってやられたのかしら」
同じことを、口のうちでなんどいったか知らない。そのうち麓のほうから、雪をおかしてくる人かげ。
「おお、呂宋兵衛さま」
「婆、待っていたか」
かぶってきた蓙をすてて焚火のそばへふるえついたのは、おなじ姿の呂宋兵衛だった。
「待っていたかもないもんだ、半日もおさきだったあね」
「気の毒だった、捕手に逃げ口をふさがれて、足羽川の上を

遠まわりしてきたため、ばかに手間をとってしまった。それはいいが、城中でわたしたアレは落とさずもってきたろうな」
「城中で？　おやなにを……」
「この呂宋兵衛が、命がけでとった柴田方攻軍の秘帖、秀吉公への土産にするのだ」
「いいえ、わしはなんにも知りませんよ」
「城中のくらがりで、たしかに汝の手へわたしたはず」
「ごじょうだんを……この婆はおまえさんがはたらくまえに、逃げだしたんじゃないか」
「はてな？　するとあの手はだれだろう」
早打ちの男か、またサクサクとここへ雪の峠越えをしてきたものがある。頬かむりの上に藁帽子、まるで、顔はわからないが蓑の下から大小の鐺がみえた。
ふたりの前をとおりかかって、
「吹雪がくる――、追手もくるぞ」
ヘンなことをいって通りすぎた。
「なるほど、また北から黒い雲がまいてきた。日の暮れないうち麓の宿へたどりつこう」
呂宋兵衛と蚕婆は、また伴天連になりすます約束でサクリ、サクリと歩きはじめた。
案の定、ドーッと、陣太鼓をぶつけるような吹雪がきた。燃えのこった焚火が雪にまじって、虚空に舞い、歓喜天の堂の扉もさらってゆかれそう。このぶんで一晩ふったら、お宮も埋もって山の木がみんな二、三尺になるかも知れない。
「オオ寒ッ！」
いたたまれないで、お堂のなかから飛びだしたはひとりの少年。寒いはずだ、膝行袴に筒袖の布子一枚、しかし、腰の刀は身なりにも年にも似あわぬ名刀の銀づくり。
「こんな雪が降ってるうちは、クロも空をとべないだろう。アア、いつおいらとめぐりあえるのかしら」
吹雪の空を見あげて、くろい大鷲の幻影をえがいたのは、法師野いらい、その行方をたずね歩いている鞍馬の竹童である。
信濃をこえて、飛騨を越えて、クロを尋ねつ冬にはいって、この大雪にゆきくれた竹童、腰に名刀般若丸のほこりはあるも、お師匠さまは尊いもの、クロはおいらのかわいいものとしている、あの鷲にあえざる心はさびしかろう。

二

あければ、天正の十一年。
本能寺の焼け跡にも、柳があおい芽をふいた。
都の春のにぎやかさ。ことに、羽柴従四位の参議秀吉が入洛ちゅうのにぎやかさ。――金の千瓢、あかい陣羽織、もえ黄縅、小桜おどし、ピカピカひかる鉄砲、あたらしい弓組、こんな行列が大路小路に絶えまがない。
戦があっても貧相でなく、新鋳の小判がザラザラ町にあらわれ、はでで、厳粛で、陽気で、活動する人気は秀吉の気質どおりだ。京ばかりではない、姫路へ下向すれば姫路の町が秀吉になり、安土へゆけば安土の町がそッくり秀吉の気性をうつす。
「ご前」

馬廻りの福島正則、ニヤニヤ笑いながら、秀吉の前へひざまずいた。京都の仮陣営、ここに天下の覇握をもくろんでいるかれ、飯を噛むまもないせわしさ。いまも、祐筆になにか書かせながら、じぶんは花判黒印をペタペタ捺している。

ちかく出師せんとする柴田がたの滝川征伐、その兵を糾合する諸大名への檄文であるらしい。

「なんじゃ」

むぞうさにこたえて、次のへ、ペタリと一つ捺した。

「とうとうやってまいりました」

「だれが」

「裾野の和田呂宋兵衛。おそるおそるご拝謁を願いに、陣前へまかりこしております」

「富士の人穴で、二千の軍兵をかかえながら、勝頼の遺子、武田伊那丸に追いまくられて、こんどはわしへとりいる気だな」

「むろん、ご賢察のごとくでござりましょう」

「まアいい、ここへ持ってこい」

と、まるで品物を見るようにいった。

「可児才蔵はあるか！」

おおきな声でどなった。

はなやかな小具足をつけた可児才蔵、幕をはらって階下に頭をさげる。

「しばらくそこにおれ」

といったまま、また祐筆にむかってなにか文言をさずけている。と、福島正則、和田呂宋兵衛と蚕婆の修道士を連れてはるかに平伏させた。

呂宋兵衛は、ここぞ出世の緒口と、あらんかぎりの巧舌と甘言で、お目見得した。まず、将来天下人の兆瑞がお見えあそばすということ、君のおんためには死も一毛より軽しということ、それから、こんどは手まえ味噌で天下の野武士はわが指一本にうごくというじまん、幻術は天下無双、兵法智略には、丹羽昌仙という腹心の者があること、――かぎりもなくならべたてる。

秀吉は、フン、フン、フン、で、聞くことだけは聞いている。

さてと呂宋兵衛、まだなにかいうつもりだ。

「さてこのたびのご拝謁に、なにがなよき土産ともぞんじまして、上洛のとちゅう、命がけでさぐりえましたのは柴田勝家の攻略、まった北庄城の縄ばり本丸外廓、濠のふかさにいたるまでのこと、それを密々言上いたしますれば、ちかきご合戦はご勝利うたがいもなきこととぞんじまする」

と、蚕婆にさぐらせた評定のもよう、じぶんがしらべた砦の秘密など、得々然とかたり出した。

いま、勝家と秀吉の仲、日ごとに険悪となりつつあることは天下の周知。さだめし、秀吉が目をほそくしてよろこぶだろうと思うと、呂宋兵衛がしゃべっているまに、

「うッはははは」

と腹をおさえて笑いだした。

「呂宋兵衛、柴田の内幕話ならもうやめい」

「はッ」とかれは目をぱちくり。

「仰せにはござりますが、勝家一族が、ご当家を袋攻めにせん奇陣をくふうし、雪解けとどうじに出陣の密策をさぐって

まいりましたゆえ」
「わかった、わかった。そちの申すのはこれであろう」
座右の文庫から、むぞうさにとりあげて、呂宋兵衛のほうへみせた書類！　ヒョイと仰ぐと、いつぞや、北庄城の一室で、納戸襖から合図されて手へわたした、あの攻軍の秘帖だ！　あの手が秀吉だったのか？　あの手が？　呂宋兵衛はぼうぜんとして二の句がでない。
「こりゃ、そちは幻術をやるだろうが、諜者はから下手じゃの。さぐりにかけては、まだそこにいる男のほうがはるかにうまい」
と、可児才蔵を顎でさした。
「才蔵、びっくりしておるわ、種をあかしてやれ」
「はッ、呂宋兵衛どの」
と、こんどは才蔵があとをうけた。
「先日はまことに失礼つかまつった」
「や！　ではあの時、うしろから手をだされたのは？」
「貴公よりまえに、北庄城へさぐりにはいっていた拙者でござる。また、橡ノ木峠でごあいさつして通ったのもすなわち拙者で」
「ははあ……」といったまま、呂宋兵衛も蚕婆も、すっかり毒気をぬかれたていで、いままで喋々とならべたてた吹聴が、いっそう器量を悪くした。

三

と、そのとき、羽柴の荒旗本、脇坂甚内、平野三十郎、加藤虎之助の三人、バラバラと幕屋の裾にあらわれて一大事を報告した。
しかも、ふしぎな事件である。
いま、ふいにこの陣屋へ徳川家の武士五人がおとずれてきた、というのである。五人の頭は、徳川家のうちでも、音にきこえた菊池半助。
その半助のいうには、武田勝頼、ほかふたりの従者がすみぞめの衣に網代笠を目ぶかにかぶり、ひそかに、東海道からこの京都へはいったので追跡してきたが、ついに、この洛中で見うしなったゆえ、羽柴どののご手勢でからめてもらいたいとの口上である。
こんな奇怪な話はない。
武田四郎勝頼――、すなわち、伊那丸の父なる大将は去年天正十年三月、織田徳川の連合軍にほろぼされて、天目山の麓ではなばなしい討死をとげていること、天下の有名、だれあって知らぬものはない。
だのに、その勝頼が、すみぞめの衣をきて、京都にはいったとは、なんとしても面妖である。
「おまちがいないか」
と、虎之助が念をおした時、
「断じてそういはござらん」
と、菊池半助が語をつよめていった。
しかし、京都は徳川家の勢力圏内ではない。ぜひお手配をわずらわしたい、との懇願。事件、人物がまた容易ならぬ人、なんとへんじをしましょうかと、三人の旗本がこもごも申したてた。

「ふウむ……勝頼がな」
と秀吉も、これを聞くとしばらく沈思瞑目していたがやがて重く、
「ほかならぬ徳川どののおたのみ、聞いてあげずばなるまい。しょうちいたしましたとごへんじをいたせ」
「はッ、お伝え申しまする」
と平野三十郎ひとりだけが立ってゆく。と、脇坂甚内すぐに小膝をゆるがして、
「ご承引のうえは、それがしと虎之助どのとにて、四郎勝頼のありかをたしかめ引っとらえてまいりましょうか」
「待てまて……」
秀吉は、まだ瞑目をつづけていたが、はじめて、いつもの調子でいいのける。
「やがてこの筑前守は伊勢の滝川攻めじゃ、この用意のなか、死んだ勝頼をさがしているひまな郎党はもたぬ」
「はッ」
甚内は五体をしびらせておそれいった。
「じゃが、ひきうけたこと抛ってもおけまい、この役目は和田呂宋兵衛に申しつける。よいか」
「しょうちいたしました、すぐ洛中をくまなくただしてご前へその者を召しつれます」
「やってみろ、そちには手ごろな尋ねものじゃ」
人使いの名人、顔を見たとたんに、もう呂宋兵衛をあそばせておかなかった。が、ふしぎな大役、いいつけられた、呂宋兵衛のほうでも、なんだかムズムズ油がのる。秀吉公への目見得の初役、ぜひ引っからめて見せねばならぬとひそかにちかった。
ましてや、武田四郎勝頼、伊那丸の父である。事実、天目山で討死していなかったとすれば、天下の風雲、さらに逆睹すべからざることになる。

般若丸と謎の僧

一

里の二月は紅梅のほころぶころだが、ここは小太郎山の中腹、西をみても東をながめても、駒城の峰や白間ヶ岳など、白皚々たる袖をつらねているいちめんの銀世界で、およそ雪でないものは、伊那をながるる三峰川か、甲斐へそそぐ笛吹川のあおいうねりがあるばかり。
「北国すじへ間者にいった、巽小文治はどうしたであろう」
「そういえば、東海道へいった山県蔦之助も、もうもどってこなければならないじぶんだが？　……」
小太郎山の山ふところ、石垣をきずき洞窟をうがち、巨材巨石でたたみあげた砦のなかは、そこに立てこもっている人と火気で、室のようにあたたかい。
いま、砦の一ヵ所に炎々と篝をたいて、床几にかけながらこう話しているのは、忍剣と龍太郎であった。
「ふたりとも、あまりに日数がかかりすぎる。悪くするとこの雪に道でもふみちがえて凍えたのではあるまいか」
「いや、とちゅうには番卒小屋もあり、部落部落には味方も

いるから、けっしてそんなはずはない」
「では深入りして徳川家のやつに、生けどられたかな」
「蔦之助も小文治も、おめおめ敵の縄目にかかる男でもなし……きっとなにか大事なことでもさぐっているのだろう。それよりあんじられるのは竹童じゃ」
と、龍太郎は眉をくもらせた。
「オオ、竹童といえば、いったいどこへいってしまったのか、とんと尻のおちつかぬやつだ」
「しかしあいつのことだから、かならずクロをさがしだして、元気な顔でもどってくるだろうが、この雪や氷の冬のうちを、どこで送っているかと思うと、ふびんでもありしんぱいでならぬ……」
さすがに木隠龍太郎は、兄弟弟子の竹童を、明けくれ忘れていないのである。
去年の晩秋――人穴城をおとし法師野の里に凱歌をあげた武田伊那丸は、折から冬にかかってきたので、幕下の旗本をはじめ二千の軍兵をひきいて、ひとまずこの小太郎山へ引きあげたのだ。
しばらくは、この山城で冬ごもりだ。
陣具をつくり武器をとぎ、英気をやしなわせて、春の雪解けをまっている。
で、おん大将をはじめ軍師の民部も、咲耶子も、みな一家のごとく団欒して、この冬をこし、初春をむかえたのであるが、ただひとり、人気者の竹童がいないのは、なにかにつけて、だれもがさびしく感じていた。
竹童よ、竹童よ。おまえはいったいどこにいるか？
ああ、クロの行方がわからないように、竹童のたよりもいっこうわからない――と、いまも龍太郎が灰色の空をあおいで長嘆していると、バラバラと、砦の柵の方から、ひとりの番卒がかけてきた。
「木隠さま！　加賀見さま！」
「なんじゃ」
煙のかげからふたりの声が一しょにおうじた。
「ただいま、巽小文治さまと山県さまが、ふもとのほうからこちらへのぼっておいでになります」
「オオ、かえってきたか！」
ふたりはすぐに篝をはなれて立ち、バラバラと砦の一の柵まで迎えにかけだした。

二

ここは大将の陣座とみえて、綺羅ではないが巨材をくんだ本丸づくり、おくには武田菱の幕がはりまわされ、そのなかにあって、当の武田伊那丸は、いましも、軍師小幡民部から、呉子の兵法図国編の講義をうけているところであった。
そばには、咲耶子もいて、氷のような板敷にかしこまり両手を膝において、つつしんで聞いている。
と――、幕をはらって加賀見忍剣、
「わが君」
と声をかけた。
「おお忍剣、なんであるな」
「ご講義ちゅうでございますか」

「いや、兵学のつとめも、ちょうどおわったところじゃ」
「では、せんこく帰陣しました山県、巽のふたり、すぐこれへ召入れましてもよろしゅうございましょうか」
「オオ、北国と徳川領へさぐりにいったふたりのもの、日ごとに帰りを待っていた。すぐここへ呼んでよかろう」
「はッ」
幕をおとして忍剣のすがたが消えると、やがてふたたびその幕がはねあげられ、山県蔦之助と巽小文治、それに龍太郎と忍剣もつづいて、伊那丸の前へひざまずいた。
「雪中の細作、さだめし難儀にあったであろう」
と伊那丸は、まずふたりの使いをねぎらって、
「順序として、北国筋の動静をさきに聞きたい、小文治そちのさぐりはどうであった」
「はッ」
威儀をただして、小文治が復命する。
「多宝塔のいただきから、たくみに鷲をつかって逃げうせました呂宋兵衛は、どうやら、越前北ノ庄を経て、京都へ入りこみましたような形跡にございます」
「ウーム、京都へ！」
小幡民部がうなずいた。
「おりから、裾野にいた鏃鍛冶の卜斎も、柴田の家中へひきあげて、北庄城では雪解けとともに、筑前守秀吉と一戦をなす用意おさおさおこたりなく、国境の関はきびしい固めでございます」
「それでおよそのようすはわかった……」
と伊那丸はつぎに山県蔦之助へことばをむける。
「して、東海道のほうにはなんぞかわりはないかの」
「若君――」
すぐ受けて蔦之助、
「容易ならぬうわさをきいてございます」
といった。
「なに、容易ならぬうわさとな？」
「また徳川の痩武者どもが、この砦へ攻めよせてくるとでもいうことか」
忍剣は気早な肩をそびやかした。
「それとはちがって、世にもふしぎなうわさでござる」
と、蔦之助は伊那丸の顔をあおぎ見ながら、
「――若君、おおどろき遊ばしますな、そのうわさともうすのは、お家滅亡のみぎり、あえなく討死あそばしたと人も信じ、またわれわれどもまでが、うたがって見ませぬ四郎勝頼さま」
「オオ、父上――その父上がなんとあるのじゃ」
「じつはお討死とは表向きで、まことは、天目山の峰つづき、裂石山雲峰寺へいちじお落ちなされて、世間のしずまるころをお待ちなされたうえ、このほど身をいぶせき旅僧にかえられ、ひそかに、京都へお入りあそばした由にござります」
「えッ！」
はたして伊那丸のおどろきは一通りではなかった。
勝頼――と父の名をきいただけでも、はやその眸はうるみ、胸は恋しさにわななくものを、まだ存命ときいては、そぞろ恩愛の情あらたにひたひたと胸をうって、歓喜と驚愕と、またそれを、怪しみうたがう心の雲が入りみだれる。

「ではなんといやる、父上にはなおご武運つきず、旅の僧となって、都へおちゆかれたと申すのか――蔦之助もっとくわしゅう話してくれ」
「されば、まだことの虚実は明確に申しあげられませぬが、東海道――ことに徳川家の家中においてはもっぱら評判いたしております。それゆえ、なお浜松の城下まで入りこみまして、ふかく実否をさぐりましたところ、その旅僧を勝頼なりといって、隠密組の菊池半助、京都へ追跡いたしました」
「ウーム、さては真にちがいない」
心そぞろに、伊那丸のひとみは燃える。
「意外なこともあるものじゃ。真実、勝頼公が世におわすとすれば、武田のご武運もつきませぬところ、若君のよろこびはいうもおろか、われわれにとっても、かようなうれしいことはないが……」
つぶやきながら軍扇をついて、ふかく考えているのは小幡民部である。しかし、加賀見忍剣や龍太郎やまた咲耶子にいたるまで、みなこの報告を天来の福音ときいて武田再興の喜悦にみなぎり、春風陣屋にみちてきた。
「京都へまいろう！　そうじゃ、すぐ京都へまいってお父上にめぐりあおう！」
なかにも伊那丸は、おさなくして別れた父、なき人とばかり思っていた父――その父の存命を知っては、いても立ってもいられなかった。
「民部、わしはこれよりすぐに京都へまいるぞ、そしてお父上を小太郎山へおむかえ申さねばならぬ」
一刻のゆうよもならずと立ちあがった。
「しばらくお待ちあそばしませ」
いつも思慮ぶかい小幡民部、しずかに、伊那丸の裾へよって両手をついた。
「民部、そちはわしの孝心をとめるのか」
「なんとしてお止め申しましょう。若君のお心、そうなくてはならぬところでございます。しかしようお考えあそばせ、元来、徳川家には策士の伝言多く、虚言浮説は戦国の常、にわかにそれをお信じなされるもいかがかとぞんじます」
「いいや、徳川家の菊池半助が、それとみた旅の僧を、京都まで追いつめていったとあれば、こんどのうわさはうそではあるまい。まんいち、時をあやまって、お父上が、家康の手にでも捕われたのちには、もうほどこすすべはないぞ、この伊那丸が生涯の大不孝となろうぞ」
「おお、ぜひもございませぬ……」
さすがの民部にもそれをはばむことはできない。かれはとちゅうの変をあんじ、伊那丸じしんがとおく旅する危険を予感しているが、孝の一言！　それをさえぎる文字は、兵法にもなかった。
にわかに、旅のしたくがふれだされた。
旅から旅をつぐ道筋は、みな敵の領土だ。むろんしのびの旅である――ともは加賀見忍剣、木隠龍太郎のふたりにきまった。
雪をふんだ一列の人馬が、蟻のように小さくくろく小太郎山の砦をくだった。ふもとの野呂川は富士川へ水つづき、筏にうつった伊那丸と忍剣、龍太郎の三人は、そこで送りの兵をかえし、雪と水しぶきの銀屑を突ッきって、まっしぐらに、

東へ東へと下っていった。
父にめぐり会いたさの一心、伊那丸は敵地をぬけ、関をかすめて旅する苦しさやおそろしさを思わなかった。
東海道のうら道をぬけて、主従三人が京都へたどりついたのは二月のすえ。おりから伊勢路一円は、いよいよ秀吉が三万の強軍を狩りもよおして、桑名の滝川一益を攻めたてていたので、多羅安楽の山からむこうは濛々たる戦塵がまきあがっていた。

三

伊勢は戦といううわさだが、京都の空はのどかなものだ。公卿屋敷の築地には、白梅の香がたかく、加茂川の堤には、若草がもえている。
そのやわらかい草のうえに、グタリと足をのばしている少年。ときどき、水をみてはさびしい顔――空をあおいではポロポロと、涙をこぼしている。
「クロ！　クロ！　こんなにおまえをさがしているおいらをすててどこへかくれてしまったんだい、クロ、もう一どおまえのすがたを見せておくれ。おいらはおまえがいないので、こんなにさびしがっているんだぜ！　さがしてさがしぬいて、こんなにつかれているんだぜ！」
鞍馬の竹童は空へむかってこう叫んだ。
しかし、その訴えに答えてくれるものもなければ、クロの幻影さえも見えてこない。かれはまたぼんやりと加茂の流れをみつめていた。
すると、往来からこっちへ歩みよってきた男が、
「おい、おまえは竹童じゃねえか」
ふいに背なかをたたいていった。
「え？」
と、すこしおどろいた顔をして、その男をふりあおいだ竹童は、へんじをするまえにパッと立ちあがって、般若丸の柄へ手をかけた。
「おいおい、やぼなことをするなよ」
と、男は手をかまえて、飛びのきながら、
「人の面をみると、すぐ喧嘩面だから怖ッかなくってしようがねえなあ。竹童、おめえとおれとは、なにも仇同志じゃあるめえし、そういつまで根を持つことはねえじゃねえか」
としきりとなだめている男は、裾野落ちのひとりである早足の燕作。なぜか、きょうにかぎってばかに下手だ。
「なあ竹童――じゃあない、竹童さん。そういつまでも怒ってるのはやぼだぜ。呂宋兵衛は没落するし、人穴城の住人でもなくなってみれば、おまえとおれはなんの仇でもありゃしねえ。久しぶりで仲よく話でもしようじゃねえか」
竹童は純なものだ。そういわれてまで、かれを敵視する気にもなれないので、意気ごんだ力抜けに、またもとの堤草へ腰をおろした。
「みょうなところで会ったなア」
と燕作もそばへ寄ってきて、
「どうしておまえひとりで、こんなところにぼんやりしているのよ。え？　ばかに元気のねえ顔つきじゃねえか」
「クロがいなくなったので、それでがっかりしているんだよ」

「クロ？　……なんだい、クロってえのは」
「おいらのかわいがっていた大鷲」
「ああなるほど――」
　と燕作は手をうって、
「あれならなにもしんぱいすることはねえぜ。泣き虫の蛾次公が、おまえのすきをねらって、乗りにげしたッていう話だから」
「ところが行方が知れないんだもの――しんぱいしずにいられないよ」
「なアに、蛾次公のことだもの、いまにあっちこっちを飛びまわったあげくに、この京都へもやってくるにきまってら。な、そこをギュッと取っつかまえてしまいねえ」
「ああ、おいらもそう思って、北国街道から、雪のふる橡ノ木峠をこえて、この京都へきたけれど……まだ鷲の影さえも見あたらない」
「そう短気なことをいったってむりだ。ものはなんでもしんぼうがかんじんだからな……おや、そりゃそうと、竹童さん、おまえはたいそうすばらしい刀をさしているじゃねえか」
　と、燕作はソロソロ狡獪な本性をあらわして、なれなれしく竹童の帯びている般若丸の鍔や目貫をなでまわしながら、
「こりゃ大したものだ。目貫の獅子は本金で、鍔は後藤祐乗の作らしい。ウーム……どうだい竹童さん、ものはひとつそうだんだが、その刀をおれに四、五日貸してくれないか」
「えッ」
　竹童は図々しい相手のことばにびっくりして、
「とんでもないこと！　この刀は貸すどころか、ちょっとでも肌身をはなすことのできないだいじな品物だよ」
「そんな意地の悪いことをいうなよ。じつは裾野を落ちていらい、着のみ着のままで、路銀もなし資本もなし、なにをすることもできずに困っているところだ。後生だから、その刀を貸してくんねえ。二、三百両にゃ売れるだろうから、そうしたらおまえにも、小判の十枚や二十枚は分けてやるぜ」
「ばかなことをいうとしょうちしないぞ」
「オヤ、こんちくしょう」
　と燕作はグッと腕をまくりあげて立ちあがって、竹童の胸ぐらをつかんだ。
「さっきから下手にでていればツケあがって、素直にわたさねえとまた痛い目に会わすからそう思え」
「おのれ、さてはやさしくいいよって、はじめからこの刀をとろうとしていたんだな」
「知れたことよ。だれが、てめえみてえな山猿に、ただペコペコするやつがあるものか！」
「ちぇッ、そう聞けばなおのこと、命にかけても般若丸をわたすものか！」
「命知らずめ、後悔するなよッ」
　もろ手で咽をしめつけながら、足がらみをかけて、ドンとねじたおすと、たおれたとたんに竹童が、さっと下から般若丸の冷光をよこざまにはらった。
「おッとあぶねえ！」
　一足とびに切ッ先をかわして、おのれも脇差をぬきはらった燕作、陽にかがやく大刀をふりかざして、ふたたびタタッ――と斬りこんでくる。

竹童はすばやく跳ねかえって、チャリン！　とそれを引ッぱずした。が、それは剣の法ではなく、いつも使いなれている棒の呼吸だ。

鞍馬のおくを下りてから、きょうまでいくたびも生死のさかいを超えてきたが、ほんものの刀をとって、敵と刃交ぜするのは竹童きょうがはじめての経験である。なんともいえぬおそろしさだが、またなんともいえぬ壮快な気分と、必死の力が五肢にも刃にもみなぎってくる——

四

「この山猿め、味なまねをしやがるな」

燕作は見くびりぬいて上段にかまえ、すきをねらって竹童の手もとへ、パッと斬りつける。

鞍馬の竹童、剣道は知らぬが、胆は斗のごとしだ。

「なにをッ」

と叫ぶがはやいか、名刀般若丸を棒とおなじに心得て燕作の刀へわが刀をガチャッとたたきつけていった。

なんでたまろう、二条の白虹、パッと火花をちらしたかと思うと、燕作の鈍刀がパキンと折れて、氷のごとき鋩子の破片、クルッ——と虚空へまいあがった。

「しまった！」

と燕作、悲鳴をあげて逃げだすところを、やっと追いすがった竹童が、ただ一息に、斬りさげようとすると、サヤサヤと葉をそよがせた楊柳のこずえから、雨でもない、露でもない、ただの光でもない、音のない銀の風！

オオ、無数の針！

光線をそそぐがごとくピラピラピラピラ！　と吹きつけてきて竹童の目、竹童の耳、竹童の毛穴、ところきらわずつき刺さった。

「ウーム？」

と息ぐるしい悶絶の一声。

さすが気丈な怪童子も、その一瞬に、にわかにあたりが暗くなった心地がして、名刀般若丸をふりかぶったまま、五肢を弓形に屈して、ドーンとうしろへたおれてしまった。

「ざまをみやがれ、すなおに渡してしまえばいいに、おあつらえどおりに、苦しい目を見やがった」

セセラ笑って、ひっ返した早足の燕作、歯がみをする竹童の胸板に足をふんがけて、つかんでいる般若丸を力まかせに引ったくった。

そして、ニヤリと刃渡りをながめていると、ふいにだれか、えりくびをムズとつかんだ。

「あッ、なにをするんだ」

いうまもなかった。

フワリと足が大地をはなれたとたんに、かれのからだは宙をかすって、堤の若草を二、三間さきへズデンともんどり打っている。

「アー痛ッ」

と跳ねおきて見ると、いつの間にそこへきたか、網代の笠を眉深にかぶったひとりの旅僧、ひだりに鉄鉢をもち、みぎに拳をふりあげて、

「こりゃ、かような少年をとらえてなんとするのじゃ」

はッたと睨めて、よらばふたたび投げつけそうな構えである。
「おや、この乞食坊主め、よくも生意気な手だしをしやがったな！」
うばい取った般若丸を持ちなおして、いきなり燕作が斬ってかかると、旅僧はやすやすと体をかわして、手もとへよろけてきた小手をピシリと打った。――燕作はしたたかに手首をうたれて、ホロリと刀を落としたので、それをひろい取ろうとすると、ふたたびヤッ！　というするどい気合い、こんどは堤の下へつき落とされた。
ズルズルとすべり落ちたが、まだ性こりもなく起きあがって、いまの仕返しをする気でいると、ひとりとおもった旅僧のほかに、まだ同じすがたの行脚僧がふたり、すぐそこにたたずんでいたので、
「あッ、いけねえ！」
とばかり一もくさん、堤のしたを縫って逃げだしてしまった。
そのうしろすがたのおかしさに、ふたりの僧は見おくりながら、
「ははははは」
とほがらかに笑い合う。
と、堤の上から先のひとりの僧が降りてきて、燕作のすてていった般若丸をたずさえてきて、
「この太刀を見おぼえはござりませぬか……」
膝をおって、丈のたかい僧のひとりへさしだした。
網代笠にかくされて、僧のおもざしはうかがいようもないが、丸ぐけの紐をむすんだ口もとの色白く、どこか凛々しいその行脚僧は、衣のそでで陽をよけながら、ジイッと刃をみつめていたが、やがてきわめてひくい声で、
「さてさて珍しい刀をみることじゃ」
感慨無量な語調をこめて、瞳もはなたずつぶやいた。
「見るもなつかしいことである。これはまぎれもなき伊那丸の守り刀……」
「わたしも、しかとさように心得ますが」
「つきぬ奇縁じゃ……おもえばふしぎな刀とわが身のめぐりあわせのう」
「御意にござります、あれにたおれている少年を介抱して、ひとつしさいをただしてみましょうか」
「いや、世をしのぶ身じゃ。それはソッと少年の鞘にもどしておいたほうがよい」
「しかしなにやら、苦しんでおりますものを、このまま見捨ててまいるのもつれないようにぞんじますが」
「オオ、では、河原の水でもすくってきてやれい。じゃが、夢にも刀のことはきかぬがよいぞ。訊けばこなたの素性も人に気どられるわけになる」
「しょうちいたしました……」
と、ひとりが河原へ下りていくと、ひとりは竹童を抱きおこして活をいれ、口に水をあたえただけで、ことばはかけずにスタスタといき過ぎてしまった。
「ア痛……どなたですか……ありがとうございました。ありがとうございました……」
竹童は遠退く跫音へいくども礼をいったが、両手で顔をお

さえているので、それがどんな風の人であったか、見送ることができなかった。
顔をおさえている指のあいだから、タラタラと赤い血の筋……
「あ痛ッ……」
と片手さぐりに河原の水音をたどっていった竹童、岩と岩との間から首をのばして、ザアッと流れる水の瀬で血汐をあらい、顔をひやし、そして目や髪の毛のあいだに刺さッた針を一本ずつ抜いてはまた目を洗っていた。
そのあいだに――以前の場所の楊柳のこずえから、ヒラリと飛びおりたひとりの女がある。
女といってもお婆さんだ。修道士の服をかぶった蚕婆――。
くろい頭巾の中から、梟のような目をギョロリとさせて、柳がくれに遠去かる三つの網代笠を見おくっていたが、やがてウムとひとりでうなずいた。
いつか河原は暮れている――
青いぶきみな妖星が、四条の水にうつりだした。
伊勢路に戦のあるせいか、日が沈んだのちまでも東の空だけはほの赤い。
「あいつだ！　たしかにあいつにちがいない！」
こうさけんだ蚕婆、妖霊星をグッとにらんで、しばらく首をかしげていたが、まもなく、黒い蝶々が飛ぶように、そこからヒラヒラと走りだした。

南蛮寺百鬼夜行

一

空にはうつくしい金剛雲、朱雀のはらには、観世水の小流れが、ゆるい波紋をながしている。
月はあるが、月食のような春のよい――たちこめている夜霞に、家も灯も野も水も、おぼろおぼろとした夜であった。いつともなく菊亭右大臣家の釣り橋にたたずんだ三人づれの旅僧は、人目をはばかりがちに、ホトホトと裏門の扉をおとずれていた。
「はて、まだ答えがござりませぬが、どうしたものでござりましょう」
やがて、当惑そうにつぶやく声がきこえた。
「まえもって、密書をさしあげてあることゆえ、館にはとくよりごぞんじのあるはずだが……」
「あまりあたりをはばかりますゆえ、まだ詰め侍が気がつかぬのでござりましょう。どれ……」
となかのひとりが、こころみにまた、閂をガタガタゆすっていると、こんどは、その合図がとどいたとみえて奥にもれていた小鼓の音がはたとやみ、同時に人の跫音がこなたへ近づいてくるらしい。
ギイ……とうちから裏門の扉があかった。
ななめに、紙燭の黄色い明かりがながれた。その明かりに、泛

いた僧形のかげを見ると、顔をだした公卿侍は、
「や！　これは？」
とおどろいたさまで、すぐに、ふッとかざしてきた紙燭を吹きけしてしまった。
「意外にお早いお着き、お館さまもお待ちかねでござります。いざ……」
あたかも、貴人の微行でも迎えるように、いんぎんをきわめて、扉のすそにひざまずいた。網代笠をかぶった三人の僧形は、黙々として、その礼をうけ、やがてあんないにしたがって、菊亭殿の奥へ、スーッと姿をかくしてしまった。
ふたたび閉めきられた裏門は、秘密をのんでものいわぬ口のようにかたく封じられた。夜はふけてくるほど、草にも花にも甘い香が蒸れて、あとはただ釣り橋の紅梅が、築地をめぐる水の上へ、ヒラ、ヒラと花びらくろく散りこぼれているばかり。
すると、その濠ぎわの木のかげから、ツイとはなれた人影があった。黒布をかぶった妖婆である。いうまでもなく、それは加茂の堤から、三人の僧をつけてきた蚕婆――
修道士すがたの黒いかたちが、朧月の大地へほそながく影をひいた。婆はヒラヒラと釣り橋のそばまできて、かたく閉じた裏門を見まわしていたが、やがて得意そうに「ひひひひひひひひ」と、ひとりで笑いをもらした。
「あれだあれだ、やっぱりわしの目にまちがいはなかったぞよ。あの三人の僧侶のうちのひとりがたしかに武田勝頼、あとのふたりは家来であろう。うまく姿をかえて天目山からのがれてはきたが、もうこの婆の目にとまったからには、運のつき……すこしも早く、呂宋兵衛さまへ、このことを知らさなければならぬが、めったにここをはなれて、また抜けだされたら虻蜂とらずじゃ、ええ、あの半間の燕作のやつ、いったいどこへいってしまったのだろう」
ブツブツ口小言をいいながら、濠のまわりをいきつもどりつしていると、向こうから足をはやめてきた男が、ひょいと木を楯にとって、
「だれだ！　そこにいるなあ？」
と、ゆだんのない目を光らした。
「おや、おまえは燕作じゃないか」
「なアんだ、婆さん、おめえだったのか」
と、声に安心して、早足の燕作、木のそばをはなれて蚕婆のほうへのそのそと寄ってきた。
「どうしたんだい、半間にもほどがあるじゃないか」
と婆は燕作を息子のように叱りつけて、
「竹童みたいな小僧には斬りまくられ、旅僧にはらまれればすぐ逃げだすなんて、いくら町人にしても、あまり度胸がなさすぎるね」
「婆さん婆さん、そうガミガミといいなさんな。あれでも燕作にしてみりゃ、精いっぱいにやったつもりなんだが、なにしろ竹童のやつが必死に食ってかかってきたので、すこし面食らったというものさ。だがおまえが木の上にかくれていて、れいの針をふいてくれたので大助かりだッたぜ」
「そうでもなければ、おまえさんは、あんな小さな者のために、般若丸のためし斬りにされていたろうよ」
「まったく！　あいつは鷲乗りの名人だとは思ったが、剣道

まで、アア上手だとは夢にも気がつかなかった」
「なアに竹童は剣術なんて、ちっとも知っていやしないのだけれど、おまえのほうが弱過ぎるのさ。だがまア、そんなことはもうどうでもいいや、燕作さんや、一大事が起ったよ」
「え？　またいそがしくなるのかい」
「用をたのみもしないうちから、いやな顔をおしでないよ。おたがいにこれが首尾よくいけば、呂宋兵衛さまも一国一城の主となり、わたしや、おまえも秀吉さまからウンとご褒美にありつけるんじゃないか、しっかりしなくッちゃいけないよ」
「合点合点。ところでなんだい、その一大事とは」
「それはね……」
婆はギョロリと館のほうへ目をくばってから、燕作のそばへすりよって、その耳へ口をつけてなにやらひそひそとささやきだした。
しばらく、目を白黒させて聞いていた燕作。
「えッ、じゃさっきの旅僧が、天目山からのがれてきた勝頼だったのか」
「しッ……」
その素頓狂な声をおさえつけて、
「わたしはここに見張っているから、はやくこのことを呂宋兵衛さまに知らせてきておくれ。こんな役目はおまえさんにかぎるのだから」
「よしきた！　おれの足なら一足とびだ」
「そして、すぐに手配をまわすようにね」
「おッと心得た！」
いうが早いか燕作は、朱雀の原をななめにきッて、お手のものの韋駄天ばしり、どこへ駈けたか、たちまち、すがたは朧の末にかくれてしまう。
あとにのこった蚕婆は、黒い袖を頭からかぶって、釣り橋のかげにピッタリと身をひそめている。そして菊亭殿の奥のようすをジッと聞きすましているらしかったが、ひろい大殿作りの内からは、あれきり鼓の音も人声ももれてはこず、ただ花橘や梅の香に、ぬるい夜風がゆらめくのを知った。

二

駈けるほどにいくほどに、早足の燕作は、さっさつたる松風の声が、しだいに耳ちかくなるのを知った。臥龍に似たる洛外天ヶ丘のすがたは、もう目のまえにおぼろの空をおおっている。
「アア、息がきれた……」
よほどいそいだものと見えて、さすがの燕作も、そこでホッと一息やすめた。
丘はさして高くはないが、奇岩乱石の急勾配、いちめんに生いしげっている落葉松の中を、わずかに、石をたたんだ細道が稲妻形についている。
「どりゃ、もう一息――」
というと燕作は、兎のようにその道をピョイピョイと登りだした。やや中ごろまでのぼってくると、道は二股に分れて右をあおぐと、石壁の堂に鉄骨の鐘楼がみえ、左をあおぐと、松のあいだに朱い楼門がそびえていた。燕作はひだりの朱門

へさして駈けのぼった。

これこそ、有名な洛外天ヶ丘の朱門。

なんで有名かといえば、その門作りがかわっているためでもなく、風光明媚なためでもない。ここのいただきの平地に、織田信長の建立した異国風の南蛮寺があるからである。

まだ信長の世に時めいていたころは、長崎、平戸、堺などから京都へあつまってきた、伴天連や修道士たちは、みなこの南蛮寺に住んでいた。そして仏教の叡山におけるがごとく、ここに教会堂を建て、十字架の聖壇をまつり、マリヤの讃歌をたたえて、朝夕、南蛮寺のかわった鐘の音が、京都の町へもひびいていた。

しかし、本能寺の変とどうじに、異国の宣教師たちは信長というただひとりの庇護者をうしなって、この南蛮寺も荒廃してしまった。そして無住どうようになっていたので、秀吉は呂宋兵衛に、天ヶ丘へ居住することをゆるした。だが、南蛮寺をおまえにやるぞとはいわない。しばらくのあいだ、あれに住めといったばかり、要するに呂宋兵衛は、荒廃した南蛮寺の番人におかれたわけである。

だが、慾のふかい呂宋兵衛は、もう南蛮寺を拝領したようなつもりで、すっかりここに根を生やし、またボツボツと浪人者を山内へあつめて、あわよくば、一国一城の主をゆめみている。

だから、むろん、祭壇はあれほうだいだし、もとの教会堂には、槍や鉄砲をたくわえこみ、うわべこそ伴天連の黒布をまとっているが、心は、人穴時代からかわりのない残忍なるかれであった。

「よくいう諺に、天道さまと米の飯はつきものだというが、まったく世のなかはしんぱいしたものじゃない。人穴城がなくなったと思えば、こんないい棲家がたちまちめっかる。わはははは、富士の裾野だの大江山だのにこもっているより、いくら増しだか知れやしねえ。しかもこんどは、羽柴秀吉から公にゆるされているのだからなおさら安心、しかし、だれもかれも、悪事をやるなら上手にやれよ、裾野とちがって都のなか、あの秀吉ににらまれると、おれもすこし困るからな」

広間には、燃えるような絨氈をしきつめてあった。そこは南蛮寺の一室。四方に大きな絵蝋燭をたて、呂宋兵衛は、中央に毛皮のしとねをしき、大あぐらをかいて、美酒をついだ琥珀のさかずきをあげながら、いかにも傲慢らしい口調でいった。

「なあ昌仙、そんなものじゃないか」

「仰せのとおり、こうなるのも、頭領のご武運のつよい証拠でござる」

そばにいて、相槌を打ちながら、頭をさげた武士の容形、どこやら、見たようなと思うと、それもそのはず、人穴落城のときに、法師野までともに落ちてきて別れわかれになった軍師、丹羽昌仙だ。

席には、昌仙以外にも、人穴城から落ちのびてきた野武士もあり、あらたに加わったやくざ浪人もいならんでその数四、五十人、呂宋兵衛のお流れをいただきながらどれもこれも、軽薄なお追従をのべたてている。

三

ところへ、朱門をぬけて、本堂の階段からバラバラと駈けあがってきたのは早足の燕作。

「お頭、とうとう目っけてまいりました」

と、廻廊のそとへ、膝をついて大汗をふいた。

「おう、燕作か」

と、呂宋兵衛は、大広間からかれのすがたを見て、

「目っけてきたとは吉報らしい。ではなにか、勝頼の在り家が、知れたというのか」

「へい……それなんで」と燕作は、唾で喉をうるおしながら、

「じつあ、きょうも、それを探索するために、蚕婆とふたりで、加茂川の岸をブラブラ歩いていると、ごしょうちでがしょう、あの鞍馬の竹童のやつがボンヤリ堤に腰かけていたんです。見ると、すがたに似合わぬ名刀をさしているので、こいつ一番セシめてやろうと、蚕婆はやなぎの木の上にかくれ、わっしはそしらぬ顔で、なれなれしく話しかけたものです」

「やいやい、燕作！」

ふいに呂宋兵衛が魔のような口を開いてさえぎった。

「バカ野郎め。目っけたというのはその竹童のことをいうのか。ふざけやがッて！　だれがあんな小僧をさがせといいつけたのだ」

「ま、ま、待っておくんなさい」と燕作はちぢみあがってどもりながら、

「その竹童のことは、話の順序なんで……じゃ、てッとり早く本筋をもうしあげます。そこへ通りかかった三人の旅僧、挙動があやしいので蚕婆がつけていくと、朱雀の原の……ええと……なんといッたっけ……おおそれそれ菊亭右大臣という公卿屋敷の裏門から、こッそり姿をかくしました。そのうちのひとりは、たしかに、武田勝頼にそういないから、すぐこのことを、呂宋兵衛さまにお知らせもうせという蚕婆からの言伝なんで」

「ウーム、そうか……」

と、呂宋兵衛はやっとまんぞくそうにうなずいたが、まだうたがい深い顔をして、

「どうだろう、昌仙、そいつアたしかに勝頼かしら？」

「さよう……」

と丹羽昌仙、じッとうつむいてかんがえていたが、なにか思いあたったらしく、丁と膝をうって、

「たしかにそういござるまい！」

と断言した。

「どうしてそれがわかるのだ」

「そのわけは、菊亭家と、武田の祖先とは、縁戚のあいだから。のみならず、勝頼の祖父信虎とは、ことに親密であったよしを、耳にいたしました。さすれば、いま天下に身のおきどころのない、落人が、そこをたよってくるのは、まことに自然だとかんがえます」

「なるほど、ウム……さてはそうか！」

と呂宋兵衛は、昌仙の説をきいて、それこそ、落人勝頼の化身にちがいなかろうと、大きく一つうなずいた。

で、すぐに、それを召しとる方法を議しはじめたが、昌仙にも名案がなくなかなかそうだんがまとまらない。なぜかといえば、菊亭右大臣ともある堂上の館へ、うかつに手を入れれば、後日朝廷から、どんなおとがめがあるかもしれないから――これは秀吉じしんの手をもってしても、めったなことはできないのであろう。

といっても、あのやかましい秀吉から、その捕縛をいいつけられている呂宋兵衛は、なんとしても、勝頼を秀吉の面前へ拉致していかなければ、たちまち、かれの信用が失墜することになる。

――策はないか！　策はないか！　なにかいい名策はないか！　と呂宋兵衛はややしばらく、額を押さえて考えこんでいたが、やがてのこと、

「うむ、どうしても、こよいをはずしてはなおまずい。昌仙、耳を……」

決断がついたか、あの大きな碧瞳をギョロリと光らし丹羽昌仙の耳もとへなにかの計略をささやいて、ことばのおわりに、

「よいか！」

ときつく念をおした。

「ご名案、心得ました」

「ではさきにでかけるぞ、燕作、その菊亭の館へあんないをしろ」

呂宋兵衛は、くろい蛮衣をふわりとかぶって立ちあがり、早足の燕作をさきにたたせて、風のごとく、天ヶ丘から駈けだした。

満山を鳴らして、ゴーッという一陣の松風が、朧月へ墨をなすッてすぎさった。と、呂宋兵衛が、立ちさったのち、――南蛮寺の絵蝋燭は一つ一つふき消されて、かなたこなたから狩りだされた四、五十人の浪人が、いずれも覆面黒装束になって、荒廃した石壁の会堂へあつまってくる。

ガチャン！　という錠前をはずす音。ガラガラとおもい鉄の扉を開けるひびき――。そして狼が食い物へとびつくかのように、覆面の者どもが一せいにそのなかへゾロゾロはいると、たちまち鉄砲、鉄弓、槍、捕縄など、おもいおもいな得物をえらび、丹羽昌仙の指揮にみちびかれて、百鬼夜行！　天ヶ丘からシトシトと京の町へさしてまぎれだした。

木の葉笛竹童嘲歌

一

風もないのに、紅梅や白梅の花びらが、釣り橋の水に点々とちって、そのにおいがあやしいまで闇にゆらぐ。――と、更けわたった菊亭家の裏門のあたりから、築土をこえて、ヒラリと屋敷のなかへ忍びこんだ三つの人かげがある。

月ヶ瀬の景趣をちぢめたような庭作り、丘あり橋あり流れあり、ところどころには、墓のような石、みやびた春日燈籠の灯が、かすかにまたたいていた。

その館の奥庭を、もののかげからかげへ、暗がりから暗がりへ、ソロ……ソロ……と息をころして忍んでいった三つの影

は、やがてひろい泉水の縁へでて、たがいになにかうなずき合いながら、ひとりは右へ、ひとりは左へ、別れわかれに姿をかくして、そこにうッすらと立ちのこったのは、和田呂宋兵衛だけになった。

呂宋兵衛はじッとたたずんで、泉水のなかほどをみつめていた。そこには泉殿とよぶ一棟の水亭がある。泉の亭の障子にはあわい明かりがもれていた。その燈影は水にうつって、ものしずかな小波に縒れている。

「……」

呂宋兵衛は唇だけをうごかして、印咒のまなこを閉じだした。と思うと、そッと足もとの小石をとって、池のなかへ、ポーンと投げる。

「あ！」

とおどろいたような声が、泉の亭のなかからもれ、池に面した塗り骨の障子がスッと開いた。

その部屋から、なかば身をさしだして、音のした池の面をながめたのは、館の菊亭右大臣晴季公で、そのまえには、さっきの僧のひとりが対坐し、ふたりの僧は、末のほうにひかえているらしかった。

「なんじゃ……」

晴季は微笑をふくんで、波紋のなかにしずんでいく魚のかげを見ながら、

「緋鯉であったそうな……ごあんじなさるまい」

こういって、またピシャリと障子をしめてしまった。

ところが――そのわずかもわずか、ほんの目ばたきするあいだに、泉のふちに立っていた呂宋兵衛のすがたが忽然と消えてしまった。いや、消えてしまったのではない。水遁の秘法をもちいて、泉殿の橋をわたり、いつのまにか、晴季や僧たちのいる室のどこかに忍びこんでいたのだ。

とも知らず――晴季は、障子を閉めてほッとしたもののように、また小声で、目のまえにいる僧形の貴人へ話しかけていたことばをつづける。

「いや、なにごとも時世時節……こうおあきらめがかんじんじゃ。あのような水音にさえ、はッと心をおくお身の上、さだめしおつらかろうとお察し申すが、またいつか天運のお恵みもあろうでな。まずそれまではご一身こそなによりの大事、かならず早まったことをなさらぬがようござる」

「お情け、かたじけのう思います」

正面にすわった僧形の貴人は、ことばすくなに沈んでいた。これ、はたして武田勝頼その人であるか否かは、あまりに、主客の対話がかすかで、にわかに判じがたいのである。しかし短檠の光に照らされたその風貌をみるに、色こそ雨露にさらされて下人のごとく日にやけているが、双眸らんとして人を射るの光があり、眉色うるしのごとく濃く、頬麗丹脣にして威のあるようす、どうみても、尋常人でないことだけはたしかである。

「とにかく、いちじこうなされてはどうであろう……」

晴季は、さらにいちだんと声をひくめて、

「嵯峨の仁和寺に、麿の親身な阿闍梨がわたらせられるほどに、ひとまずそれへお越し召されて、しばらくは天下の風雲をよそに、世のなりゆきを見ておわせ。そしてご武運だにあらば、機を待ってまたの大事をお計りなさるのがなによりの

万全じゃ。……晴季はそう思うが、御意のほどはどうおわすの？」
「しごくなお計らい……いまの身になんのかってな我意を申しましょうぞ。よろずとも、よろしきようにお願いするばかりじゃ」
「では、追い立てるようではあるが、ここの館は召使どもも多いことゆえ、夜明けをまって一刻もはやく嵯峨へお身を落ちつけあそばしたほうがよい、麿から阿闍梨どのへ、しさいに頼み状を書いておきますでの……」
こういって晴季は、千鳥棚の硯筥と懐紙を取りよせ、さらさらと文言をしたためだした。ところがいつになく筆がにぶって、書いているまに頭脳がボーと重くなり、さながらムシムシとした黒い霧に身をつつまれているようなだるさをおぼえてきた。
はッとして、こころを冴え澄まそうとした。そしてなにげなく見まわすと、まえの人は端然としているが、ふたりの従僧は坐しながら、われをわすれていねむっている。
「奇怪な！」
晴季はクルクルと手紙をまいてゆだんのない目をみはった。とたんに、三人の僧たちも、なにかいいしれぬ魔魅の気におそわれているのを知って、無言のまま、ジロジロと部屋のすみずみをみつめ合った。
しかし、短檠のかげ、棚のかげ、調度のもののかげのほか、あやしいというものの影は見あたらない。
「では……」
と晴季は、したためた手紙を僧の手にわたした。――とはるかに、ガラガラと戸をあける音や、人声のザワめきや、また牛車の轍、鶏の声など、夜明けを知らせる雑音が、入りまじって、かすかに聞えだしてきた。
「はてな？　まだ夜明けにしては、あまり早すぎるが」
ふと、池の面の障子をひらいてみると、いつか暁の光が、ほのぼのと水にういて、あなたこなたの庭木の花さえ、しらじらと明けはなれている。
「オオ、不覚不覚、あまり話に身がいって、時刻のたつのを忘れていたとみえる」
「ではお館、人目にたたぬうちお暇をいたす」
「お疲れでもあろうが、昼のおでましは、かなわぬおからだ、すぐにお立ちがよろしかろう」
にわかに取りいそいで、三人の僧はそこから、網代笠をかぶり、菊亭晴季に見おくられて、泉殿から池の橋をわたってきた。
すると、四人が橋を渡りおえるとともに、いまがいままで、さえざえと夜明けの光をたたえていたあたりは、また、どんよりとしたおぼろ月夜となり、人声や車の雑音もバッタリ聞えなくなった。
「や、や？　……」
立ちどまっていると、ものかげから、ひとりの男、すがたは見せずに、
「お館さま」と、声をかけた。
「だれじゃ」
「番の者でござります」
「ウム、門まわりの小者か。して、なにか変ったことはない

か」
「忍びの者が入りこみました」
「なに、忍びの者？」
「はい、徳川家の菊池半助というしのびの名人が」
「なんという！　すりゃ一大事じゃ」
「世をしのぶ危ないお方、はやくお落としなさいませ。早く、早く、早く……」
「ウム、そちが裏門をあけてご案内してさしあげい。かならずそそうのないように」
「心得ました。さ、こちらへ……」
ガサガサと木の葉をわけて、男がさきに立ったので、三つの網代笠が晴季に目礼をしてついていった。
が晴季は、そのあとで、ふと不安な疑念におそわれたか、小走りに僧たちのあとを追おうとした。するとそのとたんに、かれは背なかから、何者かに、ペタリと抱きつかれて、蝙蝠の翼のようなものに、さえぎられてしまった。
「だれじゃ、麿を止めるものは」
ふりはなそうとしたが、その力はねばり強く抱きすくめていた。さては！　と感じたので、晴季は前差の小太刀をぬいて、ピュッと一揮に、
「曲者！」
力まかせに後ろにはらった。
「ひッ……」
とさけんで四尺ばかり、まッ黒なかげが、身をはなれた。みると、黒衣の妖婆。――晴季の切ッ先を跳びのくが早いか、乱杭歯の口を、カッと開いて、ピラピラピラピラ！　と目にもとまらぬ針をふいた。

二

妖婆の吹き針に目をつぶされて、なにかたまろう、菊亭晴季はウームとそこへ気をうしなってしまった。
と、すぐにまたそこへ一つの人かげ、ヒラ――とこなたへかけてきて、
「婆、いそげ！」
と、あとには目もくれずに、屋敷のそとへ走りだした。いうまでもなく、呂宋兵衛と蚕婆で、さきに、屋敷の小者のふりをして、貴人の僧をさそいだしていったのは、早足の燕作であった。
その燕作は、いましも、三人の僧を早く早くと急かしながら、朱雀の馬場を右にそって、しだいに道を天ヶ丘の方角へとって駈けている。
「待てまて、小者まて！」
従僧のひとりが、ふいに足をとめて、
「こうまいっては、嵯峨の方向とはまるで反対ではないか。仁和寺へまいるのであるぞ」
「心得ております」
「心得ておりながら、なんでかようなところへ、あんないするのじゃ」
「まアだまって、わっしについておいでなさい。どうせあなたがたは、甲州の田舎者、都のみちは、ごあんないじゃありますめえが」

「まだ、いうか」
飛びかかッた従僧のひとり、燕作の襟がみをつかんでグッとうしろへ引きたおした。
「無礼なやつめ、甲州の田舎者とはなにをいうのじゃ、おそれ多くもこれにわたらせらるるは……」
怒りのあまり、口をすべらしかけると、別のひとりがハッとしたようすで袖をひいた。
「ええ、なにをするんだッ」
燕作は、よろけながらヤケになって大声にわめいた。
「そのことばが、甲州なまりだから、甲州の田舎者といったのがどうした、甲州も甲州、二十七代もつづいた武田の落人、四郎勝頼はてめえだろう！」
「あッ、こやつ――」
声と一しょに従僧の手から、隠し差しの一刀が、サッとのびて燕作の肩をかすった。
「おッとあぶねえ」
燕作は、バッと五、六間ほど、泳ぐようにつんのめっていきながら、ピピピピピ……と合図の呼子をふいて逃げた。
――と思うと八方から、おどりたった覆面の浪人どもが、
「落人待った！」
「武田勝頼！　ご用！」
「天命はつきたぞ」
口々に呼ばわりながら、ドッと三人の僧侶をとりかこんだ。
「ちぇッ、さては早くも……」
歯ぎしりを噛んだふたりの従僧、網代笠をかなぐり捨て、大刀をふりかぶって、主僧の身をまもり、きたるをうけて槍や刀をうけはらった。
いつか白刃はみだれ合って、朱になったふたりの従僧は、別れわかれの渦に巻きこまれてしまった。そして、すきをねらった一本の飛縄が、松のこずえからピューッと風をきってきたかと思うと、かれらの主と守る僧は、あッ――と大地へ搦めたおされたようす。
「これ、用意の駕籠を」
闇にあたって、丹羽昌仙の声がひびいた。
「おうッ」
というと覆面のむれ、ガチャガチャと一挺の鎖駕籠を舁きこんできて、七重八重にしばりあげた貴人の僧をそのなかに押しこみ、それッとかつぎあげるや否、まッ黒にもんで、天ヶ丘の南蛮寺へいそぎだした。
「ええ、しまった！」
「わが君ッ――」
悲痛な声が、血煙のなかに残った。満身の太刀傷にさいなまれたふたりの従僧、斬ッつ、追いつ、小半町ほど鎖駕籠を追いかけたが、刀おれ力もつきて、とうとう馬場のはずれの若草の上で、たがいに喉と喉とを刺しちがえたまま、無念の鬼となってしまった。

三

東山に、金色の雲がゆるぎだした。
京の大宮人が歌よむ春のあけぼのは、加茂の水、清水の花あかりから、ほのぼのと明けようとしている。

だれもいない南蛮寺、緑青のふいた銅瓦の上へ、あけぼのの空から、サッ――と舞いおりてきた怪物がある。みると、ひさしく裾野からその影をたっていた、竹童の愛鷲、――いやいや、いまでは泣き虫の蛾次郎が、わがもの顔に乗りまわしている大鷲だ。

「やあ、いよいよここが都だな、ゆうべは伊吹山でさびしい思いをしたが、きょうはひとつ、クロにも楽をさせて、京都の町でブラブラ遊んでやろう」

あれからのち――どこをどう飛んで歩きまわっていたか、あいかわらず、のんきの洒アな顔をして、泣き虫の蛾次郎。南蛮寺の屋根の上から、小手をかざしてひとりごと……

「いいなア、いいなア、さすがに天子さまの都だけあるなあ。オーむこうに見えるのが御所の屋根だな。霞をひいて絵のとおりだ。二条、三条、四条、五条。こうしているあいだにだんだんみえてくる……おッとこんなところで感心していたところでつまらない、はやく一つ腹ごしらえして金閣寺だの祇園だの、ゆっくり一つ見物してこよう」

ふわりと鷲を地へ舞わせて、南蛮寺の朱門へおりた蛾次郎。あッちこッちを見まわしていたが、やがて、天ヶ丘の松林を奥ふかくはいってしまった。

そして、とある松の大木へ、用意の鎖で、鷲の足をしばりつけてから、

「おいおい、クロ公」

と、人間へいうように、いいきかせる。

「おれはな、ちょッと久しぶりだ、きょうはほうぼうあるいてくるから、おれのるすに、どこへもいっちゃいけねえぜ。いいかい、帰りにゃ兎の肉をウンと買ってきてやるからな、たのむぜ、クロ公」

これで安心したらしい。

そこでさて泣き虫蛾次郎、すこし気どって、れいのボロ鞘の刀を差しなおし、松の小道をとって、ふもとの方へ歩きだしながら、みちみち、山椿の葉を一枚もいで唇にくわえ、木の葉笛で調子をとりつつ、へんな歌をさけびだした。

ピキ、ピッピキ　トッピッピ
竹童ちッぽけ　ちッぱッぱ
鷲を盗られて　ちッぱッぱ
とられる半間に　盗る利口
鴉がないても　おら知らねえ
竹童ちッぽけ　ちッぱッぱ
ピキ、ピッピキ　トッピッピ

「わアおもしれえおもしれえ。竹童のやつがきいたら口惜しがるだろうな。フフンだ、もうだめだッてことよ。クロは死んでも蛾次ちゃんのそばを離れるのはいやだとさ……あははははだ。うふふふふだ。やアい――竹童小ッぽけちッぱッぱ」

ひとりで、はしゃぎ立て、ひとりで踊り足をふりながら、天ヶ丘をなかほどまでくだってきたが、そこで、なにを見つけたか蛾次郎は急に、

「おやッ？」

と目玉をデングリかえした。

「オヤオヤオヤ、なんだなんだありゃ、まッ黒に顔をつつんで、目ばかり光らした侍が大勢ここへのぼってくるぞ」
崖の上へはいあがって、木の葉を頭から引っかぶり、なおも目をみはってつぶやいた。
「ずいぶんくるなあ、四、五十人もくるぞ。オオ鎖駕籠もやってくる。だれがいるんだろうあのなかに。罪人かしら？　えらい人かしら？　アレアレ見たような奴が、おさきに立ってくるぞ……いけねえ！　呂宋兵衛に蚕婆だッ」
というと蛾次郎は、その覆面の群れが、目の下へくるよりはやく、鉄砲玉の反れたうさぎのように、横ッとびの一もくさん――崖から崖をころげていってしまった。

虫ケラざむらい

一

――きょうは、西陣の今宮祭。
紫野から加茂の里あたりまで、なんとすばらしいにぎわいではないか。
太鼓の音に、道の紅梅は散りしき、笛の音にふくらみだす桜のつぼみ。鐘チャンギリも浮きうきとして、風流小袖の老幼男女が、くることくること、帰ること帰ること、今宮神社の八神殿から、斎院、絵馬堂、矢大臣門、ほとんど織りなすばかりな人出である。
これで、世が戦国だ、乱世だとはまったく、ふしぎなくらいのもの。
ときしも、羽柴筑前守秀吉は、北国の柴田権六をうつ小手しらべに、南海の雄、滝川一益の桑名の城を、エイヤ、エイヤ、血けむり石火矢で、攻めぬいているまッさいちゅうなのである。
留守の都で、ピイヒャラドンドンの今宮祭は、やや悠長すぎるようだが、日本はもともと祭りの国だ。かりそめの戦雲が日月をおおうても、神のまつりは絶えないがいい。また、じしんはとおく戦陣の旅にあるとも、留守の町人百姓や女子供には、こうして、春は春らしく、平和にのんきに景気よく、今宮祭ができるようにしておくのも、つまり、筑前守秀吉が、やがて大をなすゆえんであるかも知れない。
なにしろきょうは、けっこうな日である。
戦をしている秀吉にはここへくるひまもないだろうが、百姓には百姓のわざ、商人には商人のわざがある。大いにお祭をし、大いにはたらけ、それが秀吉さまもおすきだぞ！　とばかり、いまも本殿三座の御榊をひっかついで、ワーッと矢大臣門へなだれてきたのは、やすらい踊りのひとかたまり。
紅衣の楽人たちが笛をはやし、白丁狩衣の男たちが鉾や榊をふって、歌いに歌う。そして輪になった女子供が花棒ふりふりおどって歩く。
するとこの踊りの渦まきが境内の神馬小屋のまえまできたとき、
だれか！　どこかで？
「キャーッ！」
と悲鳴をあげたのである。

だが――うかれ、熱している踊りのむれ。それにも気がつかずに、なおも足なみを練ってゆくと、こんどは、
「わーッ」
といって、白丁の衛士がふいにぶッ倒れた。
白丁だから目についた。たおれた姿が血まみれである。
「踊りをやめろ！　踊りをやめろ！」
「踊るやつは、ぶッた斬るぞッ」
おどろくべき乱暴者が、いつのまにやら、この極楽へまぎれこんでいたのだ。
ふいに、破れ鐘ごえでこう叫んだのを見ると、雲つくような大男が三人、大小打ッこみ、侍すがた、へべれけに酔って熟柿のような息をはき、晃々たる大刀をぬきはらい、花や女子の踊りにまじって、ブンブンふりまわしているのだからたまらぬ。
「アレーッ」
と泣いて逃げるもの。神馬小屋へ飛びこんで、馬のお尻にかくれるもの、さては韋駄天と逃げちる者など――いまが今までの散華舞踊は、一しゅんのまにこの我武者のろうぜきで荒涼たるありさまと化してしまった。
それにも飽かず、この三人の浪人者。
またぞろ八神殿の参詣道に、ヒョロヒョロとあらわれて、あッちへ当り、こッちへ当りちらし、肩で風をきってくる。
「こらッ、物売りどもは、店をかたづけい」
「見世物小屋はたたんでしまえ」
「鳴り物をはやすことはまかりならんぞ。いまは、そんな時世ではないのだッ、このバカどもめ！」
「秀吉さまは、合戦のまッただ中、町人のくせに、祭などとはもってのほか、さッ、店や小屋はドシドシとたたんでしまえ！」
手には刀をふりまわし、足はそこらの物売りの荷を片ッ端から蹴ちらしてゆく。――烏帽子を売っていたおじいさん、鳩の豆を売っているおばあさん、逃げそこなってかわいそうに、燈籠の下で腰をぬかしてしまう。
さらに哀れをとどめたのは――大勢の客を呼びあつめ足駄ばきで三方にのっていた歯磨き売りの若い男、居合の刀を持っていたところから、一も二もなく目がけられて、豹のごとく飛びついてきた酒乱の浪人者に、血まつりの贄とされた。
「あぶないぞウ！」
と、なだれる群集。
「よるなようッ」
「母アちゃあん――」
悲鳴！　叫喚！　子をかばい、親をだいて、砂けむりをあげる人情地獄。それは面も向けられない砂ほこりであった。
「ざまをみろ、蛆虫めら」
「祭がやりたかッたら、なぜ天ヶ丘へ付けとどけをしておかねえのだ」
「商いがしたいと思うなら、ここから近い南蛮寺へ、さきに礼物を持ってこい」
かってなことを吠えた上に、カラカラッとあざわらった三名の酒乱。
「おおッ、こんどは今宮の社へかけあいをつけろ！」
「うむ、いいところへ気がついたぞ。すぐ目のまえの南蛮寺

へ、なんの貢物もせずに祭をするとは太い神主だ。グズグズぬかしたら拝殿をけちらかして、あの賽銭箱を引ッかついでゆけ！」
神慮をおそれぬ罰あたり、土足、はだかの皎刀を引っさげたまま、酒気にまかせてバラバラッと八神殿の階段をのぼりかけた。

二

なだれを打って逃げかけた群集も、このさまをみて、どうなることかと、こわいもの見たさの好奇心に、遠くからアレヨアレヨとながめている。
すると。
八神殿の朱柱のかげから、ヒラリとあらわれたふたりの男があった。
右の丸柱から駈けよってきたのは、白衣に白鞘の刀をさしたひとりの六部、左からぬッと立ったのは墨の法衣をまとって、色しろく、クリクリとした若僧である。
そのふたり。
手をつなぐように、階段の上へ大手をひろげて、
「待て！　酔いどれッ」
「ここを通すことはまかりならぬ！」
どッちの声も、威力がある。
「な、なんだとッ」
頭をおさえられた狼は、ふんぜんと、牙をむいて食ってかかった。
「見うけるところ、二匹とも、乞食にちかい六部と雲水。下手なところへでしゃばると、足腰たたぬ片端者にしてくれるぞ」
「酔いを醒ませ、この白痴者！　ここをいずこと心得ておるのだ」
「オオ、ここは紫野の今宮神社、八神殿と心得ておる。それが一たいどうしたのだ」
「ははは。生酔い本性にたがわずだ。このバカ侍どもよく聞けよ。それ、日の本の武士たるものは、弱きをあわれみ、力なき者を愛し、神仏をうやまい、心やさしくみだりに猛きをあらわさず、知をもって、誠の胸とするのが、真の武士というもの――」
色白な若僧が、右手の禅杖を床へついてから、諭したが、そんなことに、耳をかすかれらではない。
「エエ、口がしこいことを申すな。われわれをただの浪人者と思いおるか。おそれ多くも、羽柴どのよりお声がかりで、天ケ丘一帯の取りしまりをなす、南蛮寺の番士だぞ」
「だまれッ、番士であろうと秀吉じしんであろうと、民をしいたげ、神をけがするなど、天、人ともにゆるさぬところじゃ」
「ゆるすゆるさぬはこっちのことだ。南蛮寺へことわりなしに、ぎょうぎょうしい祭や踊りをなすゆえに、この神主へかけあいにまいったのが悪いか。やい、じゃまだッ、そこをどかぬと、うぬらも血まつりにするぞ」
「きさまたちのいい分は腑におちぬ。秀吉ほどな人物がさような沙汰をするはずがない。アアわかった、主もなし能もなしに、かようなことをして、良民をくるしめ歩く野武士だな

ッ」
「野武士とは無礼なことを申すやつ。耳をかッぽじって聞いておけ、いま、天ヶ丘の南蛮寺を支配する、和田呂宋兵衛さまの身内人、斧大九郎とは拙者のことだ」
「やッ、呂宋兵衛？　……」
と、六部は若僧と目ばやくうなずき合って、
「うむ、呂宋兵衛の手下ときけばなおのこと！」
「なおのことどうしたッ」
いきり立って駈けあがってきたやつを、グイと右手で猫づかみにつるしあげた若僧、
「間答無用！　こうしてやる」
すこし力を入れたかと、思うと、ふわりと宙へおよがせて冠　桜の根瘤のあたりへ、エエッ、ずでーんと気味よくたたきつけた。
「うぬッ」
と、また飛びついてきたやつは、待ちかまえていた六部が、気合いをかけた当身のこぶしで、顎をねらってひと突きに、突きとばす。
なにかたまろう、ウームというと蝦反りになって、階段の中途からデンとおちる。それも、冠　桜の根ッこのやつも、神罰覿面、血へどを吐いてたおれたままとなってしまった。
「わーッ、わあッ――」
と、かなたでよろこぶ群集の声々、八百万の神々も神楽ばやしのように、興じ給うやと思われるばかりに聞える。
じぶんたちから、南蛮寺にある呂宋兵衛の部下と名のった斧大九郎、それを見ると、かッと逆上したていである。ひっさげていた大刀の下からはらいあげて、ふたりの足を、諸薙ぎにせんず勢いで、またかかってきた。
「猪口才なやつめ」
手もとへよせて、怪力の若僧が、また、虫でもつまむように引っとらえた時である。いつか、六部のうしろまで進んできた品よき公達が、
「忍剣、そやつを投げころしては相ならぬぞ」
あわや――という手をさえぎった。

三

思いがけない悪魔がでて、のろわれた今宮祭や踊りのむれも、また思いがけない侠人の力で、午すぎからは、午前におとらぬ歓楽の巷にかえってにぎわった。
「いったいあのわかい坊さまと六部はなんであろう？」
「天狗のような力と早わざ、よも、尋常人ではございますまいよ」
「それに、もうひとりうしろにいて、だまってみていた公達がいたではありませんか」
「そうそう、藺笠をかぶっておりましたが、年は十五、六、スラリとして、観音さまがお武家になってきたようなおすがた」
「それそれ、あの人たちは、神か菩薩かの化身でしょうよ。まったく、悪いことはできないもので」
うわさはどこもかしこもであるが、その焦点の人々はあれからどこへいったろう？

紫野の芝原には、野天小屋がけの見世物が散在していた。おおくの人が、大がいそれへ目をうばわれているのをさいわいに、れいの若僧が、斧大九郎を小脇にひっかかえ、飛ぶがごとく駈けぬける――とあとから大股に、藺笠の公達と六部のすがたが、つづいていった。

「ここらでよかろう」

立ちどまったのは、舟岡山のすそ。

高からぬこの山にのぼるとすれば、西に愛宕や、衣笠の峰の影、東はとおく、加茂の松原ごしに、比叡をのぞんでいる。さらに北をあおぐと、竹童の故郷鞍馬山の翠巒が、よべば答えんばかりに近い。

「若君ここへおかけなさりませ」

たかだかとそびえた杉林の下――。

一つの切株の塵をはらって、六部はわきへ片膝をついた。

「……」

目でうなずいて、藺笠の美少年は、それへ腰をおろした。この公達こそ、甲州小太郎山の雪の砦から、はるばる、父勝頼の消息を都へたずねにきた武田伊那丸であった。

そのわきに、頭を下げたのは木隠龍太郎で、加賀見忍剣は、ひッかかえてきた斧大九郎をそこへほうりだして、

「若君、いざ、おしらべなさいませ」

と、少しさがったところで、れいの鉄杖を、持ちなおしている。

「下郎、おもてを見せい」

伊那丸はいった。これはまた、忍剣の鉄杖より、龍太郎のはや技より、一種べつな気稟というもの、下郎大九郎は、すでに面色もなく、ふるえあがって両手をついた。

「ま、まったく持ちまして、さいぜんのことは泥酔のあまりでござる。どうぞ、ひらにひらに、おゆるしのほどを……」

これがつい、いましがた、今宮の境内を修羅にして暴れまわった男とは、思えぬような、弱音である。

いうのをおさえつけて、伊那丸は、ハッタとにらんだ。

「卑怯なやつではある。むだ口を申さずと、ただこのほうがたずねることに答えればよいのじゃ」

「は……はい、命さえ、おたすけくださるぶんには、斧大九郎、なんなりとぞんじよりを申しあげます」

「その口を忘れまいぞ」

きッと、半身をつきだした伊那丸、針葉樹の木洩れ陽を、藺笠としろい面貌へうつくしくうけて、

「なんじはさいぜん、和田呂宋兵衛の家来じゃというていばっていたの？」

「あ……あれは」

「いや申した！　たしかに聞いた」

「いいましたにそういございませんが、じつは、こ、心にもないでたらめごと」

いいかけるとあとから、忍剣の鉄杖のさきが背なかへ穴があくかとばかりドンとついて、

「このうそつきめが。呂宋兵衛の部下なるがゆえに、ことわりなしに祭をもよおした神主をこらしめるとか、かけ合うとか、ほざいていたではないか。若君のおしらべにたいして、寸言たりともあいまいなことを申すと、いちいちこれだぞ」

も一つ、ドンと食わせる。

「ウーム、フフフ、痛うござる、痛うござる」
「痛かったら申しあげろ」
「も、もうしあげます。まったく和田呂宋兵衛の手のものにそういございません」
「よくいった」
伊那丸は、うなずいて、
「して、その呂宋兵衛は、ただいま、どこに巣をかまえそしてなにをいたしておるな」
「秀吉さまのお気に入り者となりまして、天ヶ丘の寺領と、南蛮寺を拝領いたし、裾野いらいの一味、丹羽昌仙や蛮婆や燕作など、みなそこに住居をいたしております」
「オオ、定めしそれらのものは、一味同類となって、武田勝頼の行方をたずねておるであろうな」
「えッ、どうしてごぞんじでございますか」
「知らないでか！」
と伊那丸のかけたかまを、たくみに引きうけた龍太郎。わざと少しわらいすまして、
「これにおいで遊ばすは、徳川家のさる御公達。まったく某やこの若僧は、みな、浜松城の隠密組だ」
「あッ、さては貴殿たちも、菊池半助どのたちと一しょに、あの僧形を京都へつけてこられたおかたで？」
「さよう――」
と龍太郎は、おかしく思いながら、まじめにおうじて、
「ところで、その僧形であるが、なんと変った消息はないか。すなおに話してくれれば、敵でも味方でもないお主とわれわれ、そこらで仲なおりの酒でも酌もうし、また、ここにおわす徳川家の御公達に、出世の口を取りもってやらぬものでもないが……」
「へへッ」
というと大九郎、慾につりこまれて、草芝の上へあらたまり、おとといの真夜中、呂宋兵衛が手策をつくして従僧ふたりを殺め、ひとりの主僧をいけどってきて、天ヶ丘の古会堂へ打ちこんであるということまでベラベラしゃべってしまった。
すぐお追従をいう軽薄なかれの舌は、それでもまだいいたらずに、つけ加えて、また話すことには、
「ところで、その勝頼公。たしかに生けどってきた僧形の貴人にそういないとはにらんでおりますが、なんせい、野武士や浪人どもばかりの天ヶ丘、真実の勝頼公の面態を見知るものがないのでござった」
「して、その謎の僧は、いまもって、南蛮寺の古会堂に押しこめてあるのか――」
と、龍太郎も忍剣も息をころして聞いている。
「されば、ただいまも申したとおり、まだ真の勝頼公なるや、いなや一点のうたがいがございますゆえ、いッそのこと、桑名にご在陣の秀吉公のところへ、かれを差したて送ろうという、昨夜の評定で」
「なんと申す！　滝川攻めのため、近ごろ桑名にいると聞く秀吉の陣へそれを送りこむという手はずになっているのか。してそれは何日、時刻は何時じゃ」
「明日の朝まだきに、東山から陽がのぼるを出立の時刻として、天ヶ丘から桑名城へ。そのために、きょう一日は、わ

れわれも骨やすみのひまをもらい、かようなところをブラついておりましたわけ、さきほどの無礼の段はひらにお目こぼしねがいまする」
一伍一什のはなし。
聞くからに伊那丸は、われをわすれて、両のこぶしを膝の上ににぎりしめつつ、
「ウーム！　さてはお父上には、早くも毒手に墜ちたもうて、桑名へさしたてられるご武運の末とはおなり遊ばしたか、……ああ、おそかった……」
と、まなじりに血をにじませ、藺笠のうちに鬢髪をブルブルとふるわせた。
父上、という一句をきいて、斧大九郎、ハッとあっけにとられながら、じりじりと尻ごみする。
伊那丸がハラハラと落涙するようすを見て、
「若君、かならずお力おとしはご無用でござります」
と、忍剣、龍太郎のふたりが、口を合わせてなだめるのだった。
「すでにお命のないものなら、真にご武運のすえ、また人力のおよぶところではござりませぬが、ただいま、大九郎の話によれば、まだご尊体にはなんのご異状なく、明朝、天ヶ丘から桑名の陣へうつされてまいるとのこと、折こそよし、これ天の与えたもう好機会ではござりませぬか」
「おお！　かならずお父上を、お救い申しあげねばならぬ」
立ちあがった時である。
「ややッ！　さては武田の？」
ぎょうてんした大九郎、跳ねあがって逃げだすと、伊那丸の一喝。
「龍太郎、そやつを討て！」
「はッ」
と答えるまでもなく、立ちあがった木隠が、やらじと猿臂をのばしたので、胆をとばした斧大九郎、にげみちをうしなって無我夢中に松のこずえへ飛びついた。
「ええ――ッ」
つんざいた木隠の気殺！
とたんに、抜きはなたれた無反りの戒刀、横にないでただ一閃の光が、松の枝にブラさがった大九郎の胴を通りぬけてしまった。
バサリと血のなかにおちたのは、胴から下、上半身は枝をつかんだまま、虚空にみにくく止っていた。
そのとき、あなた――今宮の舞楽殿では、笛や太鼓、そして鈴の音がゆるぎだした。やすらい踊りのどよめきにあわせて、神楽囃子がはじまったのであろう。――悪魔たいじの御神楽歌。

明暗の両童子

一

ピイヒャラ　ドン助　ひゃらりこドン！
鷲をとられて　オッペけペ！
竹童ドン助　ひゃらりこ　ドン！

これは、あちらの神楽歌ではない。
暮れなんとする杉林から芝生のへんを、しきりに浮かれまわっている少年の放歌である。
はるかに聞える神楽にあわせて、

ピイヒャラ　ドン助　ひゃらりこドン！

すっかりゆかいになっている。
右手に一本もっているのは、串へさしたお芋の田楽、左につかんでいるのは黒い飴ン棒、ひゃらりこドンと踊りながら、芋をたべては飴をなめ、飴をなめては芋をくい、かわりばんこに舌を楽しませて、

竹童ドン助　ひゃらりこドン！

いよいよ無上の大歓楽、歌もおどりもやむことを知らず、陽が暮れようとするのも知らず、いましも林をぬけてきた。
このお天気な少年は、いうまでもなく蛾次郎である。
きのうから遊びつづけて、きょうは、今宮祭の見物としゃれているのか。
胸や口のまわりには、田楽の味噌だの、黄粉だの、あまくさい蜜糖の粘りだのがこびりついていて、いかに、かれの胃袋が、きょう一日をまんぞくにおくっていたかを物語っている。
のみならず蛾次郎は、目のかたきにしている竹童にたいして、いま、大なる優越感をもっている。

「竹童のやつめ、さぞいまごろは、クロを盗られて、メソメソしているだろうな。まっ黒な富士の裾野で、まぬけな面をしているだろうな。
このおれさまはどうだ！　日本中クロを乗りまわしてきて、いまは、天子さまと同じ都の土をふんでいるんだ。九重の都をよ！
どうだい、蛾次郎さまの光栄は！
食べたいものをウンと食べたぜ。見たいものもウンと見たぜ。だからおいらは踊るのさ、踊らずにはいられないや。ワーーイだ、ワーーイ！　ワイ竹童、ざまをみやがれ！」
こんな気分が、かれ蛾次郎の歌となり、舞躍となるのであった。
ところで、有頂天の蛾次郎が、いま、なんの気なしに林の中をおどってくると、なんだか、ぬらりとしたものが鼻の頭をなでたのである。
「おやッ？」
と思ってさわってみた。
どうも人間らしいのである。しかし、今晩は、とはいわなかった。
「おかしいなア、この人は……」
と、上から下へ、ソーとなでてみると、へんだ！　へんだ！
へんな人間！　腰から下がなにもない。
「わッ、化け物ッ」
蛾次郎は芋の串をほうりだして、逃げるわ逃げるわ、むちゅうでにげた――一心不乱に、あかるいほうへかけだした。
夜になっても、今宮の境内はにぎやかであった。そこで蛾

次郎は、はじめてホッと人心地にかえった。更けるにしたがって、踊りの輪もちり、参詣の人もたえ、いつか、あなたこなたの燈籠の灯さえ、一つ一つ消えかかってくる。

二

「こんやの宿屋はどこにしようか」

額堂は吹きさらしだし、拝殿の廊下へねては神主が怒るだろうし、と、しきりに寝床を物色してきた蛾次郎。

「ウム、ここがいい。神さまの足もとなら、化け物もでないだろう」

と、四つンばいになって、のこのこはいこんだのは、八神殿の床下。藁莚を一枚かかえこんで、だんだん奥のほうへいざってきた。

むろん、縁の下はまっ暗で、鼻をつままれてもわからないくらいだが、蛾次郎がはいすすんでいったすこしさきに、なにやら、ゴソ……という音がした。

「ははあ、お仲間がいるな」

そう思って、地べたへ顎をつけながら、じッと闇をみつめていると、しだいに眸がなれてきて、おぼろげながら、人かげがみとめられた。

姿かたちは、だれともわからぬけれど、やはり蛾次郎と同じように、土台柱のしたへ一枚の莚をしき、そこへじッと身をかがめたまま、しきりに、器の水へ布をひたして、目を洗っているらしい。

しばらくするとその影は、小布で目をおさえたまま、蛾次郎のいるのは知らぬようすで、

「ああ、困ったなア……」

ひとり惆然として、つぶやくのである。

「もう春にもなったし、目さえ見えれば、山のおくへでも海の果てまでも、たずねてさがしだすのだけれども……急にこの目が見えなくなってしまった、蚕婆の針にふかれて！あの吹き針に目をいられて――おいらはとうとう盲になってしまったんだ……」

見えぬのは目ばかりでなく、心も憂いの雲にとじられているのであろう。なんともいえぬ、悲哀のこもったつぶやきである。

「神さまッ……」

ガバと伏して、その影が合掌した。

「八神殿の神々さま！　このお社にまつられてある神々さま。おいらはそれがなんという名の神さまだか知りませんが、どうぞこの目をなおしてください。神さまのお力で、針にふかれたこの目の痛みをとってください……」

こっちにいた蛾次郎は、オヤオヤ、という腰つきで、じッと聞き耳をたてている。

「なんだいあいつは？　気ちがいじゃねえのかな、みょうに、ふるえた声をだしやがって……アレ見や、むちゅうになって手を合わせている、ア、泣いていやがら……ばかだなあ、泣くなよ兄弟」

と、うっかり声をすべらしかけたが、待て、もうすこし、見ていてやろうと息をころした。

盲のすがたは一心不乱に、掌をあわせ、八神殿の神々

に念じていた。
信仰に熱してくると、おのずから手がふるえ、声もわれ知らず高くなって、
「この目のいたみをおなおしくださいませ！　八神殿の八つの神さま、おいらにはどうしても、さがしたいものがあるのです。クロという鷲をたずねだしたいのです。そして、伊那丸さまのおんために、もっともっと、大きな手柄を立てなければなりません。こんなところにもぐっていると、お師匠さまに叱られます。盲のすがたを見られたら、一味の人たちにも恥ずかしゅうございます。なおしてください。八神殿の神々さま、その大望をとげましたら、わたしの腰にさしている般若丸を、きッと奉納いたします」
血汐も吐かんばかりである。
一念の声、一念のいのり！　祈らなくても、人の誠は天地をうごかすという……。だが、床下のやみは、しいんとしていた。

三

おどろいたのは蛾次郎だった。
梟のように目をまるくして、ソーッと、また一、二間ちかづいて、よくよくその影を見さだめていると、あんにたがわず、それは鞍馬の竹童である。
いつぞや、加茂の堤で蚕婆の吹き針にふかれてその目をつぶされ、いまは黒白もわかたぬ不自由な身となった。
町をあるけば人につまずき、森をあるけば木の根にたおされるしまつ。クロの行方を知るよしもないので、瀬戸物のかけらに御洗水の清水をすくってきて、この床下へ身をひそめ、ただ一念にいのり、一念に目を洗っているのだった。
「ふウん……やっぱり、竹童にちがいない」
蛾次郎は犬つくばいにようすをながめて、
「へんなところで、でッ会したな。目がわるいようすだから、一つ、からかッてやろうかしら」
手にさわった土塊をつかんで、竹童のかげへ、バラッと投げつけた。
「だれだッ」
さなきだに、盲になってからは、神経のとがり立っている鞍馬の竹童、こういって、からだをねじむけてきたのである。
蛾次郎は、おもわずズルズルとあとへさがった。
だが、目がわるい、ここまではきやしまいと、たかをくくってまた、
「どうだい大将――」
と、あざわらった。
「なんだと」
「おもらいがたくさんあるかい。え、お菰さん」
「……」
「ははは、さすがは偉いもんだ、果心居士のお弟子さんはな。鞍馬の竹童はえらいよ偉いよ、とうとう花の都へでて、天下のお乞食になったんだからな」
「だれだ、だれだッ、おいらの名を知っているのは？」
「おめえ、盲のくせに勘がわるいな。アアにわか盲だから、声まで見えなくなったのか。じゃアいって聞かしてやろう。

びっくりして気絶するなよ。こう申す者こそはすなわち、おめえのクロを頂戴して、天下に名をあげている蛾次郎さまだア」

「なにッ！　蛾次郎だとッ」

さけぶや否、鞍馬の竹童、般若丸の名刀をピュッと抜きはなって、声のするほうを、さッと斬りはらった。

まさか鞍馬の竹童が、こんな名刀を持っていようとは夢にも知らなかった蛾次郎、アッといって床下からころげだし、すぐむこうにあった小屋のなかへ、四つンばいにかくれこんだ。

が、そこはれいの神馬小屋であったので、注連飾りをつけた白馬が、ふいの闖入者におどろいて、ヒーンと一声いなないたかと思うと、飛びこんできた蛾次郎の脾腹を蹄でパッと蹴りかえした。

「ウーム……」

と、打ったおれた泣き虫の蛾次郎は、脾腹をおさえてフンぞったとたんに、昼間のうち胃袋を楽しませたご馳走をのこらず口から吐きだして、厩のまえにへたばってしまった。

馬は、見むきもせず、われ関せず焉と、かッたるそうに目の皮をふさいでいる。

――更けてくると、祭の夜も寂としてものさびしい。

一陣の山嵐が、鞍馬山の肩あたりから、サーッと冷気をふり落としてきたかと思うと、八神殿の冠桜の下あたりに――竹童のお師匠さま果心居士のすがたが、めずらしくもほのかに見えたのである。そして、もくもくとして裏宮のほうへ杖をひいていった。

果心居士と愛弟子

一

右手に、名刀般若丸を、ひだりの手では、地や蜘蛛の巣をなでまわしながら、ソロリと、八神殿の床下をはいだしてきた者がある。

それはさっき、泣き虫の蛾次郎に、さんざんな悪口や揶揄をなげられていた盲の少年――鞍馬の竹童。

あたりをさぐって、そとにでれば、夜は四更の闇ながら、空には、女菩薩たちの御瞳にも似る、うるわしい春の星が、またたいている。

鳥の巣のようなかれの頭、土にまみれた肩や肘、そして、血のにじんだかれの素足――。それらのあわれな物のかげをつづった竹童のすがたは、星影の下にあおく隈どられて見えたが、かれの目には、ただ一粒の春の星さえ、うつらぬのである。

見えぬがために、見ようとする、心の異常なはたらきが、心眼ともいうべき感覚を全身にするどく研いで、右手につかんだ般若丸を、おのれの背なかにかくしながら、

「蛾次郎……蛾次郎はどこへいった！」

八神殿の石段にそって、裏宮の方へしのびやかに歩いてくる。おお、その影のいたましくもおそろしい。

かれは、心のうちでこう叫ぶのだ。

返せクロを！　返せクロを！
おいらの手から横奪りした、あの鷲をかえせ、おいらの手にタッタいまかえせ！
竹童の目は見えないはずでありながら、その一念に、あたかも、なにものかを、的確に見ているように、いうのであった。歩きだすのであった。
でてこい蛾次郎！　泣き虫の腰ぬけ。
でてこい蛾次郎、どこへいった！
よくもよくもクロをうばったな。また、よくもさっきは、この竹童を盲とあなどって、土塊をぶつけたり、お師匠さまの悪口をたたいたり、そして、鞍馬の竹童のことを、天下のお乞食さまとののしり恥ずかしめたな。
おまえはさっきたいそうなじまんをいった。いかにも得意らしいことをいった。だが泣き虫蛾次郎よ、ひとの愛している鷲をうばって乗りまわしたり、ひとのダシに使われてもらったお金で買いぐいをしたり、また益もなく都の町を浮かれあるいたりして、それがなんの自慢になる！　それがなんで男の誇りだ！
あの秀麗なる神州美の象徴。富士の裾野に生まれながら、どうしておまえはそんなきたない下司根性をもっているんだろう。情けないやつ、意気地のないやつ、怠けもの、腰ぬけ腑抜け、お天気な少年！
それはみんな、蛾次郎よ！　おまえの名だ。
おいらは鞍馬の山育ちだ。
だが、蛾次郎よ。
おいらはおまえのような下卑たやつとは心のみがき方がちがっている。また、おいらがこんな乞食のような姿になっていたり、盲になってしまったのも、みんな自分の慾ではない。甲斐源氏の御曹子、武田伊那丸さまへ忠義をつくすため、また、お師匠のおいいつけを守らんがためしていることだぞ。
おいらは恥じない。
乞食になっても、盲になっても、この竹童の心は八神殿の神々さまや、弓矢八幡がご照覧ある。
罵るものなら罵ってみろ。鷲を返さぬというならば、男らしくどうどうと竹童の前へたっていいきってみろ！　オオこの般若丸の名刀でおのれただ一刀に斬りすててくれるから……
いきどおろしい、竹童の心は湯のごとく沸りたって、こう叫びながら方角もさだめず、裏宮のお堂を巡り、いましも、斎院の前まであるいてきた。
――すると、かれより六、七歩まえを、だれやら、しずかに、ピタピタと足をはこんでいく者がある。
夜はすでに更けしずんで、さまよう者とてあるはずのないこの境内、さては蛾次郎めが、またわれを盲とあなどってからかうつもりだな！
竹童はかッとなって、こう思った。
しかし、かなしいかな目がみえぬ。すぐそこをピタピタといく跫音を聞くのであるが、ただ一討ちにとびかかってはいかれない。
「おのれ目がみえぬとて、たかのしれた蛾次郎ぐらい、斬って捨てられないでどうするものか」
竹童は、とっさに、地べたへ身をかがませた。

そして、般若丸の太刀を背中にかくし、左の手と膝ではい歩くように、まえなるものの跫音をスルスルとつけてゆく……

一歩――二歩。

さきの者の草履のかかとが、かれの顔へ土をはねかえしてくる近さまで寄りついたので、いまこそと胸おどらした鞍馬の竹童。

猛然と、たつが早いか、ふりかぶった般若丸に風をきらせて、

「覚えたかッ」

とばかり、鉄も切るような一刀、一念の気、盲となってから、それは一そうすさまじいするどさをもって、まえなる人のあり場をねらって、揮りおろした。

二

剣は、空をきって、七、八尺はしった。

あたかも闇なる彗星が、地界へ吸われていったように。

燦然たる蛍いろの太刀！　かかとをあげて、ダッ――と斬りすべっていった竹童の手にそれが持たれている。

「ウウム、無念！」

とさけんだ悲痛な声。

竹童の唇から、血のようにもれて、かれはあやうく突ンのめりそうになった足取りを踏みしめた。

そして、さらに、まえよりはすごい血相で、般若丸の切ッ先を向けなおし、剣を目とし、見えぬ目に、ジリジリと闇をさぐってくる。

針がふれてもピリッと感じるであろう柄手の神経に、なにか、ソロリとさわったものがあったので竹童は、まさしく相手の得物と直覚し、

「エ――エイッ」

身をおどらして斬りかかった。

飛躍は、竹童の得意である。

かつて、かれがまだ鞍馬の山奥にいたころは、朝ごと薪をとりに僧正谷をでて、森林の梢をながめては、丈余の大木へとびかかって、枯れたる枝をはらい落とした――その練習によるのである。

だが、いままでは剣をもつと剣をつかおうとする気に支配され、棒をもつと棒をつかう心にくらまされて、この呼吸というものが、いつかまったく忘れていた。

いま、かれは無我無心に、相手の脳天をねらってとんだ。

――それは剣法でいう梢斬りともいうべきあざやかなものである。たれかよく、宙天から斬りさげてくるこの殺剣をのがれ得よう。

ところが――相手は苦もなくかわした。

風のごとく身をひるがえし、さらに持ったるなんらかの得物で、パーンと竹童の般若丸をはらいつけたのである。

と、竹童、思わず両手のしびれに柄をゆるめたので、般若丸は彼の手をはなれて地上におちた。無手無眼となった竹童は、もう打ってかかるものは、五体そのものよりほかはない。

「おのれッ！」

というと、隼のように、相手の胸もとへとびかかって、

ムズと襟をつかんだのである。
だが、そのとたんに竹童は、
「あッ――人ちがい！」
といったまま、のけ反るばかりな驚きにうたれた。いまが今まで、蛾次郎とばかり思って斬りつけていた当の人は、枯巌枯骨そのもののような老人であったのだ。
「オオ、ちがった、人ちがいであった。――どなたかぞんじませぬが飛んでもない無礼をしました。どうぞかんにんしてくださいまし」
こういうとその老人、枯れ木のような手をのばして、竹童の肩をやさしくかかえこんだ。
「竹童よ」
「えッ……」
見えぬ目をしばたたきつつ、かれは、じぶんの名をあきらかに呼んだ者を、だれかしらとあやしむように、両手でその人の衣服をなでまわした。
「あやまることはない、あやまることはない。他の者ならあぶなかったが、わしであったからまアよかった……」
「オオ！」
竹童は、こごえていた嬰児が、母のあたたかな乳房へすがりついた時のように、ひしと、ひしと、その人の胸にかじりついて、
「あなたは鞍馬のお師匠さま！　オオ、お師匠さまではございませんか」
と、声もからだもふるわせた。
「わかったか竹童、いかにもわしは果心居士じゃ。ずいぶん久しく見えなかったのう」
「では、やっぱりお師匠さまでございましたか、ああ、おすがたを見たいにも、竹童めは、なんの罰でか、このような盲となってしまいました」
「竹童、目がつぶれたことを、おまえはそんなに不自由とおもうか」
「はい、伊那丸さまのおんために働くことはおろか、だいじな鷲をとり返すことさえできませぬ」
「そして、それを悲しいと思うか」
「お師匠さま。これがなんで悲しまずにおられましょう」
「まだまだおまえは修行が足りない。なぜ盲となったなら、心眼をひらくくふうをせぬ。ものは目ばかりでみるものではない。心の目をひらけば宇宙の果てまで見えてくるよ。……しかし、おまえはまだ歳も歳じゃ、このりくつは、ちっとむずかしかろう」
「はい、わたしにはよくわかりませぬ」
「よしよし、おまえの目は、もともと生まれつきの眼病ではない。吹針の蚕婆、あれの毒針に目をふかれたためじゃ。わしが一つなおしてやろう」
「えッ、お、お師匠さまッ。ではこの目を見えるようにしてくださいますか」
「ウム！　竹童。まずその太刀を鞘におさめて、わしの腕にしっかりとつかまっているがよい」
いわれるまま竹童は、地べたをさぐって般若丸をひろい、果心居士の右腕にからみつくと、居士は藁でも持つようにフワリと竹童のからだを小脇にかかえ、やがて、八神殿の裏宮

から境内をぬけ、森々たる木立のおくへ、疾風のように駈けこんでいった。
竹童はおよぐように引っかかえられていた。
さっさつと——風があたる。
バラバラと雨のごとき夜露がぶつかる。
居士は愛弟子竹童をかかえて、いったいどこへつれていく気か？　やがて森林をぬけて、紫野のはて、舟岡山の道を一さんにのぼりだした。
ゴウ——ッという水のおと。
それはほどなく近づいた雷神の滝のひびきである。暗々たる梢から梢を、バラバラッと飛びかうものは、夜の夢をやぶられたむささびか怪鳥であろう。
鞍馬の道士果心居士、竹童をひっかかえて岩頭にたち、鞳鞳たる雷神の滝を眼下にみた。
「竹童！」
居士の、こう呼ぶ声をきいたが、かれは小脇に引っかかえられていて、こたえる声さえでなかったのである。
と——居士は両手をさし伸ばして、あわやという間に竹童のからだを、目よりも高くさし上げた。
そして、もいちど呼んだのである。
「竹童！」
「はい……」
かれは、虚空におよぎながら、かすかに、しかし、はっきりと答えた。
「おまえはその目が開きたいか」
「ハイ、開きとうございます」
「なんのために」
「……」
「なんのために？」
「りっぱな人間となりますために」
「ウム」
「そして正義の武士となりますために」
「ウム。ではそのためには、どんな艱難辛苦もいとうまいな」
「いといませぬ。たとえこの身がどうなりますとも」
敢然たる声でいった。
「オオ、それでこそ、師たるわしもはりあいがある。雷神の滝の宙天で誓いをたてたことばを終身の守りとするなら、おまえはおそらく天下の何人にも、おくれをとらぬ武士となるであろう。オオ、苦しめ苦しめ！　苦しまぬ者はみがかれぬ。八神殿の八柱の神々、あわれ竹童を、このうえとも苦しめたまえッ」
祈るがごとく、吠えるがごとく、雷神の滝の岩頭に、果心居士の声がこうひびいた時である。
「あッ——」
と、いうと鞍馬の竹童。
ドウッ——と鳴る滝津瀬の音を、さかしまに聞いて、居士の手から闇のそこへまッさかさまに投げこまれた。

白鳥の予言

一

枯れ木をあつめて焚いた燃えのこりの火が、パチパチとわずかな火の粉をちらし、一すじのうすじろい煙は、森の梢をぬけて、まっすぐに立ちのぼっていた。

その火のまわりを取りまいて、夜の明けるのを待ちさびしげに語りあっている三人の武士。

あかき光を正面にうけて、薪束のうえに腰をかけている影こそ、まさしく伊那丸であり、その両側にそっているのは、木隠龍太郎、加賀見忍剣、いつも、すきなき身がまえである。

「若君。待つというものは久しいもの、まだなかなか夜が明けそうもございませぬな」

「そちたちは、火にぬくもったところで、少しここでやすんではどうじゃ」

「いや、なかなか寝られるどころではございませぬ」

こういったのは忍剣である。

「夜明けと同時に、天ヶ丘をくだる呂宋兵衛の列を待ちうけ、勝頼公のお乗物を、首尾よくとるかいなかのさかい。――それを思うても眠られぬし、また、日陰に敵のいましめをうけておわす、大殿のご心中を思うても、なかなか安閑とねている場合ではございませぬ」

「おっしゃる通りじゃ」

木隠もうなずいて、

「たくみに大殿をワナにおとし入れ、桑名にいる秀吉の陣屋まで、送りとどけんとする呂宋兵衛、さだめし明日はぎょうさんな人数をもってくりだすことでしょう。ここぞ、若君にとって、武運のわかれめ、忍剣どのもおぬかりあるなよ」

「いうまでもない。たとえなにほどの敵だろうとも、降魔の禅杖は、にぶりはしませぬ」

「いつもながらふたりの者のたのもしさ、わしはよい味方を持ってしあわせに思う」

と、伊那丸は心から、よろこばしげに、

「その意気をもってするからには、たとえ敵陣のかこみのうちに、無念の鬼となろうとも、わしは心残りではない」

「心よわいことをおおせ遊ばすな。呂宋兵衛こそ、多少蛮流の幻術を心得ておりますが、他の有象無象は、みなたかの知れた野武士や浮浪人の寄りあつまり、きっとけちらしてごらんに入れましょうから、お心やすく思しめせ」

「そうとも、死をいとうのではないが、こんど、木隠とこの忍剣がお供をしてきて、首尾よう大殿のご安否をつきとめねば、小太郎山にのこっている、小幡民部や咲耶子や小文治などにも笑われ草……」

と、つとめて、伊那丸の勇気を鼓舞するため、ふたりが快活に話していると、あなたの林をへだてた闇にあたって、ドボーン！　とすさまじい水音がたった。

「や、あれは……？」

「雷神の滝のあたり、まさしくその滝壺になにかあやしいもの音がいたしたようす」

「それ、あらためてみよう」
というと、木隠龍太郎は、手ばやく、用意の松明を焚火に突っこんで燃えうつし、それをふりかざしてまっさきに走りだした。
木々のあいだを縫っていく、松明のあかい光について伊那丸も忍剣も滝壺のほとりへ向かって歩をはやめる。
たちまち見る、眼前の銀河、ドウッ――と噴霧を白くたてて、宙天の闇から滝壺へそそいでいる。
「龍太郎、龍太郎！」
伊那丸は雑木をわけて、まっ暗な淵をのぞきながら指さした。
「そこへ松明をふってみい」
「はッ」
「あぶない！　岩苔にすべるなよ」
「おあんじなさいますな」
と龍太郎、松明を左手にもって、ヒラリ、ヒラリ、と岩から岩へとびうつっていった。

二

漆の渦まくを見るようなものすごい闇の滝壺である。そこに、百千の水龍が、泡をかみ霧をのぞんで躍っている。
「おお、人がおぼれているぞ」
さけんだのは、加賀見忍剣。
「なに、人がおぼれていると？」
「やッ――また沈んでいった、木隠木隠、早くこっちへ松明をかざしてみてくれ」
「待て、ただいままいるから」
と龍太郎は、また二つ三つの岩をとんで、忍剣のそばへ寄っていった。
焔を高くささげながら、じッと、あわだつ水面を透かしてみていると、やがて真白な泡がブクブクと湧きあがって、そのなかから、蓬のような、人間の黒髪がういてみえた。
「しめた！」
と忍剣は、岩につかまって鉄杖のさきをのばした。おぼれている者は、まだ多少の意識があるとみえて、目のまえにだされた鉄杖へシッカリと、両手をかけた。
「オオ、はなすなよ――」
と声をかけながら、ズーと岩の根へひき寄せると、滝壺のなかのものはプーッと水を吹きながら、けんめいにはい上がろうともがくのである。
「拙者の手にすがるがよい」
龍太郎が片手をだした。
氷のようにこごえた手が、ビッショリと雫をたらしてそこへすがってきた。――と同時に、滝壺のなかからはいあがってきた少年をみたふたりは、おもわず声をあげて、
「やッ、そちは竹童ではないか！」
見まもると、上にいた伊那丸も、
「なに、竹童じゃ……」
とうたがうように叫んだ。そして、森のなかへすくいあげてから、たしかに鞍馬の竹童だとわかると、伊那丸をはじめ、あまりの意外さにぼうぜんとしたほどだった。場所もあろう

に、深夜の滝壺から、法師野いらい、久しく姿を見うしなっていた竹童をすくいだそうとは、なんたる奇蹟！　あまりのことにあきれるばかりであった。

しかし、その人々のおどろきよりは、竹童のおどろきのほうが、どんなに強いものだったか知れない。

かれは、忍剣に、森のなかへかかえこまれてきた時にありありとそこに燃えている赤い火をみた。

その火に照らされている、伊那丸のすがた、龍太郎の顔、忍剣の禅杖も、あきらかに、かれの眸に見えたではないか。

かれの目が癒えた。竹童の目があいた。

鞳鞳たる滝の水にうたれて毒が洗われたためか――あるいは、竹童の精神を修養させる果心居士の心で、居士が、神力をもって癒やしたものか、とにかく、竹童はおのれの目の見えるのを疑い、と同時に、絶えてひさしき人々を、ここに見たのを夢のように、ふしぎがった。

竹童の話をさきに聞いてから、龍太郎と忍剣は、かわるがわるに、こんどの、都入りの大事をはなして聞かせた。

竹童は四方の話をしているあいだに、ぬれた衣服を焚火にほして身にまとった。その火のぬくみに全身の血が活々とよみがえってくるのをおぼえて、かれは、この新しい力を、どこへそそごうかと勇みたった。

話をきけば、夜明けとともに、若君の伊那丸は、ふたりを力に、天ヶ丘から降りてくる和田呂宋兵衛の一族をむかえ、桑名に送られる父勝頼君をうばいとらねばならぬとのことである。

いい機会にめぐりあった竹童は、その壮挙に加わりたいとねがって、すぐ伊那丸の許しを得た。

「では、龍太郎さま、忍剣さま」

かれは、気早に立ちあがって、

「まだ夜は明けておりませぬが、わたしは一足さきに、天ヶ丘へのぼって、呂宋兵衛のようすをさぐり、やがてほどよいところから、みなさまに合図をいたすことにいたしまする」

「ウム、いつも間諜の役は竹童の得意、おまかしなされてはどうでござりましょう」

忍剣が伊那丸の顔をあおぐと、伊那丸も小気味よいやつとうなずいて、竹童のすがたを見ながらこういった。

「では、われわれ三人は、天ヶ丘から十四、五町手まえ寒松院の並木にかくれて待つであろう。そちは身なりの目立たぬのをさいわい、出立のようす、人数、道順、落ちなくさぐって知らせてくれい」

「はい。かならずくまなく見とどけてまいります。ではまだ雷神の滝の上に、お師匠さまがおいでになるかも知れませぬゆえ、ひとことお礼を申しあげて、すぐその足で天ヶ丘へむかいまする」

「なんという。では、果心居士先生が、この近くにおいでであるのか。オオ、ちょうどよいおり、ぜひお目にかかっておこう」

と伊那丸はにわかに立ちあがった。

龍太郎や忍剣も、居士のすがたを拝さぬこと久しいので、先の松明をふりかざし、竹童をあんないにして、雷神の滝の断崖をよじ登っていくと、やがて竹童。

「みなさま、ごらんなさいませ。あのいちばん高い岩の上に、

お師匠さまが立っておられます。そしてこちらの松明が、近づいていくのを待っておいでなされます」

指さすかたをみると、なるほど、滝の水明かりと、ほのかな星影の光をあびて、孤岩の上に立っている白い道士の衣がみえる。

「おお、老先生――」

龍太郎は、はるかに見てさえ、なつかしさにたえぬように、声をあげた。

熊笹にせばめられた道、凹凸のはげしい坂、息をあえぎあえぎ、その岩の根もとまでいそいできた四人は、そこへくると同時に、岩の上をふりあおぎ、声もひとつによびかけた。

「果心先生！　果心先生！」

すると――おおという声はなく、ふいに、孤岩の上の道士のすがたが、ふわりと宙へ舞いあがったので、四人のひとみも、あッ――と空へつられていった。

その時――

夜はまだ明けぬが有明けの月、かすかに雲の膜をやぶって黒い鞍馬の山の端にかかっていた。

白き衣をつけた居士のすがたとみえたのは、はからざりき一羽の丹頂！　まっ白な翼をハタハタとひろげて、四人の上に輪をえがいて舞いめぐり、あれよと見るまに有明けの月のかげをかすめて、いずこともなく飛んでしまった。

しかし、四人はまだ、なお岩の上に、果心居士がいるような心地がして、その上まで登ってみた。そこにはだれもいなかった。

ただ残っていたのは一本の刀。

滝壺のなかに落としたとばかり思っていた、竹童の愛刀般若丸は、水にもぬれずにおいてある。

「や、まだなにやらここに……？」

と、伊那丸はたいまつの光をよんで足もとをみつめた。

見ると、岩をけずって、数行の文字が小柄で彫りのこされてある。それは、うたがう余地もなく、果心居士らしい枯淡な筆せきで、

父子の邂逅はむなしく
小太郎山の砦はあやうし

とただ二行の文字であった。

しかし、この二行にすぎぬ文字の予言は、武田伊那丸にとって、否、その帷幕の人すべてにとって、なんと絶望的な、そして戦慄すべき予言ではあるまいか。

泣き饅頭

一

予言は、よき未来の暗示であり、いましめの謎である。かならずしも、文字の表にあらわれている意味ばかりが真なのではない。その裏の意味もふかく味読してみねばならぬ。

父子の邂逅はむなしく

小太郎山の砦はあやうし

孤岩の上に――こう彫りのこした果心居士の心は、どう解いたらいいであろうか？

伊那丸をはじめ、忍剣も龍太郎も、また竹童も、ひとしく松明の燃えつきるのを忘れて、岩上の文字をみつめ予言の意味をときなやんでしまった。

これを、読んで文字のごとく考えれば、

（伊那丸よ――おまえのいま望んでいることは無益であるぞ、徒労であるぞ、幻滅をもとめているにすぎないぞよ、そして、そんなことをしているまに、留守の小太郎山の砦は、徳川家康におそわれて、あの裾野の陣の終局をむすばれてしまうぞよ――）

思うてみるさえ、おそろしい声がきこえる。

だが、まさかそんなことはあるまい！

伊那丸は心のそこで、否定した。

これは老先生の激励であろう。いまが大事なときであるぞと、凡夫のわれわれを鼓舞してくださる垂訓なのであろう。すなわち、予言の裏にふくむ真意をくめば、

――ここに最善のつとめをなさねば汝と父勝頼との、父子のめぐり会うのぞみはついにむなしいぞ。

――ここにゆうゆうといたずらな日を過すときは、小太郎山の砦もあるいは危うからん。

というおことばなのにそういない！

忍剣もそう解いた。

龍太郎も、それにちがいないといった。

で、武田伊那丸は、いやがうえにも、希望をもった。武者ぶるいとでもいうような、全霊の血と肉との躍りたつのがじぶんでもわかった。

「おのれ和田呂宋兵衛、きょうこそは、かならず汝の手から父君をとり返してみせるぞ」

固くかたく、こう誓った。

そして、予言の文字に吸いつけられていた眸をあげてふと有明けの空をふりあおぐと、おお希望の象徴！　熱血のかがやき！　らんらんたる日輪の半身が、白馬金鞍の若武者のように、東の雲をやぶってあらわれた。

夢からさめたようにあたりをみると、舟岡山は水いろにあけている。春のあけぼの！　春のあけぼの！　小鳥はそういって歌っていた。森をこえて紫野の里に、うす桃色の花の雲をひいて、今宮神社の大屋根が青さびて見える。

「夜が明けた！」

竹童が、とびあがるような声でいった。

「おお！」

と龍太郎と忍剣、きッとなって、伊那丸の顔をみながら、

「若君、時刻をうつしては一大事です。ともあれ竹童を先にやって、天ヶ丘のようすを、しかと見とどけさせましょう」

「ウム、そしてわれわれは、寒松院の松並木に待ち伏せているか」

「それが、上策とかんがえまする」

「竹童」

「はい」

「心得たか」

「たしかにうけたまわりました」
「では、これを――」
と龍太郎が、狼煙筒を、竹童の手へわたして、
「呂宋兵衛をはじめ天ヶ丘の者どもが、山をくだって、寒松院の並木へかかるころを見はからい、この狼煙をうちあげてくれい。時ならぬ狼煙の音におびやかされて、きゃつらは、かならずうろたえるにちがいない」
「その虚につけ入って、呂宋兵衛の一族をけちらし、勝頼公のお駕籠をうばいとる、ご計略でございますか」
「そうじゃ。機をあやまらぬようにいたせ」
「かしこまりました。ではみなさま――」
般若丸をさしなおして、伊那丸に一礼すると、もうヒラリと岩の上から飛びおりていた。そして、バラバラと舟岡山をかけおりていく彼のすがたを見送っていると、たちまち、崖をこえ、雷神の滝の流れをとび、やがて森から紫野のはてへ霞んでしまった。
そのはやいことはやいこと、まるで鹿のようである。もっとも、あのけわしい鞍馬の谷や細道になれきっている竹童だ。ここらの山や森などは、ほとんど、坦々たる芝生の庭をかけるようなものだろう。
「あれ、ごらんあそばせ」
龍太郎が、そのうしろ姿を指さしていう。
「竹童め、今朝はすッかり忘れております」
「なにを？」
と、伊那丸がきく。
「きのうまでは盲であったが、老先生のお力で、にわかにアアなったことをまるで忘れているらしゅうございます」
「お、……それが童子らしいところである」
微笑をもってながめていた伊那丸は、愛らしいやつ、――たのもしいやつ――そう思ってうなずいた。
やがて、その三人も、雷神の滝の岩頭をおりた。そして、裏道をめぐって、敵の廻しものに覚られぬように、ひそかに寒松院の並木にかくれ、腕をさすッて、合図の狼煙を、待ちうけていた。

二

「オオ、寒い」
正気にかえって、ポカンとあたりを見まわしたのは、ゆうべ、今宮神社の境内で、馬にけられてヘドを吐いて、あのまま気絶していた泣き虫の蛾次郎。
「オオ寒、寒、寒……」
ブルブルガタガタふるえている。
ひょいと見ると、目のまえには、じぶんの吐いたご馳走やら、馬の糞やら紙屑やらで、きれいな物は一つもない。
この汚穢だらけな地面の上に、気をうしなって寝ていたかと思うと、いくら酒アつくな蛾次郎でも、さすがにすこしあさましくなって、今朝の寝起きは、あまりいい気持でなかった。
「アア、おなかがペコペコだ……」
起きるとすぐに食うしんぱい。
ゆうべスッカリ吐きだして、今朝は胃袋が、カラッポにな

っているとみえて、食慾ばかりになった目つきで、しきりに、そこらをキョトキョトと見まわしながら、
「なにかないかナ、なにかないかナ……」
泥だらけな着物もハタかず、ふらふらと立ちあがった。
その姿や寝ぼけ面が、おかしいとみえて、すぐそばの神馬小屋で、白と黒と二疋の馬が、ヒーンと鼻で吹きだした。すると頭の上のモチの木でも、鴉がカーッと啼き合わせた。
虫のいどころが悪かった。
「ばかア！　てめえのことじゃねえやい」
と、蛾次郎、鴉をどなりつけて、スタスタと向こうへ歩きだした。
すると、あった！　あった！
ひとつの御堂の神前に、蛾次郎の見のがしならぬものがあった。
蕎麦まんじゅうのお供物である。
きのうのお祭に、氏子があげた物であろう。三方の上に、うずたかく、大げさにいえば、富士の山ほど積んであった。
犬もあるけば棒にあたる！
これなるかな、これなるかなと、蛾次郎はそこで、よだれをたらして見とれてしまった。
「ちぇッ、ありがたし、かたじけなし」
と泣き虫の蛾次郎、じぶんのおでこをピシャリとたたいて、神さまに感謝したのである。が、さてと口に唾をわかせてみると、いけないことには、厳重な柵をめぐらしてあって、いくら長い手をのばしてみても、とても、そこまではとどかない。
「ウーム、いまいましいなア」
宝の山に入りながら、この蕎麦まんじゅうに手がとどかないとは、なんたる無念しごくだろうというふうに、胃液をわかせながら蛾次郎の目がすわってしまった。だが、こういう事業にたいしては、人一倍の熱をもつ蛾次郎である。たちまち一策をあんじだして、蕎麦まんじゅうの曲取りをやりはじめた。
そこらで見つけてきた一本の細竹、先をそいでとがらせ、柵のそとから手をのばして、三方の上のまんじゅうを上から一箇ずつ突いては取り、突いては食べ、口の中へ五つばかり、ふところの中へ八つばかり、まんまと、せしめてしまったのである。
「エヘン。どんなものだい、蛾次郎さまのお手なみは」
これで兵糧もでき、目もさめた。
「さア、これからきょうはどうしよう、どうしておもしろくあそぼうか」
富士の裾野をでていらい、鷲に乗って北国も見たし、東海道も見物したし、奈良の堂塔、大和の平野、京都の今宮祭まで見たから、こんどはひとつ思いきって、四国へ飛ぼうか、九州へいこうか？
なにしろ――前途は洋々たるものだ。
ひとまず、きょうは天ヶ丘へかえって、ゆッくりと考えたうえにしよう。
おお、天ヶ丘といえば、おればかりご馳走を食べあるいて、クロのことをすッかり忘れていた。あの丘の奥の松の木へ、鎖でしばりつけておいたから、逃げる気づかいはちっともない

が、きッと腹をへらしているだろう。
こう気がついたので蛾次郎も、にわかに足をはやめて今宮神社の内から、天ヶ丘のほうへ歩きだした。
すると、ちょうどその麓。
南蛮寺ののぼりにかかろうとする参道の並木を、忍びやかにゆく人かげがある。
まだ朝霞がたちこめているので、おおかた薪拾いの小僧か、物売りだろうくらいに思っていた蛾次郎は、だんだん近づいて見てびっくりした。どうも、それは鞍馬の竹童らしい。
「おやッ」
蛾次郎は、もういっそうちかくよってみた。まちがいなく竹童である。
「だが、へんだなあ。……あいつ目が見えないくせにして、いやにまっすぐに向いて歩いていやがる。ははア読めた……よく盲というやつは、見えるふりをして歩くというが、竹童もそれであんなにすましているんだな。うふッ、……また一つからかって見てやろうか」
と、ひとり合点をして泣き虫の蛾次郎、止せばよいのに性懲りもなく、また悪戯心をおこして、竹童の後からピタピタとついていった。

三

霞にぼかされた松の丘に、南蛮寺の朱門は、まだ、かたくとざされてあった。
稲妻形についている石段の道を見まわしても、きれいな朝露がたたえられて、人の土足にふみにじられているようすはない。
きょうの朝まだきに、桑名に在陣する秀吉のところへ向けて、和田呂宋兵衛が護送していこうとする勝頼の駕籠は、まだあの朱門をでて山をくだっていないようだ。……竹童はまずよかったと、そこでいっそう身をかがませながら、はうようにして、石段を一歩一歩とのぼっていく……
それを見ると、蛾次郎は、
「あはははは。やっぱり盲だ、石段を四つンばいになって登っていきゃアがる」
と、嘲笑いながら、心をゆるめてしまった。そこで、ふところの蕎麦まんじゅうを半分たべて、のこりの半分を、ポンと竹童の背なかへ投げつけながら、
「おい、鞍馬の竹童――どこへいくンだい」
と呼びかけた。竹童は、ハッとして石段へ身をねかせた。そしてジロリと、ふりかえって見ると、ゆうべ八神殿の床下でにがした蛾次郎だ。
「ああ、またきたな」
と思ったが、はやる心をおさえて、なお盲のふりをしながら、しずかに天ヶ丘へのぼりだすと、蛾次郎は、それとも知らずに、
「オイオイ、つんぼかい？」
いよいよ図にのって、減らず口をたたきだした。
「ゆうべはつんぼじゃなかったはずだ。盲の上にツン的ときたひにゃ、それこそ、でくの坊よりなッちゃあいねえからな。ええオイ竹童……おッと、こいつは俺がまちがった。おまえ

は八神殿の床下をお屋敷としている、天下のお乞食だッたんだっけ。それじゃ返事をしないはずだよ。ではあらためて呼びなおすことにしよう……」

蛾次郎、ますますお調子づいて、いまや、その身が竹童の般若丸の切ッ先に、まねき寄せられているとは知らずに、ノコノコとすぐ後ろへまで近よっていった。

そして、黄色い歯をムキだして、ゲタゲタと笑いながら、竹童の顔を、肩ごしにのぞくようにしながら、

「――もし、天下のお乞食さま。おめえ、これからどこへいくのよ。南蛮寺の台所か、それにゃ、まずすこし時刻が早かろうぜ。おあまりは朝飯すぎにいかなけりゃくれやしないよ。うふふふ……怒ってるのか。澄ますなよ。はずかしいのか、蛾次郎さまにすがたを見られて……。まアいいじゃアねえか、なアおい竹童、おれとおめえとは、いまじゃ身分がちがってしまったが、もとは裾野の人無村で、おなじ柿の木の柿をかじりあった仲だ。――おれはおめえに同情しているんだぜ。だからよ、ゆうべだッて、おれから声をかけたんじゃねえか。うまい飴ン棒でもしゃぶらしてやろうと思って、ひとが親切にいったものを、コケおどしの刃物なんぞふりまわして、よせやい、おれだって、はばかりながら、刀ぐらいは差しているんだからな」

竹童は、唖のようにだまっていた。

しかし、全身の血は、沸りたち、毛もよだつほど怒っていた。だが、――いまは、どこまで盲の態をみせて蛾次郎にゆだんをさせ、その素ッ首をひンねじってやろうと、心の奥にためきって、かれの悪口雑言を、いうがままにこらえている。

「エエ、オイ、なんとかいえよ、なんとか」

蛾次郎は、竹童のからだから棘の立っているのに気づかず、いきなり蕎麦まんじゅうをムシャムシャ食べて、

「やい乞食、これでも食らえ」

と、その食いかけを、竹童の口もとへ持っていった。

待っていたぞ――と、いわぬばかりに。

「逃げるな、蛾次！」

と、いうがはやいか、鞍馬の竹童、顔まできた蛾次郎の右の手を、いきなりつかんでひきよせた。

「あッ！　こ、こいつ」

「よくやってきた。思いしれ」

と竹童は、その利き腕をねじあげて、石段の中途へ、押したおした。

「おう！　て、てめえ目が見えるのか」

と押しふせられながら蛾次郎は、胆をつぶして、ふるえあがった。竹童はその上へのって、膝がしらで、相手の腕をおしつけ、両手で喉と腕首をしめつけて、ビクとも動きをとらせずに、

「やい蛾次公！　よくもおのれは、この竹童を、さんざんに恥ずかしめたな。うぬッ、どうするかおぼえていろ」

「あッ――か、か、かんにんしてくれ」

「えい、いまになって、卑怯なことをいうな」

「あやまる、あやまる、あやまる！　あやまりますから！　かんべんしてくれッ！」

「だめだ！　だめだ！　だめだッ。もうなんといッたってゆるすもんか、ここでおいらの手につかまったのが百年目だ、

般若丸の斬れあじを試してやるから、そう思え」
と、刀の柄へ手をやった。
「アア待ってくれ、竹童、竹童さまーッ」
と、蛾次郎はついに本性をだして、ベソをかきながら悲鳴をあげた。
「待ってくれよ、おめえに返すものがある。おれを殺してしまうと、それがわからなくなるぜ」
「なに？　返すものが……オオ鷲をか」
「そうだ。クロを返すから、命だけを助けてくれ」
「きっとだな！」
「きっと！」
「よし、クロを返すというならば命だけは助けてやる。だが、それはいったいどこにあるのだ」
「す、す、……すこうし手をゆるめてくれなくちゃ、のどがくるしくって、声が……」
「さッ、はやくいえ！」
と少しからだを浮かしてやると、そのとたんに、泣き虫の蛾次郎、ドンと足をあげて竹童の頤を蹴とばした。あッ、と竹童もふいを食ったが、胸ぐらをつかんでいた手をはなさなかったので、足を踏みはずした勢いで、蛾次郎もろともに、ゴロゴロゴロと、二つのからだが、俵のように、石段の中ほどから下までころげ落ちていった。

地を裂く雷火

一

ごろんと石段の下にとどまると、蛾次郎はいきなり、竹童の唇へ、爪をひっかけた。
「なまいきなッ」
と竹童、その手をはらって、襟がみをつかみ、腰をあてて、車投げに、――ぶんと、大地へなげつける。が、蛾次郎もこ一生の命がけ、投げつけられて立つや否、バラバラッと横ッとびに逃げだした。
「待てッ――」
なんで竹童の足にかなうものか！　すぐ追いつかれそうになる、これはとおどろいて、蛾次郎、高くそびえ立った一本の樫の木へ猿のようにツツッ――とよじのぼった。
木登りは、また竹童の得意とするところ。
かれが猿なら、竹童はむささびのごとく敏捷だ。ピョンと枝へ飛びつくと、もう蛾次郎の踵をつかまえた。
「わッ！」と蛾次郎。
あぶなくすべり落ちそうになったところを、蹴はなして、ザワザワと横枝へはいだした。人の重味で樫の枝が弓なりになって崖へさがる――すぐあとからまた、竹童が猿臂をのばしてきた。南無三！　蛾次郎はポンと枝から崖へ飛びうつっていちもくさんに天ヶ丘へかけのぼった。

鷲だ、鷲だ！
こんな時には手のとどかない、地面をはなれてしまうのが一番安全。
こう思って蛾次郎は、いつぞや、クロをつないでおいた松の木の下まで、無我夢中にかけのぼってきてみると鷲は、人の跫音を聞きつけて、羽ばたきの音を高々とさせている。
「おお、いたな！　ありがてえ」
息をはずませてかけよった。
そして汗を拭くまもなく、クロの足をしばりつけてある鎖をガチャガチャ解きはじめた。だが、――意地わるく、急げばいそぐほど、鎖は笹や枯草にひっからんで、容易にむすびこぶしが解けない。
とこうするまに、鞍馬の竹童、ヒョイと見うしなった蛾次郎のすがたを血眼で、さがしながら、もうすぐそこまで、のぼってきた。
「オオ、クロがいた！　おれのクロだ！」
かれは思わずこうさけんだ。あたかも、暗夜に見うしなった肉親の姿でも見つけたように――
と、ちょうどその時である。
南蛮寺の奥のほうから、ジャン、ジャン、ジャン！　妖韻のこもった鐘の音――そして一種の凄味をおびた貝の音がひびいてきた。ハッと思ってふり向くとたんに、丘のいただきにある南面の朱門が、魔王の口を開いたように、ギーイと八文字に押しひらかれた。
同時に――
その朱門の中からワラワラとあふれだしたおびただしい浪人武者！　黒装束へ小具足をつけたるもの、鎖襦袢をガッシリと着こんだもの、わらじ野袴に朱鞘のもの、異風さまざまないでたちで、その数五十人あまり。
百鬼夜行ということはあるが、これは爛々たる朝の陽をあびて、その装束が同じからぬごとく、その武器も槍、太刀、かけや、薙刀、鉄弓、鎖鎌、見れば見るほど十人十色。
「それッ、列をみだすな、駕籠わきへつけ、駕籠わきへ」
なかに、ひとりこういって、手をふりあげた者がある。これぞたしかに、紅毛黒衣の怪人、和田呂宋兵衛にまぎれもない。
黄金の鎖を胸にたらした銀色の十字架、それが、朝陽をうけて、ギラギラ光っている。
「おう！」
と答えて、ひとつの駕籠のまわりへ、警固についた者たちを見ると、おなじ黒布をかぶり黒衣をつけた吹針の蚕婆をはじめ、呂宋兵衛のふところ刀、丹羽昌仙、早足の燕作、このほか、腕ぶしの強そうな者ばかり、ひしひしと足なみをそろえた。
そして、あたかも、深岳の狼が、群れをなして里へでるごとく、列をつくって、天ヶ丘の石段を下りはじめる。中にはさんでいく一挺の鎖駕籠は――まさしく、桑名の羽柴秀吉へおくらんとする貴人の僧形、武田勝頼が幽囚されているものと見られる。
「やッ！　呂宋兵衛がいく、勝頼さまのお駕籠がいく」
それを見るや竹童は思った。寒松院の並木に待ちぶせている伊那丸やそのほかの人々に、すこしも早く、このことを合図

してやらねばならぬと。――

といって――

狼煙のしたくをしているまには、おお、すぐそこにいる蛾次郎めが、クロの背をかりて、宙天へ逃げ失せてしまうであろう。

蛾次郎を見のがすぐらいは、虫ケラと思えばなんでもないが、いまここで、せっかくその姿を見たクロとふたたび別れてしまうのは、なんとしてもしのびない。いつまた、それが蛾次郎の手から、じぶんの手へ返ってくる時節があるかわからない。

さればといって――それにグズグズ手間どっているまに、呂宋兵衛一族が天ヶ丘から道をかえて、勝頼公をとおく護送してしまったら、それこそ伊那丸さまへたいしてぬぐわれざる不忠不義！　腹を切っておわびしても、その大罪をつぐなうには値しない。

「ああ、困った」

竹童は、髪の毛をつかんで、迷いにまよった。合図か？　鷲か？　合図か？　鷲か？

どっちへこの身をむけていいか。

「おお、クロを？」かれはとつぜん蛾次郎のいるほうへ征矢のごとく飛んでッた。

クロこそは、人間のもつなにものも、匹敵するあたわざる飛行の武器だ、生ける武器だ。クロさえ蛾次郎の手からとり返せば、のろしをあげるまでもなく、あの偉大なつばさで一はたきで、寒松院の並木にいる味方へ、このようすをお知らせにも飛んでいける。

そのうえ、たとえ呂宋兵衛が、どこをどう逃げまわっても、空からそれを見てとることもできるというもの。――こう竹童はかんがえた。

しかし、その時すでに、蛾次郎は、鎖をといて鷲の背へ、フワリと乗っていたのである。

「あッ、待て！」

飛びついていった竹童と、地上をはなれた大鷲とはそのとき、ほとんど同時であった。

「くそうッ」と蛾次郎、鷲の上から竹をふるって、竹童の肩をピシーッとなぐった。

「ちイッ……」と、こらえながら、竹童は、必死につかんだ蛾次郎の足をはなさず、大鷲のつばさが、さッと大地を打ってまいあがるのと一しょに、かれも蛾次郎とともに、無二無三に、鷲の背なかへかじりついてしまった……

二

かくて巨大な黒鷲の背には、いまやたがいに、敵たり仇たるふたりの童子が、ところもあろうに、飛行する大空において、ひとつ翼の上に乗りあってしまった。

だが、しかし――鷲そのものは、蛾次郎を敵ともおもわず、また竹童を仇とも思うようすもない。軽々と、二少年を背にのせて、そのゆうゆうたるすがたを、南蛮寺の空にまいあがらせた。

おお、みるまに下界は遠くなる――遠くなる――

南蛮寺の屋根、天ヶ丘一帯、さらに四方の山川まで、たち

まち箱庭を見るように、すぐ目の下へ展開されて、それが、ゆるい渦巻のように巻いてながれる……

蹴おとされては大へんと、泣き虫の蛾次郎は、歯を食いしばって、鷲の頸毛にしがみついた。

と――同じように、地上とちがって、大空の風をきってゆく鷲の背なかにいては、さすがの竹童も、手がはなせないので、みすみすそばに乗りあっている蛾次郎をどうすることもできないのである。

それはいいが、ここに、なおなお困ったことは、ひとりならば自由な方角をさして飛ばすこともできるが、こうして蛾次郎と相乗りになってしまったために、クロはただクロ自身の意志で、勝手なほうへさっさつとして飛んでいく。それでは、伊那丸たちへ、合図をするたよりがないので、かかるまも、竹童の腹のなかは、引っくり返るような心配である。

ピューッ、ピューッと顔をかすっていく風の絶えまにはるかに下をみてあれば、もう和田呂宋兵衛一族の列は蟻のように小さく見えながら、天ヶ丘の石段を降りきっている。

「かならず――合図をまちがえてくれるなよ――」

くれぐれもことわられた龍太郎のことばが、空の上なる竹童の耳に、いまもありありと聞える心地がする。

――とそのせつなである。竹童は、すぐ真下の地上に一点の火の塊を見いだした。

枯草をやく百姓の野火か、あるいは、きこりのたいた焚火であろうか、とある原のなかほどに、チラチラと赤くもえている焔があった。

「しめた」

竹童は、やっと片手をふところへ入れて、龍太郎から渡されてきた、狼煙筒をかたくつかんだ。そして、鷲の腹がちょうどその火の上へ舞いめぐってきたとたんに、ポーンと下へ投げおとした。

ツーと斜線をえがいて落ちていく、小さい物体の行方に、竹童は祈りを送った。

しめた！　狼煙の筒は、うまく、地上に見えるその焔の廓のなかへ落ちた。

と、思うまもあらず、轟然たる青天の霹靂。

筒の中の火薬が破裂して、ドーン！　とすさまじい火と灰と炸裂した物体の破片を舞いあげた。

合図の狼煙！　それは一倍ものすごい響きをもって、寒松院の並木にいる、伊那丸、忍剣、龍太郎の耳へまでつんざいていったことは必定である。だが――？　そのとたんに、ビックリした大鷲は、雷気にあって天空をそれたようにパッ！

――と一陣の風をついて、竹童と蛾次郎をのせたまま、いずこともなく飛びさってしまった。

呂宋兵衛の奥の手

一

さて――。

寒松院の松並木――ここもまだ、朝がすみがこめていた。

四条五条へ花売りにでる大原女が、散りこぼしていったの

であろう、道のところどころに、連翹の花や、白桃の小枝が、牛車のわだちにもひかれずに、おちている。

並木のこずえには、高々とうたう春の百鳥、大地はシットリと露をふくんで、なんともいわれないすがすがしさ。

かかるところへ、霞のなかから、ポカリと浮きだした一列の人かげがある。寂光浄土の極楽へ、地獄の獄卒どもが練ってきたように、それは殺風景なものであった。

きょう、桑名の陣をさして、天ヶ丘をくだってきた、和田呂宋兵衛の一行である。れいの鎖駕籠をいと厳重に警固して、随行には軍師の昌仙、早足の燕作、吹針の蚕婆、そのほか五十余名の浪人が、鳴り物こそ使わないが、いわゆる一鼓六足の陣あゆみで、ピタッ、ピタッ、ピタッ、ピタッ……と、足なみをそろえてくる。

せんとうに立ったのは三人の野武士である。さえぎるものあらばと、刀の柄に手をかけたまま歩いてくる。次には、黒柄九尺の槍を横にもち、するどい穂先をならべてくる者が七人。——そのつぎに、和田呂宋兵衛、黒衣に蛮刀を佩き、いかにも意気ようようとしていた。

追分へでたら、左だぞ、左だぞ。すこしは道がまわりになっても、なるべく裏街道をえらんでいけよ。——途中、ほかの大名にあったらば、同格の会釈をして、かまわないから、羽柴筑前守のみ内と名のれ——関所へかかったときは、武器を伏せろよ！　いいか、関所で武器をふせるのを忘れるなよ！

そのほか、桑名のご陣につくまでは、みちみち話をかわすことはならぬ。

列の前後へむかって、こう号令したが、令をくだす自分だけは軍律もなにもなく、黒布のかくしぶくろから陶器製のパイプを出し、それへ、葉煙草をつめたかと思うと、歩きながら、スパスパとむらさき色の煙をくゆらしはじめた。

しばらくゆくと、また呼んだ。

「昌仙、昌仙」

「はッ」

と、うしろのほうでこたえる。丹羽昌仙と早足の燕作とは、鎖駕籠の両わきに、つきそっていた。

「京の大津口から桑名まで、およそ何里ほどあるだろう」

「さよう？　……」

と昌仙は歩きながら懐中絵図をひろげて見て、

「二十九里余町——まア、ざっと三十里でございまする。すると桑名のご陣へつきますまでには、約三日ののちとあいなります」

「三日はすこしかかりすぎるな。どこか間道をとおって、二日ぐらいでまいれる工夫はなかろうか」

「なにしろ途中には、大津の関所、松本の渡舟、鈴鹿山の難路などがございますので……」

と、しきりに懐中絵図の説明をしていたが、そのうちに列のまっさきにあたって、あッ、という声がした。さきの野武士三人の手から、ふいに、虹のような陣刀がひらめいたのだ。

と思うと、その三名は、電光一瞬のまにたおれ、すさまじい一陣の風をついて、何者かが、向かってくる。

「おお！」

と、五十余名の大衆が、シタシタと足をひいて、まえをみると、霞のふかい松並木のかげから、忽然とおどりだした年

わかい怪僧があった。染衣の袖を綾にしてうしろにからげ、手には、禅杖をふりまわして、曠野をはしる獅子のごとくおどりこんできた。

「おのれッ！」

さけぶやいな、第二段の浪人組七人が、黒柄九尺の槍の穂さきを、サッと若僧の一身にあつめ、リラッ、リラッ、リラッ、としごきをくれて八面を押っとりかこんだ。

二

「や、や？」

と、呂宋兵衛は、陶器パイプを口からおとして、

「おう！　ありゃ、武田方の加賀見忍剣だ。さては、勝頼をうばいかえすために、伊那丸をはじめ、その他のやつらも、このちかくに身をふせているとおぼえたぞ。昌仙、昌仙！燕作もゆだんするなッ」

いうもおそし、その伊那丸は、いきなり横あいの草むらから、バラバラとおどりだして、木隠龍太郎とともに刀のこじりをはねあげ、呂宋兵衛の前へぬッくと立った。

「野武士ども待て、しばらく待て、むりにおし通らんとすれば、命がないぞ」

「おッ――おのれは武田伊那丸に龍太郎だな。秀吉公の威勢をもおそれず、都へ入りこんでくるとは、不敵なやつ。この呂宋兵衛の手並にもこりず、わざわざ富士の裾野から討たれにきたか」

内心、胆をつぶしながらも、怯みを見せまいとする呂宋兵衛は、蛮音をはりあげて、刀へ手をかけた。

「やかましいッ！」と、木隠龍太郎。

「はるばる、若君がここへ、お越しあそばしたのは、お父上勝頼公をお迎えにまいったのだ。その鎖駕籠のうちに、お身をひそめたもうおん方こそ、まぎれもなき勝頼公と見た。呂宋兵衛、神妙に渡してしまえ」

「なにを、ばかな。いかにも鎖駕籠のうちには、これから桑名のご陣屋へ護送するひとりの落武者が入れてある！　だがよくきけよ！　おれも人穴城にいた野武士とちがって、いまでは、南蛮寺を守護する羽柴家の呂宋兵衛だぞ。なんで勝頼をうぬらの手にわたすものか」

「渡さぬとあらば、なおおもしろい。木隠龍太郎や忍剣が力をあわせて、汝らを、この松並木の生き肥にしてくれる」

「わはははは、片腹いたいいいぐさを聞いちゃいられねえ。オオ！　めんどうだが、桑名へのいきがけの駄賃にうぬらの生首を槍のとッ尖にさしていくのも一興だろう。それッ、この虫けらを踏みつぶしてしまえッ」

剣をはらって、うしろの狼軍をケシかけようとすると伊那丸の声が、またひびいた。

「ひかえろッ、雑人ども！」

機山大居士武田信玄の孫、天性そなわる威容には、おのずから人をうつものがあるか、こういうと呂宋兵衛にしたがう山犬武士ども、おもわず耳の膜をつン抜かれたように、たじたじとして、われ一番にと斬りつける者もない。

「えいッ、相手はわずか二人か三人、なにを猶予しているのだ、ふくろづつみにして、そッ首をあげちまえッ」

呂宋兵衛が怒号したとたんに、ズドンッ！　と一発、つづいてまた一発のたま！　シュッと、硝煙をあげて伊那丸の耳をかする。
「おッ、若君、飛道具のそなえがありますぞ」
「なんの！」
と、武田伊那丸、小太刀をぬいて、身をおどらせ、目ざす呂宋兵衛の手もとへとびかかった。
「それッ、頭領をうたすな」
と、なだれてくるのをおさえて、木隠龍太郎はかれが得意の戒刀をぬいた。――たちまち、前後の四、五人を斬りふせつつ、かの鎖駕籠のてまえまで走りよった。
と――駕籠の屋根にはさっきから、一人の老野武士が立っていた。その上から、銀象嵌の短銃をとってかまえ、いましも、三度目の筒口に、伊那丸の姿をねらっていたが、龍太郎が近づいたのをみると、オオ！　とそのつつ先を向けかえた。
「おのれッ！」
とたんに、ごうぜんと、また一発のけむりが立った。老野武士は短銃を持ったまま、駕籠の屋根から向こうがわへぶっ倒れ、龍太郎のすがたは、太刀を走らせたまま煙の下へよろめいた。
短銃をつかんでいた者こそ、すなわち人穴以来、呂宋兵衛の軍師格となっている丹羽昌仙――ああ好漢、木隠龍太郎、とうとうかかる無名の野軍師と、あい討ちになってしまったか？

三

龍太郎と伊那丸が、呂宋兵衛の側面をつくよりまえに、ただひとり、列のまっ正面から禅杖をふっておどりこんだ勇僧は、いうまでもなく加賀見忍剣だ。
七、八人の野武士どもが、九尺柄の槍尖をそろえて、ズラリと円陣をつくり、かれをまんなかに押しつつんでしまったが、笑止や、忍剣の眼から見れば、こんなうすッぺらな殺陣は、紙のふすまを蹴やぶるよりもたやすいことであろう。
――見よ、錬鉄の禅杖が、かれの頭上にふりかぶられて、いまにも疾風をよぼうとしているのを！
かッと、目を見ひらいて、加賀見忍剣、
「命のおしいやつはどけッ！」と大喝した。
と思えば――虚空からさッとおちた禅杖が、右なる槍を二、三本たたき伏せる！　それッと、ひだり側から間髪をいれずにくりこんだ槍は、ビューッと禅杖が輪をえがいてかえったとたんに、乱離微塵！　三段四段におれとんで、その持主は血の下になった。
「わッ」
と円陣の一角がくずれると、もうかれらは、こらえもなく浮きあしをみだした。忍剣はといえば、その瞬隙に、檻をでた猛虎のごとく、伊那丸の側へかけだしている。
伊那丸はどこまでも、呂宋兵衛をのがさじと追いつめて、いまや、火をふらして血戦をいどんでいた。そこへ忍剣がかけつけて、あたりの木ッ葉浪人を八面にたたき伏せ、

「若君、お助太刀」
いきなり、呂宋兵衛の横から打ってかかった。
「おう！」
と魔もののように吼えた呂宋兵衛は、すでに、味方の半ばはきずつき、半ばはどこかへ逃げうせたのを見て、いよいよ狼狽したようす。伊那丸のするどい切ッさきと、忍剣の禅杖をうけかねて、息をあえぎ、脂汗をしぼりながら、一歩一歩追いつめられたが、そのうちに、ドンとうしろへつまずいた。
ほうりだされた鎖駕籠――それへ打つかって、呂宋兵衛がヨロリと駕籠の棒へささえられた。
「しめたッ！」
と、いう声がそのうしろでした。――だれかとおもうと、さいぜん、弾煙のなかにたおれた木隠龍太郎である。
いかなる戒刀の達人も、飛道具のまえに立っては危険なので、わざと身をうっ伏せたものだった。
しかし龍太郎は、たおれたまま仮死をよそおっていただけではない。かれは、丹羽昌仙が、じぶんの切ッさきからとんで逃げ、あたりの者も見えないしおに、得たりとばかり鎖駕籠の側へはいより、その錠まえをねじ切っていたところである――そこへ、呂宋兵衛がヨロケこんできたから、龍太郎はなんの苦もなく、
「しめた！」
と、その片足をつかんでしまった。
まえには忍剣、横には伊那丸の太刀、足をつかまれて立ちすくみになった呂宋兵衛は、いよいよいまが最後とみえたが、いつもこうした破滅には、かならず南蛮流幻術で姿を消すのが、かれの奥の手だ。
いまもいまとて、伊那丸と忍剣が、一気にかれを討ちとろうとしたせつな、どこからともなく、ビラビラビラビラビラッと吹きつけてきた針の風！　それは呂宋兵衛の幻術ではない、すぐかたわらの松の木のうえに、蝙蝠のごとく逃げあがっていた蚕婆が、呂宋兵衛あやうしと見て、例の妖異な唇から、ふくみ針を吹いたのだ。
梢はたかく、下へはかなりの間隔があった。無数の針は音なき風となって、ピラピラと飛んできても肌につき立つほどではないが、あたかも毒蛾の粉のように身を刺したので、ふたりはあッ――と面をそむけた。その一瞬だ！
「ええッ！」
と、するどく龍太郎の手を蹴はらった呂宋兵衛は、いきなり駕籠にかぶせてある鎖の網をつかんで、パッと大地へ投網のように投げた。
「あッ、また妖術を――」
とさけぶまに、龍太郎のからだがその鎖網のなかへつつみこまれたので、おどろいた忍剣、禅杖に風をきらせて五体みじんになれとふりつけると、おお奇怪！　一陣の黒風がサッと流れて、いままでほがらかだった春暁の光はどこへやら、あたりは見るまに墨色にぬりつぶされ、ザアッ――という木の葉のそよぎとともに、雨か霧かしぶきか、なんともいえないしめッぽい水粒がもうもうと立ってきた。
とたんに、呂宋兵衛のからだは、邪法秘密の印をむすびながら、ヒラリと駕籠の屋根へ飛びうつっていた。あれよ！と眼をみはるまに、まッ暗になった両側の松並木の根もとか

ら、サラサラサラサラ……という水音がしてたちまち滾々とあふれてくる清冽が、その駕籠をうごかして、呂宋兵衛を乗せたままツウ――と舟のように流れだした。

「魔人め。また邪術をほどこしたな」

「若君若君。これは呂宋兵衛の幻惑ですぞ、かならず、その手に乗って、おひるみあそばすな」

投げかけられた鎖をはらって、龍太郎と忍剣が、流るる駕籠をジャブジャブと追いかける、その時もうこの街道は、まんまんたる濁水の川となって、槍の折れや、血あぶらや、死骸がうきだし、ともすると伊那丸まで足をながされておぼれそうだ。

「ちぇッ、ざんねんだ！」

なにしろ水の勢いが、とうとうと足の運びをはばめるので、さすがの伊那丸も二勇士も、目前に仇を見、目前に父の駕籠を目撃しながら、どうしても追いつくことができない。そのまに、筏のように水に浮いた駕籠がグングンとゆれつつ押しながれ、その上には和田呂宋兵衛、ざまを見ろといわんばかりに、白い歯をむいてあざわらっている。

「ウーム、おのれ邪法の外道め、見ておれよ！」

水勢に巻かれて、むなしく立ち往生してしまった主従三人は、もう胸の上まで濁水にひたって、樹の枝につかまりながら、敵のゆくえをにらんでいたが、そのとき、加賀見忍剣は、はじめて破術の法を思いだして、散魔文の秘句をとなえ、手の禅杖をふりあげ、エイッ！　と水流を切断するように打ちおろした。

水面をうった法密の禅杖に、サッと水がふたつに分れたと思うと、散魔文の破術にあって狼狽した呂宋兵衛は徒歩になってまッしぐらにかなたへ逃げだし、まんまんと波流をえがいていた濁水は、みるみるうちに、一抹の水蒸気となって上昇してゆく……そして松並木の街道は、ふたたびもとのどかな朝にかえっていた。

まるで、悪夢から醒めたよう……ふとみると春の陽はさんさんと木の間からもれて若草にもえ、鳥はほがらかに音を張ってうたっている。それのみか、呂宋兵衛が水に浮かして乗りさったと思えた鎖駕籠は、一寸の場所もかえずに、もとのところにすえられてある。

四

呂宋兵衛が得意とする水術に眩惑されて、かれをとり逃がしたのは遺憾だが、勝頼の駕籠をうばったのは、せめて伊那丸の心をなぐさめるに足るものであった。

「待て待て、忍剣。龍太郎も待て！」

伊那丸は、なおも憎ッくき賊を追おうとするふたりを止めて、

「このたび都へまいったのは、まず何よりもお父上の危急をお救い申すにあった。いまここに、その駕籠を迎えまいらせた以上、呂宋兵衛を討つのは、いまにかぎったことではない。それ、一刻もはやく、お駕籠のうちからお救い申しあげて、小太郎山のとりでへもどろうぞ」

「おっしゃるごとく、それこそ、大願の目標でした」

「忍剣！　手をかせ」

「はッ」
と、主従三人、バラバラと駕籠のそばへ寄っていったが、
ああ、去年の春、織徳連合軍の襲うところとなって、天目山の露と化したまうと聞えて以来、ここにはやくも一めぐりの春。――いまこそ、亡き君とのみ思うていた、武田四郎勝頼その人のかわれる姿を拝すことができるのかと、龍太郎も忍剣も、思わず胸をわななかせて、大地にひざまずき、伊那丸もまだその姿を拝さぬうちから、睫毛になみだの露をたたえている。
一同、駕籠のまえに、ピタと両手をついて、
「あいや、それにおわす貴人のご僧に申しあげまする。われわれは武田家恩顧のともがら、ここにいますは、お家のご次男伊那丸さまにおわします。ひそかにおうわさのあとをしたって、遠き小太郎山のとりでより、ここまでお迎えに参じまして ござります。このうえはなにとぞ、もとの甲山にお帰りあそばして、あわれ、甲斐源氏再興のために、臥薪嘗胆いたしている若君をはじめ、われわれどもの盟主とおなりくださいますよう。またそれをごしょうちくださいますとあらば、なにとぞ、ここにて久しぶりに、若君へご対顔おおせつけ願いとうぞんじます」
誠意をこめて、ふたりがいうと、
「うむ……」と駕籠のうちで、かすかにうなずく声がした。
「さてはおゆるし？　……」
と龍太郎、忍剣と目くばせしながら、おそるおそる寄って駕籠の塗戸へ手をかけ、
「若君、ご対面なされませ」
スーと開けると、なかには、まぎれもなきひとりの僧形、網代笠をまぶかにかぶって、うつむきかげんに乗っていた。
「おお、お父上でござりましたか。おなつかしゅうぞんじまする。わたくしは伊那丸でござります――天目山のご合戦にもい合わさず、むなしく生き永らえておりました。お父上！　お父上！」
ほとばしる激情！　われをわすれて駕籠の戸にすがりつき、僧形の人の手をとると、僧も黙然として手をとられ、ゆらりと駕籠のそとに立った。
「お父上！　またもや敵の手がまわらぬうちに、一刻もはやく、ここを去ってお越しくださいませ、いざ伊那丸がごあんないいたしまする」
「どこへ？　……わしを連れていくというのじゃ」
「甲信駿三ヵ国のさかい、小太郎山のとりでの奥へ。――オオ父上、そこそこ山また山、自然の嶮城、難攻不落の地にございます。お父上のご武運つたなく、ひとたびは織田徳川のために亡びこそすれ、まだその深岳のいただきには、甲斐源氏の旗一旒、秋をのぞんでひるがえっておりまする」
「ああ、その秋はすでに去りました――、天の運行は去ってかえらず、還るは百年ののちか千年の後か――」
「えッ、なんとおっしゃいます……父上！」
染衣の袖にすがりついて、ふと、網代笠の下からあおいだ伊那丸は、あッといって、ぼうぜん――ただぼうぜん、その手をはなしてこういった。
「父上とのみ思うていたが、そちは、鞍馬の果心居士ではないか」

聞くより龍太郎もびっくりして、
「やッ、老先生でござりますと？　――」
あまりのことにあきれはてて、忍剣とともに、ただ顔を見あわせているばかり。しばらくの間は、口もきけないほどであった。
「定めしおおどろきでござろう。……しかし、わしが雷神の滝の孤岩の上に、書きのこしておいた通り、これもみな、まえからわかっていることなのでござる。おう、ご不審の晴れるように、いまその次第をお話しいたそう。若君も、まず、そのあたりへ御座をかまえられい」
居士はゆうゆうと、ちかくの石へ腰をおろした。そして、伊那丸へ、
「おん曹子――」と重々しく呼びかけた。
「はい」と伊那丸は、老師のまえへ、神妙に首をたれてこたえる。
「あなたは、甲斐源氏の一つぶ種――世にもとうとい身でありながら、危地をおかしてお父上を求めにまいられた。孝道の赤心、涙ぐましいほどでござる。が、しかし――その勝頼公が世に生きているということは、はたして真実でございますか？　あなたはその証拠をにぎっておいでなさりますか？」
「わしは知らぬが、伝うところによれば、父君は天目山にて討死したと見せかけて、じつは裂石山の古寺にのがれて姿をかえ、京都へ落ちられたといううわさ……」
「さ。それが真実か虚伝かは、まだまだ深いなぞでござるぞ。いかにも、この果心居士が知るところでも、呂宋兵衛の手にとらえられた僧形の貴人は、勝頼公によう似ておった」
「おお、してその僧侶はどうしました。また、居士はなんで、かような姿をして、この鎖駕籠のなかにはいっておいでになりましたか」
「されば、じつをいうと、その貴人の僧は、南蛮寺の武器倉に押しこめられている間に、わしがソッと逃がしてやりました。そして――その人の笠や衣をそのまま着て、わしがこの鎖駕籠に乗っていたのじゃ」
「お！　では老先生、やはりその僧こそ、父の勝頼ではございませぬか」
「さあ？　……その人が勝頼であるかないか、それはだれにもはっきりは申されぬ」
「な、なぜでござります」
「武門をすて、世をすて、あらゆる恩愛や争闘の修羅界を、すてられた人の身の上でござるもの。話すべきにあらず、また話して返らぬことでもある」
「や、や、や！　ではこの伊那丸が、かくまで心をくだいて、武田家の再興を計っているのに、お父上には、もう現世の争闘をお忌みあそばして、まったく、心からの世捨人とおなりなされたのですか」
「もし、おん曹子――まえにもいったとおり、まだその僧が、勝頼公かいなか、はっきり分っておらぬのに、そうご悲嘆なされてはこまる。どれ、わしもそろそろ鞍馬の奥へ立ちかえろう」
「老先生、しばらくお待ちくださいませ。……もう一言うかがいますが、居士が身代りとなって逃がしたとおっしゃるその僧は、いったいどこへいったのでございましょうか」

「おそらく、浮世の巷ではありますまい」
「と、すると」
「浄悪すべてをつつむ八葉蓮華の秘密の峰――高野の奥には、数多の武人が弓矢を捨てていると聞く」
と、謎のような言葉をのこして、果心居士は飄然と松のあいだへ姿をかくした。
幻滅の悲しみをいだいて、ぼうぜんと気ぬけのした伊那丸は、ややあってわれにかえった。そして、なお問いたいことのいくつかを思いだし、あわただしくあとを追って、老師！
老師！――といくたびも声のかぎり呼んで見たけれど、もう春影の林間にそのうしろ姿はなく、ほろほろとなく山鳥の声に、なにかの花がまッ白に散っていた。
ああわからない、わからない。どう考えても伊那丸にはわからない。
果心居士の話しぶりでは、居士はすでに貴人の僧に会っているのだ。そして、自身がその身代りになり、桑名に護送されるまえに、どこかへ落としてしまったとおっしゃる。だのに、居士はそれが父の勝頼であるとは決していいきらない。その一点だけをどうしても打ち明けてくれない。
なぜだろう？――ああさてはお父上には、居士が口をもらしたとおり、まったく弓矢の道をすてて、高野の道場にこもるおつもりなのか？……そして浮世に未練をもたぬため、いさぎよく、わざとじぶんにも会わず、父とも名のらず、愛情のきずなを断って三密の雲ふかきみ山にかくれてゆかれたのであろう？
そう伊那丸はかんがえた。
お父上よ！　お父上よ！　ではぜひないことでございます。敗軍の将は兵をかたらずと申します。ひとたび天目山に惨敗をとられた父上が、弓矢をなげうつのご決心は、よくわかっておりまする。
甲山に鎮守して二十七世の名家、武田菱の名聞をなくし、あまたの一族郎党を討死させた責任をご一身におい、沙門遁世のご発心！　アア、それはよくわかっておりまする！　お父上のご心中、戦国春秋の常とはいえ、ご推察するだに、熱いなみだがわきます。
さあれ、伊那丸はまだ若年です。
伝家の宝什、御旗楯無の心をまもり、大祖父信玄の衣鉢をつぎ、一片の白旗を小太郎山の孤塁にたてます。
われに越王勾践の忍苦あり、帷幕に民部、咲耶子、蔦之助あり、忍剣、龍太郎の驍勇あり、不倶戴天のあだ徳川家を討ち、やがて武田再興の熱願、いな、天下掌握の壮図、やわか、やむべくもありませぬ。
伊那丸は心のそこで、高く高く、こう思い、こう誓い、こうさけんだ。
そして彼は、まもなく忍剣と龍太郎とをつれて、寒松院の松並木をたち去った。
かかるうえは一刻もはやく、小太郎山のとりでへ帰って、一党の面々にこのしまつをつげ、いよいよ兵をねり陣をならし、一旦の風雲に乗じるの備えをなすこそ急務である――と思ったのである。
伊那丸はほんぜんとさとった。大悟すれば、居士の謎めいた言葉も、おのずから解けたような心地がする。

会わねど、見ねど、さらば父上よ高野の道場にいませ。
――かれの心はすがすがしかった。

両童子空に闘う

一

いそぎにいそいで京都をでた伊那丸主従が、大津越え関の峠にさしかかったのは、すでに、その日の薄暮であった。
ここは木曾街道、東海道、北国街道、三道のわかれ道で、いずれを取るもその人の心まかせ。伊那丸は三井寺山のふもとに立ち、魚鱗の小波をたたえている琵琶のみずうみをながめながらかんがえた。
「忍剣、龍太郎。そちたちは、これから小太郎山へもどる道を、いずれにえらぶがよいと思うか」
「されば」と、龍太郎はすぐこたえた。
「北国路には、上部八風斎のつかえる柴田権六勝家が、厳重に柵をかまえていて、めッたな旅人は通しますまい、また、東海道はなおのこと、徳川家康の城下あり、井伊、本多、榊原などの、陣屋陣屋もございますゆえ、ここを破ってまいるのもひとかたならぬご難儀かとぞんじまする」
「とわれらのとる道は、まず木曾路が一番安全であるという意見じゃの」
「さようにござります」
というと、忍剣が、異論をとなえて、木曾路ゆきに反対した。
「イヤ龍太郎どののお言葉は、もっとものようであるが、木曾路もけっして安心な道中ではない。なんとなれば、木曾の木曾義昌、きゃつも昔は武田家の忠族であったが、いまでは徳川家の走狗となっている、かならず若君に弓をひくやつであろう。ことに木曾路はゆくところみな難所折所、いざという場合にはいちだんと危険が多いように考えられる」
「では、忍剣どのには、北国路がよいと仰せられるか」
「北国路とて同じこと、柴田権六、ちかく賤ヶ岳まで軍兵をだして、木ノ芽峠には厳重な柵をかまえているように聞きますゆえ、ここを通るも難中の難でござる。で、おなじ難儀をみるものなら、むしろどうどうと徳川家の領土をぬけ、あわよくば浜松城のやつばらに、一あわふかせて引きあげたほうがおもしろいとぞんじます」
ちょっと聞くと忍剣の説は、暴論のように聞えるが、ふかく考えれば北国も木曾も東海も、その危険さは一つである。ましてやいま、天下に一国の領土もなく、一城の知己もない伊那丸に、安全な通路というものがあろうはずはない。
おなじ敵地をふむものなら、忍剣のいうとおり、徳川家の蟠踞する東海道こそもっとも小太郎山に近く、もっとも地理平明である。では――と相談がまとまって伊那丸は藺笠の緒をしめ、忍剣は禅杖をもち直し、やおら、そこを立ちかけたせつなである。
頭のいただきから、山嵐をゆする三井寺の大梵鐘が、ゴウーン……と余韻を長くひいて湖水のはてへうなりこんでいった。と、一しょに――これはそもなに？　逢坂山の森をかす

めて、ピューッと凧のうなるがごとき音をさせつつ、斜めにひくく、直線にたかく、そしてゆるく、またはやく旋回してきたあやしいものがある。――オ、舞いめぐる空の怪物！それは丈余の大鷲だ。

そのとき、暮れなんとする春の夕空は、ひがし一面を紺碧に染め、西半面の空は夕やけに赤く、琵琶の湖水を境にして染めわけられたころあいである。空にかかった大鷲の影も、遠き夕照りをうけて金羽さんらんとして見えるかと思えば、またたちまち藍色の空にとけて、ただものすごき一点の妖影と化している。

「おお、ありゃクロだ！　竹童がたずねている大鷲だ」

禅杖をあげて忍剣が高くさけぶと、龍太郎と伊那丸も目をみはって、

「うむ！　まさしくクロにそういない。寒松院の並木へのろしの音はきこえてきたが、竹童はあのまま帰らぬ。もしや鷲に乗って、追いついてきたのではあるまいか」

「そういえばだれか乗っているようす、――や、竹童だ！」

「なに竹童が乗っている。オオ、竹童――竹童ッ――」

とふたりが、声をあげて大空に呼んだが、鷲はひくく樹木のさきへふれるばかりにおりてきて、また、ツーッとあらぬ方角へそれてしまう。と、龍太郎が、なにを見いだしたかおどろきの声をはずませて、

「や、ふしぎな！　あの鷲には、竹童ばかりでなく、ほかの童子も乗っている。たしかにふたりの人間が乗っている」

「龍太郎どのの目にもそう見えたか、わしもそう思ってふしぎに感じていたのだ。アレアレ、こんどは湖水のほうへいっさんにかけりだした――」

瞳をこらして見ていれば、さっさつたる怪影は、関の山から竹生島のあたりへかけて、ゆうゆうと翼をのばして舞うのであった。その鷲の背にありとみえた両童子こそ、まぎれもあらず、南蛮寺の丘からムシャブリついて飛びあがった、鞍馬の竹童――泣き虫の蛾次郎。

二

天空のふたりは、朝から今まで、たがいに、飲まず食わずである。

竹童は、蛾次郎を鷲の背から蹴おとさんとし、蛾次郎は、竹童をふりおとして、じぶんひとりで翼を占有しようとしている。

しかもそれは、寸分の休みもなく走っている鷲の背なかで、天空の上で――行われつつある争闘だ。一しゅんのゆだん、一分のすきでもあれば、鷲じしんにふりおとされるか、そのいずれかが見舞ってくる。朝から飲まず食わずでも、またこれからいく日、一滴の水を口にしないまでも、そんなことは念頭にない。まさに真剣以上の真剣だ。それに早くまいったほうが惨敗者だ。

「やい、蛾次郎！」

かけりゆく鷲の上で、こういう声は鞍馬の竹童。

「なんだ、竹童」

蛾次郎は、ただそれ下界へ蹴おとされまい一念で、鷲の頸毛にダニのようにたかっていた。

「いいかげんに降参してしまえ。そしてこの鷲をおいらに返してしまえ。そしたら命だけは助けてやる」
「いやなこッた。てめえこそ、低いところへ降りたときに、飛び降りてしまやがれ。そしたら命だけたすけてやる」
「こいつめ、人の口まねをするな。おのれ、今にどこかで突きおとしてくれるから見ていろよ」
「手をはなせば、人を落とすまえに、じぶんのからだがお陀仏だぞ。ざま見やがれ、唐変木、突きとばせるものならやッて見ろ」
「おのれきっとか」
「くそうッ！」
と、ののしり合った空のけんか。
両手をはなして組みあえば、蛾次郎のいう通り、鷲の上からふりすてられてしまうので、片手と片手のつかみ合い。
蛾次郎は猫のごとく爪をたって、竹童の頬ッぺたをひっかいたが、指にかみつかれたので、びっくりして手を引っこめ、こんどはいきなり対手の髪の毛を引っつかんだ。
「うむ！　こんちくしょうッ」
竹童は拳骨をかためて、かれの脇のしたから顎をねらった。そして、二つばかり顔を突いたが、蛾次郎も命がけだ。くちびるを噛みしめて、なおも必死にこらえている。
「ちぇッ――強情なやつだ、降参しろ、降参しろ！　まいったといわないうちは、こうしてくれる！」
竹童の鉄拳が、目といわず鼻といわず、ポンポン突いてくるので、さすがの蛾次郎も、だんだん色をうしなって顔色まっ青にかわってきた。これがいつもならば泣き虫の蛾次郎、本領を発揮してワアワア泣き声をあげているはずだが、かれも生死の境にたった以上、ふだんよりは相当につよい。タラタラと鼻血をながして、くちびるの色まで変えたが、まだ参ったとはいわないで、
「ちッ、ちッ、畜生ッ！」
というがはやいか、竹童の腰に差されてあった般若丸の刀に目をつけ、あっという間に、それを抜いてふりかぶった。
雲井にあらそう両童子を乗せて、鷲はいましも満々たる琵琶の湖水をめぐっている。

夜の海月と火の百足

一

はてしもなく舞う大鷲の背なかに、はてしもなき両童子の争闘！　蛾次郎は、敵の剣を抜きとッてふりかぶり、竹童はその腕くびを引ッつかんで、やわか！　とばかり般若丸の柄をもぎ取ろうとする。
黒毛ふんぷん、大地の上なら、まさに組ンずほぐれつである。
蛾次郎勝つか？　竹童勝つか。
雲井に賭した命と命！　かれも必死、これも必死だ。
だが、大鷲の神経は、かかる火花をちらす活闘が、おのれの背におこなわれているのも、知らぬかのように、ゆうゆうとして翼をまわし、いま、比叡の峰や四明ヶ岳の影をかすめ

たかとみれば、たちまち湖面の波を白くかすって、伊吹の上をめぐり、彦根の岸から打出ヶ浜へともどってくる。――

さっきから三井寺の丘のふもとに立って、かたずをのんで見つめていた伊那丸と、忍剣、龍太郎の三人は、その巨影がありありと目前へ近づいたせつなに、

「あッ――竹童！」

と、異口同音にさけんだが、いかにかれの危難を知っても、それへ力を貸してやることもならず、鷲はまた、バッと山かげに突きあたって飛翼をかえし、広い琵琶湖の上を高くひくく舞いはじめた。

と思うと――一しゅんのまに、鷲はいような羽ばたきをして、糸目のからんだ凧のように、クルクルッと狂いはじめた。

両童子が背なかの上で、たがいに、斬らんとし、奪わんとしていた般若丸の切ッさきが、あやまッて鷲のどこかを傷つけたのにそういない。あッ――というまもなく、虚空の上から引ッからんだ二つの体が、フーッと真ッさかさまに落ちたなと思うと、琵琶湖のまン中に、龍巻でも起ったような水煙が、ザブーンと高くはねあがった。

しぶきの散ッたあとは、雪かとばかり白い泡がいちめんにみなぎっていた。そしてその泡沫が消えゆくにつれて、夕ぐれの青黒い波が、モクリ、モクリと、大きな波紋をえがいていたが、ジッと波の中をすかして見ると、電魚のような光がして、たッたいままで天空にあった竹童と蛾次郎、こんどは湖水の底で、なおもはげしくあらそっている。

時おり、黒い波を切ッて、ピカリピカリとひらめくのは、般若丸の光であった。やがて、竹童の力がまさったか、その刀をもぎ取ってブクリッ……と水面に浮かびだしてくると、その腰にからんで蛾次郎も、

「ア、ぷッ……」

と鮫のように水をふいた。

「えい、じゃまなッ」

と鞍馬の竹童は、般若丸を口にくわえるやいなや、蛾次郎をけって……サッと抜き手をきったが、かれはまた一方の足をかたくつかんで、死んでもはなすまいとした。

ふたたび三たび、浮いては沈み、浮いては沈みするうちに、さすがの竹童もきょくどに心身をつからして、蛾次郎に足を引かれたまま、ブクブクと深みへ重くしずんでしまった。

そしてついに、湖面へ浮かんでこなかったが、ややしばらくたつと、そこからズッとはなれた竹生島の西浦あたりに、名刀般若丸の血流しをくわえたまま失神している竹童と、その右足にからんでグンニャリした泣き虫の蛾次郎とが、くらげのごとく、フワリ、フワリ……と夜の湖水の波をよりつつただよっていた。

二

「これッ、だれかおらぬか、この渡場のものはおらぬか！」

もうトップリ日がくれた松本の渡船場へきてあわただしく、そこの船小屋の戸をたたいていたのは、加賀見忍剣であった。

「湖水に落ちておぼれたものがある、それを救ってやるいそぎの船を借りたい。これ、だれかおらぬか、船頭は！」

と、破れんばかり戸をたたいたが、なかにもれる灯影があ

るのに、いっこうこたえがないので、加賀見忍剣、禅杖をかかえて附近の波うちぎわを見まわしていると、三井寺のふもとから、おくればせに馳けてきた伊那丸と龍太郎も、はるかに見た竹童の危急をあんじて、
「忍剣、船はあったか」と、そこへくるなり声をいそがした。
「ふしぎなこと、……この渡船場に、一そうもそれが見あたりませぬ」
「まだ宵なのに、矢走（矢橋または八馳）へかよう船がないはずはない。そのへんの小屋に、船頭がいるであろう」
「さ、それをただいま、呼んでいるところでございますが」
「船頭もおらぬのか。――さては、さきに逃げた呂宋兵衛やその手下どもが、このあたりの船を狩り集めて、琵琶湖を渡ったものとみえる。アーふびんなことをいたした。いかに竹童でも、あの高い空から落ちて、はや日も暮れてしまったことゆえ、さだめし水におぼれたであろう……なんとか、助けてやる工夫はないものか」
主従三人、愁然と手をつかねて湖水の闇を見つめていると、瀬田川の川上、――はるか彼方の唐橋の上から、炬火をつらねた一列の人数が、まッしぐらにそこへいそいできた。
危難は竹童の身ばかりではない。
敵地に身をおいて、草木の音にも気をくばっている伊那丸主従は、それを見ると、ハッとして、和田呂宋兵衛がさかよせをしてきたか、膳所の城にある徳川方の武士がきたかと、身がまえをしていると、やがて、炬火の先駆となって、駒をとばしてきた一騎の武者。
「やあ、それにおいであるのは、武田伊那丸さまではございませぬか」
音声たからかに呼んで近づいてきた。
「おお、いかにもこれに渡らせらるるは、伊那丸君でおわすが、して、そこもとたちは何者でござる」
まえにたって龍太郎と忍剣、きびしくこういって油断をしずにいると、
「さては！」
とその騎馬武者三人、ヒラリ、ヒラリ、と鞍から飛びおりて、具足陣太刀の音をひびかせながら面前に立った。
「それがしは、福島市松の家来、可児才蔵」
こう名のると、つぎの武者が――
「拙者は、加藤虎之助の家臣、井上大九郎と申す」
「おなじく、木村又蔵でござる」
と、いずれもりっぱな態度で会釈をした。
そしてふたたび、なかの可児才蔵が、一歩すすんで、
「不意にかような戦場のすがたで、人数をひきいてまいりましては、さだめしお驚きとぞんじますが、じつはこれお迎えの軍卒、さっそく、あれへ用意いたしてまいった馬にお召しをねがいます」
「なんといわれる。伊那丸さまをお迎えにまいられたとか？」
意外な口上をきいて、忍剣と龍太郎が顔を見あわせていると、井上大九郎が語をついで、
「それは、桑名のご陣にある、秀吉公からの、直命でござる。殿のおおせには、このたび伊那丸さまのご上洛こそよきおりなれば、ぜひ一どお目にかかったうえ、ながらくおあずかりいたしている品を、手ずからお返し申したいとの御意、なに

とぞ、ご同道のほどくださいますように」
「はて、不審なおおせではある？　……」
伊那丸は優美な眉をひそめて、
「べつにこの方より、秀吉どのへおあずけいたした品もないが……」
「イヤ、たしかに、大事な品をおあずかりしているとおおせられました。そのために、桑名攻めの陣中から、われわれどもが、騎馬をとばしてお迎えにまいったわけ」
というと、加賀見忍剣、もしや巧言をもって、若君を生けどろうとする秀吉の策ではないかと、わざと、鉄杖をズシーンと大地へつき鳴らして、
「ではおうかがいいたすが、桑名攻めの戦場にあられたかたがたが、どうして、ここへ伊那丸さまがお通りあることを、かように早く承知めされたのじゃ」
「その不審はごもっともであるが、じつはきょうの午の刻まえに、南蛮寺の番人和田呂宋兵衛をはじめその他の者が、ちりぢりばらばらとなって、桑名のご陣へかけつけてまいりました」
「ウム。勝頼公を差したてよとは、アレも、秀吉どのの指図であろうが」
「都に風聞の立ったとき、その在所をしらべよとはおいいつけになりましたが、罪人あつかいにして、桑名に護送することなどは、まッたく、秀吉公のごぞんじないこと。――しかるに呂宋兵衛、桑名のご陣へまいって、いろいろと差出がましいことを申しあげたため、かえって秀吉公のお怒りをうけて、そくざに、ご陣屋を追いはらわれ、南蛮寺の番衛役も召しあげられ、この後は、京都へ立ち入ることはならぬと、手下のものまで追放になりました」
まことはおもてにあふれるもの。
使者三名の口上には、その真実味がこもっていた。
では、筑前守秀吉は、かならずしも、悪意があって勝頼のゆくえをたずねさせたのではなかろう……と伊那丸も心がけ、忍剣や龍太郎も、さらばと、その意に従うことになった。
いつか、一同のまわりには、松明をあかあかと照らした軍兵が五、六十人、ズラリと輪形になって陣列を組んでいた。
「それ、用意のみ鞍をさしあげい」
と、木村又蔵が合図をすると、おッといって馬廻りの武士、月毛、黒鹿毛の馬三頭のくつわをならべ、馬具の金属音をりんりんとひびかせて、三人の前へひいてきた。と――伊那丸が、
「ごめん――」
と、目礼をして、まッ先に、白駒の金鞍にヒラリと乗る。つづいて忍剣と龍太郎、波に月兎の鞍をおいた黒鹿毛の背へヒラリとまたがって、キッと手綱をしぼり、たがいにあいかえりみながら、
「裾野以来、こうして馬上になるのは、久しぶりだなあ……」
という風に微笑しあった。
やがて、まッくらな瀬田の唐橋、小橋三十六間、大橋九十六間を、粛々とわたってゆく一行の松明が、あたかも火の百足がはってゆくかのごとくにみえた。

蜘蛛の子と逃げ散る餓鬼

一

夜も昼も、伊勢の空は、もうもうと戦塵にくもっていた。

七万の兵をひきいて、滝川攻めにかかった秀吉は、あの無類な根気と、熱と、智謀をめぐらして、またたくうちに、亀山城をおとし、国府の城をぬき、さらに敵の野陣や海べの軍船を焼きたてて、一益の本城、桑名のとりでへ肉迫してゆく。

それが、天正十一年、三月上旬のことである。

春となれば、焼蛤の汐のかおりに、龍宮城の蜃気楼がたつといわれる那古の浦も、今年は、焼けしずんだ兵船の船板や、軍兵のかばねや、あまたの矢や楯が、洪水のあとのように浮いて、ドンヨリした赤銅色の太陽が、その水面へ反映もなく照っていた。

陸をみれば、泊、八幡、白子の在所在所、いずれをみても荒涼たる焼け原と化して、あわれ、並木のおちこちには、にげる途中でなげすてた在家の人の家財荷物が、うらめしげに散乱して、ここにも、斬ッつ斬られつした血汐や槍の折れや、なまなましい片腕などがゆくところに目をそむけさせる。

すると、この酸鼻な戦場の地獄へ、血をなめずる山犬のように、のそのそとウロついてくる人影がある。

「お、こいつの差している刀はすばらしい」

「しめた、ふところから金がでたぞ」

「やあ、この陣羽織は血にもよごれていねえ。ドレ、こっちへ召上げてやろうか」

ざわざわと、こんなことをささやきながら、あなたこなたにたおれている武士の物の具や持ち物を剥ぎまわっているのだ。

ああ戦国の餓鬼！　戦場のあとに白昼の公盗をはたらく野武士の餓鬼！　その一群であった。

「おい！　もう大がいにしておけ。あまりかせぎすぎると、こんどは道中の荷やッかいになって、釜をかぶって歩くようなことになるぞ」

すると、この野盗の頭とみえて、ふとい声が土手の上からひびいた。ヒョイとそこをふり仰ぐと、臥龍にはった松の木のねッこに、手下の稼ぐのをニヤニヤとながめている者がある。

「もうたくさんだ、たくさんだ。そう一ぺんに慾ばらねえでも、ちかごろは、ゆくさきざきに戦のある世の中だ。まごまごしているまに、秀吉の陣見まわりでもきた日には大へんだ」

また、こういって、そこにスパスパ煙草を吸っていたのは、すなわち、和田呂宋兵衛、ほかの二人は蚕婆と丹羽昌仙だ。

これで事情はおよそわかった。

秀吉の御感にいって、出世の階段をとびあがるつもりでいた勝頼探索の結果が、あの通りマズイはめとなったうえに、命令以上なでしゃばりをやッたので、ついに、軍律をもって陣屋追放をうけたというから、そこで呂宋兵衛は、もちまえの盗賊化して、これから他国へ逐電するゆきがけの駄賃とでかけているところであろう。

いくら捨て鉢になったにしろ、よくこんな、残忍な盗みができることと思うが、根を考えると、富士の人穴に巣をかまえていた時から、和田呂宋兵衛、このほうが本業なのだ。
「頭領、思いがけなく、金目なものがありましたぜ」
と、二、三十人ほどの手下が、そこへ、剥ぎとった太刀や陣羽織や金をつんでみせると、呂宋兵衛は土手の上からニタリと横目にながめて、
「そうだろう。このへんに討死しているやつらは、おおかた滝川一益の家来で、ツイきのうまでは、桑名城でぜいたく三昧なくらしをしていた者ばかりだからな。……う、そりゃアとにかく、もう南蛮寺も秀吉のやつにとりあげられてしまったから、京都へもどることはできねえ。いッたいこれからどこへ指して落ちのびたものだろう？」
と、昌仙と蚕婆のほうに相談をもちかけた。
「また、富士の人穴へかえろうじゃないか」
と、蚕婆は常に思っていることを、このさいにもちだして、あの曠野の棲みよいことや、安心なことを数えたてた。
「そうよ、もうほとぼりもさめたから、久しぶりで、富士のすがたも拝みてえな」
「だが――それはまだよろしゅうござるまい」
といったのは丹羽昌仙。野武士のなかにいても、軍師格なだけに、この者はすこし厳めしくかまえこんでいる。
「なぜだい？」
「なぜと申しても、小太郎山の砦には、伊那丸の幕下、小幡民部、また、頭領を親の仇とねらっている咲耶子などが、きびしく裾野を見張っております」
「ウームなるほど。すると、おれがまた人穴城へ入りこむと、さっそく、小太郎山からやつらがドッと攻めかけてくるわけだな」
「火をみるよりも明らかな話でござる。まず、もうしばらく、こッちの力がじゅうぶんにととのうまで、裾野へはいるのは、見合わせたほうがいいようにぞんじます」
「じゃアひとつ、北国路へでもいって、あの敦賀津の海に紅がら帆をおッ立てている、龍巻の九郎右衛門と合体して、こんどは海べのほうでも荒してやるか」
「イヤイヤ、それもダメなことで」
と、昌仙はいう下からかぶりをふって――
「もうそろそろ北国街道の雪も解けてまいったはず、春となれば、秀吉と、弔合戦をやるべく意気ごんでいた柴田勝家が、北ノ庄から近江路へかけて、ミッシリ軍勢をそなえているでございましょう」
「じゃ、そッちへもいけねえとしたら、いったいどこへ落ちのびたらいいのだ」
「まず、いまのところしずかなのは、東海道でございますな」
「フーン。すると徳川家の領分だな」
「さよう。近ごろ家康と秀吉とは、たがいに、珠をあらそう龍虎のかたち。その仲の悪いところをつけこんで、こんどは家康のふところへ食いいる算段が、第一かと考えます」
「そううまくこっちの註文にハマるかな」
「いくら狡猾な家康でも、策をもって乗せれば、乗らぬものでもございますまい、じつはその用意のために、早足の燕作を物見にやッてありますゆえ、やがてそろそろここへ帰るじ

ぶん……」
　と、話ついでに、のびあがって向こうを見ていると、オオその燕作であろう、竹ノ子笠に紺無地の合羽、片袖をはねて手拭で拭きふき、得意な足をタッタと飛ばして、みるまにここへ駈けついた。

二

「やあ、ごくろう、ごくろう」
　と丹羽昌仙、土手の上から飛びおりて、
「して、どうだッた。伊那丸のようすは？」
「やッぱり、東海道から裾野へはいって、それから小太郎山へかえる道順をとるらしゅうございます」
　と、さすがに早足、あれほど韋駄天と走ってきながら息もきらさずこう答えた。
「そうか、やッぱりこっちの想像どおり、思うつぼにハマッたわい」
「ところが昌仙さま、あまり思うつぼでもありませんぜ。というなあ、秀吉の指図で、瀬田まで迎えにでやがった軍勢があるんで」
「ほ……秀吉が？　フーン猿面め、じょさいないことをやりおって、うまく伊那丸を抱きこもうという腹だな。だがよいわ、まさかに家康の領分まで、その軍兵がクッついてもいけないだろう」
「昌仙――」
　と呂宋兵衛もズルズルと下へおりてきて、
「徳川家へ取りいる算段とは、やッぱりなにか、その伊那丸をおとりにして？　……」
「こいつを利用しないのは愚でござる。武田伊那丸を心のそこから憎みぬいて、あくまでもかれを殺害してしまいたいと願っているのは、秀吉よりは家康でございますからな。また伊那丸にとっても、かれは、父の勝頼をほろぼした仇。どッち道、このふたりのあいだは生涯の敵同志でおわるでしょう。――ところが、こんど伊那丸が小太郎山へかえるには、どうしても、その家康の城下を通らねばなりますまい。さア、おもしろいのはここの細工で、そのさきにわれわれが浜松城へまいって、なにかのことを教えてやったら、あのずるい家康も、眼をほそめて、うれしがるにきまッております」
「名策！　名策！」
　呂宋兵衛、手を打ってよろこんだ。
「そいつアいい考えだ。ではさっそく、浜松へ乗りこもう！　だがなんでも慾得ずくだ、無条件じゃいけねえぜ」
「むろん、伊那丸を討ったあかつきには、こうしてくれという条件もつけてのうえに」
「富士の裾野は徳川領だから、あのへん一帯から人穴を、おれの領分としてくれりゃありがたいが」
「家康が夢にまでみておそれている、伊那丸がないものとなれば、それくらいなことは承知しましょう」
「天下はひろい！　もう草履とりあがりの猿面なんざア、くそでも食らえだ。ワハハハハハ」
　にわかに前途を明るくみて、小心な呂宋兵衛が、こう元気づいていると、しきりに向こうを見はっていた早足の燕作が、

「あッ、いけねえ！　もうきやがッた」
と、いかにも狼狽したらしくさわぎだした。
「な、なんだ、なにがきたンだ」
「ゆうべ瀬田から伊那丸をむかえてきた、木村又蔵、可児才蔵、井上大九郎なんていうやつの軍兵で」
「そいつア大へんだ、ヤイ、てめえたち、はやく獲物を引ッかついで浜べのほうへ姿をかくせ！　オオ蚕婆、おまえがさッき目をつけておいた船があッたな、船で逃げろよ船で——。燕作燕作、向こうだ向こうだ、蚕婆と一しょにいって、はやく船のしたくをしていろい」
まるで、突風に見まわれた紙屑か、白日に照らされた蜘蛛の子のように、クルクル舞いをして呂宋兵衛とその手下ども、スルスルと土手草へとびついて、雑木林の深みへもぐりこんだかと思うと、木の葉ばかりをザワザワとそよがせて、首もみせずに海べのほうへ逃げぬける。

野風呂の秀吉

一

二里さきには桑名の城が見える。
亀山の出城、関、国府の手足まで、むごたらしくもぎとられた滝川一益、そこに、死にもの狂いの籠城をする気で、狭間からはブスブスと硝煙をあげ、矢倉には血さけびの武者をあげて、合図おこたりないさま、いかにも悲壮な空気をみなぎらしている。
その城とは、三里弱の距離をおいて、水屋ノ原にかりの野陣をしいているのは、すなわち秀吉方の軍勢で、紅紫白黄の旗さしもの、まんまんとして春風に吹きなびいていた。
きょう——あかつきの半刻ばかりの間に、バタバタとここへ集団した野陣であるから、板小屋一ツありはしない。
ところどころに鉄柱を打ちこみ、桐紋の幔幕をザッとかけたのが本陣であろう。今——このかげから四、五人の軍卒、鎖具足に血のにじんだ鉢巻をして、手に手に鍬や鋤をひッさげ、バラバラと陣屋へ駈けだしてきた。
れんげがいっぱい咲いている。
やわらかい若草が、二、三寸ほどな芽をそろえている野原を、血汐だらけな武者わらじがズカズカと踏ンづけてひとところへかたまったかと思うと、鋤を持ったものが、サク、サク、サク、と四角い仕切りをつけてゆく。と、ただちにそのあとから、鍬をふりかぶッた方が戦をするような力で、線のうちがわを、パッ、パッ、パッと土をかきだして、みるまに穴を掘ってしまった。
と——こんどは、その穴へあつい桐油紙を一面にしき、五寸かすがいでふちを止めて、ドウッと水を入れはじめる。
そのまに他のものが、まッ赤に焼けた金の棒を持ッてきては、ジュウッ、ジュウッ……とその中へ突っこむうちに、いつか、中の水は湯にかわって、モクリと白い湯気を立てた。
「できた——」
といって、軍兵たちは、むこうの陣場へかくれてしまった。
何ができたのだろう？

すると、ややあってから、一方の幕をサッとはらって、羽柴筑前守秀吉、ズカズカと大股にあるいてきた。
「殿、――しばらく、ただいまお支度を設けます」
あわてながら追っかけてきたのは、秀吉の脇小姓、朝野弥平次、加藤孫一。
抱えてきた楯を、バタバタと四、五枚そこへ敷きならべて、なおも、あとから運んできたのを、まわりへ立てようとすると、秀吉手をふって、
「うっとうしい」と、うしろ向きになった。
「はッ……では」
と陣礼儀をして、ふたりがそこをさがると、秀吉は鎧草摺をガチャリと楯の上へ投げすてて、まッぱだかになった。
そして、一片の布をもって、前に軍兵がつくっていった、野陣の野風呂へドブリと首までつかりこんだ。
「ウーム……ウウム……」
と、秀吉、湯のなかに首まではいって、さも心地よげにうなっていたが、ザブリと一つ顔をあらって、
「ああ、よい湯かげん――」
と、湯穴のフチにしいてある楯の上に腰かけ、両の足だけを、ダラリとなかへブラさげていた。そしてときどき無意識にジャブリジャブリとさせながら、
「智恵じまんな一益も、ゆうべは定めしおどろいたろう……」
苦笑をうかべて、桑名城を観望している。
そうだ。昨夜は滝川一益が、ここから五、六里離れたところの白子の陣へ夜討ちをかけた。秀吉は、きゃつめかならずこうくるな――と手を読んでいたから、四方の平地や森の人家のかげに、堀尾茂助、黒田官兵衛、福島市松、伊藤掃部、加藤虎之助、小川土佐守など配置よろしくしいておいて、左近将監一益が枚をふくんで寄せてきたところを、逆に、ワ――ッと鬨の声をあげさせて、敵が森へ逃げんとすれば森の中から、海辺へはしれば海の中から、金鼓を鳴らして追いまわし追いまわし、とうとう桑名城まで袋づめに追いこんだ。
これは兵法でいう八門遁甲。諸葛孔明が司馬仲達をおとし入れた術でもある。秀吉、それを試みて、滝川一益をなぶったのだ。
「まずこれで伊勢は片づけた、――つぎには柴田権六か、きゃつも、ソロソロ熊のように、雪国の穴から首をだしかけておろう……」
敵城を前にして、すッかり野風呂であたたまった秀吉は、こうつぶやきつつ、まッ赤になった下ッ腹へ、ウン、と、一つ力をいれて、いかにも愛撫するごとくへそのまわりをなでは じめた。
なでると黒い垢がボロボロ落ちた。
それもそのはず、この二月十日に七万の大軍を三道にわけて、都を発してきて以来の入浴で、寝ぬ日もきょうで三日つづく。しかし、垢はでるがいねむりはでない。かれは精力の権化であった。
「どれ……上がろうか」
湯の中に立って、手ばやく上半身を拭きはじめると、オオ、その時だ！　れんげの花へピタリとからだを伏せて、蛇のようにスルリ、スルリ……とはってきた異形の武士が、寝たまま片腕をズーッと伸ばして、種子島の筒先を、秀吉の背骨へ

ピタリとねらいつけた。
火縄をプッと吹いたようす――、ドーンと弾けむりがあがるかと思うと、せつなに、パッとはねかえった異形の武士は、串にさされた蛙のように、九尺柄の槍に胸板をつきぬかれ、しかもその槍尖はグザと大地につき立っていた。
「孫一、やりおったの」
それをニヤニヤ笑ってながめながら、秀吉、足を拭いて楯の上にあがった。加藤孫一、すがたは見せないが、向こうの楯のかげで、
「は、一益のまわし者と見ましたので」と答えた。
「イヤちがう。ありゃおそらく、徳川家の隠密組であろう。家康もなかなか人が悪いからの。あとでよく死骸のふところをあらためてみい」
ところへ、バタバタと早運びの足音がひびいてきた。フト見ると、加藤虎之助、はるかにはなれて具足の膝を地につかえる。
「お上」
「ウム、虎之助」
「近江路へやりました井上大九郎、その他の者、ただいま武田伊那丸をご陣屋まで召しつれましたが」
「や、帰ってきたか。ウム、伊那丸も同道して。――そうか。では表陣屋西幕のうちに床几をあたえて、鄭重におとりなし申して置くがよい」
これだけの言葉をはくうちに、秀吉は、肌着小手脛当をピチンと着けて、皆朱碁石おどしの鎧をザクリと着こみ、唐織銀文地に日月を織りうかした具足羽織まで着てしまった。
そして鎧のアイビキ紐、草摺のクリシメ紐、陣太刀の緒と、端からキチキチむすんでゆく指の早さといったらない。まるで神技と思わるるくらいだ。もっとも秀吉ばかりでなく、およそ戦国の世に男とうまれ武士の子と生まれたほどの者は、みな、陣太鼓の音が三ツ鳴るあいだに、具足着こみのできるくらいの修養を、ふだんのうちにつんでいた。
「孫一」
武将いでたちとなると、秀吉の威風、あたりをはらって、日輪のごとき赫々さがある。
「はッ、御意は？」
「右陣にいる福島市松のところへ伝令せい！　ただ今、武田伊那丸が見えたによって、あずけておいた一品、そっくここへ持参いたせと」
「は、かしこまりました」
ヒラリと溜りへかえった加藤孫一、使番目印の黄幌に赤の差旗を背につッたて、馬をあおって、右陣福島市松のところへ馳けとばした。
伊那丸から秀吉があずかったという品、――それは果たしてなんであろうか？

二

伊那丸は与えられた床几によって、秀吉のくるのを待っていた。右には忍剣、左には龍太郎が烱とした眼をひからせている。
張りめぐらした幔幕のそとには、槍の穂さきがチカチカと霜

のごとくうごいていた。やがて、加藤虎之助があらわれて、いんぎんに礼をして、秀吉の大将座をもうけ、その脇にひかえていると、順をおって堀休太郎、蜂須賀小六、仙石権兵衛、一柳市介などの、旗本がいならび、やがて幕をはらって、秀吉の碁石縅の姿がそこへあらわれた。

「おお、伊那丸どのな――」

こういいながら秀吉は、ズカリと前へよってきた。その満顔の笑みをみると伊那丸も旧知のような気がして、笑みをもって迎えずにはいられなかった。

「まずもって、あっぱれなご成人ぶりを祝福いたす。つねにうわさはきいておるが、イヤ、さすがは機山大居士の御孫、末たのもしい御曹子じゃ……」

みじんのわだかまりもなく、胸をひらいて手をつかんだ。そして、その手をふって明るく笑った。あたかも肉親の邂逅のように。

「さて、眼前にまだ一攻めいたす桑名城もござるゆえ、ゆるりとお話もいたしかねるが、お迎えもうしお返しせねばならぬ一品。おじゃまではあろうなれど、小太郎山のとりでへ、土産としてお持ちかえり願いたい」

床几になおって、羽柴秀吉、こういうと手の軍扇を膝にとってかまえながら、

「市松！　市松！」とおごそかに呼ばわった。

「はッ」

という幕かげの答え。主命によって、いまそこへ、控えたばかりの福島市松、一箇の鎧櫃をもって、秀吉と伊那丸の中央にすえた。

「伊那丸どの、お返し申す品はこのなかにある。すなわち、それは武田家のご再興になくてかなわぬ什宝、御旗楯無の名器でござりますぞ」

「や、ではこの中に、御旗楯無の宝物が？」

「秀吉の手にあるわけは、あの和田呂宋兵衛めが、人穴城におったころ、京へ売りつけにきた物をもとめておいたからでござる。もとより、もとめる時からこの秀吉には用のない品、いつかそこもとの手へ返してあげたいと念じていたのじゃ、どうぞ、あらためて貴手へお受け取り願いたい」

武田家無二の什宝――御旗楯無。それこそは、伊那丸にとってなによりなものである。裾野の湖水へしずめて隠しておいた後、それが何者かに盗みさられて、呂宋兵衛の手で京都にはこばれ秀吉の手からふたたび伊那丸へ返ってきたのは、これ武田家再興の大願がなる吉兆か――と、かれはなつかしくそれをながめ、また、秀吉の好意を謝さずにもいられない。

二言三言、その礼をのべている時だった。なにごとか、にわかに、陣々に脈々たる兵気がみなぎってきたかと思うと、本陣へ京都からの早馬の急使がきて、秀吉に、時ならぬ急報をつげた。

いわく、

北国北ノ庄の柴田勝家、盟友一益の桑名の城危うしと聞いて、なお残雪のある峠の嶮をこえ、佐久間盛政を先鋒に、上部八風斎を軍師にして近江へ乱入し、民家を焼き要害のとりでをきずいて、作戦おさおさおこたりない――と。

その飛状を手にした秀吉は、あわてもせず、莞爾として、

「では残りおしいが、伊那丸どの、また会う機会もあるであ

ろう。その宝物の御旗、その楯無の鎧が、かがやく日をお待ちするぞ」
「ご芳志、ありがたくおうけいたします」
「おお、それより小太郎山へお帰りあるは、途中さだめし多難であろう。秀吉の部下五、六十騎おかし申そう」
「イヤ、徳川領を通るのがおそろしゅうて、秀吉どののさむらいを借りてきたと申されては……」
「ウウム、名折れといわるか」
「多難は旅の道ばかりではございませぬ」
「そうじゃ。天下は暗澹――いずれ、光明の冠をいただく天下人はあろうが、その道程は刀林地獄、血汐の修羅じゃ。この秀吉のまえにも多難な嶮山が累々とそびえている」
「ましてやおさない伊那丸が、わずかな旅路を苦にしてどうなりましょうか」
「愉快なおことば、秀吉もその意気ごみで、ドレ北国の荒熊どもを、一煽りに蹴ちらしてまいろうよ」
さらば――と別れて、秀吉はたって作戦の用意にかかり、伊那丸は、はからずも手にもどった御旗楯無の具足櫃を忍剣の背に背おわせて、陣のうらかられんげ草のさく野道へ走りだした。
ワーーッという武者押しの声をきいた。
小手をかざして桑名の方をみると、はやくも秀吉の先陣は、ふたたび戦雲をあげて孤城奪取の総攻めにかかり、後陣は鳥雲のかたちになって、長駆、柴田との迎戦に引ッかえしてゆく様子――。
その戦雲をくぐり、敵味方の乱軍をぬけて、伊那丸主従は、やがて名古屋から岡崎へとすすんでいった。――ああ、いよいよあと十数里で、徳川家康の本城、浜松の地へ入ることになる。
さきに、奸策をえがいていた呂宋兵衛が、こんどは、狡智深謀な家康と、どう手を組んでくるだろうか。
伊那丸のまえには、いまや、おそるべき死の坑穴が何者かの手で掘られている。

死といえば、夜の湖水にただよっていた、鞍馬の竹童と泣き虫の蛾次郎。あのふたりの死はどうなっただろう。
死はどうなるものでもない。
死は絶対であり永遠である。

仲直り

一

琵琶湖のなかにひとつの島がある。本朝五奇景のうちに数えられている竹生島。
島の西がわ、天狗の爪とよぶ岩の上に、さっきからひとりの神官、手に笙の笛をもち、大口の袴をはき、水色のひたたれを風にふかせて立っている。
そこから小手をかざしてみると、うッすらとした昼霞のあなたに、若狭の三国山、敦賀の乗鞍、北近江の山々などが眉にせっしてそびえている。そして、はるか柳ヶ瀬のおくから、

この琵琶湖へ一冽の銀流をそそいでくる高時川のとちゅうに、のッと空に肩をそびやかしているのは、賤ヶ岳の巨影で、そのうしろに光っているいちめんの明鏡は余呉の湖水と思われる。

と、――その神官の眼が、そこにピタリと吸いついて時ひさしくたたずんでいるうちに、賤ヶ岳から柳ヶ瀬にわたる方角に、モクリと黄色いけむりがあがった。

見るまに、それを一手として、つぎには、大岩山、木之本附近、岩崎山のとりでとおぼしきところから山火事のような黒煙がうずをまいて、日輪の光をかくした。と思うと、余呉の湖水や琵琶の大湖も、銀のつやをかき消されて、鉛のような鈍色にかわってくる。

「ああ、敗れた！」

神官は手にもてる笙のような声でさけんだ。

「賤ヶ岳のとりでも落ちた――柳ヶ瀬の陣も総くずれだ――柴田勢はとうとう秀吉のためにほろぼされる運命ときまった……」

いかにも悲痛な色をうかべた。

神官のひとみには、かすかな涙の光さえみえる。

そして、亡国の余煙をとむらわんとするのか、おがむように笙を持って、しずかに、その歌口へくちびるをあてた。

壮な音色、悲愁な叫び、または嘈々としてさわやかに転変する笙の余韻が、志賀のさざ波へ微に妙によれていった――

「宮内さま、――菊村さまア！」

すると、その笙の音をたよりにして、岩々たる島の根を漕ぎまわってくる小船があった。

呼ぶこえ、櫓の音。船のなかにはひとりの若い漁師が、櫓柄をにぎって、屏風のような絶壁をふりあおいでくる。

「おう、源五か」

天狗の爪からのびあがって、こう答えた神官は、すなわち菊村宮内である。松の枝に手をささえて、波うちぎわを見おろした。

「宮内さま、おたのみをうけまして、すっかり陸のようすをみてまいりました」

「ごくろうごくろう、さきほどから、その返辞を待ちかねていたところ、どうであった戦の結果は」

「伊勢の陣から引っかえした秀吉勢は、おそろしい勢いで、無二無三に北国街道をすすみ、堂木山に本陣をおいて、柴田勢を追いちらし、北ノ庄まで馳けすすんでゆくというありさまです」

「ウーム、そうか、北国一の荒武者といわれた、佐久間盛政もそれを食いとめることができなかったか……」

「佐久間勢も、一どは秀吉方の中川清兵衛を破ったそうですが、丹羽長秀が不意の加勢についたため、勝軍は逆になって、北国勢は何千という死骸を山や谷へすてたまま、越前へなだれて退いたといううわさです。このあんばいでは、やがて北ノ庄の柴田勝家も、近いうちには秀吉の軍門にくだるか、でなければ生くびを塩づけにされて凱旋の土産になってしまうだろうと、もっぱら風聞しております」

「おうわかった――北国勢の敗軍であろうとは、ここからながめても、およそ見当がついていた。源五、ごくろうだった。また用があったら笙を吹くから……」

力なくこういうと、神官の菊村宮内は、天狗の爪からすべりおちるように、よろよろと島のなかへすがたをかくしてしまった。

島にはつつじ、山吹、連翹、糸桜、春の万花がらんまんと咲いて、一面なる矮生植物と落葉松のあいだを色どっている。宮内のすがたは、その美わしい自然に目もくれないで、しおしおと細道をたどっていった。

かれの直垂の袖をかすめて、まッ黄色な金糸雀がツウ――と飛んだ。

と、その向こうには、神さびた弁天堂の建物が見えた。なお、あたりには、宇賀の御社、観音堂、多聞堂、月天堂などの屋根が樹の葉のなかに浮いている。

「宮内さま、もうお午でございます」

社の内から走りだしてきた巫女の少女が、かれの姿をみるとこう告げた。だが、宮内はゆううつな顔をうつむけたまま、

「う、お午か。やめよう、今日はなんだか食べたくない」

とかぶりをふった。ちいさい巫女はそれを追って、

「ですけれど、あの、可愛御堂のなかにいるお方へは、いつものように、お粥を作っておけとおっしゃったので、もうできておりますが」

「お、忘れていた。じぶんの心がみだされたので、ツイそのことを忘れていた。さだめしお腹がすいていよう」

「じゃ、いつもの通り、あそこへ運んでまいりましょうか」

「あ、両方へ同じようにな」

宮内は急にいそぎ足になって、境内のかたすみにある六角堂へ向かっていった。一間の木連格子が、六面の入口にはまっていた。

その一方の錠をあけて、宮内はやさしい声をかけた。うすぐらい御堂の中には、蒲団をかぶって寝ている少年のすがたがある。――ふと見ると、それは泣き虫の蛾次郎だった。

二

「どうだな、蛾次郎さん」

と宮内はそこへしゃがみこんで、体の、容体をききはじめた。そのようすをみると、かれはしばらく病人となって、この可愛御堂に閉じこもっていたものとみえる。

だが、蛾次郎は、蒲団のなかにねてこそいるが、もうあらかたご全快のていとみえて、宮内の顔をみるや否、ムックリとそこへ起きあがった。そして、

「おじさん、ひどいじゃねえか！　どうしたンだいッ」

とどなりつけた。

病人にどなりつけられたので、宮内も少しびっくりしたが、二十日あまりもこの蛾次郎の世話をやいて、いまではすッかりその性質をのみこんでいるから、かくべつ怒りもしなかった。

「たいそうな元気じゃの。けっこうけっこう、それくらいな勢いなら、もうじきに元の体になるだろう」

「なにをいッてやがるンだい」

蛾次郎は不平の口をとンがらして、

「もうとッくの昔に、このとおりまえの体になっているんじゃないか。それを、いつまでこんな中へほうりこんでおいて、

だしてくれないッて法があるかい。え、おじさん――どこの国へいったって、そんなばかな法はないぜ」
「そうかな、それは悪かったよ」
と、宮内は、どこまでも好人物らしく笑っている。
「おまけに、笙ばかり吹いていて、まだお午の飯も持ってきてくれやしねえ。ちぇッ、おらア腹がへってしまった」
「いまじきに持ってきてあげるから、おとなしくしておいでなさい」
宮内はこうなだめておいて、そこの扉をピンと閉めたかと思うと、こんどは、つぎから二ツ目の木連格子の錠をあけた。と、みょうなことに、この中にも蛾次郎のところと同じように、一組の夜具が敷きのべてあって、その蒲団の上にも、やはりひとりの少年がいる。
だが、これは向こうの蛾次郎のごとく不作法ではなくいかにものしずかに、いるかいないかわからぬようにしてすわっていたが、木連格子がギーッと開いたので、顔をさし入れた菊村宮内と目を見あわせ、だまって、頭をさげた。
「うっかりして、昼の食物をおそくいたした。さだめし空腹になったであろう」
「どういたしまして、それどころではございません」
こういった者こそ、かの鞍馬の竹童なのである。
その日からおよそ二十日ほどまえ、海月のようにただよって、湖水におぼれていた竹童と蛾次郎が、いまなお、この竹生島の可愛御堂という建物のなかに生をたもっているところをみると、あの夜か翌朝、島の西浦で、弁天堂の神官菊村宮内の手で救いあげられたにそういない。そして、柔和で子供ずきな宮内の手当が厚かったために、こうしてふたりとも、もとのからだに近いまでに、健康をとりもどしてきたのだろう。
「ありがとうぞんじます。もう体もよほどよくなりましたから、けっして、ごしんぱいくださいますな。そして、わがままのようですが、どうぞわたくしのからだを、この島からおはなしなすッてくださいまし」
竹童が、こういったものごしを見るにつけても、宮内は、向こうにいる蛾次郎とこの少年とは、なんという性格の違い方だろうと思った。
だが、かれは、どッちも憎いと思わなかった。竹童が好きなら、蛾次郎も好きだった。イヤ、菊村宮内という人物は、すべての子供――どんな鼻垂れでもオビンズルでもきたない子でも、子供と名のつく者ならみんな好きだった。
それがために、かれは武士の身分をすてて、この竹生島へ、可愛御堂という六角屋根の建物をたてた。
今日は東の国、あすは西の国と、つぎからつぎへ戦いがあってやまない世の中。――その兵火のたびごとに、武士も死ねば女も死ぬ百姓も死ぬ、まして、たくさんな子供のたましいも犠牲になる。
菊村宮内は、もと柴田勝家の家中でも、重きをなしていた武将であったが、そういう世のありさまをながめると、まことに心がかなしくなった。で、主君の勝家から暇をもらって、いくたの戦場をたずね、やがて竹生島の弁天の社にそって、この可愛御堂を建立した。
「弁財天は母である。そしてわしは不運なおおくの子供たちの慈父になりたい」

こういう願いをもっている。
ところが、さきごろから、琵琶湖の附近にも、戦の黄塵がまきあがった。すなわち、伊勢の滝川一益をうった秀吉が、さらにその余勢をもって、北国の柴田軍と、天下分け目の迎戦をこころみたのである。
不幸な子供の魂をとむらいながら、可愛御堂の堂守で生涯をおわろうと思っていた菊村宮内も、むかしの主人であり、ふるさとの兵である北国勢が、すぐ向う岸の木之本でやぶれ、賤ヶ岳から潰走するありさまを見ると、なんとなく心がいたんで、いっそのこと、島をでてふたたび主君の馬前に立とうかとさえ――ツイさっきも迷ったのである。
しかし、それもそれだが、まったくみじめな、乱世の子供たちの慈父となる生涯も、けっして悪い目的ではない。ことに、いま、この島には、じぶんが心をそそいで救いかけている竹童という少年、蛾次郎という少年がいる。
もう、からだはなおったが、からだだけなおしてやっただけでは、まんぞくとはいえない。ふたりの境遇や、心までも、幸福に健全にして、そして、この竹生島をだしてやりたいと、かれは願った。

三

でいまここに、蛾次郎の顔をみ、竹童のすがたを見ると同時に、宮内は、湖をへだてたかなたの戦のことも、きれいに心頭から忘れさって、まことに慈父のような温顔になっていた。

「この島からだしてくれといわれるか？」
「はい」竹童はキチンとすわって、そしてすなおに、
「わたくしには、一刻も忘れてはならない主君がありますし、それに、だいじな鷲のゆくえもさがさなければなりませんから……」
「おお、おまえは主人持ちか。してそのお人という者の名は？」
「ここでは、お話し申されません。ですが、お師匠さまの名まえなら、打ちあけてもかまわないでしょう。わたくしは鞍馬山の僧正谷にいる果心居士先生の弟子のひとりでございます」
「ウム、有名な、果心居士のお弟子であったか。なるほど、それならものの聞きわけもよいはずだ。……ではおまえに一つのたのみがあるが」
「はい、命をたすけられたご恩人」
「なんでも聞いてくれるというのか」
「できることならきっとききます」
「ほかではないが、おまえと一しょに、湖水におぼれていた蛾次郎な」
「ああ、あの蛾次郎がどうかしましたか」
「どうも、ひどく仲が悪そうだが、なんとかわしの顔にめんじて、これからさき、仲をよくしてくれないか」
「……」
竹童はだまって下を向いてしまった。
「でないと、ふたりをこの御堂からだしてやることができない。せっかくわしが助けてあげても、この塔をでるとたんに、檻をでた犬と猿のように、また血まみれになったり、取ッ組ん

だりされては、わしの親切がかえって仇になってしまう。それがゆえに、罪のようだが、ふたりを別々な口へいれて、錠までおろしているのだよ、これもひとつの情けのかぎだ。悪く思ってくれてはこまる」
宮内のあたたかい真心が、じゅんじゅんと胸にひたってくるので、竹童も思わず涙ぐましくさえなった。
だが、そればかりは、竹童にも、ハイとすなおに快諾されなかった。かれはだまって、いつまでも下をむいていた。
「いけないと見えるな……ウーム、これだけはさすがのわしも困ったな」
そこへ、巫女の少女が粥をはこんできたので、宮内はそれを竹童にあたえ、蛾次郎の分はじぶんが持って、また以前のところへもどってきた。
お粥のけむりを見ると、空腹で、喉から手がでそうなくせにして、蛾次郎はプンプンと怒った。
「けッ、またおかゆかい、おじさん」
「うごかずにいる間は、まアまアこれでがまんをしなければ」
「じょうだんじゃねえや、おれなんか、裾野にいたじぶんから、ズッと奈良や京都のほうを見物して歩いてる時なんかも、こんなまずいものを一どだって食ったことはありゃしねえ」
「ほウ、おまえはそんなぜいたくだったのか」
「そうさ、おいらはこう見えても、徳川家へゆけばはぶりがきくんだからな。浜松にいる菊池半助という人を知っているかい。おじさんなんか知るめえ。隠密組で第一ッていう人よ。おれはその人にずいぶん小判をもらったぜ、つかいきれないほどあった――アアつまらねえつまらねえ、また浜松へいって、少しお金をせびッてこよう」
ひとりでペラペラしゃべりながら、まずいといった粥を一つぶのこらずなめてしまった。
そして、すぐにゴロリと横になって、手枕をかいながら、生意気そうな鼻の穴を宮内のほうにむけ、
「おじさん、いまおめえは、この向こうにはいっている竹童のところで、なにかコソコソ耳こすりをやっていたろう」
といった。
「ウム。おまえと仲をよくせぬかと、そのそうだんをしていたのじゃ」
「くそウくらえ――だれがあんなやつと仲をよくするもんか。おいらは徳川びいきだし、あの竹童ッてやつは、山乞食の伊那丸って餓鬼や、イヤな坊主に味方をしているんだ」
「ではどうもしかたがないな。……ふたりの気がおれて、仲をよくするというまで、この塔にはいっていてもらうよりほかに方法はあるまい」
宮内は竹童のたべた土鍋のからと、蛾次郎の食べたからを両手にもって、社家のほうへもどってしまった。
格子のすきまから、そのうしろ姿をみて、蛾次郎は声のあるッたけ悪たれをついた。
「やい、早くここをだしてくれよ。いッてしまっちゃいけないよ！　やい神主！　つんぼか唖かでくの坊か！　オイきこえないふりをしてゆくない。オーイ、バカ神主め、おいらをいつまで竹生島へおいておくんだい。かえせ、帰せ、かえしてくれ！　帰さねえと、いまに弁天さまへ火をつけるぞッ！」
あおむけに寝ながら、足で床板をふみ鳴らし、口から出放題

にあたりちらしていると、その仕切境の板のむこうがわで、「やかましいッ」と、小気味のいい一喝がツンざいた。
「オヤ、なんだと！」
ムクムクと身をおこした蛾次郎。
「なにがやかましいッ！」と負けずにどなりかえした。
だが、じぶんの声が、ガーンとくらい塔の内部へひびいただけで、もう向こうにいる竹童は、それきり、かれの相手になってこなかった。

火独楽と水独楽

一

強がりンぼで横着で、すぐツケあがる泣き虫の蛾次郎。いざとなれば声をだしてわめくくせに向こうでだまりこむと、その足もとをつけこんで「やい、竹童ッ」と、こっちからけんかを吹ッかける。
これだから菊村宮内も、この性のあわないふたりを、一つのじぶんの手にすくって、難儀をしているところなのだ。で、どうかして、仲をよくしてやりたいと考えてはいるが、なにしろ蛾次郎は、からだを養生するうちに菊村宮内のやさしさに馴れ、すっかり増長している気味だから、とても竹童と手をにぎって、心から打ちとけるべくもない。
「やいなんとかいえよ！」
業をにやして蛾次郎は、さかいの板をドンドンとたたいた。
すると、向こうにいて、ジッと我慢をしているらしい竹童も、ついに、堪忍袋の緒をきって、
「だまれッ、狂人！」と叱りつけた。
「なに、狂人だと！　おれのこと、狂人だとぬかしたな。なまいきなア！　いまに野郎おぼえておれよ。フーンだ――いまにこの島をでてみやがれ、あの大鷲をまたおいらの手に取りかえして、きさまたちに目にもの見せてくれるから」
「井の中の蛙――おまえなんかに天下のことがわかるものか、この島をでたら、分相応に、人の荷物でもかついで、その駄賃で焼餅でも頬ばッておれよ」
「よけいなおせッかいをやくな。てめえこそこの島からだされると、また八神殿の床下で、お乞食さまのまねをするより道がねえので、それで、おとなしくしていやがるンだろう。武田伊那丸だッて、忍剣とかいうやつだって、龍太郎という唐変木だって、てめえの味方は、みんなロクでもねえ山乞食ばかりだ」
「うぬッ、伊那丸さまのことをよくも悪ざまにいったな」
「オイオイ、どッちもでられないと思って、強そうなことをいうなよ、なぐれるものならなぐってごらんだ。お手々が痛くなるばかりだ」
「バカ！　こんなほそい木連格子ぐらい、破ろうと思えば破れるが、それでは、ご恩になった菊村さまにすまないから、おゆるしのあるまで、ジッとしんぼうしてはいっているのだ」
「ちぇッ！　おつなことをおっしゃったよ。お腹の虫がチャンチャラおどりをしたいとサ」
「きッとか！　蛾次郎！」

「おどかすねえ、琵琶湖の水をのんで、助かったばかりのところを」
「だからだまっていろというのだ」
「そういわれりゃなおさわぐぞ」
「勝手にしろい」
「ざまを見やがれ、へッこみやがって！」
「こいつ！」
と竹童がわれをわすれて立ったとたんに、ヒョイと手をかけると格子のとびらが、観音びらきにサッと開いた。
「あッ――」
はずみを食って、塔の口からころがりだしたせつなに、蛾次郎も仰天して扉をおした。すると、意外や、そこも容易にパッとひらいて、かごの鳥が舞うようにかれも表へとんでる。――
そうだ、菊村宮内は、さッき社家のほうへもどる時、いつものように、そとから錠をおろしてゆかないようであった。なにか考えごとをしていて、ウッカリそれを忘れていたのだ。
それはいいが、さてまたここに一大事。
パッと両方の口からとびだした蛾次郎と竹童とは、王庭に血戦をいどむ闘鶏のように、ジリジリとよりあって、いまにもつかみ合いそうなかたちをとった。
裾野以来――また、京都の八神殿以来――かれとこれとは、いよいよ怨みのふかい仇敵となるばかりであった。ことに蛾次郎は、一ど徳川家からあまい汁をすわされているので、その方に肩をもち、竹童はそれを伊那丸とともに敵としている。また、いまはいずこの空へ飛んでいるかわからないが、あの大鷲をたがいにわが手におさめんとする競い人も蛾次郎は竹童をめざし、竹童は蛾次郎の息のねをとめてしまわなければやまない。
ところが、蛾次郎も、近ごろは先のうちより、だいぶ強くなってきた。もともと彼は石投げの天才であって、智能の点はともかくも、糞度胸がつくとなると、どうして、容易にあなどりがたい。
ましてやいまは、竹童も般若丸を宮内の手にあずけてあるし、蛾次郎もあけび巻の一腰を取りあげられているから、この勝負こそ、まったく無手と無手。
「ウーム、よくもいまは広言をはいたな」
と、掌につばきをくれながら、竹童がジーッとせまると、蛾次郎もまた腕をまくりあげて、
「こん畜生、もう一ど琵琶湖の水をくらいたいのか」
いきなり拳をかためて、電火のごとき力まかせに、グワンと相手の頬骨をなぐりつけていったが、なにをッ！　と引っぱらって鞍馬の竹童、パッと身をかわしたので、ふたりはすれちがいに位置を取りかえ、またそこで血ばしった眼をにらみ合った。
と――思うと蛾次郎は、ふいに五、六間ほどとびさがって、足もとから小石をひろった。卑怯！　飛礫をつかんだな！
と見たので竹童も、おなじように大地のものを右手につかんだ。
だが、竹童のつかんだのは、石でもない、土でもない。
あたり一面に、雪かとばかり白く散っていた、糸桜の花びらである。

花びらの武器？　なんになるのか蛾次郎にはわからない。畜生、すこし血があがっていやがるなと見くびってひろいとった石飛礫、ピューッと敵の眉間へ打ってはなすと、竹童すばやく身をしずめて指の先から一片の花をもみだして唇へあて、息をくれて、プーッと吹いたかと思うと、それは飛んで一ぴきの縞蜘蛛となり、つぎの飛礫をねらいかけていた蛾次郎の鼻へコビリついた。

これはかつて竹童が、人穴城へ使者としていったとき、呂宋兵衛の前でやって見せたことのある初歩の幻術、きわめて幼稚なものであるが、蛾次郎ははじめてなのでおどろいた。

「わッ」

といって、おもわず顔へ手をやった。すでに体はみだれたのだ。得たりと竹童、そこをねらって馳けよりざま、さらにつかんでいた無数の花びらを、エエッと、力いッぱい蛾次郎の頭からたたきつけた。オオ落花みじん、相手はふんぷんたる白点につつまれたであろうと見ると、それとはちがって、竹童の手からパッと生まれて飛んだのは、まッくろな羽に赤い渦のある鎌倉蝶々、――蛾次郎の目へ粉をはたいてすぐにどこかへ消えてしまった。

いよいようろたえた泣き虫の蛾次郎、たわいもなく竹童の足がらみにけたおされて、ギュッと喉笛をしめつけられ、さらにうらみかさなる拳の雨が、ところきらわずに乱打してきそうなので、いまは強がりンぼの鼻柱がくじけたらしく、

「たッ、たすけてーッ、神主さま、神主さま」

最前、ここをだしてくれなければ、火をつけるぞと悪たれを吐いていた、その弁天さまのほうへ、声をしぼって救いをよんだ。

二

その晩である。

瘤だらけになった蛾次郎と、みみずばれをこしらえた竹童とが、菊村宮内の住居のほうで、かた苦しくすわらされていた。

昼間、もう少し蛾次郎がやせがまんをしていたら、竹童のためにしめ殺されていたかもしれない。あのとき、すぐに宮内が馳けつけて引き分けてくれたからこそ、かれの頭が多少のでこぼこを呈しただけですんでいる。

「なんとしても、ふたりは死ぬまで、敵となり仇となり、仲よくしてはくれないというのか。アア……どうもこまった因縁だの」

宮内は双方の顔を見くらべて、つくづくとこう嘆息した。

およそどんな者にでも、真心から熱い慈愛をそそぎこめば、まがれる竹もまっすぐになり、ねじけた心も矯めなおせると信じているかれだったが、竹童はとにかく、蛾次郎の横着と奸智と強情には、すっかり手を焼いてしまった。

こういう性質の不良なものでは、日本に天邪鬼という名があり、西洋にはキリストの弟子のうちに、ユダという男がいた。ユダの悪魔ぶりにはキリストも持てあましたし、十二使徒の人々も顰蹙して、あいつはとても、真人間にはなりませんといったくらいだ――という話を、宮内はいつか伴天連の説教にきいたことがあるので、蛾次郎もそれに近い人間かな

と考えた。
「では、なんともいたしかたがない。いつまでおまえたちを、この竹生島へ鎖でつないでおくわけにもゆかぬから、明日はふたりをむこうの陸におくってあげよう」
とうとう宮内もあきらめてこういいわたした。
「まことに、永いあいだ、手あついお世話になりました」
竹童は尋常に礼をいったが、蛾次郎は、ヘン、お粥ばかり食わせておきやがって、大きな顔をしていやがる――といわんばかり、面と瘤をふくらましてそッぽを向いたままである。
「だが？　……」と宮内はまたなにか考えて、
「明日までにはまだだいぶ間がある。たがいに顔を見ているとツイつかみ合いをやりたくなるから、向こうへゆくまでの間、これをかぶって双方口をきかぬことにしているがよい」
と、奥へいって持ってきたのは、ふるい二つの仮面である。あおい烏天狗の仮面を蛾次郎にわたし、白い尊の仮面を竹童にわたした。
それをかぶらせておいてから、宮内はも一つのほうの箱を開けてふたりの前に妙なものをならべてみせた。
なにかと思って目をみはった蛾次郎が、
「オヤ、独楽だ！」と、すぐに手をだしそうになるのを、
「まあ、お待ち」
と宮内がそれをおさえて、じぶんの両手に一箇ずつ持ち、さて、ふたりの者へ、たのむようにいうには、
「この古代独楽は、竹生島の宮にあった火独楽と水独楽という珍しいものだ。この火独楽を地に打ってまわせば、火焔のもえて狂うかとばかりに見え、この水独楽を空にはなせば、サンサンとして雨のような玉露がふる……」
「おもしろいな！」
説明をきいているうちに、蛾次郎、もう瘤のいたさを忘れて盗んでもほしそうな様子をする。
「これこれ、そうおもしろいことばかり聞いてくれては、わしが話をする意味がなくなる。まだこの独楽にはふしぎな力がたくさんあって、たとえば、じぶんの迷うことを問わんとし、または指すべき方角をこころみる時に、この独楽をまわせば自然にそのほうへまわってゆく――、などということもあるが、あまり話すと、また蛾次郎が勘ちがいをいたすから、もうそのほうのことはいうまい」
「おじさん、――じゃアなかった。神主さま、もう蛾次郎も、けっして勘ちがいなんかしないことにいたします」
「わかったわかった、ところで竹童」
「はい」
「この紅い火独楽はそなたに進上する」
「えッ！」
といったのは、もらった竹童ではなくって、それをながめた蛾次郎である。
「そ、それを竹童に？　……もったいないなあ。じゃおれにもこっちをくれるんだろう」
「やらないとはいわない。この青い水独楽は、すなわちおまえにあげようと思って、とうから考えていたくらいなのだ」
「ちぇッ、かたじけねえ」
独楽を押しいただいた蛾次郎は、そのままうしろへ引っくりかえって、鯱鉾だちでもやりたかったが、また叱られて取

りあげられては大へんと、かたくにぎって踊りだしたいのをこらえていた。
「そこでな、ふたりの者」
きッとあらたまった宮内は、まず少年の心理をつかんでおいてから、その本道を説こうとする。
「こんどはわしのいうことをきいてくれる番だぞ。よいかな。明日この島をでて、向こうの陸へあがってから、もうわしがそばにいないからよいと思って、その仮面をとるが早いか、喧嘩や斬りあいをするのでは、今日までの宮内のこころは無になってしまう」
「ごもっともでございます」
と蛾次郎、みょうなところでばかていねいな返辞をした。
笑いもしないで竹童はまじめに、
「それで、宮内さまのおたのみというのは、いったいなんでございますか」
とかたずをのむ。
「ほかではないが、ふたりの遺恨を、きょうからこの独楽にあずけてしまって、たがいに、討つか討たれるか、命のやり取りをしようという時には、この独楽で勝負をしてもらいたい。そうすれば、独楽はくだけても、そなたたちのからだに怪我はできないから」
「わかりました」
「その儀、きっと承知してくれるだろうな」
「じゃア、なんですか？」とまた蛾次郎が反問した。
「たとえば、わたしたちの争っている大鷲を、どっちのものにするかという時にも、つまり、この独楽のまわしッくらで、きめるんですか」
「そうだ、そればかりでなく、今日のような場合でも、腹がたったら独楽で勝った者のいいぶんを通すなり、または、あやまるということにしたら、なにもつかみあって湖水におぼれるまでの必要もなくなるであろう」
欲しいものは与えられ、愉快な方法はおしえられて、なんで少年の心がおどり立たずにいよう。竹童はむろんそれに異存もなし、蛾次郎も一言の不平なく、きっとその約束を守りますといって宮内にちかった。
でふたりは、いいつけられた仮面をかぶり、あたえられた独楽をかたく抱いて、奥の部屋に、今夜だけは仲よく寝こんでしまった。

割れたお仮面

一

死人の顔のように青い月があった。
にらんでいるかと思うほど冴えている。月も或る夜はおそろしいものだ。
昼は蓬莱山の絵ともみえた竹生島が、いまは湖水から半身だしている巨魔のごとく、松ふく風は、その息かと思われてものすごい。
まさに夜半をすぎている。
ザブーン！　と西浦の岩になにか当った。パッと散ったの

は波光である。百千の夜光珠とみえた飛沫である。だが、そこに、怪魚のごとき影がおどっていた。舟だ、人だ。
「やッ」
とさけんだのは舟中の男だろう。ほかに人はだれもいない。またつづいて、やッ！ という声がかかった、声というよりは気合いである。
ピューッと舟から空に走ったのは、鈎のついた一本のなわ。ガリッというと手にもどって、上からザラザラと岩のかけらが落ちてくる。
エイッ、ガリッ！ というこの物音、なんどくり返されたかわからない。そのうちに、
「しめた！」
という声。うまく投げた鈎のさきが岩松の根に引っからんだとみえる。
力をこめて手応えをためし、よしと思うとその男のかげ、度胸よく乗ってきた小舟を蹴ながし、スルスルと一本綱へよじのぼりだした。
胆も太いが手ぎわもいい、たちまち三丈あまりの絶壁の上へみごとに手ぐりついて、竹生島の樹木の中へヒラリと姿をひそませてしまった。
と。それからすぐに――。
弁天堂のわきにある菊村宮内の家の戸を、トントントンと根よくたたき起していたのはその男で、やがて手燭を持ってでてきた宮内と、たがいに顔を見合わせると、
「や」
「おお」
といったまま、中にはいって厳重に戸じまりをかい、奥の一室に席をしめて、声ひそやかに話しはじめた。
「どうなすった。こんどの合戦に、北国勢の軍師であるそこもとが、かかる真夜中に落ちてくるようでは、いよいよ北ノ庄の城もあぶないとみえますな」
「おさっしのとおりまことにみじめな負けいくさ。ここへきて貴殿に顔をあわすのも面目ないが、じつは、賤ヶ岳の一戦に、この方と佐久間盛政との意見が衝突いたし、そのためにいろいろな手ちがいを生んだので、いまさら越前へももどれず……」
深夜の客は暗然として、話す間に、その顔すらもあげなかった。宮内も、いまは浪人の身であり、まったく弓矢をすてた心ではあるが、北庄城にいたころの友が、かく負軍で逃げこんできた姿をみたり、または旧主の亡びる消息をつたえられては、さすがに一掬の涙が眼ぞこにわきたってくる。
「オオ……ではあの我のつよい佐久間どのと意見がちがって……なるほど、得て、一国の亡びる時には、そういうふうに人心へヒビの入りやすいもので」
「のみならず、かれは賤ヶ岳をすてて、先に北ノ庄へ逃げかえり、このほうの軍配すべて乱脈をきわめたりと、勝家公へざん言いたしたとやら」
「ウ、それはまたあまりなこと」
「でなくてさえ、味方の敗軍に、いらだっている主君には、手もなくそれを信じて、身どもを軍罰にかけよという命令をくだしました」
「や、では」

「北ノ庄へかえれば、軍罰に照らされて首を打たれるは必定。といって戦場にとどまれば、秀吉の手におさえられて、生恥をかかねばならぬ窮地に落ちたのでござる。で、ぜひなく、羽柴勢の目をくぐって、ここまで落ちのびて、まいったわけじゃ、ごめいわくでも、二、三日この島にかくまっておいてくださるまいか」

深沈とふけゆく座敷のうちに、こう湿ッぽい密々話。ハテナ？　ハテナ？　なんだかどこかで、聞いたことのある声だぞと、亀の子のように、のこのこと蒲団の中から首をもたげだしたのは、独楽をもらったうれしさに昂奮して、つい寝つかれずにいた泣き虫の蛾次郎。

こういうことに出ッ会すと、がんらい、ジッとしていられない性分。よせばいいのに、ソロリ、ソロリと四ツン這いにはいだして、つぎの部屋の向こうがわの、線香のようにスーと明かりの立っているところを目あてに、

「だれだろう？　そばできくと、よけいに聞きおぼえのある声だが……」

と、細目にすかして、烏天狗の仮面をつけたまま息を殺してさしのぞいた。

二

見てびっくりするくらいなら、のぞかなければいいものを、襖のすきへ仮面をつけたとたんに、

「あッ！　こいツアいけねえ」

と仰天して、蛾次郎みずから、そこにじぶんのいることを、となりの武士に知らしてしまった。

草木のそよぎにも心をおくという、落武者の境遇にある者が、なんでそれを気づかずにいよう。

イヤ、当の蛾次郎よりははるかに胆をひやしたかもしれない。

「ヤ、だれか、となりへ！」

太刀をつかんでパッと立った。おそろしく背のたかい武士。筋骨も太く、容貌がまたなくすごいようにみえたが――オオなるほどこれには蛾次郎が仰天したのも無理ではない。だれあろう、この落人こそ、柴田方では一方の軍師とあおがれていた上部八風斎――すなわち、富士の裾野にいた当時は、綽名されて鏃師の鼻かけ卜斎といわれていた人物。

蛾次郎はそのころかれの弟子であった。じつはまだはっきりとお暇もいただいてないのだから、ここで逢ったのはまずいというより運のつきだ。

「南無三。とんでもねえやつが舞いこんできやがった。こいつアどうもたまらねえ」

と、バタバタと奥のほうへ逃げこんだので、八風斎の鼻かけ卜斎は、さてこそ、秀吉のまわし者でもあろうかと邪推をまわして、そこの唐紙を蹴たおすばかりな勢い――間髪をいれずにあとを追いかけていった。

一足とびに二間ほど馳けぬけてくると、卜斎はなにかにドンとつまずいた。

「あッ」

といって、蒲団のなかから躍りだしたのは、尊の仮面をつけて寝ていた竹童である。

だが卜斎は、その背かっこうの似ているところから、これこそ、奥へ逃げこんだ小童であろうと、拳をかためてなぐりつけた。
寝ごみの不意をくったので、さすがの竹童もかわすひまなく、グワンと血管の破れるような激痛をかんじてぶッ倒れたが、とっさに枕もとへおいて寝た、般若丸を抜きはらって、かれの足もとをさッと薙ぎつける。
「うむ」
と卜斎一流の妖気みなぎる含み気合いが、それをはねこえて壁ぎわへ身を貼りつけると、
「オオ、なんじは鞍馬の竹童だな」
らんらんとして眸を射て、こなたのかげをすかしたものだ。ハッと思って、竹童は自分の顔に気がついた。
卜斎の鉄拳をくったせつなに、仮面は二つに割られてしまった。そして二つに割られた仮面が、畳の上に片目をあけて嘲笑っている。
「なんでおいらの寝ているところをぶンなぐった。裾野にいた鏃鍛冶、顔は知っているが、怨みをうけるおぼえはない」
「ではなにか、今この方が宮内と話をしていたのを、ぬすみ聞きしていたのは、きさまではなかったか」
「それは向こうに寝ていた泣き虫の蛾次郎だろう」
「や？　――蛾次郎もここにおったか。ちッ、ちくしょうめ」
と、そのほうへ走りだそうとしたが、卜斎、なにをフト思いなおしたかにわかに大刀の柄をつかんでジリジリと竹童のほうへよってきながら、
「いやいや、たとえ怨みがあろうとなかろうと、ここへおれが潜伏しているということを知られた以上は、もうきさまも助けておけない」
「なにッ」竹童も身がまえを直した。
「秀吉の陣へ内通されれば、八風斎の運命にかかわる。気の毒だが生命はもらうぞ――だめだだめだ！　鞍馬の竹童ジリジリ二寸や三寸ずつ後退さりしても、八風斎の殺剣がのがすものか、立って逃げればうしろ袈裟へひと浴びせまいるぞ、――ジッとしていろ、運が悪いとあきらめて、そのままそこに、ジッとしていろ」
スラリと青光りの業物を抜いた。
戦国時代の猛者が好んでさした、胴田貫の厚重ねという刀である。竹童ぐらいな細い首なら、三つや四つならべておいても優に斬れるだろうと思われるほどな。――
そいつを抜いて、鼻かけ卜斎、ダラリと右手にさげたのである。そして、
「ジッとしていろ！」
とおそろしい威迫を感じる声で、ズカリとくるなり足をあげて、般若丸を構えていた竹童の小手を横に蹴った。しかも、その足力がまたすばらしい、あッというと、般若丸はかれの手をもろくはなれて、ガラリと向こうへ飛ばされてしまった。
「これでおれの力量はわかったろう、じたばたするなよ、とてもむだだ。――ジッとしていろ！　ジッとしていろ！　痛くないように斬ってやる」
こういいながら胴田貫、おもむろに切ッさきを持ちあげて、ヌッと竹童のひとみへ直線にきたと思うと、パッと風を切って卜斎の頭上にふりかぶられた。

なんで、これがジッとしていられよう。そのすきに鞍馬の竹童、グッとうしろへ身を反らしたが、落とした刀へは手がとどかず、立って逃げれば、われから卜斎の殺剣へはずみを加えてゆくようなものだし？　……

絶体絶命。

いまは、のがれんとするもその術はなく、この五体、ついに鮮麗な血をあびるのかと、おもわず胸をだきしめる、とその手のいったふところに、さっきの火独楽が指にさわった。

お小姓とんぼ組

一

賤ヶ岳の総くずれから、敵営、秀吉方の目をかすめて、やっと世をはなれた竹生島に、旧知の菊村宮内をたよってきた――柴田の落武者、上部八風斎の鼻かけ卜斎。

草木のそよぎにも、恟々と、心をおどろかす敗軍の落伍者が、身をかくまってもらおうと、弁天堂の神主、宮内の社家にヒソヒソと密話をかわしていると、止せばよいのに、でしゃばりずきな泣き虫の蛾次郎が、ワザワザ寝床からはいだして、それを、ぬすみぎきしていたのを、卜斎、気取るや否や、おそろしい形相で、かれを奥へ追いまくした。

南無三――もとの主人卜斎だったかと、仰天した蛾次郎は、すばやく風を食らって逃げだした。けれど、その禍いは、なにも知らずに寝こんでいた、鞍馬の竹童の身にふりかかって、すでに、自身のあるところを知られては、秀吉のほうへ、密告されるおそれがある、きさまも生かしてはおけぬ、目をつぶって、覚悟をしろ、逃げようとしても、それは無駄だぞ――と、おそろしい威迫の目をもって、胴田貫の大刀を面前にふりかぶった。

「――ジッとしていろ！　ジッとしていろ。痛くないように斬ってやる！」

卜斎の足の拇指が、蝮のように、ジリジリと畳をかんでつめよってくるのに、なんで、鞍馬の竹童、ジッと、その死剣を待っていられるものか。そんな無意義な殺刀にあまんじる理由があろうか。

といって、身をまもる唯一の愛刀、般若丸はそのまえに、卜斎の足蹴にはねとばされて、拾いとって立つ間はない。しかも、寸秒の危機は目前、おもわず、額や腋の下から、つめたい脂汗をしぼって、ハッと、ときめきの息を一つ吐いたが――その絶体絶命のとっさ、ふと、指さきに触れたのは、さっき、菊村宮内からもらって、ふところに入れていた、希代な火独楽！　その火独楽だ。

二

宵に、神官の菊村宮内が竹童と蛾次郎をならべておいて、蛾次郎には青い水独楽をあたえ、竹童にはあかい火独楽をくれて――その時ふたりにいったことには、これは、竹生島の弁天に、歳久しく伝わっている奇蹟の独楽だといった。

宮内は、この独楽をもって、仲のわるい二童子の手をむす

ぼうとしたのである。だから、その奇蹟についてはあまり、多くを語らなかったが、火独楽水独楽、どっちも、なにかの不可思議力を持つものにちがいない。

だが、――竹童の今は、しんに、間一髪をおく間もない危機である。もとより、かれが、卜斎が大刀をふりかぶったとたんに、ふところの独楽をつかんだとはいえ、ふかい、冷静な、思慮ののちにそうしたのではない。寸鉄もおびていない自衛意志が、おのずから独楽をつかませたのだ。

それが、たとえば一個の石にすぎなくとも、この場合、竹童の手は、その石へふれていたにちがいない。

「なんできさまたちの刃にたおれるものか！」

口にはださないが、竹童の顔筋肉はそういう風に引きしまっていた。

そして、独楽をかたくにぎった。

遊戯に、まわすべき独楽なら、紐のこともかんがえるが、いまの場合そうでない。武器として、目つぶしとして、敵が大刀へ風を切らせてくるとたんに、卜斎の眼玉へ、それをたたきつけようと気がまえているのだ。

卜斎も、竹童のたいどをみて、うかつにはそれをふりおろしてこない。ジリ、ジリ、と一寸にじりに寄りながら息をはかり、気合いをかけたが最後、ただ一刀に、息の根をとめてしまおうとするらしい。

「まいるぞッ！」

と、いきなり魔獣のような気合いがかかった。

はッ――として、竹童の五体も、おもわずその凄まじさにすくんでしまおうとしたせつな――

「ええッ」

とわめいた卜斎の大剣が、電火のごとく竹童の頭上におちてきた。あッ――といったのは刀下一閃のさけび、どッと、血けむりを立てるかと思うと、必死の寸隙をねらって、竹童の右手がふところをでるやいなや、

「なにをッ」

と一声、待ちかまえていた独楽のつぶてを、パッと卜斎の眉間へ投げつけた。

すると、まっ赤な火独楽は、文字どおり、一条の火箭をえがいて、しかも、ピュッとおそろしい唸りを立て、鼻かけ卜斎の顔へ食いつくように飛んでいった。

「おお、これはッ？」

と、おどろいた卜斎、斬りすべった厚重ねの太刀を持ちなおす間もなく、火の玉のように宙まわりをしてきた火焔独楽をガッキと刀の鍔でうけたが、そのとたんに、独楽の金輪と鍔のあいだから、まるで蛍籠でもブチ砕いたような、青白い火花が、鏘然として八方へ散った。

「うつッ……」

と、卜斎が、片手で眼をふさいだ間髪に、竹童はいちはやく、般若丸の刀をひろって、バラバラッと廊下へでたが、それと一しょに、奇蹟の火焔独楽、ポーンとはね返って、竹童の手もとへ舞いもどってきた。

いかにもふしぎな魔独楽の力よ！

とあやしまれたがのちによく見れば、独楽の金輪の一端に、ほそい金環がついていて、その金環から数丈の紐が心棒にまいてあるのだ。はねもどったのは、独楽それ自身の魔力では

なく、竹童の帯に結んであった紐の弾撥。手もとへおどり返ってきたのは、とうぜんなのであった。

三

竹童をとり逃がして卜斎は、不意の燦光に目をいられて、一時は、あたりがボーッとなってしまったが、廊下を走ってゆく足音を聞きとめると同時に、

「うぬッ」

憤然として、その真ッ暗な部屋からかけだした。

そして、いきなり廊下から、庭先へ降りようとして、やみのなかにそれと見えた、沓脱石へ足をかけると、こはいかに、それは庭の踏石ではなくて、ふわりとしたものが、足の裏にやわらかくグラついたかと思うと、

「ぎゃッ」と、蛙のようにつぶれてしまった。

それは、竹童より先ににげた泣き虫の蛾次郎で、いま、床下へもぐりこもうとしているところへ、卜斎の足音がしてきたので、そのまま、縁の下へ首をつっこんだなりに、石の真似をしていたものらしい。

あの勢いで、大兵な、卜斎に踏みつけられたのだから、蛾次郎もギャッといって、ぴしゃんこにつぶれたのはもっともだが。

おどろいたのは、むしろそれへ足を乗せた卜斎のほうで、まさか、やわらかい石だとは、夢にも思わなかったはずみから、よろよろとツンのめって、あやうく、向こうの梅の老木に頭をぶつけ、ふたたび、目から火のでるつらい思いをするところだった。

「やッ……おのれは蛾次郎だな」

気がつくと卜斎は、いきなり蛾次郎のえりがみをつかんで、ウンと、そとへ引きずりだそうとした。

蛾次郎は、半分もぐりこんだまま縁の下の土台にかじりついて、

「ごめんなさい！　親方、親方！」

と土龍のように、でようとしない。

なにしろ蛾次郎は、この卜斎ほどおっかないものはないと心得ている。裾野にいた時分から、気にいらないことがあると、すぐに鏃をきたえる金槌で、頭をコーンとくるくらいはまだやさしいほう、ふいごで拳骨を食ったり、弓のおれでビシビシとどやされたおそろしさが、頭のしんにしみこんでいる。

しかもまだその当時の、弟子師匠の関係を断っているわけではなく、卜斎が北ノ庄へかえるとちゅう、目をくらまして逃げだしていたところだから、見つけられたがさいご、こんどこそ、どんな目に遭わされるかと、いきた空もないのである。

「たわけめ。でろ、ここへ！」

とどなりながら、卜斎はすこし苦笑をもらしてしまった。

いまでも、裾野当時の気持で、じぶんへあやまるのに、親方親方と呼んだところが、いくぶんか正直らしいと、おかしくなって、この蛾次郎には、竹童へ向かったような、ああいう本気にはなれなかった。

「かんべんしてください、親方、後生です」

「でろと申すに！」

「あッ、苦しい……いまでます、いま……」
「このバカッ」
力まかせに引ッ張りだして、イヤというほど叩きつけようとすると、蛾次郎、頬ッぺたをおさえて飛び退きながら、
「親方、どうも、お久しぶりでした」
ピョコンと、おじぎをして、たくみに、あとの拳骨を予防した。
「蛾次郎！」
「へいッ」
「きさまはだれにゆるされて、方々かってにとびまわっているんだ」
「もうしわけございません」
「まだ、きさまにひまをだしてはいないぞ」
「承知しています。これから、けっして気ままにあそんで歩きません。はい、親方の腰についております」
「また、なんのために、この竹生島へなどきているのだ」
「琵琶湖で土左衛門になるところを、ここの神主のやつが助けやがったんで……わたしがきたいと思ってきたところじゃありません」
「竹童もか」
「そうです」
「武田伊那丸やあの一党の者は、その後、どうしているか、なにか、うわさを聞いているだろう」
「あのなかの、小幡民部や咲耶子や山県蔦之助などは、小太郎山のとりでに、留守番をしているそうです」
「そして、伊那丸は？」
「加賀見忍剣と木隠龍太郎をつれて、しばらく京都におりましたが、そのうちに、なんでも秀吉の陣をとおって桑名から東海道のほうへ帰っていったという話です。……けれども、それは、わたしが見たわけじゃありませんから、親方、ちがっていても、かんにんしてください」
と蛾次郎は、卜斎の顔色が、だんだん和らいでくるのを見ると、甘ッたれたような調子でしゃべりだしてくる。
「ウーム。秀吉は伊那丸に好意をよせて、暗に、かれを庇護しているものとみえる。だが……」
というと、卜斎は、なにか自分の前途について、だいじな方針をかんがえかけてきたとみえ、逃げたる竹童のことはともかく、どっかりと、庭石へ腰をおろして腕ぐみをしてしまった。
「――だが、家康は伊那丸をにくんでいる。たしかに、かれを亡き者にせねば、ある不安から離れられまい。伊那丸も家康を武田家の仇とねらっているのは知れきったこと……」
「そ、その通りですよ、親方」
と、蛾次郎は、そばから、おちょぼ口をつぼめて、
「これからまた、富士山のまわりで、すさまじい戦があるとすりゃ、伊那丸と家康の喧嘩でしょうよ。家康も東海道の名将だが、伊那丸のほうにいる忍剣や龍太郎というやつも強いからな。それに、小太郎山にのこっている小幡民部というやつが、たいへんな軍師だそうで」
いいかけたところで、また、卜斎の顔色をみて、
「だが、親方には、かなわねえやきっと――」
と前言をあいまいにした。
「おれも柴田家から爪弾きをされてみれば、なんとか、ここ

で行く末の方針を立てなければならない場合だが」
「はい、そうです」
と深いわけもわからぬくせに、卜斎が問わず語りにつぶやくのへ、蛾次郎、いちいちあいづちをうって、じぶんも腕ぐみのまねをしている。
「ウム」
それには相手にならないで、卜斎はなにかひとりでこうなずき、上に着ていた陣羽織を脱ぎすてて、
「しばらくの間、またもとの鏃鍛冶にばけて、世間のなりゆきを見ているとしよう。そのうちには、なんとかいい運がひらけてくるだろう」
「じゃ親方、また裾野の人無村へかえって、テンカンテンカンやるんですか」
「どこに住むかわからないが、てめえもこれからは、無断でほうぼうとんであるくと承知しないぞ」
「へ、へい」
「どこまでもおれについていろ。そして一人前の鏃師になったら暇をくれてやる。お、そんなことはとにかく、おれがここへきたことを、竹童に知られてしまったから、もう永居をしているのはぶっそうだ。鏃師卜斎にすがたをかえて、夜の明けないうちに、竹生島をでるとしよう」
卜斎は陣羽織をすててつぎに、手ばやく籠手の具足をとり、脛当の鎖を脚絆にかえて、旅の鏃師らしいすがたにかわった。そして蛾次郎に、
「菊村宮内どのへ、ちょっとお暇をつげてまいるから、おまえも、そのあいだに支度をして、ここに待っているんだぞ」
と、いいのこして、そこを立とうとすると、なんだろう？周囲の闇――樹木や笹や燈籠のかげに、チカチカとうごく数多の閃光。
槍だ――槍の穂先だ。
いつのまにか、卜斎と蛾次郎のまわりには、十数槍の抜身の穂尖、音もせずに、ただ光だけをギラギラさせて、芒のように植えならんでいた。
「さては、秀吉の陣から、もう追手がまわってきたな」
卜斎ははやくも観念して、飾りをとった陣刀を脇差にぶっこみ、りゅうッ――と抜くがはやいか、その槍襖の一角へ、われから血路をひらきに走った。

四

「親方――ッ」
と泣きごえをだした蛾次郎は、そのとたんにいきなり、突っかけてきた槍の柄にむこうずねをたたかれ、ワッといって、打ッたおれた。
あとはおそらく、蛾次郎じしんにも、むちゅうであったにちがいない。とにかく、ひとりや半分の敵ではなく十数人――あるいは二、三十人もあったろうと思われる甲冑の武士が、なにも知らずにいるところへ、なにもいわずに、ズラリと槍の尖をそろえてきたのだから、胆は天外に吹ッとんでいる。
一どたおれた蛾次郎は本能的にはねかえって、起きるが早いか、そばの大樹へ、無我夢中によじのぼった。

猿のように梢へのぼるとちゅうでも、秀吉方の甲冑武者に、槍の柄でピシリッと叩かれたが、それさえ、必死であったので、痛いともなんとも性にこたえなかった。

そして、運よく大樹の枝先が、弁天堂の上へおおいかぶさっていたのを幸いに、かれはヒラリと身をおどらして、枝から屋根へ飛びうつり、てんてんと影をおどらせて、やっと竹生島の磯へかけ下りてきた。

するといっぽうの急坂からも、血路をひらいた卜斎が、血刀を引っさげてこの磯へ目ざしてきたので、ふたりは前後になって磯の岩石から岩石を飛びつたい、やがて、一艘の小舟を見つけだすとともに、それへ飛び乗って櫓をおっとり、粘墨のように黒い志賀ノ浦の波を切って、いずこともなく逃げのびてしまった。

それよりまえに、あやうく卜斎の殺刃をのがれて、堂の裏に姿をかくしていた鞍馬の竹童は、ほど経てあたりをうかがいながら、そっと、ようすをながめにでた。見ると、弁天堂のまえへ、大勢の武士をつれて篝火を焚かせている者は、かの賤ヶ岳で勇名をはせた、加藤虎之助の臣、井上大九郎であることがわかった。

思いがけないところで、大九郎にあった竹童は、かれの口から、その後の伊那丸の消息をくわしく知ることができた。

すなわち、武田伊那丸と従臣のふたりは、大九郎が桑名の陣を引きはらうと同時に、秀吉にわかれて小太郎山へかえるべく、徳川家の城地へ危険をおかして進んでいったという話。

――

それを聞くと、竹童は、すぐにあとをしたって、三人に追いつき、ひとまず小太郎山のとりでへ帰ろうと決心した。そののちに、琵琶湖の上で乗り落ちたまま行方をうしなったクロをさがす方針もかんがえ、また、一党の人々にも、久しぶりで会いたいと願った。あの、温厚にして深略のある小幡民部、あのやさしくて凛々しい咲耶子、あの絶倫な槍術家と弓の名人である、蔦之助や巽小文治にもずいぶんながく会わなかった。あの人たちは、みなじぶんを心の底からいとしんでくれる、骨肉のようなやさしさと、温味をもっている。

その人たちに久しぶりで会おう。

小太郎山は、乱世の中にあってゆるがず、みだされずにある、義血の兄弟たちの家だ。その家へ帰ろう。こう思うと矢も楯もなく、竹童は、神官の菊村宮内に、きょうまでうけた親切の礼をのべ、井上大九郎の舟に送られて、ほのぼのと夜の白みかけた竹生島へ別れをつげた――。

もとより、辛苦になれている竹童には、野に伏し樹下にねむることも、なんのいとうところではなく、また鞍馬の谷で馴らした足には、近江街道の折所や東海道の山路なども、ものの数にはならないので、なみの旅人のはかどるよりは数日もはやく里数をとって、間もなく、家康の領地、遠江の国へ近づいてきた。

しかしそこまでいって、ハタと竹童がとうわくした、というのは、いたるところの国境に、徳川家の関所がきびしく往来をかためていて、めったな者は通さないという風評であった。

で、やむなく、街道を遠くはなれて、人もとおらぬ山河を越え、ようよう遠江の国へはいったが、こんな厳重さでは、さきに桑名を立った伊那丸たちも、やすやす、無事にここを通

れたとは思われない。なにかの危険にであっているにちがいない。
「ああ、だれかに、ご安否をたずねてみたいが、めったなものに、そんなことをきけば、みずから人のうたがいを招くようなものだし……」
こう思いながら、鞍馬の竹童は、野末にうすづく夕陽をあびて、見わたすかぎり渺茫とした曠野の夕ぐれをトボトボと歩いていた。
ここは、どこの野辺ともわからないが、いま渡ってきた川の瀬には、都田川という杭が立っていた。
なお、はるかにあなたの野のはてには、一抹、霞のように白い河原がみえる。あとは、西をあおいでも、北を見ても、うっすらした山脈のうねりが黙思しているのみだ。
微風もない晩春の夕ぐれ、――ありやなしの霞をすかして、夕陽の光が金色にかがやいている。いちめんの草にも、霞にも、竹童の肩にも――。
するとやがて、耀々とした夕がすみのなかから、あまたの青竹と杉丸太をつんだ車が、ガラガラと竹童のそばを通りぬけた。そのあとについて、八、九人の足軽と十数名の人夫たちが、斧や、鉞や、木槌などをかついで、なにかザワザワと話しながら歩いてゆく。
すれちがった時に、なんの気もなく竹童がふりかえると、一ばんさいごについてゆく足軽が、一本の立て札をかついでいる。
生あたらしいその高札の片面に、なにか墨色もまざまざと書いてあったが、その文字のうちに、ふと、武田と読めた一行があったので、竹童はハッと胸をさわがしたが、
「あ、もし」
と、呼びとめておいて、つとめて冷静をよそおいながら、
「浜松のご城下へゆくには、これをまっすぐにゆけばいいんですか……」
と道にまよっているふりをして、そのあいだに、足軽が肩にかけている高札の文字を読もうとしたが、意地わるく、文字面の裏を向けていて、よく読むことができなかった。
「うむ、ご城下へは一本道だが、まだだいぶ道のりがあるぜ」
「じゃ、日が暮れてしまいましょうね」
「いそいでゆきねえ。ぶっそうだから」
曠野にさまよう子供と見て、その足軽は、さきへ青竹をつんでいった車やつれの人数からひとりおくれて、こまごまと、十字路の方角や里数をおしえてくれている。
「どうもありがとうございました」
竹童はその道しるべより、肩にかついでいる高札のことを、なんとかして聞きほじりたいがと苦慮したが、いきなりたずねだすのもさきの疑いを買うであろうと、わざと空とぼけて、
「それでよく道はわかりました。ですけれど、おじさん、この広い原ッぱは、いったいなんという所なんでしょうね」
「おまえは、それも知らずに歩いているのか。子供ってえものはたわいのねえものだ。ここはおまえ、甲斐の信玄と家康さまとが、鎬をけずった有名な戦場で、――ほれ、三方ヶ原というところだ」
「あ、ここが、三方ヶ原でございますか。――なるほど、広いもんだなあ。そして、おじさんたちは、やっぱり徳川さま

のご家来ですか」
「そうよ、おれたちは、浜松城の足軽組だ」
「いまごろから、あんな青竹や松明をたくさん車につんで、いったい、どこへおいでになりますので？」
「おれたちか……」足軽は、ちょッといやな顔をして、
「これから都田川の手まえまでいって、夜明かしで、人の死に場所をこしらえにかかるんだよ」
「へえ、人の死に場所を」
「うむ。つまり、刑場のしたくにゆくんだ」
「ああ、それで、矢来にする竹や丸太や、獄門台をつくる道具をかついで、みんながさっき向こうへいったんだな」
「そうだ、おまえも、こんなこわい話を聞いてしまうと、たださえさびしい三方ヶ原が、よけいにさびしくなって歩けなくなるぜ。だがまだいまのうちなら、夕陽がキラキラしているからいい、はやく、いそいでゆくことにしねえ」
クルリとふり向くと、さきの者とは、だいぶ距離ができたのにびっくりして、足軽の男は、急にいそぎ足に別れかけた。
「あ、おじさん。もしもし」
竹童は、あわててそれを呼びかえしたが、べつに、どういう口実もないので、とっさの機智を口からでまかせに、
「腰の手拭が落ちますよ」といった。
「ありがとう」
と、さきの男が、うっかり釣りこまれている間に、かれは、すかさず、矢つぎ早にさぐりをいれた。
「あの、いまおじさんがいった刑場で、いったいだれがいつ斬られることになるんです」
「よくいろんなことをききたがるな。子供のおまえにそんなことを話してもしかたがねえが、男は一どは見ておくものだそうだから、あさっての夕方、都田川の竹矢来のそとへ見にきねえ。この高札に書いてある通り、こんど徳川さまの手でつかまった、武田伊那丸とその他二人の者がバッサリとやられるのだから」
もう、うるさいと思ったか、こんどはそっけなくいいはなした。肩の高札を持ちかえると、ふり向きもせずにタッタとさきの人数を追いかけていった。

五

ゆき別れた足軽のすがたが半町ばかり遠ざかると、生ける色もなく、そこに取りのこされた竹童は、
「ウウム……」
髪の毛をつかんだまま、よろよろと、草のなかへ腰をついて、
「た、たいへんだ」
身をゆすぶッて、もだえだした。
「伊那丸さまが――あとのふたりも？　――」
くわっと、眼をひらいて、宇宙に眸をさまよわせたが、
「こうしてはおられない！」
また、ものぐるわしくそこを立った。
いても立ってもいられない焦燥である。
その驚愕とうろたえのさまは、鞍馬の竹童として、いつにない取りみだしようだ。はね起きたが、その足を向けようと

する方角にも、迷いともだえがからんでみえる。
「アア、どうしたらいいだろう」
三方ヶ原は渺として、そこには、ただようようにうすれてゆく夕陽の色があるばかりだ。
「はやく、小太郎山にのこっている、一党の人たちへ、この大事を知らせるのが、一ばんいい工夫だけれど、そんなことに、四日も五日もかかっていては間に合いはしない。エエ、どうしたらいいだろうッ……」
歯を食いしばったまま、湧きたつ胸を、両手でギュッとだきしめた。
「どうして、伊那丸さまが……おまけに龍太郎さまや忍剣さまでついていて、やみやみと、徳川家の手へつかまっておしまいなされたのであろう。アア、だけれど、いまはそんなことを考えている間などない。おいらの頭の上へ降りかかってきた使命は――どうして、はやくこのことを、小太郎山へ知らせてあげるか、どうしたら伊那丸さまをお助けすることができるか、この二つだ！　この二つが目のまえの大事だ」
ひとり問い、ひとり答えて、はては当面の大難にあたまも惑乱して、ぼうぜんと、そこに、腕ぐみのまま立ちすくんでしまったのである。
すると、野原のどこからか、ワ――ッと、元気のいい声が、潮のように近づいてきたかと思うと、やがて青々とした草の波から、おなじ年頃の少年ばかりが二十人ほど、まっ黒になって、竹童のほうへなだれてくる。
「や、なんだろう？」
ぼうぜんとしていた竹童は、その気配に顔をあげたが、ようすがわからないので、いち早く、草のなかに身をふせてしまった。
姿をかくして、眸だけをジッとそれへ向けていると、あまたの少年たちは、いずれも、前髪だちで、とんぼ模様のついたそろいの小袖、おなじ色の袴をうがち、なにか、大きな動物に綱をつけて、その動物の力にワイワイと引きずられてくる。
見ると、それはクロだ。
竹童の愛鷲――あの大きな鷲だ。
とんぼのついたそろいの小袖を着ているところでは、これこそ、浜松城で有名な、お小姓とんぼの少年たちにちがいはない。そして、このとんぼ組の餓鬼大将とかげ口をいわれているものは、結城秀康の子で家康には孫にあたる、徳川万千代である。
万千代は、いまもこのとんぼ組の小姓たちの先達となって、しきりに大鷲の背なかへ乗ろうとしては落ち、乗ろうとしては、翼にハタかれて、ぶッたおれた。
足に結びつけた、綱にすがりついている多くの小姓も万千代も、手や足にすり傷をこしらえて血だらけになっているが、さすがに、戦国の少年、三河武士の卵たちである。あくまで鷲と力をあらそって、自由にせずにはおかないふうだ。
竹童は、われを忘れて草の中から立っていた。

独楽だまし

一

草の嵐にうすづく夕日。

日の暮れるのも忘れてしまって、三方ヶ原の奥へ奥へ、鷲にひきずられてゆくとんぼ組のお小姓たち。

鷲をオモチャにしているのか、鷲にオモチャにされているのか、ともすると、あべこべに、空へつるしあげられそうになるのを、からくも、一本杉の根ッこへ、その手綱を巻きつけて食いとめたとたんに、

「あア、くたびれた」

と、ヘトヘトにつかれたこえを合わせながら、

「休もう」

「休もう」

「休んでからまた飛ぼう！」

と、これでも鷲のつばさと一しょに、飛んできた気でいるのだからたわいない。

見ればみな、なつめのような眼をもった、十二、三から十五ぐらいまでの前髪少年。浜松城のお小姓であれば、しかるべき家柄の息子たちにはちがいないが、城下からこんなところまで、鷲と取っくんできたのだからたまらない、とんぼぢらしのおそろいの小袖も、カギ裂きやら泥だらけ。

なかには、手や頬ッぺたをすりむいて、ざくろみたいになっている者、鼻血をだしておさえている者、髷の草ッ葉がとれないでこまっているもの、脇差の鞘だけさしてすましているもの。——どれもこれも弟たりがたく兄たりがたき腕白顔だ。さだめし、屋敷へかえったのちには、母者人からお小言であろう。

お山の大将おれひとり——という格で、中にまじっている徳川万千代は、みんなと一しょに、つなぎ止めた大鷲を取りまきながら、

「やあ、金光りの眼で、ギョロギョロとにらんでいるわ。怒るなおこるな、いまに餌をやるからな。余一、余一、さっきの餌を持ってこい」

と、鞭をあげてさしまねいた。

「はい」

というと、とんぼ組の中でも一番チビなお小姓余一、にわとりの死んだのを、竹のさきにかけて、万千代の手へ渡した。

「おお、鷲のごちそう」

と一同にみせて、笑わせながら、万千代はそれを猛禽の鼻ッ先へ持っていった。そして、くちばしのそばへぶらぶらさせたが鷲は横をむいて、その匂いすらかごうとしない。

業を煮やした万千代は、意地になって、

「こりゃ食え、食え。くれたものを、なぜ食わんか」

と、よけいに突きつけると、うるさいとでも感じたか、金瞳黒羽の大鷲、嵐に吹かれたようにムラムラと満身、逆羽をたててきた。

と思うと——畳二枚ほどは優にある両の翼が、ウワーッと上へひろがって、白い腋毛が見えたから、びっくりしたお

小姓とんぼ。
「そら――ッ」
とまわりを飛びはなれたが、偉大なる猛禽のつばさが、たッたひと打ち、風をあおるとともに、笑止笑止、まるで豆人形でもフリまいたように、そこらの草へころがった。
「アー痛い」
「オーひどい」
やがてめいめい、腰をさすって起きあがってみると、鷲は杉の根もとにケロリとして、とんぼ組の諸君、なにを踊っているんです、といわないばかりの様子である。
だが、えらいやつがいた。
たッたひとり、いまの羽風にも倒されずに、鷲のそばに突っ立ったまま、ジッと腕ぐみをしている少年。
お小姓とんぼのなかにも、あんな強胆な者がいたかしら？
とみんなが眼をみはって見ると、ちがッてるちがッてる、肩つぎのある筒袖に、よごれきった膝行袴を穿き、なりにふさわぬ太刀を差して、鷲にも負けない眼の持ち主。
浜松城の小姓組には、こんなきたない小僧はいない。
「だれだ、あいつは？」
「いつのまに、どこから降ってきおったのじゃ」
ぞろぞろと集まった。
そして、こんどは鷲よりも、この小僧に好奇の目をそそいだ。けれど、そこに黙然と立った鞍馬の竹童は、じぶんをとり巻いてジロジロと見る、小姓たちのあることなどは忘れはてて、
「オオ、おまえはクロじゃあないか」
と、心のそこから、いっぱいななつかしさを、無言に呼びかけているのである。――
ああ、ずいぶん久しぶりだったねえ――
そう思うと、竹童は、なんだかボッと顔が赤くなる気がした。かれの愛着とあこがれは、不意にめぐり会ったクロを見て、やさしく動悸を打っていた。
そこに動物と人との、なんのへだたりもなく、
「おまえを蛾次郎にぬすまれてから、おいらはどんなに諸国をさがし歩いていたろう。波のあらい北の海、吹雪のすさぶ橡ノ木峠、それから盲目になってまで、京都の空へ向かっても、おいらは、クロよ、クロよと呼んでいた。そのかいがあって、やっと、天ヶ丘で蛾次郎とうばい合いをしたかと思うと、おまえはまた、ふたりを琵琶湖へふりおとしたまま、どこかへ姿を消してしまった――さあ、それからも竹生島にいるあいだ、おいらは、朝となく夜となく、どれほど空を気にしていたか知れやしない……だがよかったなア、いいところでめぐり会ったなア。わかるかい、おぼえているかい？　この鞍馬の竹童の顔を……」
と、口にはださないが、熱い思慕をこめて、ジイッとみつめているうちに、思いもうけぬ邂逅の情が、ついには、滂沱の涙となって目にあふれてくる。
そして、なにげなく愛撫の手が、クロの襟毛へ伸びようとすると、
「これッ」鞭をかまえながら、徳川万千代、
「わしの大事な飼い鳥へ、なんで手をふれるのじゃ」
「あ」

竹童はその声に、はじめてわれに返ったように、万千代のすがたと、あたりに群れているとんぼ組の少年たちを見まわした。

そして、だまって、頭をさげた。

「なんだ、おまえはッ。どこの子だ」

「わたくしは」

「あやしい小僧じゃ、敵国の間者であろう。おじいさまのお城へつれて、役人の手へ渡してくれる」

「アアもし、けっして、そんな者ではございません。わたくしは、たびたび東海道へもきております、伊吹村の独楽まわしです」

「なに独楽まわしじゃ？」と、みんなどよめきだして、

「独楽まわしなら廻してみろ！　うそをついたら承知せんぞ」

と、腕まくりをして見せた。

「ハイ。独楽のご用ならおやすいこと、商売ですから、お望みにまかせてまわします。ですが、わたくしが首尾よく芸をごらんにいれましたら、そのご褒美には、なにがいただけるでございましょう」

「鳥目を投げてやる」

「いえ、お鳥目はいりません。そのかわりに、ひとつのお願いがございますから」

「では、扇子がほしいか、きれいな巾着がのぞみなのか」

「いえいえ、わたくしのお願いと申すのは、この鷲に乗らしていただきたいのです。はい、上まであがりましたら、すぐにまた降りてまいりますから」

「これへ乗るッて」

万千代は目をまるくして、

「そんなことができるのか」

「できますとも。伊吹の山にいたころは、毎日、鷲や鷹をあい手にあそんでいたわたくしです」

たわいのないお小姓とんぼは、興にそそられて、一も二もなくかれのことばを信じてしまった。そして竹童にむかって、はやく独楽をまわせ、独楽をまわしたら鷲をかしてやる、とせがんだ。

「じゃ、まわしますから、ズッとそこを開いてください」

かれはどこかの町で見かけた旅芸人の所作を思いうかべて、わざと、興をそえながら、杖でクルリと円形の線をえがいて、

「――そもそも独楽にもいろいろございます、古くは狛江の高句麗ゴマ、島からわたった貝独楽も、五色にまわる天竺独楽も、みんな渡来でございます。そこで日本独楽のはじまりは、行成大納言、小松つぶりに村濃の糸をそえまして、御所でまわしたのがヤンヤとはやりだしました初め。さあそれからできましたこと、できましたこと、竹筒の半鐘独楽をはじめとしまして、独楽鍛冶もたくさんできました。陀羅ゴマ銭ゴマ真鍮ゴマ、ぶんぶん鳴るのが神鳴りゴマ、おどけて踊るが道化ゴマ、背のたかいは但馬ゴマ、名人独楽は金造づくり、豆ゴマ、賭ゴマ、坊主ゴマ、都ではやっております。そこで手まえのあつかいますのは、近江は琵琶湖の竹生島に、千年あまり伝わりました、希代ふしぎな火焔独楽――はい、火焔独楽！」

と、ここに竹童が、にわか芸人の口上をうつして、弁にまかせてのべ立てると、万千代はじめ、とんぼ組、パチパチと

手をたたいて無性にうれしがってしまった。
だが、竹童は、真剣である。
口に道化ても肚のそこでは、たえず、伊那丸の危急をあんじているのだ。
さきに、都田川の刑場へ、したくにいそいでいったあの足軽のはなしが事実ならば――
武田伊那丸と忍剣と龍太郎とが、むなしく徳川家の手に縛されて、あさっての夕ぐれ、河原の刑場に斬られるという、あの高札が事実ならば――
じつに、武田一党の致命的な危難は、目睫にせまっているのだ。
竹童の胸がなんで安かろうはずはない。かれは、一刻もはやく、この大へんを、小太郎山のとりでへしらせたいともだえている。どうしても、四、五日かかる道のりのある小太郎山へ、今夜のうちに、かけつけたいと苦念している。
とうてい、人の力でおよばぬことをなさんがために、竹童は心にもない大道芸人のまねをするのだ。見ているお小姓とんぼはおもしろかろうが、ああ、かれには涙の芸であった。

二

「さあ、それから、それから――」
と、輪になっている前髪たちは、待ちきれないで、あとをせがんだ。
きわどいところで、竹童はたくみにおッとりして、
「さ、火焔独楽の曲まわし、いよいよかかりますがそのまえに、ちょっと、おうかがいしたいことがございます。どうか、話してくださいまし」
「なんじゃ？　独楽まわし」
「あの、近ごろ浜松のご城下で、武田伊那丸という方が徳川さまの手でつかまったそうですが、それは、ほんとでございますか」
「捕まったのはまことじゃ、家来のやつふたりも一しょに」
「ああ、では……」
思わず、あおざめたかと思う顔を、むりに微笑させて、
「やっぱり、うわさはまことでございましたか。それで、さだめし家康さまもご安心でございましょう。けれど伊那丸や家来のふたりも、なかなか智勇のある者とききましたが、どうしてそんなに、たやすく捕まってしまったのでしょう？」
「いいではないか、そんなこと。早くそれより独楽をまわして見せい」
「はい、いままわします。ですけれど、じつはこのさきの都田川で、そんな高札を見ました時に、仲間の者と賭をしたのでございます」
「じゃ、話してやるから、それがすんだら、すぐに火焔独楽をまわすのじゃぞ」
「ええ、まわしますとも、まわしますとも」
「その武田伊那丸は、まえからほうぼうへ手配をしていたが、なかなか捕まえることができなかった。するとこんど、桑名のほうから、和田呂宋兵衛という者が密訴をしてきた。その者のことばで、伊那丸のとおる道がわかったから、関所に兵を伏せておいて、苦もなくしばりあげたのじゃ。だから、あ

さっての太刀取りは呂宋兵衛が役をおおせつかって、都田川の刑場で、その三人の首を斬ることになっている」
「ああ、そうですか。いや、それでよくわかりました」
と、さり気なく聞いていたものの、竹童の胸は早鐘をついている。
「そして、この大鷲は、どうしてまた、あなたがたのお手に入りましたか。浜松にも、めったにこんな大鷲は飛ばないでしょうに」
「この鷲か。――これもその呂宋兵衛が、桑名から浜松へくるとちゅうで捕まえたのを、菊池半助のところへ土産に持ってきたのじゃ。それを万千代さまが、おねだりして、こうしてとんぼ組で飼っているのじゃ。だから、めッたな者にはかさないが、おまえが上手に独楽をまわせば、万千代さまもかしてやろうとおっしゃる。サ、はやくまわしてみせい、はやく火焔独楽の曲まわしをやってみせい」
もうすっかり、竹童を旅の独楽まわしと思っているので小姓たちは、城内で聞きかじっていたことを、みんなべラべラしゃべってしまった。
事実だ。伊那丸の遭難はまことであった。ああ、大事はついにきた。
「ウウム、もうこうしてはおられない！」
と竹童の眼はわれ知らずかッと燃えた。
その真剣な気ぶりに、万千代や小姓たちが、少しあとへさがったのをしおとして、かれはまた、ふたたび芸にとりかかるような身構えをキッと取り、
「では！　竹生島神伝の魔独楽！」
と、こえ高らかに叫んで――
「――小手しらべは剣の刃渡りッー」
片手に独楽――まわすと見せて、一方の手に、般若丸の脇差を抜きはなったかと思うと、杉の根もとにつながれている、クロの綱をさッと斬った。
紫電のおどろきに、鷲は地をうってユラリ――と、空に足をちぢめた。
ふたたび帰らぬ高き上に。
「あ、あ、あッー」
と、不意をくったとんぼ組の小姓たちは、旋風にまかれた木の葉のように、睥睨する大鷲の腹の下で、こけつ、まろびつ、悲鳴をあげて、
「逃がすな」
「いまの独楽まわしーッ」
「あッちへいった！」
「鷲も逃げた！」
「それ」
「そらッ」
「追ッかけろ！」と走りだした。
見れば竹童もまッ先に馳けてゆく。
竹童は鷲を追い、万千代は竹童を追い、小姓とんぼは万千代のあとからあとから――

三

いつか茜いろの曠野は、海のような青い黄昏とかわってい

た。草をけって、追いつ追われつする者たちには、十方なにものの障壁もない。
すると不意に、
さきへ走った竹童が、するどい気合いをあげて、なにやら、虚空へ棒のようなものを投げあげた。
クルクルと螺旋に舞って、それが、空の藍へとけ入ったかと思うと、高いところで、かッ、という音がひびいた。そして、前の棒切れが反落してくるのと一しょに、クロの巨影もそれにつれて真一文字に地へ降りてきた。
そしてやがて。
「独楽まわしのにせ者め」
「鷲をかえせ、鷲をかえせ」
声をそろえて、そこへ万千代たちのなだれてきたころには、すでに、地上に竹童のすがたもなく、大鷲の影もなかった。
ただ、あッ気にとられていた眼へ、ふとうつったものはちょうどそのとき野末をはなれた、大きな宵月の光に、なにやら知れぬものの影が、草の上をフワフワとさまよった——それだけであった。
おお、お小姓とんぼの坊ッちゃんたち！
三方ヶ原をあとにしながら下に月光の山川を見、あたりに銀鱗の雲を見ながら、鞍馬の竹童は鷲の上から叫ぶのである。
これはもともとおいらの鷲だ。
おいらのものはおいらに帰る。なんのふしぎもないはなしだ。蛾次郎みたいに、ぬすんで逃げるのとはわけがちがう。
独楽でだましたのは悪かったけれど、おとなしくクロを渡してくれといっても、かせといってたのんでも、浜松城の腕白坊ッちゃん、けっして、すなおには承知しないでしょう。だから、あんな詐術をやりました。
それも武田一党のため。ああ、しかも伊那丸さまの危難を知った日に、この鷲が、ふたたびじぶんの手にかえるとは、天がこの竹童をあわれんでか、果心居士さまのお護りであろうか。
なにしろ、おいらは、これからいそがなくってはならない身だ。久しぶりでこのクロを、じぶんひとりで、ほしいままにのってかけるのだが、いまは、その翼の力さえなんだかおそい心地がする。
クロよ、ひとはたきにとんでくれ。
小太郎山へ、小太郎山へ。

四

右少将徳川家康、いつになく、ほころんだ顔をしている。ごきげんがよいのである。
常に、かれが気にしている秀吉が、近ごろメキメキとはぶりをよくして、一挙に桑名の滝川を陥し、軍をかえして北国をつき、猛将勝家の本城、北ノ庄にせまって、抜くべからざる勢力をきずき、北陸の豪族前田利家と仲をよくしたという間諜もあった。
で、はなはだ、かれの気色がうるわしくない。
どこかで秀吉がつまずけかし、と祈っているのに、その反対なうわさばかりが飛んできて、ここしばらくの間、かれの心を楽しませぬのであった。

しかし、きょうはいたって和らかい眉目である。
がんらい、家康という人、心のうちの喜怒哀楽を色にださない質である。いつも、むッつりと武者ずわりをして、少し猫背になりながら、寡言多聞を心がけている。ひじょうに狡猾で気むずかしく、腹ぐろい人相のようでもあり、ばかに柔和であたたかい相好のようにも見える。だから、その顔を好くものは深くしたしみ、忌みきらうものはまたひどくきらう。
めずらしく、酒宴をのべていた。
多くの近侍や旗本をあいてに、ほがらかな座談。それが倦むと、つづみの名人大倉六蔵に、鼓をうたせて聞きとれる。
そこへ、おそく酒宴にまねかれた、菊池半助が末席にすわった。隠密のものは、禄は高いが士格としては下輩なので、めったに、こういう席に招じられることはない。
半助のすがたをチラリと見ると、
「鼓をやめい」
と盃を取って、
「かれへ」
と、近侍へ取りつがせた。
破格な盃をいただいた半助へ、人々は羨望の目を送った。そして、半助、なにかよほど手柄をやったな、とささやいていた。
そういう様子をながめながら、家康はまた、近う、とかれをまぢかく呼んで、
「数日来のはたらき、まことに、過分である」
と賞めことばをあたえた。めったに、人を賞めない家康、これもあまりないことである。

「は」
とのみいって、半助は平伏していた。
伊賀衆のなかでも、隠密の上手とは聞いたが、なんという光栄をもった男だろうと、人々の目は、いよいよかれと主君とにそそがれていた。
「して、こんどのことに、偉功を立てた、和田呂宋兵衛は、いかがいたした」
「せっかく、ご酒宴のお招きをうけましたが、まだ身分の定まらぬ浪人境界で、出席はおそれおおいと辞退しましたので、手まえの屋敷にのこしてまいりました」
「そうか、野武士でも、なかなか作法を心得ている。そちの家に食客しているあいだ、じゅうぶんにいたわってとらせろ。そのうちに、なにか、適宜な処置をとってつかわす」
「かれが聞きましたなら、さだめし、ご恩に感泣いたしましょう」
「ながらく捕らえ得なかった武田伊那丸、またふたりの者まで、一網に召捕り得たのは、いつにかれの訴えと、そちの手柄じゃ」
「は、ご過賞、身にあまるしだいでござります」
「当日、都田川の刑場で、伊那丸を斬る太刀とり役、それも呂宋兵衛とそちとに申しつけてあるが、用意万端、手ぬかりはあるまいな」
「じゅうぶん、ご奉行とともに、お打ち合せをいたしますつもり」
「矢来、高札、送り駕、また警固の人数など、そのほうは？」
「いちいち、手配ずみでございます」

「またその日はうわさを聞きおよんで、あまたの領民があつまるにちがいない。甲賀組、伊賀組の者、残りなく狩りだして、あやしい者の見張りに放ちおくように」
「変装組百人ばかり、もう今日のうちに、ご領内へ散らしておきました」
「ウム、ではもう牢内の、武田伊那丸、加賀見忍剣、木隠龍太郎、その三人を都田川にひきだして首を洗って斬るばかりか」
「御意。もはや、裾野の雲は晴れました」
「甲斐ざかいの憂惧がされば、これで心を安らかにして、旗を中原にこころざすことができるというもの。家康にとって、伊那丸はおそろしい癌であった。幼少ながら、かれの行く末は浜松城の呪いであった。それを捕らえ得たのは近ごろの快事、いずれも斬刑のすみしだいに、恩賞におよぶであろうが、その日のくるまでは、かならず油断せまいぞ。よいか、半助」
　さては、家康のごきげんなわけは、伊那丸が捕らえられたことであるか。と一同はうなずいて、徳川家のため、暗雲の晴れた心地がした。そして、城を退ったものは、このうわさを城下につたえて、その日のくるのを、心待ちにしていた。そして、かつて軍神の信玄が、甲山の兵をあげて、梟雄家康へ、乾坤一擲の血戦をいどんだ三方ヶ原。
　そのいわれのある古戦場で、その信玄の孫が、わずかふたりの従者とともに、錆刀で首を落とされるとは、なんと、あわれにもまた皮肉な因縁よ！
　と、気の毒がるささやきもあれば、心地よげに嘲む三河武士もある。
　とにかく、春もくれかかる東海道の辻には、そのうわさが、なにかしら、人に無情を思わせた。

おのれの首を投げる人

一

　すんだ笛の音が流れてくる。
　鬼一管とか天彦とかいう名笛の音のようだ。なんともいえない諧調と余韻がある。ことに、笛の音は、霧のない月明の夜ほど音がとおるものだ。ちょうど今夜もそんな晩――。
　そこは、白樺の林であった。
　さらぬだに白い斑のある樺の木に、一本一本、あおじろい月光が横から射している。
　笛がとぎれた時の、シーンとした静寂と冷気とは、まるで深海の底のようだ。けれど、事実はおそろしい高地なのだ。
　小太郎山の中腹、陣馬ヶ原の高原つづき。
　かの、伊那丸の留守をあずかる帷幕の人々、民部や蔦之助や小文治などが、天嶮を擁してたてこもるとりでの山。
　笛は喨々とうむことなく、樺の林をさまよっている。やがて、そこに人かげがうごいた。見ればひとりの美少女である。長くたれた黒髪に、蘭の花をさしていた。
　その人かげのあとから、幾年も朽つんだ落葉をふんで、ガサ、ガサと、歩いてくる者があった。小具足をまとった武士である。
　七、八本の槍が、月光をくだいてギラギラとした。

「だれだッ！」
呼びかけると、ひとりの手から、黄色い閃光が三角形に放射された。
龕燈のあかりのなかに浮きたった少女のすがたをみると、
「おお、咲耶子さま――」
と、目礼して、武士たちは、樺の林をぬけてしまった。とりでを見張る番士たちである。
そのうしろ姿を、咲耶子はたのもしい思いで見おくった。ああして、寝ずに、夜なか、あかつきもこの要害を見まわっている人々の忠実さに感謝した。そして、まだこのとりでに雪のあるころ、山をくだって京都へ向かった伊那丸の上にも、どうぞ、この山のように無事があるように――と祈った。
咲耶子は裾野にいたころから、月の夜に笛をすさびながら歩くのが好きであった。この小太郎山にきてからは、ことに白樺の林に、ほのかな蘭の香のながれる道を、しずかに歩むのが好ましく、今夜も陣馬の搦手から、月にさそわれて、思わず夜のふけるのを忘れてしまった。
「おお、ひえびえとしてきた。二子山に見えた月が、もうあんなに遠い谷間にある。……あまり遅うなっては、さだめし、民部さまや小文治さまがおあんじなされているかもしれぬ……」
そう思いながら、それでもまだ、帰る道をむなしく歩いていくことはおしそうに、狛笛をとって、その歌口を湿しはじめる。
するとどこかで、びゅうッ――という風のような音がした。だが、樺の梢はゆれてもいなかった。野呂川のひびきにしては一しゅんである。いや、それは天地をゆく音ではなく、高いところをかすめた音響にちがいなかった。
「なにかしら？　――」
咲耶子はいそいで林をかけぬけた。
陣馬の高原には、さまざまな植物の花が、露をふくんで黒々と眠っていた。ここに立てば、昼は東の真正面に富士の銀影や裾野の樹海がひと目にながめられ、西には信濃の山々、北には甲斐の盆地、笛吹川のうねり、村、町、城下の地点までかぞえられる。
「耳のせいであったか、それとも、やはりただの風か？　……」
見まわした空には、なにものの影も見あたらなかった。ただ、しずかに黙している、月はある、星はある。
ふたたび、狛笛の音が高くすんだ。そして咲耶子が、われとわが吹く音色にじぶんをすら忘れかけたころ、さらにすさまじい一陣の疾風が、月のふところをでて、小太郎山の真上をびゅうッ――と旋回しはじめた。
「オオ！」
咲耶子は、笛を唇からはなして、高く高くうちふった。
「――竹童ではないか！　鷲！　鷲！　竹童の鷲よ――」
おどり立つばかりに叫んだが、すぐにまた、笛を持ちなおして、息いッぱいに、空へ向かって高らかに吹く。
砦の灯は、夜はまったく隠されてあるので、このあたりの重畳たる山の起伏に、どれが目ざす小太郎山か、宙に迷いめぐっていた鞍馬の竹童も、やっと、その音を聞きあてた。
こころみに鷲の上から、下界へ向かって、声いっぱいに、

「咲耶子さまーッ」と呼んでみる。
小手をかざしてみれば、いちめんの高原植物、月光と露に繚乱たるなかに、ぽちりと、ひとりの少女のすがたが、ありと立って見えた。
少女は笛で呼んでいる。
竹童もまた声をはって、
「咲耶子さまア。咲耶子さまアー」
巨大なる波紋を宇宙にえがきながら、だんだんに陣馬の地上へくだってきた。
ただならぬ怪影を見つけた砦の番士は、なにかとおどろいて、変を小幡民部につげた、その夜、自然城の山曲輪には、巽小文治と山県蔦之助も、虫の知らせか、しきりに伊那丸の安否や、随従していった忍剣と龍太郎から、なんの消息もないことなどをうわさし合っているところであった。

二

三方ヶ原をとんで、夜の空をいそいだ鞍馬の竹童は、そうして、小太郎山の同志へ、伊那丸の急変をもたらした。
かれは、かれの使命をとげた。一念を達した。
けれど、寝耳に水の変を聞いた、一党のものの驚きはどんなであったか。なかにも、小幡民部はその急報をうけるとともに、
「ううむ……」
と、深くうめいたまま、しばらく、いうべき言葉もなかったくらい。
山曲輪の一廓、評定場の扉はかたくとざされた。
ひそやかに、そこへ集まった人々は、むろん、帷幕の者ばかりで、民部を中心に、山県蔦之助、巽小文治。そして、竹童はそのまえに疲れたからだをすえ、咲耶子はうちしおれて、紫蘭のかおる黒髪を、あかい獣蝋の灯のそばにうつむけていた。
「竹童」
やがて、民部はおもおもしい顔をあげて、
「そちがさぐってきた、若君のご異変、また都田川の刑場でおこなわれる時日、かならずまちがいのないことであろうな」
「たしかに、そういないこととぞんじます。その刑場をつくる足軽のはなしや、またお小姓のいったこともみなピッタリと、合っております」
「すると、今宵もやがて夜明けに近いから、のこる日は明日だけじゃ……」
さすが、甲州流の軍学家、智謀のたけた民部といえども、この急迫な処置には、ほとんど困惑したらしく、憂悶の色がそのおもてを暗くしている。
「若君のご運命がそうなっては、もう、われわれもこの砦をまもる意義がない」
巽小文治は、悲痛なこえでいった。
「そうだ！」と蔦之助も嘆声をあわせて、
「このうえは、砦にのこる兵をあげて、小勢ながら裾野へくだり、怨敵家康の城地へ、さいごの一戦を」
みなまでいわせず、民部は首をよこにふった。
「そのとむらい合戦なら、すこしも、いそぐことはありますま

まい。いつでもできることじゃ」
「といって、むなしく、手をつかねておられましょうか」
「むろん、どうにか工夫をせねばならぬ。しかし、人数をくりだして、とおく浜松へ着くころには、若君のお命が、すでにないものと思わねばならぬ」
「おお、それもごもっとも」
と、蔦之助はまた悶々とだまって、いまはただ、この民部の頭脳に、神のような明智がひらめけかし、とジッと祈るよりほかはなかった。
「ともあれ、若君のご一命や忍剣や龍太郎を、いかにせば救いうるか、それが目睫の大問題であると思う。いたずらに最後の決戦をいそいで、千や二千の小勢をもって、東海道を攻めのぼったとて、とちゅうの出城や関所でむなしく討死するのほかはない。それでは、きょうまでの臥薪嘗胆、伊那丸君のおこころざし、すべては水泡となり、また世の笑われぐさにすぎぬものとなる」
やはり民部の説は常識であった。
あくまで伊那丸を中心とする一党が、その盟主をうしなって、なんの最後の一戦がはなばなしかろう。どうしても、いかなる手段をもって、石に噛みついても！　伊那丸をたすけなければ意義がない！　武士道がない。
はなやかならぬ、また勇にのみはやれぬ、軍師のつらい立場はそこにあるのだ。
「ああ策は一つしかない」やがて、かれは決然といった。
「蔦之助どの、小文治どの、すぐに、旅のおしたくを！」
「や、われわれのみで？　その他の味方は？」
「むしろ秘密に――」
と、民部は席をたって、太刀をはき、身ごしらえにかかった。
熟考の長さにひきかえて、意を決するとすぐであった。蔦之助と小文治も、膝行袴の紐をしめ、脇差をさし、手馴れの弓と、朱柄の槍をそばへ取りよせた。
「民部さま……」
咲耶子と竹童は、じぶんたちに指図のないのを、やや不満に思って、おなじように身じたくをしようとしながら、
「わたしも」
「わたくしも」
一しょに立つと、民部はそれを制して、
「ふたりは、どうかとりでのるすを護っていてくれい。なお、われわれがおらぬ間も、われわれがいるように見せかけて、こよい、三人が小太郎山をぬけだしたことは、かならず、敵にも味方にも秘密にしておくように」
そういって、評定場の床を上げた。
まっくらな空洞が口をあけた。
峡谷の一方へひくくくだっていく間道である。
「では」と、そこへ足を入れながら、民部はもういちど咲耶子と竹童をふりかえった。
「いまのたのみ、くれぐれも心得てくれよ、なにごとも若君のおためじゃ」
いなむこともならず、ふたりはさびしい目で見おくった。
小文治と蔦之助は、目と目で別れをつげながら、民部につづいて、もくもくと間道の下へすがたを入れる。

ドーンと、下から入口をふさいでしまわれると、山曲輪の一室にはもう、竹童と咲耶子、たッたふたりきりになってしまった。

それから二刻か、一刻ばかりの後――。

味方の目をしのんで、一散に、ふもとへ走っていった小幡民部とほかふたりは、やがて、夜のしらしら明けに、麓の馬舎から三頭の駿馬をよりだして、ヒラリと、それへまたがった。

あいたいと、たなびく雲の高御座に、富士のすがたがゆうぜんとあおがれる。民部は、鞭をさして、

「ご両所！」と呼んだ。

「竹童のしらせによると、若君が刑場へひかれるのは、明日の夕方ということじゃ。きょう一日で、裾野から東海道のなかばまではかどれば、その時刻にようよう間に合おうかと思う。いや、たとえ、駒とともに血を吐くまでも、それまでに三方ヶ原へかけつけねばならぬ」

「おお、もとよりそれぐらいなこと、この場合になんのことでもござりませぬ。して、その時には？」

「なんの手段をめぐらす時間もない。ただ、群集のなかにまぎれて、せつなに、矢来のなかへ斬りこみ、若君をはじめふたりの盟友を救いだすばかり」

「心得ました」

小文治は腕をうならせて、朱柄の槍をからぶりさせた。

さっさつたる朝の風が、駒のたてがみをこころよく吹き散らす。

ひゅうッ、と一鞭あてると、三騎はそのまま馬首をそろえて、東へひがしへ疾走していった。

やがて、やがて、渺茫とした裾野と、はてなき碧落が目の前にめぐりまわってくる。

海のようだ。五月の裾野、五月の大気。

目のとどくかぎり、十何里、ただ一色の青ずすきが、うねうねと風のままに波に似たる、波を立てている。

そのなかを、いとも小さな三騎がはしっていく。

風にかくれ、風に見え、風をついて疾走する。

ああまだ東海道へはへだてがある。なお浜松や三方ヶ原には間がある。覚悟のとおり、あの三騎は、とちゅうで血を吐いてしまいはせぬだろうか。

かかる場合は、千里をとぶ逸足ももどかしく、一日の陽脚もまたたくひまである。すでにその日は、天龍川のほとりに暮れた三騎のひとびと、はたして、翌日の午後までに、刑場の矢来ぎわまで、馳けつけることができるのであろうか？

三

ついに、その日、その時刻はきた。

都田川の右岸には、青竹をくんだ矢来の先が、針の山のように見えている。そのまわりに、うわさを聞きつたえて集まった群集が、ヒシヒシと押していた。

夕ぐれの風が、矢来の竹にカラカラとものさびしい音を鳴らすほか、むらがった大衆も、シーンとして、水のようにひそまっていた。

さっき、浜松の城下から、三方ヶ原をとおっていった裸馬

には、まだおさない公達と、僧形の者と六部のすがたがくくりつけられて、この刑場へ運ばれてきたから、もうほどなく、首斬りの役人が、太刀に水をそそぐであろうと、予想するだけでも、みんなの息がつまってくる。

と――丁字形に幕をはった矢来のすみの溜り場から、くろい服をまとった男が、のっそりと刑場のまん中にでてきて、ジロジロと矢来の周囲を見たり、天をあおいでなにかつぶやいているようす。

「おや、伴天連がきています」と、みんな、耳や口をよせあっていた。

すると、ややおくれて、矢来の死門から三人の縄つきがひかれてきた。菊池半助がその縄取りのうしろから、おごそかに口をむすんでくる。

「ごくろうでした」

「そこもとにも」

と、伴天連と半助は、こう会釈をして、すぐに刑吏へさしずして、死座をつくらせ、血だまりの穴をほらせ、水柄杓をはこばせる。

あなたには奉行、検視の役人などが、床几をすえて、いそがしくはたらく下人たちのようすをながめ、ときどき、なにか下役へ注意をあたえている。

かけやを持ったひとりの男は、やがて、三ツの死のむしろのそばへ、三本の杭をコーン、コーンと打ちこんだ。

「それッ」と、菊池半助が、時刻をはかって目くばせする。

「武田伊那丸ッ、立て！」

まっ先の杭へ、あらあらしく引きずってきて、ギリギリ巻きにいましめの端をからめつけた。

むしろの上にすえられた姿は、悄然と、うつ向いていた。さすがな家康も、その身分を思ってか、衣服は着けたままの白綸子、あきらかに、武田菱の紋がみえて、前髪だちのすがたとともに、心なき群集の眼にも、あわれに、いたいたしい涙をもよおさせる。

さらに、ひどかったのは、つぎの、法師すがたのものと、白衣の人をあつかった刑吏の待遇である。打つ、蹴る、あげくの果てに、伊那丸と同じように引きすえて、何か、口あらくののしりちらした。そのふたりも、ついにはこらえかねて、刑吏にするどい言葉を返していた。

だが、目は布をもってふさがれ、両手は杭にしばりつけられている二人の怒声は、むざんな役人たちの心に、ありふれた、世迷い言としかひびかなかった。なお、矢来のそとの群集には、そのありさまを見るだけで、ことばの意味は聞きとれない。

「罪人どもの泣きほえるのを、いちいち取りあげていては果てしがない。それッ、時刻の過ぎぬうちに支度をせい」

こう、奉行役人が、大きな声でどなったのは、だれの耳にもわかった。

「太刀取りのお方――」

と、目くばせすると、それまで、小気味よげに三人をにらんでいた伴天連風の怪人は、

「半助どのに、代理をお願いいたしたい。この呂宋兵衛は、さきごろ桑名で少し右腕をいためておりますので……」

と、辞退した。

その妖異なすがたをした者こそ、伊那丸の通過を密告して、またうまうまと徳川家のふところに食い入ろうとして、猫をかぶっている和田呂宋兵衛である。

呂宋兵衛の辞退をきくと、半助は、だれも刑場へでると、一種の鬼気におそわれる、その臆病風に見舞われたなと、苦笑するさまで、

「さようか。では、不肖ですが、半助代刀をつかまつります」

と、奉行にもいって、刑吏の手から、無作りの大刀をうけとり、すぐに、鞘をはらった。

小柄杓の水を、サラサラと刃にながして、その雫のしたたる切ッさきを、まず、右の端にいた者の目の前につきつけて、

「忍剣ッ！」

と、声をかけた。

白布で、目をふさがれている法師すがたは、その時、顔をあげ、肩をゆすぶッて、なにやら、無念そうに叫ぼうとしたが、

「徳川家に仇なすやつ、やがて、あとからいく伊那丸の先駆けをしろッ」

という、半助ののしりに消され、それと同時に、夏然と剣がひらめいた。

バサッ――と血しぶきが立った。

とたんに、俯ッ伏せとなった死骸の斬り口から、百千の蚯蚓が走りだすように血がながれた。矢来のそとに息をのんでいた群集も、さすがに、目をそむけて、手につめたい汗をにぎりしめた。

「木隠龍太郎ッ――」

つづいて、こう叫ぶ声がしたので、こわいもの見たさの眼をソッと向けてみると、袴の裾に、返り血をつけた半助のすがたが、すさまじく斬れた大刀へ、ふたたび手桶の水をそそぎ直して、つぎの者へズカリと寄っていったかと思うと、

「龍太郎ッ！　覚悟は？　――」と、光流をふりかぶった。

「覚悟？　そんなものはないッ」

と、どなることばもおわらぬまに、風をきる刃がはすかいに下りて、白衣の全身がまッ赤になった。

あとは伊那丸ひとりだ。

菊池半助はゆうゆうとして、三人目の成敗にかかろうとしている。

点々たる返り血は、夜叉のように、かれの腕や袖をいろどった。

哀寂な夕雲は、矢来の上におもくたれて、一しゅん、そこを吹く風もハタと止んだ。

ああ、ついに間に合わなかった。

小幡民部。
山県蔦之助。
巽小文治。

かれらはなにをしているのか！

いそぎにいそいで、小太郎山から疾駆してくるとちゅうで、馬もろとも、血を吐いてぶったおれたのか。あるいは、もう、そのへんまで――三方ヶ原の北のへんまでは、きているのか！

それにしても、ああ、もう大事は過ぎてしまった。

一党になくてはならない盟友、加賀見忍剣はたおれている。

木隠龍太郎も血の中に俯ッ伏してしまっている。
と――思うまに菊池半助の無情な刃は、颯然と、伊那丸の襟もとへおちた。

四

目をおおうべし。
菊池半助が気をこめた刑刀は、一閃、ひゅッと虹光をえがいて、伊那丸のすがたを血けむりにさせた。
「アーアー」
群集はただ、こう口からもらしただけであった。正視するにしのびないで、なかには、矢来につかまったまま蒼ざめた者すらある。
八双截鉄の落剣！　異様なる血の音を立って、武田伊那丸の首はバスッとまえにおちた。
胴はそのとたんに死座から前向きにガクッとつっぷしてしまう。あの小袖につけた武田菱の紋も、朱に染まって、もうビクリともしなかった。
完全な死だ、完全な断刀だ！　家康もまた選りによって斬れる刀を、刑吏へ授けたものとみえる。
忍剣を斬り、龍太郎の首をうち、いままた伊那丸を刑した半助は、さすがに斬りつかれがしたとみえて、滴々と、血流しから赤い雫のたるる刃をさげて、ぽうッとしばらく立っていた。そのあたりの草いッぱい、曼珠沙華という地獄花が咲いたように、三ツの死骸の返り血が斑々とあかく燃えている。
斬刑がすんで、浜松城からきている奉行や検死役人などは、みな床几を立ちはじめた。入りみだれて立ちはたらく下人たちの間に、血なまぐさい陰風が吹く。
ひとつ星、ふたつ星。……空は凄愴な暮色をもってきた。だが、矢来のそとの群集は容易にそこをさろうとしない。
「ああ、いやな気持になった！　はじめのうちはおもしろかったが、なんだかいまになって毛穴がゾーッとしてきやがった。へんなもんだなあ、人の斬られるッていうものは」
矢来にたかっている数多の中で、こういった、ひとりの見物人がある。
「親方！　親方はなんともないような顔をしていますね」
つれの男は太い口をむすんで、黙然と、刑場のなかを見つめていた。革胴服にもんぺを穿き、脇差をさした工匠風、だれかと思うと、秀吉の追捕をのがれて、竹生島から落ちてきた上部八風斎、いまではもとにかえって鏃鍛冶の鼻かけ卜斎。
しゃべっているのは蛾次郎だった。
「だけれど、考えてみると、伊那丸もかわいそうだな。ちょっと、旗上げのまねをしたばかりで、もう首を斬られちまった。忍剣も龍太郎もとうとう冥土のお相伴。アアいやだいやだ死ぬなんて。ねえ親方、こういうところを見ると、やっぱり富士の裾野あたりで、テンカンテンカンと鏃をたたいているのが一ばん安泰ですね」
卜斎はそばのおしゃべりへ、耳もかさずに腕組みをしていた。
だが蛾次郎は、卜斎が返辞をするとしないとにかかわらず、ひとり所感をのべている。
「これで、木から落ちた猿みたいに、ベソをかくのは竹童だ

ろう。この見物のなかにあいつがいたら、いまの景色をどんな顔して見ているだろうな……オヤ、もうおしまいかしら、役人がみんな幕のかげへはいってしまった――つまらねえな。ア！　非人がきたぞ非人が、三ツの死骸をかたづけるんだな。やあいけねえ、伊那丸の首を河原の方へ持っていってしまやがった。ホウ、あんなところの台へ首をのせてどうするんだろう、龍太郎の首も、忍剣の首も――アア、獄門というのはあれかしら？　親方親方、あれですか、獄門にかけるッていうことは？」

指差しをして卜斎の顔を見あげたが、その卜斎は、蛾次郎とは、まるで見当ちがいなほうに目をすえているのであった。

さっきから、なにを見ているんだい親方は？

と――蛾次郎も卜斎の視線にならってその方角へ目をやってみると、竹矢来の一角、そこはいまあらかたの弥次馬が獄門台と掲示の高札を見になだれさったあとで、ほのあかるい夕闇に、点々と、かぞえるほどの人しか残っていなかった。

卜斎は最前から、そこばかりをじっとにらんでいた。横目づかいの白眼で――

蛾次郎の注意もはじめて同じ焦点へ向いた。

とたんに、

かれ蛾次郎の目の玉が、デングリかえるようにグルグルとうごいた。そしてその睫毛がせわしなくパチパチと目ばたきをし、眉に八の字をこしらえた。なにか叫ぼうとした唇が上下にゆがんだが、いう言葉さえ知らぬように、鼻の穴をひろげたまま、アングリと口をあいて茫然自失のていたらく……。

あたかも磁力にすいつけられてしまったよう。そも、泣き虫の蛾次郎および親方の卜斎までが、なにを見てそんなにぼうぜんとしているのかと思えば――それも道理、ふしぎ！　イヤふしぎなどという生やさしい形容をこえた、あるべからざる事実が、そこに、顕然とあったのである。

見れば北側の矢来そと、人かげまばらなあとにのこって、なにかヒソヒソとささやき合ってる旅人がある。よくよく凝視するとおどろいたことには、それが、たったいま、刑場のなかで首をおとされたはずの忍剣、龍太郎、伊那丸の主従三人。

あやしいといってもこれほど怪異なことはない。菊池半助が、大衆環視のなかでたしかに斬った三人――しかもその血汐は、なおまざまざと刑場の草をそめており、その首は都田川の獄門台にのせられているのに！

その人間がここにいる。

話している。

笑っている。

ときどき、じぶんの首がのせられた獄門台のほうを見ている。

そして微笑する。

くすぐったいように――不審なように――ささやき、うなずき合っている。

五

卜斎が眼をはなさなかったのもあたりまえ。

蛾次郎が鼻から息を吸ったままぼうとあッけにとられてし

まったのももっともだ。
人ちがいじゃないか？
とも思って、眼をこすって見なおしたが、やはり記憶はいつわらない。どう見てもあの三人、菊池半助にバサと斬られた三ツの首の主にまぎれはない。
すなわち武田伊那丸は、眉目をあさく藺笠にかくし、浮織琥珀の膝行袴に、肩からななめへ武者結びの包みをかけ、木隠龍太郎は白衣白鞘のいつもの風姿、また加賀見忍剣もありのままな雲水すがた、手には例の禅杖をつっ立てている。
「ウーム……親方……」
蛾次郎はうなるようにト斎を見あげた。
「……はアて……」と卜斎もまたしきりに首をひねっていたが、
「どうもわからぬことがあるものだ。弥次馬にはなにもわかるまいが、わかる者から見ていると、世の中の裏表は、じつに奇妙だ。いや裏が表だか、表が裏だか、こう見ているとおれにさえわからなくなってくる」
「まったくです！」と蛾次郎も相槌をうって、
「斬られた首が本ものの伊那丸か、見ている首が本ものか、なにがなんだか、さっぱりワケがわからなくなっちまった」
「そりゃもちろん、あっちのやつがにせ者だろう」
「テ、どっちがです？」
「矢来のそとに立っているやつらよ」
「すると、生きてるほうの伊那丸ですか」
「ウム、方々の落武者や浪人で、飯の食えない侍などは、よく名のある者のすがたと偽名をつかって、無智な在所の者をたぶらかして歩く手輩がずいぶんある。おおかたそんな者たちだろう」
「だって親方、それにしちゃ、あんまり似過ぎているじゃありませんか。ちょっとそばへいって、わたしが目利きをつけてきましょう」
「これッ、よけいなとこへ突っ走るな」
「へい！」
「ばかめ、すぐに調子に乗りおって！」
「でも……」
と蛾次郎は河豚のようにプーッとふくれた。――なにもそう頭からこんなことをガンと叱らなくッたってよかりそうなもんだと。
と思ったが、卜斎に袖をひっぱられたので、気がついた。うしろに、いやな目つきをした町人が立っている。
うさん臭い目つきをして、じぶんたちの挙動に注意しているらしい。蛾次郎は口をむすんで、あわてて夕星へ顔をそらしながら、
「親方、そろそろ晩になりましたネ」
と空とぼけた。
「もどろうかな、ご城下へ」
「帰りましょうよ。はやく、宿屋のご飯が食べたい」
空の星がふえるのと反比例に、地上の人影はぼつぼつへっていた。ふたりは矢来のきわをはなれながら、それとなく気をつけたが、いつのまにか疑問の三名は忽然とかげを消して、あたりのどこにも見えなかった。まるでたったいま、ありありと見えたあの姿が、まぼろしか？　人間の蜃気楼でもあっ

たかのように。
妖麗な夜霞をふいて、三方ヶ原の野末から卵黄色な夕月がのっとあがった。都田川のながれは刻々に水の色を研ぎかえてくる、――藍、黒、金、銀波。
そして河原はシーンとしてしまった。秋のようだ。虫でも啼きそうだ。獄門台の釘に刺された三ツの首は、その月光に向かっても、睫毛をふかくふさいでいた。
そばには生々しい新木の高札が立ってある。
いつぞやこの原の細道で、足軽がになっていくのを竹童がチラと見かけた、あの高札が打ってあるのだ。――といつの間にか、その立札と獄門の前へ、三ツの人影が近づいている。
「わしの首 級がさらしてある」
こういったのは、伊那丸の首のまえに立った伊那丸である。
「これが拙者の首でございますな」と龍太郎も、おのれの首をながめて笑った。
「じぶんの首と対面して話をすることはおもしろい。これ忍剣の首！ よくそちの面体をわしに見せろ」
加賀見忍剣は禅 杖を持ちかえ、いきなり、獄門台の首のもとどりをつかんで月光に高くさし上げ、
「は、は、は、は。運のわるい弱虫の忍剣め、つぎの世には拙僧のような不死身を持って生まれかわってこい。喝！
南無阿弥陀仏ッ――」
ドボーンと都田川の流れへ首をほうりこんだ。
その水音があがったとたん。
獄門番の寝るむしろ小屋から、銀の鞭をたずさえた黒衣の伴天連、豹のごとくおどりだして、
「計略ッ、図にあたった！」と絶叫した。
だれかと思えば、それこそ、和田呂宋兵衛なのであった。
「ウウむ、網にかかった！」
と、呂宋兵衛の叫びにこたえてどなったのは、隠密頭の菊池半助、いつのまにか、三人の背後に姿をあらわして、
「しめた！ 伊那丸主従のやつら、そこを去らすな」
と四方へ叱咤する。
同時に、ピピピピピ……と二人が音をあわせて吹いた高呼笛につれて、河原のかげや草むらの中から蝗のように、わらわらとおどり立った百人の町人。これ、その日見物のなかにまぎれこませておいた菊池半助配下の伊賀衆、小具足十手の腕ぞろい、変装百人組の者たちであった。
さらに見れば、川向こうから三方ヶ原のおちこちには、いつか、秋霜のごとき槍と刀と人影をもって、完全な人縄を張り、遠巻きに二重のにげ道をふさいでいる。

鉱山掘夫の知らぬ山

一

そのおなじ日の落ちゆく陽脚をいそいで、まだ逆川に夕照りのあかあかと反映していたころ、小夜の中山、日坂の急をさか落としに、松並木のつづく掛川から袋井の宿へと、あたかも鉄球がとぶように、砂塵をついて疾走していく悍馬があった。

くろく点々と、その数三頭。
いうまでもなく小太郎山から、伊那丸の急変に鞭をはげまして、きた小幡民部、山県蔦之助、巽小文治の三勇士である。
天龍の瀬を乗っきって、遮二無二笠井の里へあがったのも夢心地、ふと気がつくと、その時はもう西遠江の連峰の背に、ゆうよのない陽がふかく沈んで、刻一刻、一跳一足ごとに、馬前の暮色は濃くなっていた。
「暮れたぞ！　暮れたぞ！」
蔦之助は鞭も折れろとばかり、ぴゅうッと馬背を打ってさけんだ。馬もはやいがより以上に、こころは三方ヶ原にいっている。
「刑場はもう近い！　落胆するな、気をくじくな！」
と、民部はいよいよ手綱に勢をつけて、そればかりはげましてきた。
しかし、ああしかし、その三方ヶ原の北端をのぞんだ時には、もう夕刻とはいいがたい、すでに夜である。草と平にうっすらとした月光さえ流れてきた。
すると原の道をちりぢりにくる人かげが見えだした。みな浜松の城下へかえっていく見物人である。それを見ると巽小文治は、
「ウウム、ざんねんッ――間に合わなかった！　もはや刑場のことがすんだとみえて、みなあの通りにもどってくる」
と、歯がみをして、われとわが膝を、かかえている槍の柄でなぐりつけた。
民部のようすもさすがに平色ではなかった。それを見ても、なお気をくじくなとははげましきれなかった。かれは、道々すれちがった町人に、都田川のもようをたずねたがそれは、みな伊那丸以下のものが、菊池半助の斬刀に命をたたれて、その首級も河原の獄門にさらしものとなった、という答えに一致していた。
絶望！　三人は馬から落ちるように草原へおりて、よろよろと腰をついてしまった。
民部はものをいわなかった。小文治も黙然とふかい息をつくのみだった。蔦之助もまた暗然と言葉をわすれて、無情な星のまたたきに涙ぐむばかり……
「ぜひがない！　おれは一足さきにごめんこうむる！」
小文治はいきなり脇差をぬいて自分の腹へつき立てようとした。と一しょに蔦之助も、
「おお、この期になってなんの生き甲斐があろう。小文治、拙者もともに若君のお供をするぞッ」
と、同じく自害の刃を取りかける。
「これッ――」と、民部は叱りつけるような語気で、左右にふたりの腕くびをつかみながら、
「なにをするのかッ！」
「おたずねはむしろ意外にぞんじます」
「死のうという考えならしばらくお待ちなさい」
「すでに伊那丸君がございごとわかった以上は、いさぎよくお供をして、臣下の本分をまっとういたしとうございます」
「ご心情はさもあること。しかしまだそのまえに、臣としての役目がいくらものこされてある。都田川にかけられた御首級をうばって、浄地へおかくし申すこと。また刑刀をとった菊池半助を討って、いささか龍太郎や忍剣の霊をなぐさめる

ことも友情の一ツ。さらに、しばらくこらえて小太郎山の味方をすぐり、怨敵家康に一矢をむくいたのちに死ぬとも、けっして若君のお供におくれはいたしますまい」

民部のかんがえ方は、どういう絶望の壁に打つかっても、けっして狂うことがなかった。情熱の一方に走りがちな蔦之助や小文治は、それに、反省されはげまされて、ふたたび馬の背にとび乗った。

そしてふと。

夜色をこめた草原のはてを鞍上から見ると――はるかに白々とみえる都田川のほとり、そこに、なんであろうか、一脈の殺気、形なくうごく陣気が民部に感じられた。

「はてな？　……」

眸をこらしてみつめていると、ときおり、面をなでてくる微風にまじってかすかな叫喚……矢唸り……呼子笛……激闘の剣声。

二

「計策は図にあたったぞ！」

と呂宋兵衛がさけび、しめたと菊池半助がいったところからみると、きょう都田川でおこなわれた刑罪は、家康が呂宋兵衛と半助にふかくたくらませてやった、一つの計りごとであったことはうたがいもない。

すなわち家康は、さきに伊那丸の主従が、桑名からこの浜松へはいってくるという呂宋兵衛の密告はきいたが、容易にそのすがたを見出すことができないので、奉行所の牢内にいる罪人のうちから、同じ年ごろの僧侶と少年と六部とをよりだし、服装までそれらしく似かよわせて、わざとことごとしく斬らせたのだ。

つまり、虚をつたえて実をさそう、ひとつの陥穽を作らせたのだ。そしてかならず、その日の見物のうちには、まことの伊那丸や龍太郎が入りまじってくるにちがいないといった。で、群集のなかには、百人の伊賀衆を変装させてまきちらし、片っぱしからその顔を改めていたのである。

はたして、伊那丸の主従は、捕らえられもせぬじぶんたちが、きょう刑場で斬られるというううわさを聞いて、奇異な感じに誘惑された。

にせ首を斬らせて、まことの首を得ようと計ったもくろみは、かれらにとって筋書どおりにいったのである。

もとより龍太郎も忍剣も、この奇怪な事実が、意味もないものだとは思わなかったが、そうまでの落とし穴とは気がつかなかった。

「あッ！」

と獄門台のそばをはなれたときには、すでに、敵影八面に満ちている。

呂宋兵衛は、今夜こそ伊那丸をとらえて、家康にひとつの功を立てようものと、銀鞭をふるってじぶんたちの一味、丹羽昌仙や早足の燕作や、二、三十人あまりの野武士たちを、獣使いのようにケシかけた。

菊池半助はその側面にかかって、部下の変装組に、激励の声をからした。軽捷むひな伊賀者ばかりが、百人も小具足術の十手をとって、雨か、小石かのように、入れかわり立ち代

り、三人の手足にまといついてくるには、野武士の大刀などよりも、むしろ防ぎなやむものだった。
龍太郎の戒刀は、四角八面に斬って斬って、柄まで血汐になっていた。
一揮風をよび、一打颯血を立てるものは、加賀見忍剣の禅杖でなくてはならない。さきに身代りの自分の首に引導を渡して、都田川へ水葬礼をおこなった快侠僧、なんとその猛闘ぶりの男々しさよ！　生命力の絶倫なことよ！
見るまに、かれと龍太郎の犠牲となる者のかずが知れなかった。そのふたりにまもられながら伊那丸も小太刀をぬいて幾人か斬った。だが、かれは敵をかけまわして浴びせかけることはしない。身を守って、よりつく者を斬りたおすばかりであった。
それは、平時に民部の教えるところであった。民部は伊那丸を勇士猛夫の部類には育てたくなかった。器の大きな、徳のゆたかな、品位と天禀のまろく融合した名将にみがきあげたいと念じている。
伊那丸はそうして最後を見ていた。
しずかに、覚悟の機会を待っていた。
いくら、追っても斬りふせても、三方ヶ原からわいてでる敵の人数は、少しもへっていくとは見えない。
そして、都田川を背水にしいて、やや、半刻あまりの苦戦をつづけていると、フイに、思いがけぬ方角から、ワーッという乱声があがった。
「それッ、獄門の御首級をうばえ」
「うぬ、伊那丸さまのかたきの片われ！」
と、馬首をあげておどってきた影！　黒々とそこに見えた。
そのまッ先に乗りつけてきたのは、朱柄の槍をもった巽小文治である。
「退けどけどけ、邪魔するやつはこの槍を呑ますぞ」
とばかり、まっしぐらに獄門台の前まできたが、
「やッ、み首級がない！」
「なに、み首級がないと？　さては逃げたやつらが素早くどこかへかくしたのだろう。それ、向こうの河原に馳けたやつを引きとらえてみろ！」
蔦之助は馬上からそこの高札を引きぬいてふりかざし、どっと、十四、五間ほどかけだしたが、あッ――と思うまに蔦之助、くぼの草かげから閃めいた銀鞭にはらわれて、馬もろとも、ドーンともんどり打ってたおれてしまった。
「やッ、どうした？」
と、小文治が乗りつけてみると、ひとりの怪人、蔦之助を組みふせて鋭利な短刀をその胸板へ突きとおそうとしている。
「おのれ！」
くりだした槍。
黒衣の影は、そのケラ首をつかんでふりかえった。
「あッ、呂宋兵衛」
とおどろいたせつなに、小文治の馬も屏風だおれにぶったおれた。朱柄の槍先をつかんでいた呂宋兵衛も、それにつれてからだを浮かした。
「得たり！」
とはね起きた蔦之助、持ったる高札で黒衣の影に一撃をくらわせた。すごい声をあげたのは呂宋兵衛、したたかに肩を

打たれたのだ。そして疾風のごとく逃げだした。
追おうとすると横合から、小文治の馬腹をついた菊池半助が、槍をしごいてさまたげた。
「よし、ひきうけた」
と朱柄の槍がからみあう。
黒樫の槍と朱柄の槍、せんせんと光を合わしてたたかっている。
それは小文治にまかせて、蔦之助は逃げる呂宋兵衛を追っていく、へんぺんと風をくぐって同じ色の闇にまぎれていく黒衣のはやさ、たちまち見うしなって河原へくだると、不意に、引っさげていた高札が、屋根板のようにくだけて手から飛んだ。
「何奴？」と大刀をぬく。
相手に眼をつけるまもあらばこそ、ぶーんッとうなってくる鉄の禅杖。
発矢、火花！
「待てッ！」と、うしろで伊那丸がさけんだ。
「蔦之助ではないか！　忍剣、待て！」
「オオ加賀見――ヤヤ、そちらにおいで遊ばすのは若君？……」
とあっけにとられて立ちすくんでいると、そこへ奇遇におどろきながら、小幡民部と龍太郎がうちつれて馳けつけてくる。
小文治も相手の半助をいっして、かなたこなたをさまよった後、やがて、ここの人かげを見つけて走ってきた。
はしなく落ちあった主従は、かたく手をとって喜びあった。
どうしてここへ？
どうして生きて？
同じ問いが双方の口をついてかわされた。

三

嵐のような声つなみがいくたびかくりかえされて、月は三方ヶ原の東から西へまわった。
渋面をつくった呂宋兵衛と、にがりきった菊池半助とが、片輪や死骸になった味方のなかに立ってぼんやりと朝の光を見ていた。
敵はどうした！　敵は？
陽が高くあがったが、その行方はついにわからなかった。
家康の不首尾な顔が思いやられる……
「どうするんだ、この復命を？」
「どうするったッて、ありのままに申しあげて、おわびを願うよりほかにない」
「計略はうまくあたったんだが……」
「あんな助太刀がうしろを衝いてこようとは思わなかったからなあ」
気をくさらして、疲れたからだをグッタリと草の上に投げあった。その顔へ、ブーンと虻がなぶってくる。
「ちイッ……」
と半助は舌打ちをした。
そのころ武田伊那丸は、ゆらゆらと駒にゆられて、大井川の上流、地蔵峠にかかっていた。

五人の屈強なるものが、その前後につきしたがっている。
この裏道をくるのにも、とちゅう、一、二ヵ所の山関があったが、小人数の関守りや、徳川家の名もない小役人などは、この一行のまえには、鎧袖一触の価すらもない。
山路の険しさはあるが、道は坦々、無人の境をすすむごとしだ。
武田一党のまえには、洋々としたひろい光明が待っているかと感ぜられる。見よ！　もう大根沢の渓谷のあいだから、莞爾とした富士のかおが、伊那丸の無事をむかえているではないか。
立って地蔵峠の頂からふりかえると、もう三方ヶ原は遠くボカされて、ゆうべのことも夢のようだ。
あおい駿河の海岸線の一端には、家康の居城が、松葉でつつんだ一個の菓子のごとく小さく望まれる。
「さだめしいまごろは、あのむずかしい顔を一そうむずかしくしているだろう」
と思う想像が、みんなの顔に、禁じえないほほえみをのぼせた。
なにか、今日ばかりは、はればれしい旅ごこちがした。伊那丸も民部も、そして、龍太郎やそのほかの者も。
そう思うこころの矢さきへ、峠の間道を、のんきな唄がとおっていった。崖の下へきた時に、小文治がのぞいてみると、裾野で見おぼえのある鼻かけ卜斎、唄は、おともの蛾次郎が、大きな口を天へむかって開いているのだ。
「オヤ」
と、向こうで気がついて、すぐわき道へ影をかくしたので、一行の者もあえて追わず、そのままさきをいそいでゆく。
そしてようよう、駿遠の山境を踏破してきた。もとより旅人もあまり通らぬ道、里数はあまりはかどらない。服織という二、三十戸の山村、みな素朴な山家者らしいので、その一軒へ伊勢の郷士といっわって宿をかりた。
はいった家は、その村の長の邸らしい。
土着の旧家らしい土塀や樹木が、母屋を深くつつんでいた。
渓流へいってからだを洗い、宿の主にひかれて、奥の一室へ落ちつくと、床に一幅の軸がかかっていた。それはその部屋へはいったとたんに、だれにもすぐ目についた。
伊那丸はサッと色をかえて、
「亭主」と案内してきた村長を見おろした。
「はい、なにかお気にさからいましたか」
「この石摺りの軸はどうしてそちが手に入れた」
「ああ、それは石摺りと申しますか。じつはわたしにもよく読めませず、へんなものだと思いましたが、このあいだ、村へまよってまいりました妙な老人が、宿をかりた礼にといって、自分でかけてまいりましたので、そのままほッておいたのでございます」
「忍剣、龍太郎。これを見い！」
と伊那丸はさらに床の間にちかづいて指さした。それまでは他の者も、なにか、得体の知れない、ただ岩の肌へ墨をつけてそれを転写した碑文かなにかと思っていた。が、そういわれてよく見ると、まっ黒な黒と白い筋のあいだに二行の文字が刷りだされてある。
「あッ！」龍太郎はぎょッとした。忍剣もふしぎにたえない面持

であった。

父子の邂逅はむなしく
小太郎山の砦はあやうし

いつか、京都の舟岡山、雷神の滝の岩頭に、果心居士が彫りのこしていった二行の予言！

それが岩のしわ目と文字の痕をほの白く、そッくりそのまま、石摺りに写ってここにあるのではないか。

勝頼と伊那丸のことを、未然に暗示した一行の文字はいま思えばあたっていた。戦慄すべきもう一行の予言！

小太郎山の砦があやういとはどういうわけか？　それは伊那丸にも民部にも、どうしてもわからなかった。

村長の話をきけば、数日前に、この家へとまって飄然と去ったという妙な老人というのこそ、どうやら果心居士であるような気がする。

四

躑躅ヶ崎の館というのは、甲府の町に南面した平城である。

平城というのは、天嶮によらず平地にきずいた城塞のことで、要害といっては、高さ一丈ばかりの芝土手と、清冽な水をあさく流した濠があるだけだ。

土手は南北百六間、三ツの郭にわかれ、八門の石築に出入りを守られている。

青銅瓦のご殿の屋根、樹林からすいてみえる高楼づくりの朱の勾欄、芝の土手にのびのびと枝ぶりを舞わせている松のすがたなど城というよりは、まことに、館とよぶほうがふさわしい。

甲斐の土は一歩も敵にふませぬ。

終生このことばをもって通した信玄には、ものものしい要害は無用であった。けれど、勝頼が敗れたのちは、その躑躅ヶ崎の館も、織田の代官の居邸となり、さらにそののち火事泥的に甲府へ兵をだしてかすめとった小田原の北条氏直が持主にかわった。

氏直が甲府を手にいれたと知ると、家康は眉をひそめた。

「もし小太郎山と甲府とが結びついたら？　どうだろう？」

想像するだけでもおそろしいことだと思った。

で、かれ一流の反間苦肉の策をほどこし、奇兵をだして、躑躅ヶ崎の館をうばった。それは、伊那丸が京都へいっているあいだのできごとであった。

大久保石見守長安は、家康の腹心で、能役者の子から金座奉行に立身した男、ひじょうに才智にたけ算盤にたっしている。家康はその石見守を甲府の代官とした。そして甲州には昔からの金坑があるから、できうるかぎりの金塊を浜松におくれと命じた。

でなくてさえ強慾な石見守は、私腹をこやすためと家康のきげんをとるために、金坑掘夫をやとって八方へ鉱脈をさぐらせる一方に、甲斐の百姓町人から、ビシビシと苛税をしぼりあげて、じぶんは躑躅ヶ崎の館で、むかしの信虎時代もおよばぬほどなぜいたくをきわめている。

「畜生ッ、あばれるか！　手向かいをすると耳をきるぞ！　脛

をぶッぱらうぞ！　歩けッ、歩けッ、うぬ歩かんか」
腕まくりをした若侍が八、九人。
いま、躑躅ヶ崎の石門のなかへ、ひとりの百姓をしばりつけてきた。
「おとうさんを助けてくださいませ！　もし、おとうさん、あやまってください、お武家さま、堪忍してあげてくださいませ」
十五、六の女の子。その百姓の娘らしい。人目もなく泣きながら若侍の腕にすがりつくのを、
「えい、きさまも片われだ！」と、大きな掌で頬をなぐった。
娘はワーッと声をあげて泣く。百姓は気狂いのように猛る。それを仮借なくズルズルと引きずってきて、やがて、大久保石見が酒宴をしている庭先へすえた。
「なんだ、そのむさくるしい人間は？」
石見守は、近習に酌をさせながら、トロンとした眼で見おろした。若侍は膝をついて、
「こいつ、ただいまご城下の辻で、信玄の碑のまえへ供物をあげながら、徳川家のことを悪ざまにのろっておりました」
「斬ッてしまえ」
酒をふくみながら石見守はかんたんにいった。
「ついでに、あの信玄の石碑なども、濠のそこへ投げこんでしまうがいい。あんなものを辻にたてておくから、いつまでも百姓や町人めが、旧主をわすれず新しい領主をうらみに思うのだ」
若侍はただちに刀を抜いた。
石見守は盃を重ねて見てもいなかったが、バッと音がしたので庭先へおもてを向けてみると、もう百姓と娘の死骸がふたところにつッ伏していた。
「殿さま！」
そこへ、ひとりの小侍が、あわただしい足音をさせて、一封の早打状をもたらしてきた。
大きな黒印がすわっている。徳川家康の手状だ。
「おッ、なんだろう？」
かれも少し酒の気をさまして、いそがわしく封を切った。またその下にも封緘がしてある。よほど大事なことだなと思った。
「これ、伊部熊蔵をよべ、奥の鉱石庫にいるはずじゃ」
その手紙を巻きおさめながら、こういった石見守の顔色は尋常でない。
鉱山目付の伊部熊蔵、奥のほうから庭伝いにとんできた。大久保石見は酒席につっ立って、庭先にいる中戸川弥五郎という若侍へ、
「その見ぎたない百姓と娘の死骸を、はやくどこかへ取りかたづけろ」
と苦々しくいいつけて、
「おお熊蔵、むこうへまわれ、浜松からの早打状で、そちに申しつける急用ができた」
と、離室のほうへ顎をさして、そのなかへ密談にすがたをかくしてしまった。そして半刻ばかりすると、伊部熊蔵、躑躅ヶ崎の館の外郭へ駈けだしてきて、ピピピピと山笛を吹いた。
鉱石庫の外や内ではたらいていた荒くれ男は、その山笛を

きくと持っている槌も天秤もほうりなげて、ワラワラと熊蔵のいる土手の下へあつまってきた。
「おい、すばらしい鉱脈が見つかったんだ」
熊蔵はこういって、鉱山掘夫一同の顔をジロリと見わたした。どれもこれも山男のようなたくましい筋肉と、獰猛な形相をもっていて、尻切襦袢へむすんだ三尺帯の腰には、一本ずつの山刀と、一本ずつの鉱石槌をはさんでいる。鷲のくちばしのようにするどく曲ってキラキラ光っている鉱山槌だ。
「ヘエ」と、みんなバカにしたような面がまえで、熊蔵のことばを冷笑した。
「どうして素人にそんなものが見つかったんですえ？」
「素人？　ふふん、貴様たちみたいに、銅脈ばかりさぐりあてる玄人とはちがって、しかもこれは金鉱だ」
「ごじょうだんでしょう、めッたやたらに、そんな鉱山があってたまるもんですか」
「いやうそではない、すぐにこれから、その鉱山へ出立するのだ」
「まったくですか？　そしていったいそりゃあだれが見つけた山なんで」
「浜松城のご主君、右少将家康様だ！」
「？　……」
みんなあッけにとられてしまった。家康公が鉱山掘夫の玄人だとはのみこめない……という顔だ。
熊蔵はすこしキッとなって、山目付らしい威厳をとった。
「で、これは家康公の直命にひとしいのだから、鉱山へいくとちゅうで、イヤの応のとしぶるやつは、ようしゃなく打ッた斬るからさよう心得ろ」
「へい」
「頭数は？」
「六十人ばかりで……」
「よし、向こうへいけば、まだ人数がいるはずだから、これだけでいいだろう。五足ずつの草鞋と三日分の焼米を腰につけて、すぐに西門のお濠ぎわへ集まりなおせ！」

さて。
躑躅ヶ崎の館をでた六十人の鉱山掘夫。
伊部熊蔵にひかれて、甲府の城下を西へ西へとすすみ、龍王街道から釜無川を駈けわたり、やがて、山地にさしかかった。
「どこだい、ここは」
「御勅使川の裾じゃねえか」
「ふーむ、まだ山はあさいな」
「どうやら、ゆくさきは信濃か飛騨だぜ」
ドンドンドンドン、駈けていく。
「沢へでたな」
「水びたしじゃ草鞋がたまらねえ」
「向こうの山は？」
「大唐松よ」
「峠へきたな、どこだいここは」
「べらぼうめ、鉱山掘夫がいちいち山の名をきくやつがあるものか。トノコヤ峠、雨池の下り勾配、ヌックと向こうに立っているのが、甲信駿の三国にまたがっている白根ヶ岳と鷲

の巣山だ」
「だが、オイ」
「なんだ」
「いったいどこまでいくんだろう」
「さあ、そいつはおれにもわからねえ、さきへいくお目付の熊蔵さまに聞いてみねえ」
「へんだな、妙だな、だんだん鉱気のねえ山へはいっていくぜ。打つかるなア、水脈ばかりだ」
しかり、鉱山掘夫六十人、その時、野呂川の流れに沿って、上流へ上流へと足なみをそろえていた。
森々と深まさる檜の沢、タッタとそろう足音が、思わず足を軽くさせる。
と思うと、伊部熊蔵、
「オイ、止まれ」とうしろを向いた。
六十人の額からポッポと湯気がたっている。
そこは小太郎山のふもとであった。

一

山掘夫、山にからかわれる

「止まれ」
といわれた鉱山掘夫、汗をふきながらあたりを見て、みんなけげんな顔をしながら、伊部熊蔵のさしずをうたがった。
ばかにしてやがら！　といわんばかりに、気の荒い山掘夫のひとりが、
「もし、熊蔵さま！」と、突っかかってきた。
「なんだ、雁六」
「ここは小太郎山じゃあねえんですか」
「そうだ、小太郎山の東麓だが、それがどうかいたしたか」
「どうかしたかもねエもんです、じょうだんじゃアねえ、いいかげんにしておくんなさい」
と小頭の雁六が腹をたてて、岩に腰をおろしてしまったので、以下六十人の山掘夫も、みんなブツブツ口小言をつぶやきながら、ふて腐れの煙草やすみとでかけはじめた。
こんな日傭稼ぎなどになめられて、山目付というお役目がつとまるものかと、伊部熊蔵、ひたいに青筋を立ってカンカンになりながら、
「こら！　山掘夫どもッ。だれのゆるしを得て勝手に煙草休みをするか。躑躅ヶ崎をでた時からきっといいわたしてあるとおり、拙者の命にそむくことは大久保石見守さまの命にそむくも同じこと、石見守さまのおいいつけにそむくことは、すなわち、家康公のご命令をないがしろにいたすも同様だぞッ」
そういいながら、いきなり腰の刀をぬいて素ぶりをくれ、猛獣使いの鞭のように持った。
「いいつけを守って、すなおにはたらく者へは、後日、じゅうぶんな褒美をくれるし、とやこう申すやつは斬ってすてるからさよう心得ろ」
「ですがお目付さま、いくら働けといったところで、こんな鉱気のないくそ山を、掘り返したところでしようがありますまい」

「イヤこの山には金鉱の脈がある！　すなわち家康公にとっての金脈があるのだ！　これからそれをさがしにかかるのだから、ずいぶん骨を折るがよい。いまもいったとおり、首尾よくいけば莫大なご褒美がある仕事だから」
「どうもさっぱり腑に落ちませんが、おそらく骨折り損のくたびれもうけでございましょう」
「よけいなことはいわんでもよい。さ、一服吸ったら八方へ手を分けて、まず第一に間道らしい洞穴をさがしてみろ」
「ヘエ、洞穴を」
「ウム、洞穴だ！　かならずどこかに頂上へ抜けでられる穴口があるはずだ」
「そしてそれをどうするんで？」
「いずれ要所要所には、石扉を閉てたり岩石や組木を組んで、ふだんは通れぬ仕掛けになっているだろう。それをおまえたちの槌でいけるところまで掘りぬいていくのだ」
「へえ？　……そうして」
「そうして不意にとりでの郭内にあらわれ、岩くだきの強薬を爆発させて、砦にるすいをしているやつらがあわてさわぐまに、小太郎山を乗っとってしまう！　むろん、これだけの人数ではむずかしいが、砦のなかにはまえまえから、こっちの味方が諜者になって入りこんでいるし、火薬の爆音をあいずとして、甲府表から、いちどきに家中の者が攻めかけてくる手はずとなっておるのだから、いわばわれわれは乗っ取りの先陣、願うてもない誉れをつとめるわけなのだ」
　おどろいたのは小頭の雁六、ほか六十人の山掘夫たちである。
　金脈だ金脈だというので、なにも知らずにきてみれば、命がけの合戦をやるのだ。間道からもぐりこんで、とりでをかきまわすという危ない役目、鉱山の坑へ細曳一本で吊りさがるよりは、まだ危険だ。
「こんなことならついてくるんではなかった」
　と、いまさら臍をかんでも追いつかない、後陣には石見守の家中がうしろ巻をしているといえば、逃げだしたところで、すぐと捕まって血祭りになるのは知れている。
「だが、こんな奥ぶかい山地に、だれのとりでがあるのであろうか」
　と、そこで一同、はじめて麓から山を見あげて見たが、峨々たる岩脈と雲のような樹林の高さを仰ぎうるばかりで、城らしい石垣も見えず、まして、ここに千も二千もの人数が、立てこもっているとは思われないほど、森々として静かである。

二

　ぜひなく観念した鉱山掘夫は、伊部熊蔵の指揮のもとに小太郎山の東のふもと、木や草をわけて八方へ散らかった。
　なにせよ、荒仕事と山には馴れきった者ばかり、手に手に鷹のくちばしのように光る鉱石槌を持ち、木の根にひっかけ、崖によじ、清水と岩脈のかたちをさっして、それらしい所をさがし廻っているうちに、ひとりが深い熊笹の沢の上で、
「あった！　間道が見つかった！」
　と、大声でさけんだ。
　小頭の雁六が、ピューッと口笛を一つ吹くと、上から、下

から伊部熊蔵をはじめすべての者のかげが、ワラワラとそこへ駈けあつまった。
見ると、たけなす山葦と笹むらにかくれて、洞然たる深い横穴がある。
「これだ！」
と、熊蔵が、用意の松明を持たせて中にすすむと、清水にぬれて海獣の肌のようにヌルヌルした岩壁を、無数の沢蟹が走りまわったのに、ハッとした。
「雁六、この穴はどうだ？」
「掘ったものです。しかも、まだ新しく掘った穴にちがいありません」
「ウム、それじゃてっきり、山曲輪へ通じる間道だろう、先を一つさぐってみてくれ」
「合点です！　オイ松明を持った野郎はさきに立て」
あとからあとからと、山葦をわけてザワザワと中へはいった。そして、奥へすすめば、すすむほど、土質の肌目があらく新しくなってくる。ところどころに、土をくりぬいた段があった。段をのぼると平地になり、平地をいくと段がきりこんである。
かくて、かなりの暗黒をうねっていくと、やがてゆきどまりの岸壁にぶつかった。あらかじめこうあることとは、石見守からもいわれてきた熊蔵、
「それッ」
というと、山ほりたち、合点といっせいに腰の槌をひきぬいて、金脈だ金脈だ！　家康公から恩賞のでる金脈だとばかり、たちまちそこを掘りぬけた。
荒鉱を掘ることを思えば、なんの造作もないひと仕事。抜けると、カーッと陽が照っていた。
小太郎山第一の峡！
孔雀の背なかを見るような燦鬱として真っさおな、檜林の急傾斜、それが目の下に見おろされる。
「ウム、ちょうど山の二合目だ」
目のくらむような陽をあびて、狼群のように、はいかがんだ人数、向こうに見える次の間道を目がけてゾロゾロゾロはいこんだ。
さざえのなかをくぐるように、また二つめの間道をしばらくのぼると、山の五合目虚無僧壇とよぶところ、暗緑色の峡を隔てた向こうと、丸石を畳みあげた砦の石垣、黒木をくんだ曲輪の建物らしいのがチラリと見える。
だが、千仞の深さともたとうべき峡谷には、向こうへわたる道もなく、蔦葛の桟橋もない。
「オ、あれに三ツ目の間道がある」
伊部熊蔵がこういったので、みなそのあとからついていった。まさしく、こんどは間道らしい間道である。まっ赤な松明をふり廻して、シトシトシトいそぎだした。と――こんどは段もなく、井戸のような深い穴口へでた。そこに一本の鉄棒が横たえられ、蔓梯子がブラさがっている。
それより他にいきようはないので、いずれまた、段々と上へのぼることになるのであろうと、一同はそれにすがって下りていくと、その深いことはおどろくくらい――、下りるとまたうねうねと道々がある、まるで富士の胎内くぐりという形だ。

「はてな？」
と地中の闇を馳けながら、小頭の雁六は首をかしげた。
「妙だぞ、妙だぞ、いっこう上りになってこない、なんだかだんだん下る」
「いやそんなはずはない、こういううちに、しぜんと頂上のとりでの中にでるにちがいない」
と、伊部熊蔵はがえんぜない。ますます足を早めていった。
するといきなり眼の前に、ドウーッと真っ白なものが光った。青い光線がひえびえと流れこんできた。見るとそれは岸をあらう渓流である。岩をかんで銀屑をちらす飛沫である。
岩壁の一たんに、ふとい鉄環が打ちこんであり、環に一本の麻縄か結びつけてあった。で、その縄の端をながめやると、大きな丸太筏が三そう、水勢にもてあそばれてうかんでいる。
はてな？　いよいよ、はてな？　である。
熊蔵も雁六も、すこし道順がわからなくなってきた。まえには渓流、うしろは暗黒！
「ままよ。いくところまでいって見ろ。つぎには第四の間道があるだろう」
そう多寡をくくって、三そうの筏に飛びうつり、向こうへ渡ろうとしたのであるが、思いのほか水足がはやく、鉄環の縄をきるやいな――ザアッと筏は下流のほうへ押されてしまった。
そしてやっと、水勢のゆるい瀞へかかった時、向こう岸へはいあがって見ると、ああなんということだ！
見るとそこは、さっき一同が甲府から指してきた時に、汗をしぼって一列に駈けた野呂川の右岸で、その胎内の間道をくぐり、その絶頂のとりでへでようとこころみた小太郎山そのものの姿は、唖然として立った六十人の眼のあなたに――。
かなり離れた渓流の向こうに、むらさきばんだ昼霞をたなびかせ、なにごとも知らぬさまに聳えている山の容こそ、小太郎山ではないか。いま、げんに、その山の腹をくぐり登っていたはずの山ではないか。
山掘夫、山にもてあそばる！
その時、穴に入るまえはらんらんとかがやいていた太陽が、もう西へまわって朱盆のように赤くくすんでいた。